峰町文化財調査報告書　第９集

佐賀貝塚

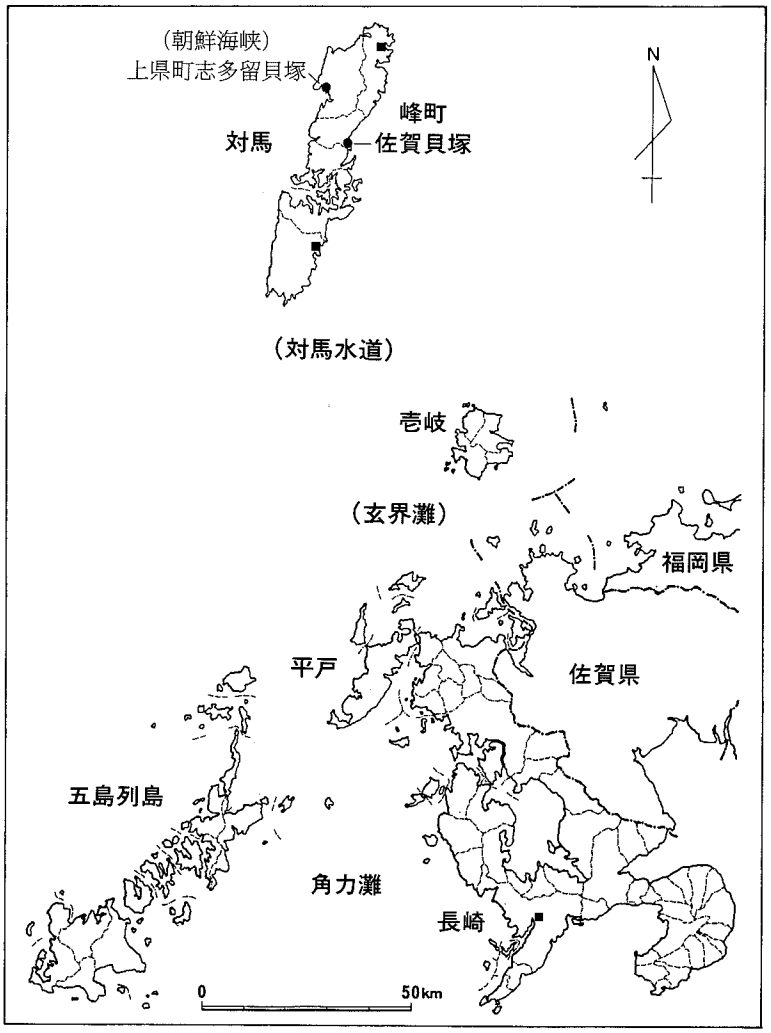
１９８９

長崎県峰町教育委員会

峰町文化財調査報告書　第９集

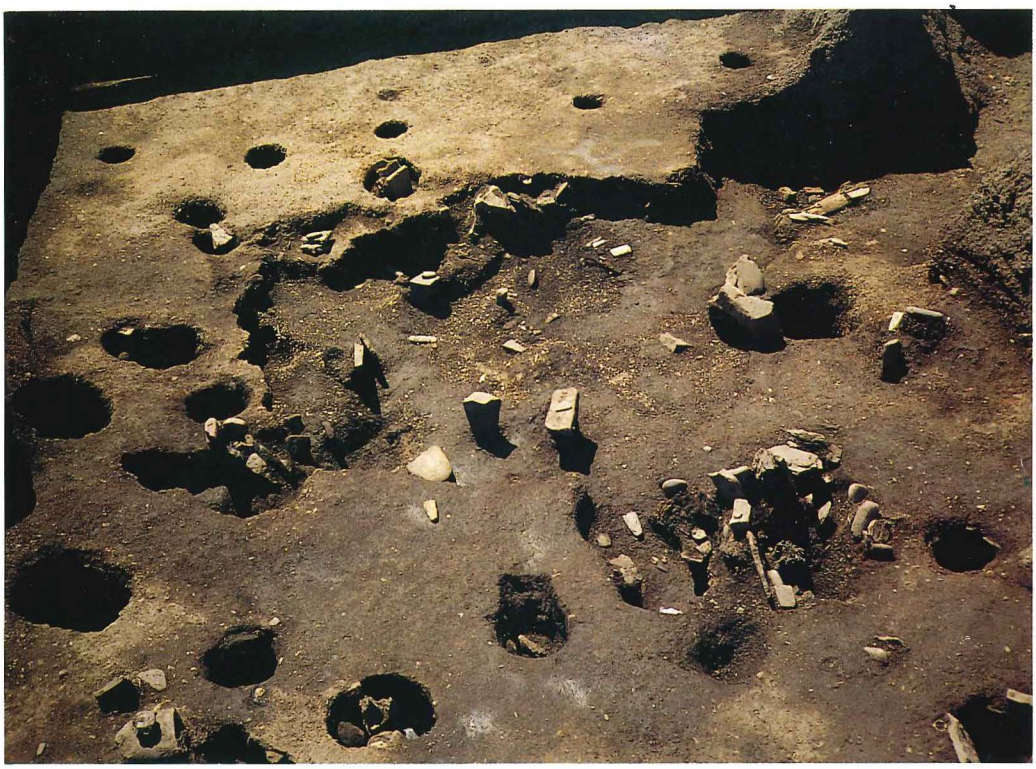
佐賀貝塚

さ　か



１９８９

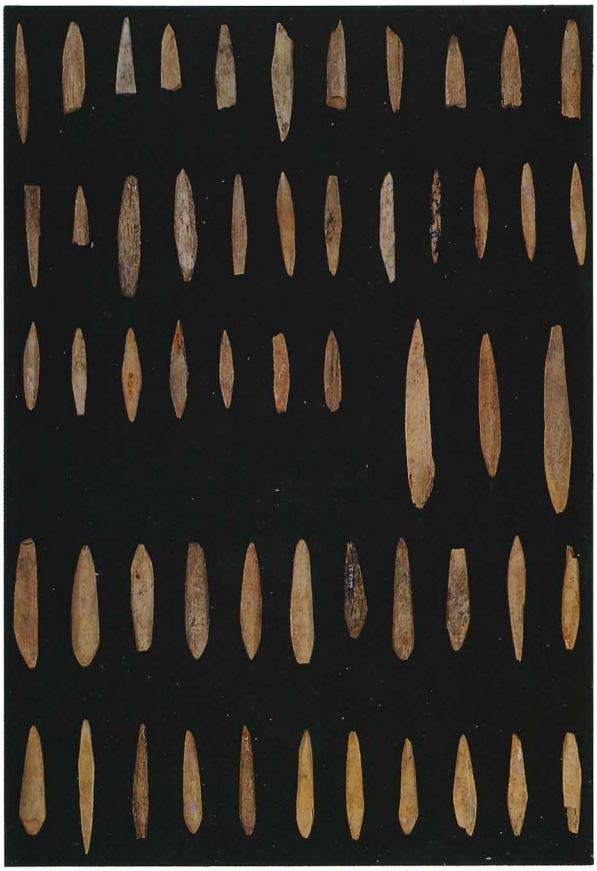
長崎県峰町教育委員会



佐賀貝塚２号住居跡

銛・釣針・垂飾・貝輪

鹿笛（実大）



骨製刺突具

本　文　目　次

頁

1．調査の発端と経過……1
2．対馬と佐賀貝塚の地理的・歴史的環境……2
3．佐賀貝塚の調査……6
4．佐賀貝塚の土層……8
5．貝塚と遺構……10
6．遺　　物
(1)　歴史時代の遺物……21
(2)　弥生時代の遺物……23
(3)　縄文時代中期の土器……24
(4)　縄文時代後期の土器……30
(5)　縄文時代後期の剝片石器……45
(6)　縄文時代後期の石斧……63
(7)　縄文時代後期のその他の石器……107
(8)　縄文時代後期の骨角器……113
7．佐賀貝塚の問題点……149
8．長崎県峰町（対馬）佐賀貝塚出土の縄文時代人骨……193
9．佐賀貝塚の貝……237
10．佐賀貝塚出土の脊椎動物遺存体……243

挿　図　目　次

第1図　長崎県及び佐賀貝塚の位置図
第2図　峰町及び佐賀貝塚の位置図……3
第3図　佐賀貝塚付近図（1/1000）……7
第4図　発掘調査地点および調査区設定図(方眼＝4m×4m)……8
第5図　D－4～E－4(南北方向)，E－4～E－5(東西方向断面図)(1/3)……9
第6図　遺構配置図（1/40）……13
第7図　1号人骨出土状況図（2/3）……12
第8図　2号人骨出土状況図（2/3）……12

第９図　３号人骨出土状況図……15
第10図　４号・５号人骨出土状況図……15
第11図　１号住居跡実測図……16
第12図　２号住居跡実測図……17
第13図　３号住居跡実測図……19
第14図　石組柱穴実測図（第２号住居跡第10柱穴）（１/20）……21
第15図　表土層発見の銭貨……22
第16図　弥生式土器実測図（１/３）……23
第17図　縄文中期の土器実測図１（１/３）……26
第18図　縄文中期の土器……27
第19図　縄文中期の土器及び土製品Ⅶ類（底部），Ⅷ類（把手及び有孔円盤）（１/３）……28
第20図　縄文後期の実測図１（１/３）……32
第21図　縄文後期の土器実測図２（１/３）……33
第22図　縄文後期の土器実測図３（１/３）……34
第23図　縄文後期の土器実測図４（１/３）……35
第24図　縄文後期の土器実測図５（１/３）……36
第25図　縄文後期の土器実測図６（１/３）……37
第26図　縄文後期の土器実測図７（１/３）……38
第27図　縄文後期の土器実測図８（１/３）……39
第28図　縄文後期の土器実測図９（１/３）……40
第29図　縄文後期の土器実測図10（１/３）……41
第30図　縄文後期の土器実測図11（１/３）……42
第31図　縄文後期の石器実測図１（２/３）……47
第32図　縄文後期の石器実測図２（２/３）……48
第33図　縄文後期の石器実測図３（２/３）……49
第34図　縄文後期の石器実測図４（２/３）……50
第35図　縄文後期の石器実測図５（２/３）……51
第36図　縄文後期の石器実測図６（２/３）……52
第37図　縄文後期の石器実測図７（２/３）……53
第38図　縄文後期の石器実測図８（２/３）……54
第39図　縄文後期の石器実測図９（２/３）……55
第40図　縄文後期の石器実測図10（２/３）……56
第41図　縄文後期の石器実測図11（２/３）……57
第42図　縄文後期の石器実測図12（１/２）……58

第43図　縄文後期の石器実測図13（1/2）……59
第44図　縄文後期の石器実測図（1/3）……66
第45図　縄文後期の石器実測図（1/3）……67
第46図　縄文後期の石器実測図（1/3）……68
第47図　縄文後期の石器実測図（1/3）……69
第48図　縄文後期の石器実測図（1/3）……70
第49図　縄文後期の石器実測図（1/3）……71
第50図　縄文後期の石器実測図（1/3）……72
第51図　縄文後期の石器実測図（1/3）……73
第52図　縄文後期の石器実測図（1/3）……74
第53図　縄文後期の石器実測図（1/3）……75
第54図　縄文後期の石器実測図（1/3）……76
第55図　縄文後期の石器実測図（1/3）……77
第56図　縄文後期の石器実測図（1/3）……78
第57図　縄文後期の石器実測図（1/3）……79
第58図　縄文後期の石器実測図（1/3）……80
第59図　縄文後期の石器実測図（1/3）……81
第60図　縄文後期の石器実測図（1/3）……82
第61図　縄文後期の石器実測図（1/3）……83
第62図　縄文後期の石器実測図（1/3）……84
第63図　縄文後期の石器実測図（1/3）……85
第64図　縄文後期の石器実測図（1/3）……86
第65図　縄文後期の石器実測図（1/3）……87
第66図　縄文後期の石器実測図（1/3）……88
第67図　縄文後期の石器実測図（1/3）……89
第68図　縄文後期の石器実測図（1/3）……90
第69図　縄文後期の石器実測図（1/3）……91
第70図　縄文後期の石器実測図（1/3）……92
第71図　縄文後期の石器実測図（1/3）……93
第72図　縄文後期の石器実測図（1/3）……94
第73図　縄文後期の石器実測図（1/2）……95
第74図　縄文後期の石器実測図（1/2）……96
第75図　縄文後期の石器実測図（1/2）……97
第76図　縄文後期の石器実測図（1/3）……98

第77図　縄文後期の石器実測図（1/3）……99
第78図　敲石・磨石（1/3）……109
第79図　石錘・軽石製磨石・石皿（10・11・15　1/3，他は1/4）……110
第80図　敲石・砥石・石錘（1/3）……111
第81図　縄文後期の石器実測図（1/2）……112
第82図　骨製刺突具各部の名称……118
第83図　骨製刺突具第Ⅰ類（1～6）第Ⅱ類（7～8）第Ⅲ類（9～14）実測図（1/2）……119
第84図　骨製刺突具第Ⅳ類実測図（1/2）……120
第85図　骨製刺突具第Ⅴ類（34～61）実測図（1/2）……121
第86図　骨製刺突具第Ⅰ類（1～6）第Ⅱ類（7～8）第Ⅲ類（9～14）実測図（1/2）……122
第87図　骨製刺突具第Ⅵ類実測図（1/2）……123
第88図　骨製刺突具第Ⅵ類（126～127）第Ⅶ類（128～146）実測図（1/2）……124
第89図　骨製刺突具第Ⅷ類実測図（1/2）……125
第90図　骨製刺突具第Ⅸ類実測図（1/2）……126
第91図　猪牙製釣針実測図（1/2）……127
第92図　猪牙および骨製釣針実測図（1/2）……128
第93図　鯨骨製骨器他実測図（1/2）……129
第94図　狩猟用骨角器実測図（1/2）……130
第95図　骨角製装飾品実測図（1/2）……131
第96図　骨角貝製装飾具実測図（1/2）……132
第97図　貝輪実測図1（1/2）……133
第98図　貝輪実測図2（1/2）……134
第99図　貝輪実測図3（1/2）……135
第100図　貝輪実測図4（1/2）……136
第101図　貝輪実測図5（1/2）……137
第102図　貝輪実測図6（1/2）……138
第103図　貝輪実測図7（1/2）……139
第104図　貝輪実測図8（1/2）……140
第105図　貝輪実測図9（1/2）……141

表　目　次

第1表　縄文中期土器観察表……29

第２表　縄文中期土器観察表……43
第３表　剥片石器観察表１……60
第４表　出土区別石斧一覧……100
第５表　石斧Ⅰ類観察表……101
第６表　石斧Ⅱ類観察表……101
第７表　石斧Ⅲ類観察表……102
第８表　石斧Ⅳ類観察表……104
第９表　石斧Ⅴ類観察表……104
第10表　石斧Ⅵ類観察表……104
第11表　石斧Ⅶ類観察表……105
第12表　石斧Ⅷ類観察表……105
第13表　石斧Ⅸ類観察表……105
第14表　石斧Ⅹ類観察表……105
第15表　石斧Ⅺ類観察表……106
第16表　骨角製刺突具観察表……142
第17表　貝輪観察表……146
第18表　歯牙骨製釣針観察表……148

図　版　目　次

ＰＬ１　遺跡遠景（南から）①佐賀貝塚②佐賀漁港……154
ＰＬ２　遺跡と遺物出土状況……155
ＰＬ３　土　　層……156
ＰＬ４　遺　　構……157
ＰＬ５　遺　　構……158
ＰＬ６　遺　　物……159
ＰＬ７　縄文中期の土器１……160
ＰＬ８　縄文中期の土器２……160
ＰＬ９　縄文後期の土器１……161
ＰＬ10　縄文後期の土器２……161
ＰＬ11　縄文後期の土器３……162
ＰＬ12　縄文後期の土器４……162
ＰＬ13　縄文後期の土器５……163

ＰＬ14　縄文後期の土器６……163
ＰＬ15　縄文後期の土器７……164
ＰＬ16　縄文後期の土器８……164
ＰＬ17　縄文後期の土器９……165
ＰＬ18　縄文後期の石器１……166
ＰＬ19　縄文後期の石器２……167
ＰＬ20　縄文後期の石器３……168
ＰＬ21　縄文後期の石器４……169
ＰＬ22　縄文後期の石器５……170
ＰＬ23　縄文後期の石斧１……171
ＰＬ24　縄文後期の石斧２……171
ＰＬ25　縄文後期の石斧３……172
ＰＬ26　縄文後期の石斧４……172
ＰＬ27　縄文後期の石斧５……173
ＰＬ28　縄文後期の石斧６……173
ＰＬ29　縄文後期の石斧７……174
ＰＬ30　縄文後期の石斧８……174
ＰＬ31　縄文後期の石斧９……175
ＰＬ32　縄文後期の石斧10……175
ＰＬ33　縄文後期の石斧11……176
ＰＬ34　縄文後期の石斧12……176
ＰＬ35　縄文後期の石斧13……177
ＰＬ36　縄文後期の石斧14……177
ＰＬ37　縄文後期の石斧15……178
ＰＬ38　縄文後期の石斧16……178
ＰＬ39　縄文後期のその他の石器１……179
ＰＬ40　縄文後期のその他の石器２……179
ＰＬ41　縄文後期のその他の石器３……180
ＰＬ42　縄文後期のその他の石器４……180
ＰＬ43　縄文後期の骨角器……181
ＰＬ44　縄文後期の骨角器……182
ＰＬ45　縄文後期の骨角器……183
ＰＬ46　縄文後期の骨角器……184
ＰＬ47　縄文後期の骨角器……185

ＰＬ48　縄文後期の骨角器……186
ＰＬ49　縄文後期の骨角器……187
ＰＬ50　縄文後期の骨角器……188
ＰＬ51　縄文後期の骨角器……189
ＰＬ52　縄文後期の骨角器……190
ＰＬ53　縄文後期の骨角器……191

刊行にあたって

このたび、本町の大字佐賀にあります佐賀貝塚に関する調査報告書を刊行することになりました。

この貝塚につきましては、昭和28年に発見され、翌29年に小規模な調査があり、縄文時代中期の貝塚として最近まで認識されてまいりました。ところが、昭和59年、遺跡地において遊技場建設の話がもちあがり、緊急に発掘調査の必要が生じてまいりました。

対馬において数少ない縄文時代遺跡であり、現状保存の方策も検討いたしましたが、土地所有者の事情もやむを得ないものがあり、国および県費の補助をいただいて、同年に緊急発掘調査を実施したところであります。

発掘調査の結果につきましては、同年度に調査概報を刊行したところでありますが、対馬におけるはじめての住居跡や完全な埋葬人骨の発見があり、遺物におきましても対馬縄文人の活発な交易と、海での活動を示す数多くのものがあるなど、調査の全容を発表する必要が生じ、今回正式な報告書を刊行することにした次第であります。

昭和64年度には、本町立の歴史民俗資料館を開館し、本貝塚の出土資料をはじめとする町内の歴史と民俗をご覧いただくことにいたしておりますが、展示内容と本書が学術研究と教育に役立つことを念じ、あわせて文化財の保護思想の向上に資することを祈って、本書刊行のご挨拶といたします。

平成元年３月31日

峰町長　安藤茂喜

例　　言

1．本書は長崎県上県郡峰町大字佐賀486番地にある佐賀貝塚に関する発掘調査の報告書である。

2．調査は、昭和60年４月８日から５月10日まで、峰町教育委員会が国・県費の補助を受け実施した緊急発掘調査であり、長崎県教育委員会文化課正林護（当時主任指導主事）・村川逸朗（当時文化財調査員）が調査を担当した。

3．調査は遊技場用地の造成工事に先立って実施したものである。

4．調査の結果については昭和61年３月、峰町文化財調査報告書第８集『佐賀貝塚』（略報）が同町教育委員会によって刊行されているが、本書はその本報告書である。

5．報告事項の内、貝類については前記略報に収録した県立長崎北高等学校山本愛三先生の玉稿を本書に再掲させて頂いた。人骨については長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝之・別部哲秋両先生に玉稿を頂戴した。動物・魚骨については早稲田大学考古学研究室の金子浩昌先生に玉稿を頂いた。金子先生には諸般ご迷惑をおかけしたが、動物・魚骨に関する本報告は別の機にお願いする仕儀となったことをお詫びしておきたい。

6．直接報文を執筆いただいた前記の方々とはべつに、現地指導をいただいた九州大学西谷正先生、地形実測を担当された峰町役場産業課（当時）藪田春男氏に厚くお礼申しあげる。

7．土地所有者早田和之氏には調査による工事遅延を快諾頂き、お詫びとお礼を申しあげる。

8．本書作成に関して、土器・石器・骨角器の実測、撮影および報文執筆全て正林がおこなった。

9．本書の編集は正林がおこなった。

10．佐賀貝塚の遺物は、平成元年３月中は長崎県文化課立山分室に保管しているが、以後は峰町教育委員会が国から譲渡を受け，平成元年に建設予定の同町立歴史民俗資料館に収蔵展示される予定である。

1．調査の発端と経過

昭和60年３月４日、対馬峰町の教育委員会から急報が長崎県文化課によせられた。全国遺跡地図長崎県に３―27（昭和62刊の長崎県遺跡地図では７－７）として収録されている佐賀貝塚のある場所に遊技場建設が計画されており、整地工事の着工が間近いので、対応策について指導を得たい、というものであった。翌５日、県文化主任指導主事正林護は対馬に渡り、現地の状況を確認した後、関係者と協議をおこなった。協議の内容は、(1)現状のままで遺跡の保存ができないか　(2)それが困難であれば、緊急発掘調査に必要な期間（約40日間）工事着工を猶予できないか、というものであった。

土地所有者の早田氏は協議に応じられたが、(1)遊技場建設の申請がすでに県公安委員会において受理されており、工事の完成に期限が設定されている。期限内に完成しない場合は許可が取り消され、再申請ができない、(2)土地の売買契約不履行の処理が困難である、(3)したがって、調査に必要な期間の設定も困難であるとの見解をしめされた。

そこで、県公安委員会に、せめて調査に必要な期間、工事完成までの期限を猶予できないかということについて交渉した結果、公共の事業のため必要と認められる場合、期限の延長もあり得るとの見解が示された。峰町教育委員会は町長と協議のうえ、早田氏と再び協議し、県公安委員会が工事完成期限を延長してくれれば、調査に必要な期間、工事着手を猶予してくれるか、ということを協議し、同氏の承諾を得た。

峰町教育委員会は県公安委員会に公文書を提出し、文化財保護法による発掘調査が工事着手以前に必要であり、遊技場完成期限の延期の承諾をもとめ、その承諾を得た。

調査費についても年度末のことであり、調達の方途に困難があり、峰町では国庫補助が得られないか、との希望が出された。対馬から帰投した正林は峰町の状況と希望について報告し、対策について協議した結果、文化庁に相談することになり、同庁によって昭和60年度の国庫補助事業として認められるにいたった。

調査は昭和60年４月８日から５月10日までの43日間実施することになり、峰町教育委員会が事業主体となり、長崎県文化課主任指導主事正林護と同課文化財調査員村川逸朗が調査を担当することになった。

2．対馬と佐賀貝塚の地理的・歴史的環境

1）対馬の位置

対馬は朝鮮半島に最も近い日本である。対馬北部の各地から、晴天の日の朝には釜山の山々をしばしば望見することができる。対馬の北端、上県郡上対島の鰐浦から釜山影島区まで、直線距離にして約50km、朝鮮海峡は国境の海である。一方、対馬の南端から南隣の壱岐島（長崎県壱岐郡）まで約70km、さらに壱岐島から呼子港（佐賀県唐津市）まで27km、対馬から博多港まで170kmという海上距離を示せば、対馬の位置の理解に役立つであろう。

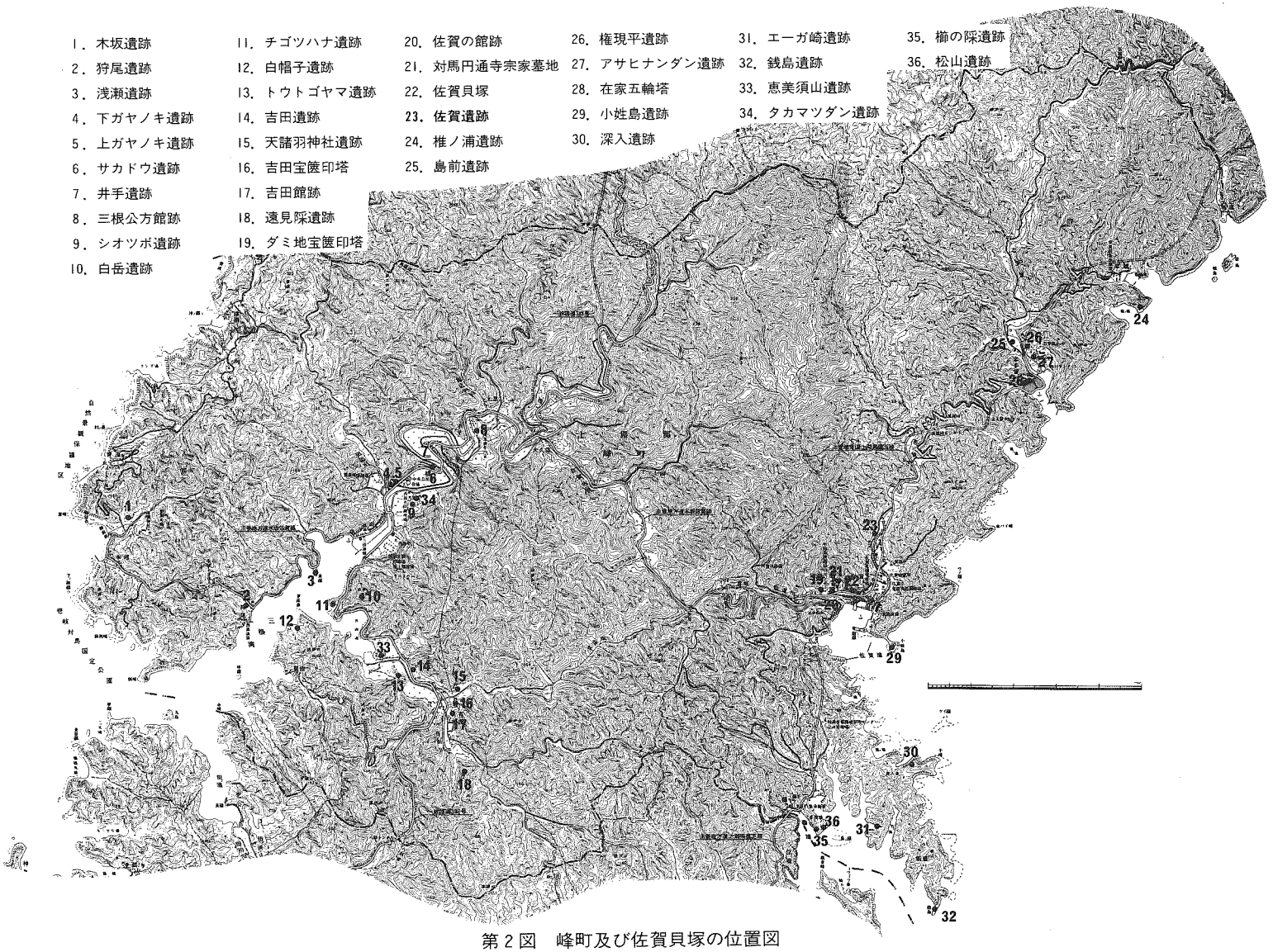
戦前のことではあるが、対馬島内の交通事情は後述するごとく、その地形故に劣悪をきわめていた。したがって島内交通も沿岸航路に頼ることが多かったようである。特に対馬北部の人々はまとまった買物をする場合、釜山まで漁船で行くのが最も便利な方法であったという。運動会の季節になると、「朝飯食うて漁船で出発、（釜山で）賞品買うて、（昼食に）チャンポン喰うて、活動（映画）一本見て帰ると、（対馬での）晩飯の時間であった」という古老の話には実感がある。

『魏志』倭人伝にある倭への道程で最初に出てくる倭人の国が対馬（国）である。この位置故に、対馬は国際関係の影響を直接受けてきた。白村江の戦い、遣唐・遣新羅使の派遣、元軍の来襲、豊臣秀吉の浸攻、日露海戦等における対馬が置かれた国際的位置を思いおこす歴史事象に事欠かない。

2）農耕不適の島（対馬の地形と土壌）

対馬は南北80km、やや東に傾いた細長い島である。現在の行政区画で、北半の上対島・上県峰の三町が上県郡に、豊玉・美津島・厳原の三町が下県郡に属している。対馬は北半の下島、南半の上島に分れているが、元来は一つの島であった。「二島」になったのは、明治年間に軍事上の必要から旧日本海軍が浅茅湾東奥の地峡を開削したためであり、現在は狭い万関瀬戸になっていて万関橋がかかり景勝を誇っている。

対馬は山の多い島である。標高のわりに険しい山々が全島を貫き、特に上島は500m級の山が八座を数える。山麓は急崖になっていて直接海に没するところが多く、これが海上からみて孤島の感を深くしている。対馬は平地に乏しく全島の98％が山地であり残り２％が平地、さらにその３分の１が水田である。また対馬は対州層群とよばれる新世代第三紀の頁岩と砂岩からなっているところが多い。これらの岩石は、脆くて細片になり易く「土一合に石九合」の状態となって全島を覆う。この土壌は滞水性に乏しく、養分も滞留しにくい。対馬は平地に乏しいだけでなく、土壌そのものが耕地に適さないが故に「良田なく南北に市羅」ぜざるを得ない状態にあったのである。



第２図　峰町及び佐賀貝塚の位置図

3）対馬の集落と交通事情

対馬における集落は、海岸部に僅かに開けた平地に限られる。山間に平地が殆どないからである。また、集落相互の間は、険しい地形によって隔絶されており、互いの交流が行われにくくなっている。道路は昭和40年代の前半まで、「禽鹿の径」に近い状態であり、小舟と沿岸航路に頼る状況であった。特に東西沿岸相互の交通は困難であった。

このような集落の在り方と交通事情は近年、道路の整備によってやや変化も見られるが、基本的な集落の在り方は変化していない。対馬における集落と交通事情は小・中学校の在り方を見るとよく理解できる。対馬の小・中学校は、長崎県本土部に比して、人工当たりの学校数は三倍近いが、一校当たりの学級数は三分の一しかなく、小規模校が多い。集落が互いに隔絶された状態にあり、しかも交通不便のため、学校統合が行われた場合、登校困難な事情が発生するためである。

このようなかつての対馬の集落と交通の事情は、遺跡の在り方と似ている。現在まで多くの遺跡が発見され、調査もなされているが、その殆どが墳墓遺跡であり、集落遺跡・生産遺跡・貝塚等の生活関連の遺跡に乏しい実状がある。対馬の墳墓遺跡は、集落から離れた小規模な岬にあるのが殆どである。それに比して生活関連の遺跡が発見されにくいのは、居住と生産活動可能の場所が古来変化しておらず、これらの遺跡が現在の集落と重複しているためである。

4）対馬周辺海

対馬は日本海・黄海・朝鮮海峡・対馬水道に囲まれており、この海域は対馬暖流に洗われている。暖流と沿岸水が混じって複雑な海水となり、ブリ・イカ・イワシなど回遊魚の種類が豊富である。また、海底地形が複雑であり、アワビ・サザエ・ワカメ等の根付き資源も豊富である。したがって沿岸漁業は極めて盛んであり、漁港数は52を数え、漁獲高は長崎県で首位をしめている。このような対馬海域の事情は古来変わっておらず、『魏志』倭人伝にもそのことがみえるが、本書の佐賀貝塚の遺物でも同じ事情を読みとることができる。

5）縄文時代以前の対馬（佐賀貝塚の歴史的環境）

対馬における旧石器時代に関しては目下のところわかっていない。遺跡は勿論のこと、遺物に関してもいまのところ表面採集品も全く発見されていない。壱岐島においては九州と軌を一にした旧石器時代の姿が見られるところからして、対馬に存在しないことは考えにくいがウルム氷河期の海水面をかんがえれば、現在の海水面以下に対馬旧石器時代の遺跡が存在するのであろうか。

縄文時代の対馬は主として下島（北半の島）中心に展開する。上県町の仁田湾一帯と下島南部、浅茅湾南岸一帯である。仁田湾は対馬の北西海岸にあり、茂(しげ)の脇(わき)遺跡や越高(こしたか)遺跡では韓国の有文土器が出土しており（註１）、縄文時代前期頃までの対馬は「倭」よりも朝鮮半島の影響

が大きかったようである。縄文時代も中期～後期になると、理由不明ながら、「倭」の影響が強く見られるようになる。豊玉町の西加藤遺跡（註２）やヌカシ遺跡（註３）、佐賀貝塚の一部（註４）では滑石粉末を含んだ阿高式系の土器や磨消縄文系の土器が現われ、朝鮮半島南部を一部含んだ環対馬海域文化とも称すべき石器時代文化が展開する。石鋸、片刃石ノミ、石銛の他、西北九州型の釣針やヤス等の骨角器が彼我の埒を越えて出現する。縄文晩期の対馬は実態がよく分からない。遺跡・遺物が少ないせいであるが、特に支石墓が全く発見されない事情は理解に苦しむ。壱岐島の場合もこの点については同様の疑問が残されたままである。支石墓の道は対馬・壱岐のルートを全く経由することなしに、西北九州に渡来したのであろうか。

〔註〕

1．坂田邦洋『韓国隆起文土器の研究』1978、坂田邦洋『対馬起高尾崎における縄文前期文化の研究』1978

2．西健一朗『西加藤遺跡』『対馬』浅茅湾とその周辺の考古学調査　長崎県教育委員会1974

3．坂田邦洋『対馬ヌカシにおける縄文時代中期文化』別府大学考古学研究室報告第一冊1978

4．昭和29年、佐賀貝塚について増田精一氏等による発掘調査が行われ、縄文中期貝塚とされた。1986年の調査において筆者等は増田氏等の発掘トレンチを確認した。

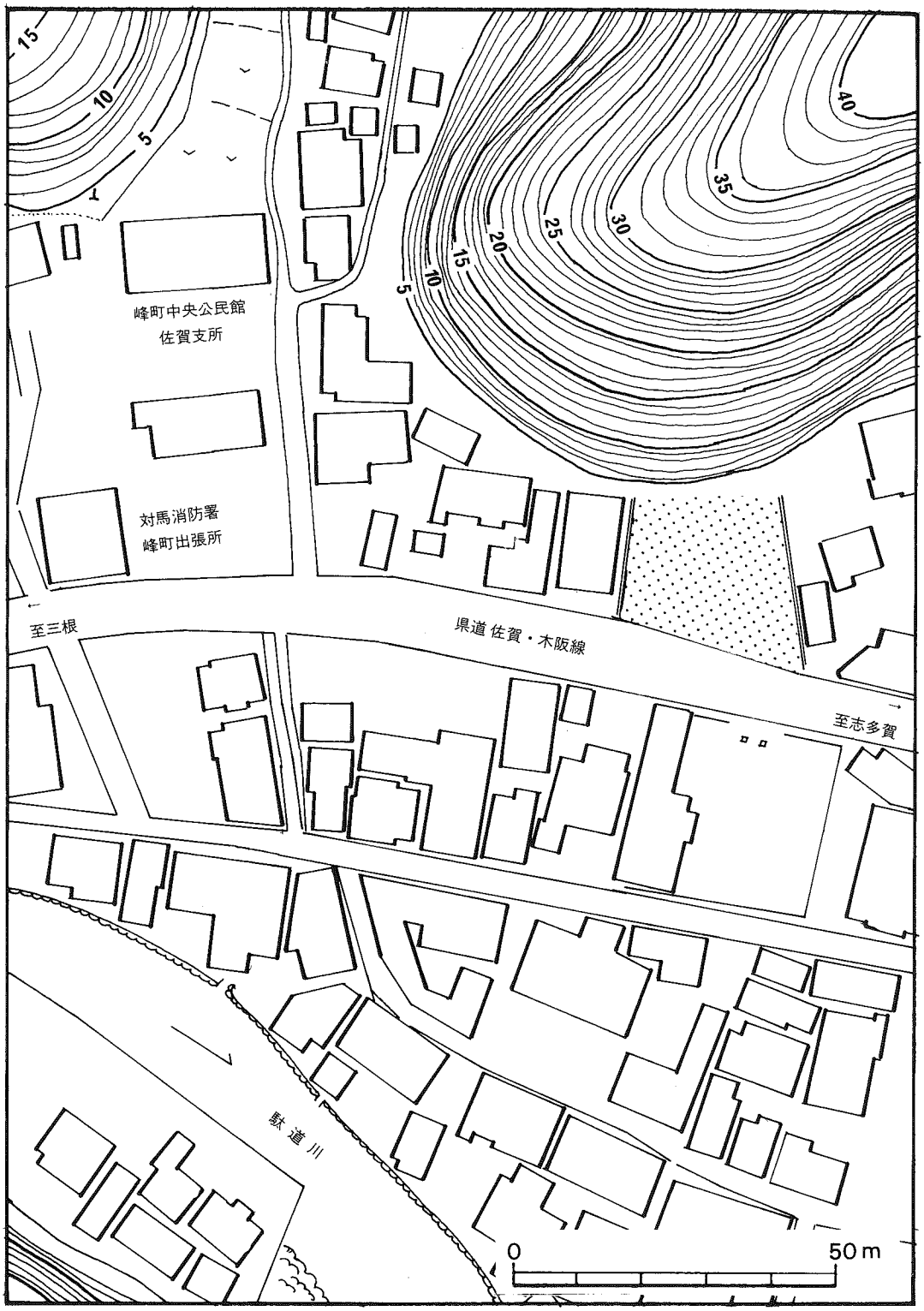
3．佐賀貝塚の調査（第図４）

調査対象地は、長崎県上県郡峰町大字佐賀486番地、面積は約400㎡である。この土地は県道木坂・佐賀線の北側にあり、両隣は民家、北背後は等高線の調密な丘陵が迫っている。昭和61年３月、現地踏査の時点で、敷地は山側が一段高くなってそこに小島氏宅があり、倉庫が１棟敷地西側に建てられ、庭先は一段低くなっていた。この遺跡について、昭和29年増田精一氏等によって小発掘が行われているが、敷地の西隅であったことが発掘調査によって判明した。また、昭和32年庭先から切石を使った箱式石棺１基が出土しているが、その位置については、「このあたり」という程度しかわからず、発掘によっても旧位置の確認はできなかった。

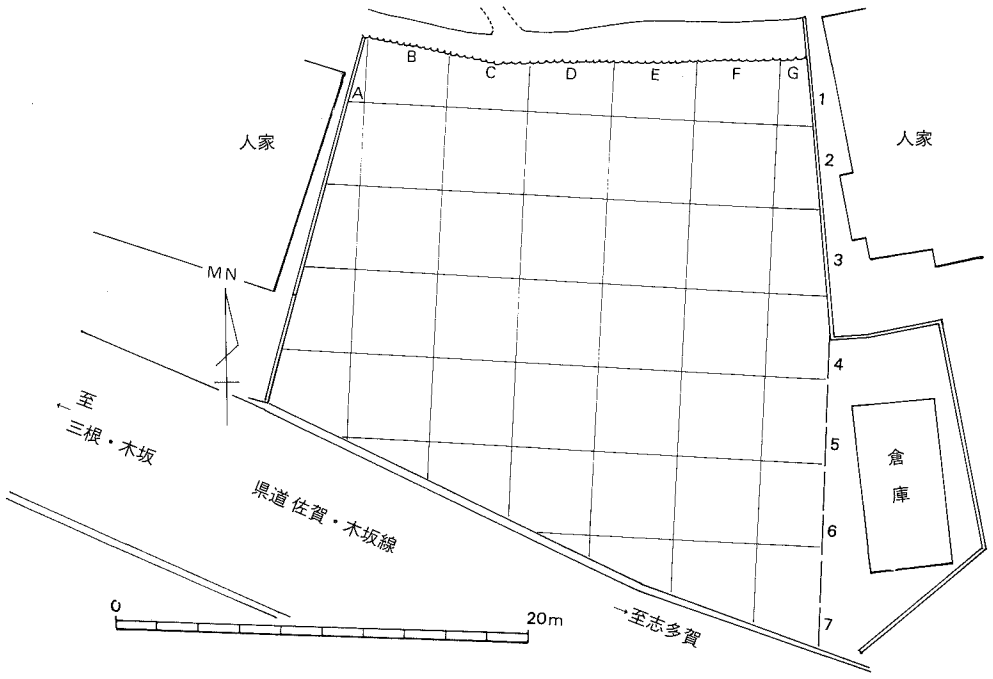
調査は、東西約20m、南北約18mの敷地を４m方眼に区切り、東→西にA～F、北→南に１～６の記号を付して、A－２、F－４区等とした。限られた期間を有効に利用するため、貝塚および包含層の範囲を確認する必要があり、敷地を４分割する線上のグリッドと敷地４隅のグリッドについて、それぞれ半分程度の面積を試掘した。その結果、B－４区を斜断、C－４区の一部を通り、D～F－５区を東西に半割する線以南は地盤が急激に下り、遺物の包含状態が認められないことが判明した。「この線以南は地盤が急激に下り、遺物の包含状態が認められない」という線は、佐賀貝塚の立地を考えるうえで重要であるがこの点については、「貝塚と遺構」の項で述べる。

このような試掘の結果、全面発掘から除外できる部分が生じた。第６図の１点鎖線以南の部分であるが、結果的に全面発掘を実施したのはこの線の以北約300㎡になる。

地形実測は縮尺200分の１で実施したが、等高線の記入については原状とかなり異っているため、要所の高さを求めるにとどめた。遺構実測は原則として10分の１で実施した。写真撮影は35ミリ判モノクロおよびカラーリバーサルフイルムを使用した。



第3図　佐賀貝塚付近図（1/1000）



第４図　発掘調査地点および調査区設定図（方眼＝４ｍ×４ｍ）

４．佐賀貝塚の土層

佐賀貝塚の発掘調査地点は、県道佐賀・木坂線の北側にあり、土地自体が緩く県道側（南）に下降傾斜している。旧土地所有者早田氏宅の宅地は、この緩斜面を二段に造成し、高い方は住居に、低い方（県道側）は庭と畑に利用されていた。このため、旧地形は推測しやすい状態であったが、遺跡自体はあるていど損壊された部分もあった。

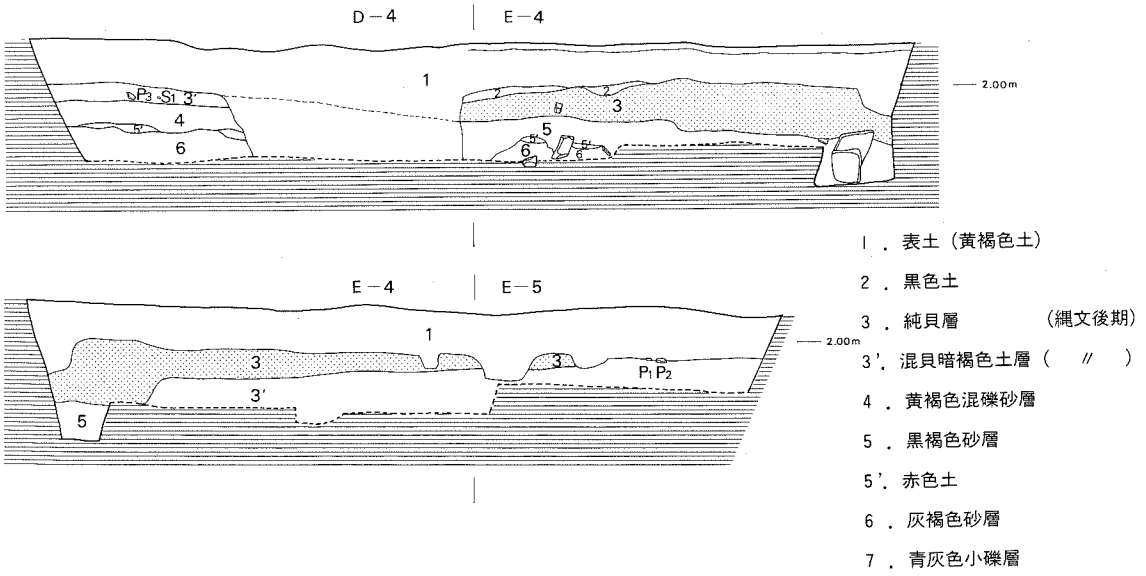
土層の観察と記録の対象としたのは、Ｄ・Ｅ－４区北側と、Ｅ－４・５区東側の畦畔部であり、土層の状態は第５図のとおりである。

１層は黄褐色土層であり、対州層群の砂岩の微細粒が混じり、粗い土質である。攪乱を受けているものの、30cm近く堆積しており、本来は弥生時代の土層であるかも知れない。昭和32年に石棺が発見された時の記憶では「一尺ぐらい下から板石で作った棺が出た」とされており、今回の調査で弥生式土器も出土しているのでその可能性はある。２層は黒色の土であるが、土質の点では１層と変わらず、遺物は含まない。３層は暗褐色の砂土質で貝が混じり、東端に行くほど貝の厚い堆積を載せている。この層が縄文後期の遺物を多量に包含し、遺構の切りこみ面になっている。この層は東西の断面では、ほぼ平均して堆積しているが、南北の断面では南側

にやや傾いて堆積している。また、この上に載る貝層は、E列を西限としている。D列まで広がる破砕貝層は、一部住居跡をも覆っており、地形に沿って貝塚が崩れたものと考えられる。

4層は、薄く堆積した混礫砂層で小礫を含み、殆ど遺物を含まず、部分的に堆積している。5層は固く締まった黒褐色の砂層で、東方向では堆積深度が深い。この層はD列以西、特に北西隅において破砕貝を含み、縄文中期の遺物を含むようになる。このことは、発掘調査地点の西隣の民家の下に縄文中期の貝塚があることを推測せしめる。昭和29年、増田精一氏等が発掘調査されたトレンチ跡を北西隅のB－2区において今回確認したが、同氏等が佐賀貝塚を縄文中期とされたことと今回の調査結果が一致する。

第7層は、有機物と遺物を含まない自然層である。粗粒の対州層群の砂の中に小指大から拳大の対州層群の礫を含みザラザラと崩れ落ちる海浜の砂の層である。この層は、第5列のトレンチ以南において堆積しており、縄文時代中・後期の海浜が遺跡近くまであり、遺跡はごく限られた山際の狭い部分に立地していたことを意味している。この層の堆積する線を延長すると県道向かいの現集落に残る岩礁（弁天の小祀がある）に連なると考えられ、遺跡は古い駄道川（だみちがわ）河口に面していた、と推測される。



第5図　D－4～E－4（南北方向）、E－4～E－5（東西方向断面図）（1／3）

5．貝塚と遺構

1）現地の旧地形

第3図に見るごとく、調査地点の背後一帯は等高線の調密な丘陵になっており、急傾斜地になっている。調査地点一帯は、名刹円通寺の方向から流れる駄道川の運ぶ堆積土と海砂の作用で僅か乍ら平地を造り出したものと考えられる。県道佐賀・木坂線の向かい側の集落はかつて砂浜であったといわれ、弁天を祭る岩礁がそれを物語る。この岩礁と調査現場との間には小規模な砂堤があったと考えられ、この位置にある人家の敷地のレベルが僅かながら高くなっている。

調査地点のB－4区を斜断し、C・D・E・Fの5区を東西に横断する線の以南は、粗い対州層群の礫になっており、海浜の辺端と考えられるが、この線が弁天を祭る岩礁とを結ぶ旧海浜の奥であったと考えられる。現在の県道の南側約30mのところを旧道が走っているが、海辺に近かったといわれ、前述の旧地形推測を助けている。してみると、貝塚のある場所は、砂堤が風波を遮り、比較的広い海浜に面し、駄道川河口に近い絶好の場所であったらしい。

2）貝塚

佐賀貝塚は、二つの貝塚からなる。縄文時代中期及び同後期の貝塚である。「佐賀貝塚の土層」の項で記したように、中期の貝塚は調査対象地点の西北隅に破砕貝層が西から張り出した状態で確認されるところから、主体部は西隣の人家の下にあると考えられる。

一方、同後期の貝塚は東隣の人家の下に主体部があるらしく、東方向の調査区ほど貝の層が厚く、E－3区を西端として舌状に東手から張り出し、崩れた破砕貝層はその周辺まで認められる。土層の項で記したように現場の旧地形は急傾斜地が背後に迫った狭い海岸であり、堆積した貝塚の一部が崩れ出したものと考えられる。

3）埋葬遺構

佐賀貝塚の調査において、人骨6体を検出した。人骨自体については別項に譲るが埋葬状態で検出したのは4体である。

1号人骨は、D－5区北東隅に、東西135cm、南北65cmの浅い土壙に頭位を西にして埋葬されていた。やや後世の影響を受けているものの、人骨の各部位は正位置にあり、屈肢葬の状態で埋葬されていた。土壙の中に人頭大以下の礫数個が残っており、第4号人骨の場合と同様、埋葬後、礫で覆ったものと考えられる。右手の側に第70図156に示した扁平石斧があり、副葬品と考えられる。

2号人骨は、F－2区の南西隅で検出した。下顎骨を残して頭蓋骨を失っているが四肢骨は正位置にあり、屈肢葬の状態で埋葬されたことは明確であるが、土壙の状態は明確でない。

3号人骨は、C－2区のほぼ中央で検出した。頭蓋骨の一部と四肢骨の一部が残った子供の埋葬骨であり、四肢骨の状態から屈葬と考えられるが土壙の状態は明らかでない。

4号人骨は、F－2・3区の境界で検出した。135cm×85cmの土壙に屈肢葬の状態で頭位を南西にして埋葬されていた。上半身を人頭大以上の礫で覆っているが足元にも礫が残っておりもともとは全体を礫で覆っていたらしい。頭の部分には大型のアワビの殻が五枚あり、左膝の部分にも一枚残っているので埋葬当初にはかなりの数のアワビが全体を覆っていたものであろう。

5号人骨は、4号人骨の足元近く大腿骨のみが残っていた。遺構を伴った状態は確認できず散乱骨とも考えられる。

4）住居跡

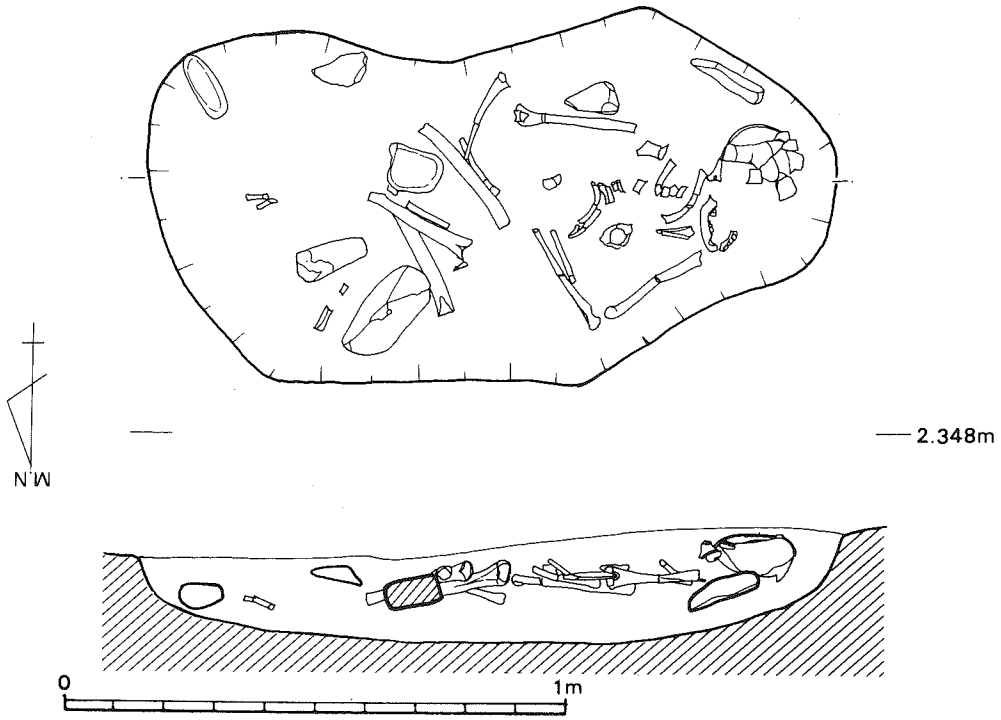
佐賀貝塚の調査において、住居跡と見られる遺構を検出した。竪穴を持った柱穴群1、持たない柱穴群3箇所である。1号住居跡はB・C3区にまたがる位置、2号住居跡はE5区、3号住居跡はD3区において検出した。

1号住居跡は、E4区に、南北2.2m、東西1.5mの楕円形の範囲に掘られた柱穴群であり、竪穴を持たず、柱穴自体も小規模であるが、底に石等を持ち、床面が固くしまっている。「住まい」であるか否かは別として小規模な建物であったと考えられる。(第11図)

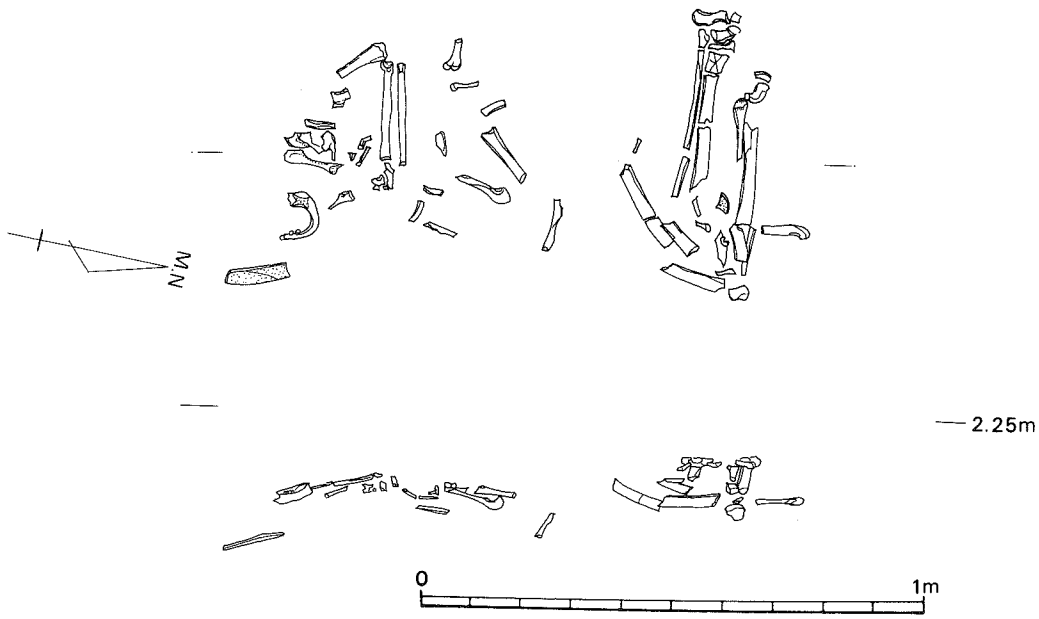
2号住居跡は、B・C3区にまたがって検出された。径250cm程度、深さ30cmほどの円形竪穴を掘り、大小26個の柱穴を主として竪穴外に穿っている。竪穴内床面は固くしまっているが、炉跡はない。柱穴の大半は側面と床面に平らな石を配しており、柱の安定と固定を意図した構造になっている。したがって柱穴の外見は、一見超ミニサイズの方形石棺の感がある。対馬の地盤は脆弱で、特に砂地の場合、壁面の保全が困難であり、水にあうと容易に崩れる。このような土地条件を考慮した柱穴構造であろう。(第12図)

3号住居跡は、D3区から一部D2・E3区にまたがる。東西約4m、南北約3m範囲に25の柱穴群が楕円形にまとまって検出された。2号住居跡と同様、大小の柱穴があり、径30cm以下の小規模のものは素掘りのままであるが、それ以上のものは悉く柱穴の壁面か底部あるいは双方に平らな石を配している。床面は固く締まり、一部焼石のまとまったところが北辺にあって屋外炉の可能性がある。(第13図)

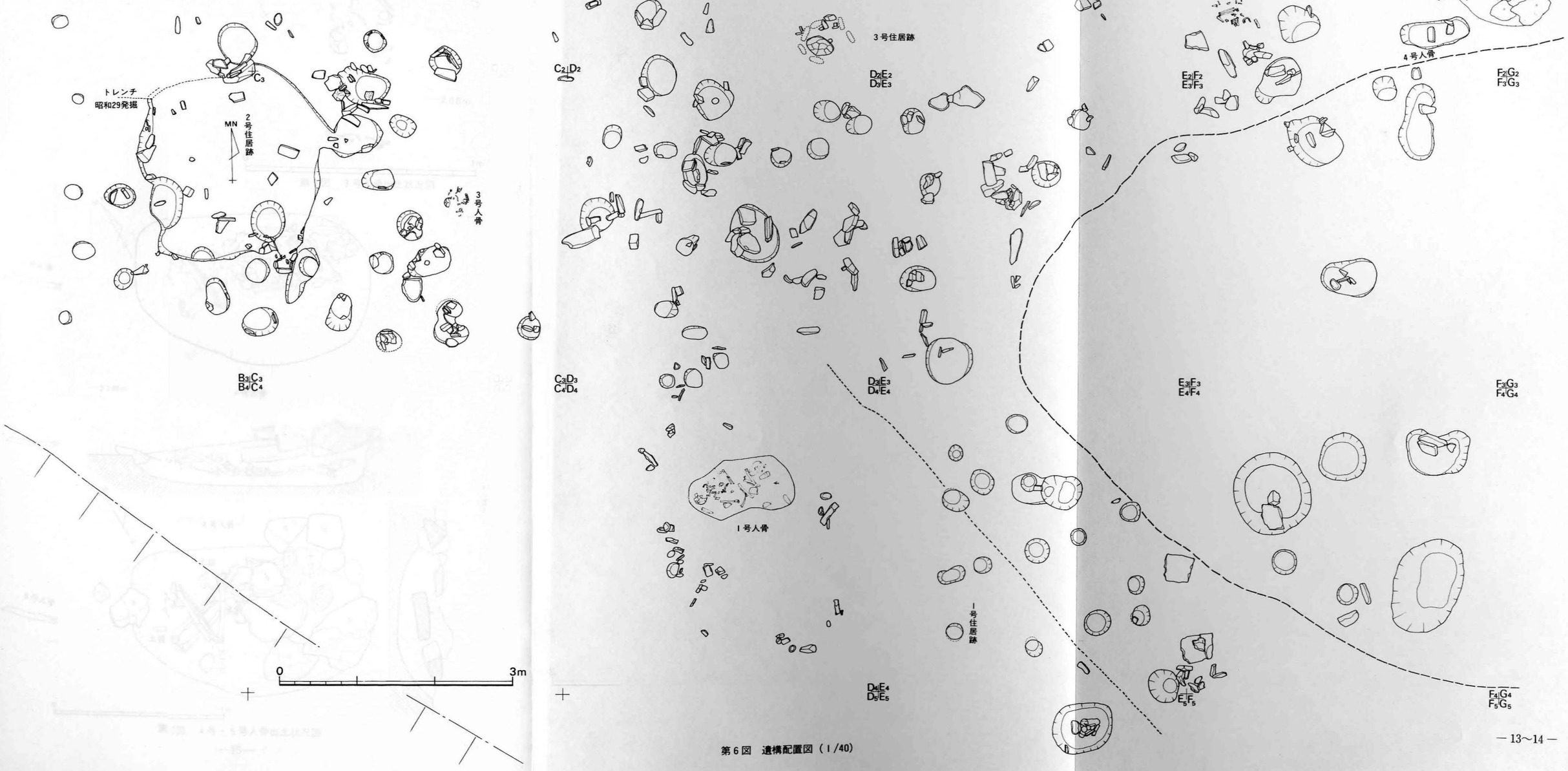
この住居跡は、石斧とその木製品が30点以上まとまって出土し、砥石の大半が出土しているところを考えれば石斧造りの工房的な性格が考えられる。



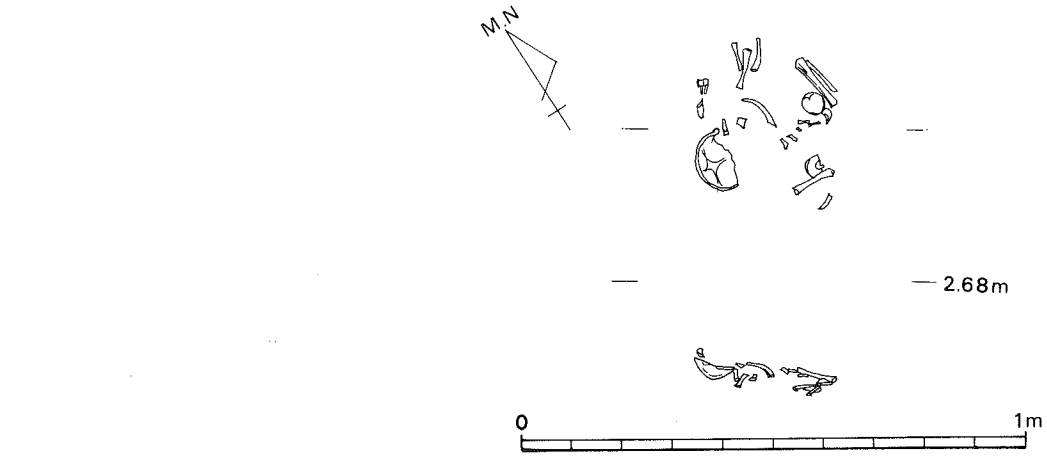
第7図　1号人骨出土状況図（2/3）



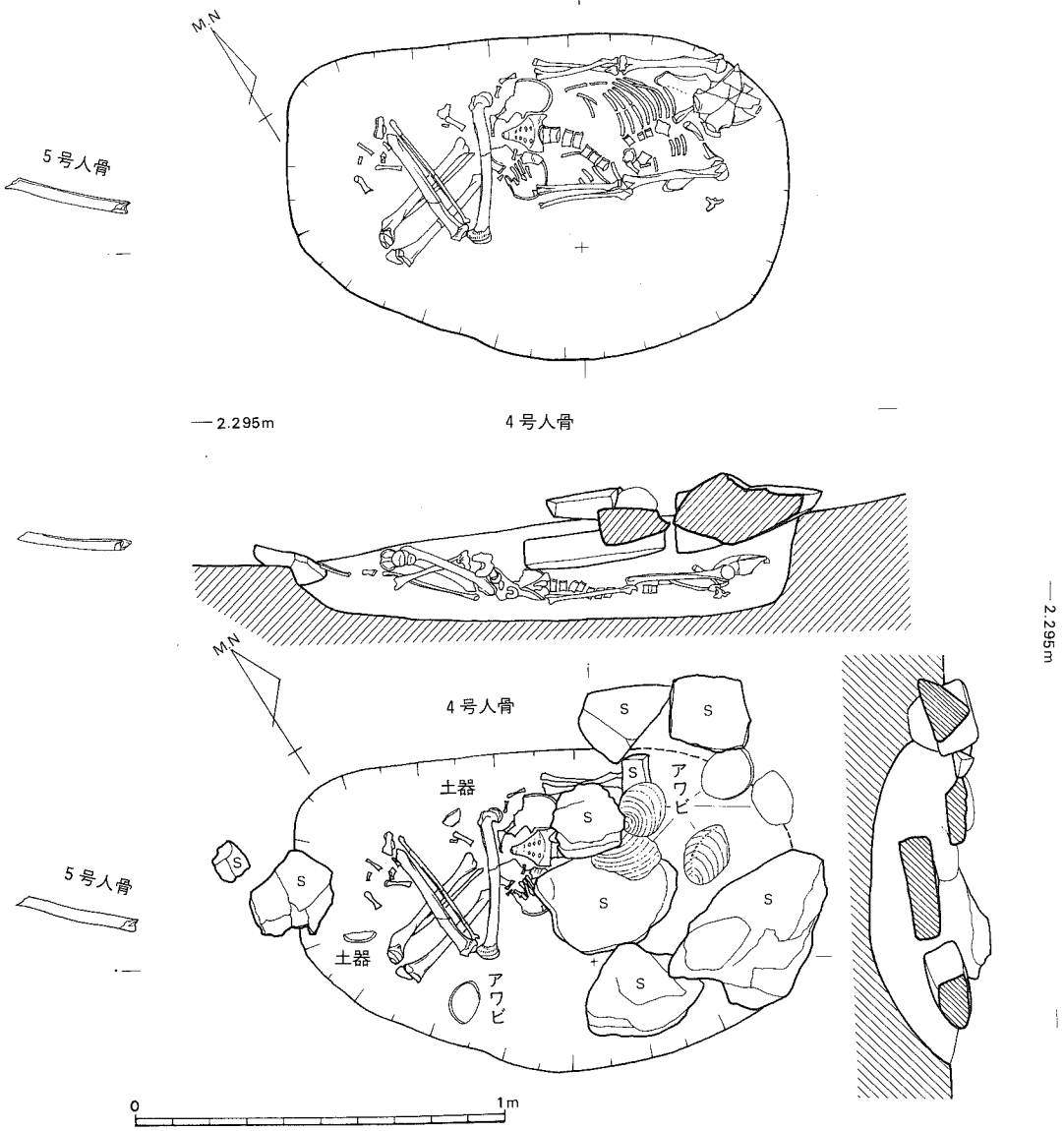
第8図　2号人骨出土状況図（2/3）



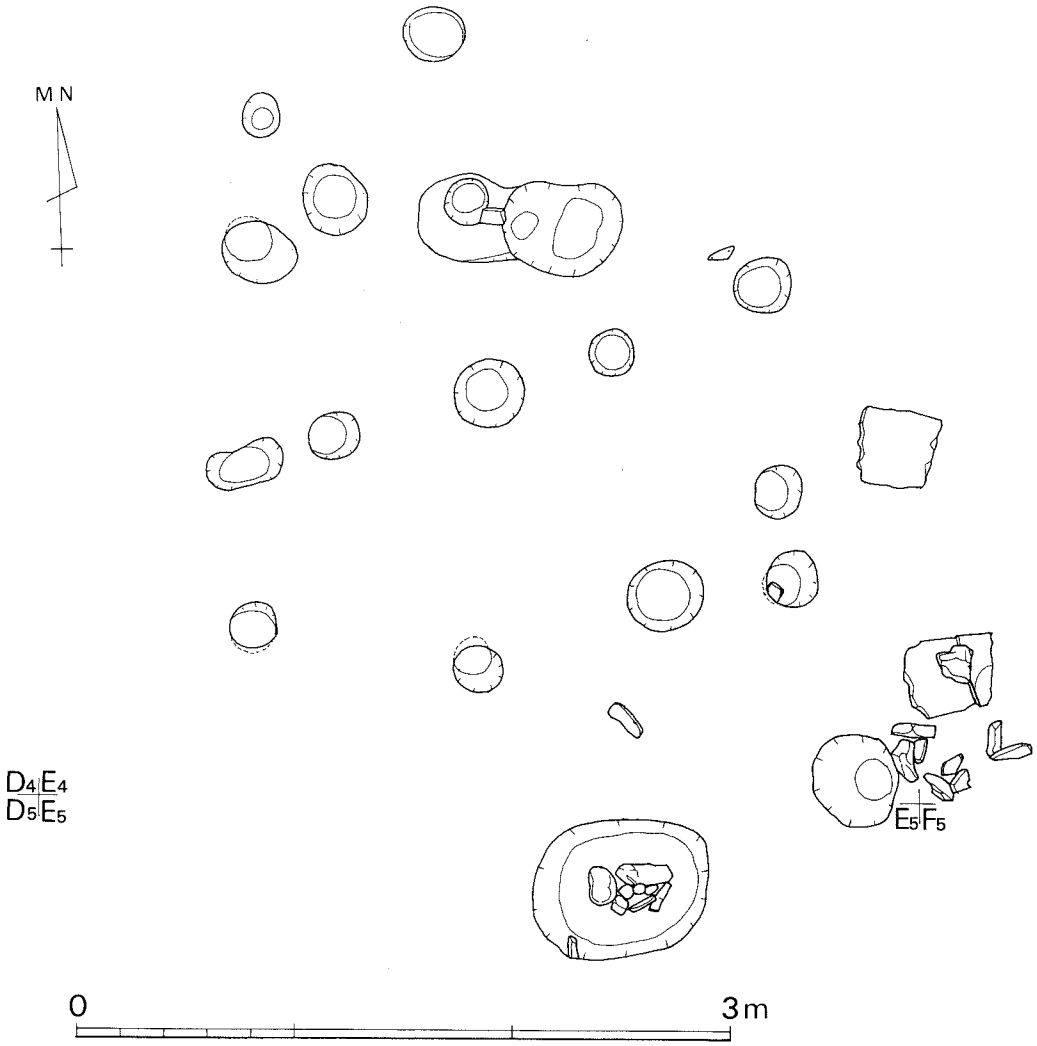
第6図　遺構配置図（1/40）



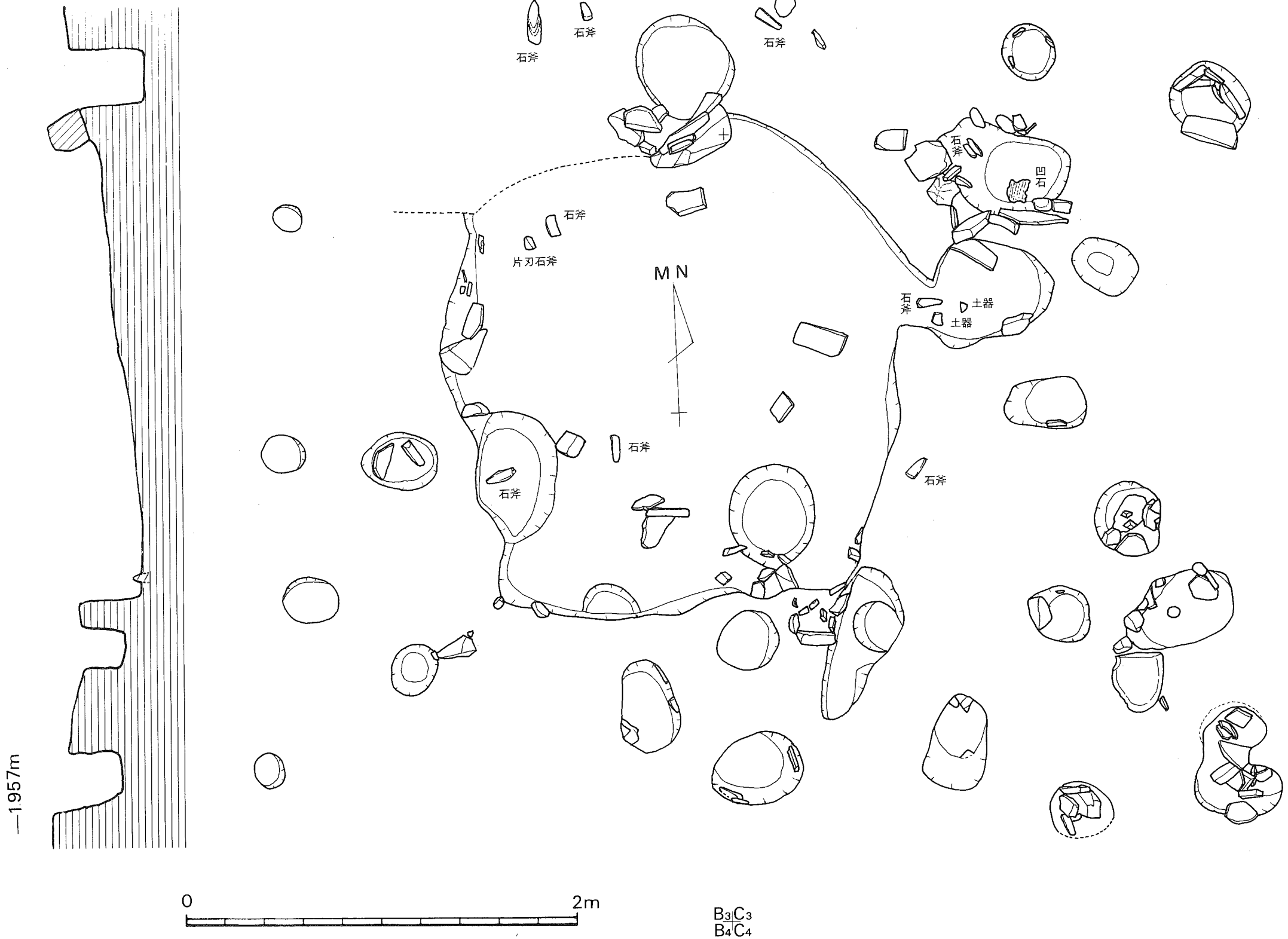
第9図　3号人骨出土状況図



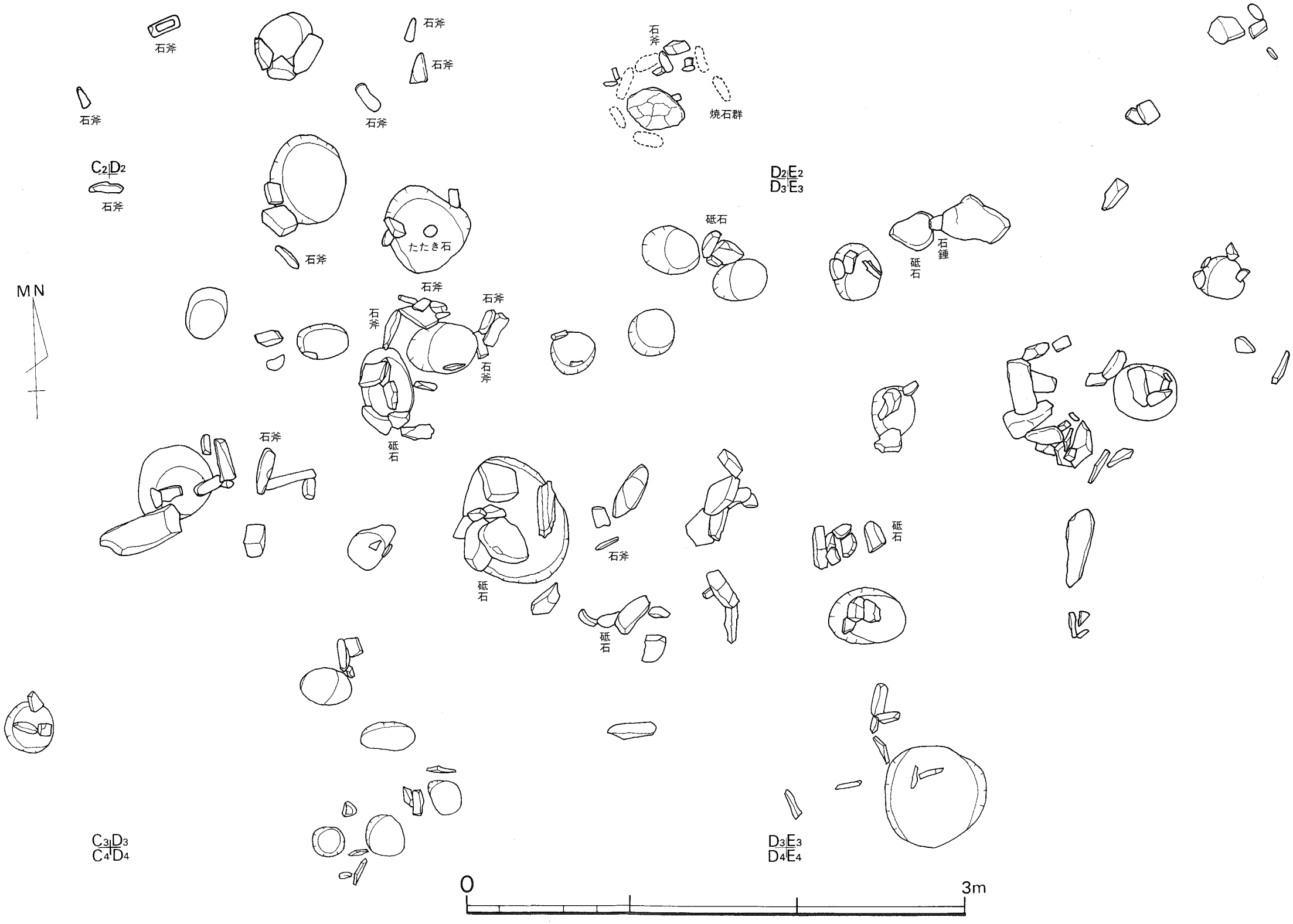
第10図　4号・5号人骨出土状況図



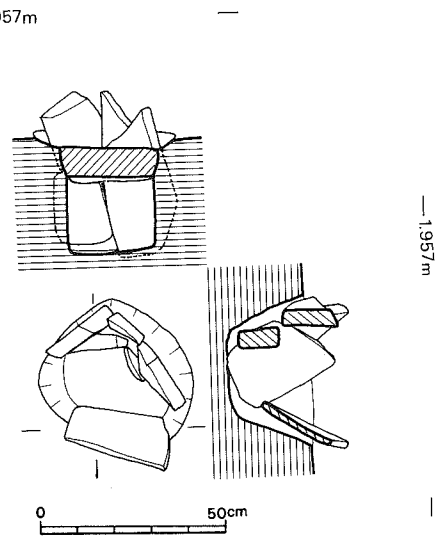
第11図　1号住居跡実測図



第12図　2号住居跡実測図



第13図　3号住居跡実測図



第14図　石組柱穴実測図
（第２号住居跡第10柱穴）

6．遺　　物

(1)　歴史時代の遺物

佐賀の集落は歴史時代においても、対馬にとって重要な役割を果たしてきた。13世紀以前における対馬の実情はかならずしも明瞭ではないが、阿比留氏が富強を誇っていたらしい。1245年（寛元３）太宰府の命を受けた宗重尚が阿比留平太郎を討ち、以後の対馬は宗氏による支配が明治維新まで続くことになる。鎌倉時代以降、明治に至るまで同じ領主が続いた例も珍しい。対馬という隔絶した離島で、対外関係のある時以外は本土の動きとは直接的な関係がなかったせいであろう。

佐賀の地は宗氏三代の間、対馬の主邑であった。朝鮮半島の使者はここに上陸することになっており、外交の拠点でもあった。現在も残る名刹円通寺は使者接応の場所であり、現在同寺には李朝初期の朝鮮鐘（県指定文化財）が残り、佐賀の往時を象徴している。

歴史時代の佐賀に関する遺跡の発掘調査は未だ行われていないが、貝塚の発掘調査に伴って若干の遺物が出土しており、攪乱層の資料であるが、注意を引くものがある。

李朝初期の平瓦片がある。凹面に細かい布目圧痕があり、凸部には斜格子の押型のある資料である。瓦当面・玉縁を欠くので全容は定かでないが、近年、対馬島内で６箇所の朝鮮系古瓦の出土地が確認され、平戸市（註１）・諫早市（註２）でも確認されている。この種朝鮮系瓦は沖縄県首里城の「癸酉」年瓦が著名であり（註３）、熊本県（註４）・島根県でも報告（註５）

されている。

第15図は銭貨である。天聖元宝（北宋仁宗1023年）・政和通宝（北宋徽宗1111年）・常平通宝（李朝世宗５　1423年）がある。

15世紀中葉以降、対馬の主邑は下県郡厳原町（対馬東南岸）に移るが、佐賀の地は朝鮮通信使の上陸と応接の地であった。報告した資料は僅かな量であるが、対馬における佐賀の地の国際的位置を示している。

〔註〕

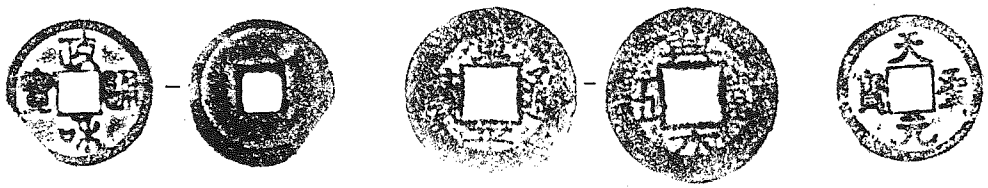
1．茨花博文他『平戸和蘭商館跡』平戸市教育委員会1988に、青海波模様の軒丸瓦片一点が報告されている。

2．西郷氏の居城とされる諫早市高城と沖城でまとまった資料が1988年出土している。

3．西谷正『高麗・朝鮮両王朝と琉球の交流』その考古学的研究序設「九州文化史研究所紀要第26号」1981

4．熊本城宇土櫓の整備事業に際して、まとまった資料が出土し、熊本城前代遺構のものであるという。（松本健郎氏教示）

5．内田律雄『史跡富田城跡菅谷地区』第１次発掘調査署報　島根県広瀬町教育委員会1985

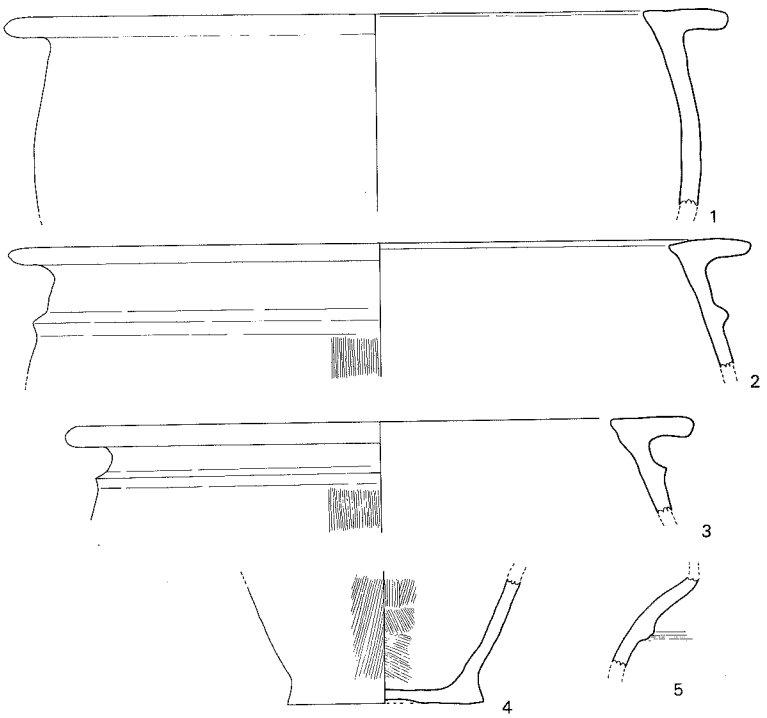


第15図　表土層発見の銭貨

(2) 弥生時代の遺物（第16図）

甕型土器の口縁部３点、袋状口縁部１点、底部１点がある。１は口縁部が外側に張りだすものであるが、内側への張りだしは弱い。２・３は口縁部１に似るが口縁部下際につまみ出したような断面三角形の突帯を一条めぐらせている。復元径は１～３それぞれ28.4、30.0、25.4cmである。中期中葉～後半の資料と考えられる。５は袋状口縁部資料で朱の塗布がある。

佐賀貝塚では昭和32年に切り石を使った石棺一基が出土したといわれ、今回の調査において原位置等の確認を試みたが、確認にいたっていない。石棺の位置についても「このあたりであった」という程度で、確認できなかった。対馬の弥生時代墓地はほとんど岬の先端に営まれる例が多く、本遺跡のように砂地の墓地は従前皆無に近い状態であり、五島列島や県本土部の外洋沿岸の墓地に近い立地をしめしている。



第16図　弥生式土器実測図（１/３）

(3) 縄文時代中期の土器

佐賀貝塚における縄文時代の遺構・遺物を包含する層は、3層(純貝層　縄文後期)、3'層(黒褐色混土砂層　縄文後期)、および4層(黒色砂層　縄文中期)である。3層は30cm程度の厚みがあるが、調査区の西半では比較的うすく、道路側でもうすくなっている。3'層もほぼ同様の堆積が見られ、この面が遺構面になっている。4層は3'層に比してやや粗い砂層であり、西側に厚く堆積している。一部E列あたりまで堆積がひろがっており、遺物も若干認められるものの極めて希薄であり、中期包含層の主体部が西隣の土地にあることをしめしている。昭和29年、増田精一氏等が発掘調査された、この地番西北隅では遺物の包含状態はやや厚く破砕貝が混じるところからして、西隣の土地に中期貝塚主体部の包含地のあることが予測される。

佐賀貝塚の縄文式土器は3及び3'層の土器と4層の土器が分かれるので、3・3'層と4層に分けて述べることにしたい。

第4層の土器(第103～105図)

Ⅰ類土器(1・30・32・38)

胎土に大量の滑石を含む口縁部資料で、凹線を施した後、半裁竹管状の施文具によって爪型連続させるものを一括した。1は角張った波状口唇に爪型文を、口縁部下際に凹文を施した後爪型を連続させる。30も滑石を多量に含む口縁部で、口唇上に爪型を連続施文し、口縁部に凹文をほどこしている。32も滑石粉末を多量に含む資料で、口唇上に爪型を連続させる資料である。表面がやや流れているが爪型と凹文が見える。38も滑石粉末を多量に含み、口縁部が肥厚して山型になる資料である。口唇上の施文は半裁竹管による爪型でなく、深い刻みをいれている。この一群は並木式土器系であり、30・38は太型凹文土器との折衷段階の土器とかんがえられる。

Ⅱ類土器(3～29)

太型の凹線と凹点を、単独もしくは組み合わせた厚手土器の口縁部で滑石粉末を多量に含む一群である。口縁部が波状になるもの、平縁のものがあり、口唇上に凹点をもつものもある。口縁部の模様は、凹点を主体とするもの、凹点と凹線を併用するもの、凹線のみのもの、がある。第4層出土の土器の中で最も量的に多く阿高式土器である。

Ⅲ類土器(31・33～37)

胎土に滑石を全く含まない一群の土器口縁部である。口唇上に刻みを持つもの、凹線を持つもの、波状口縁のものがあるが、模様は萎縮しおり、胎土も粗い。阿高式系に一応含まれるであろうが、萎縮退化した段階のものであろう。

Ⅳ類土器(39～41)

いずれも滑石粉末を多量に含むが、張りだしの弱い39、張りだしの強い40、平底の41(貼合

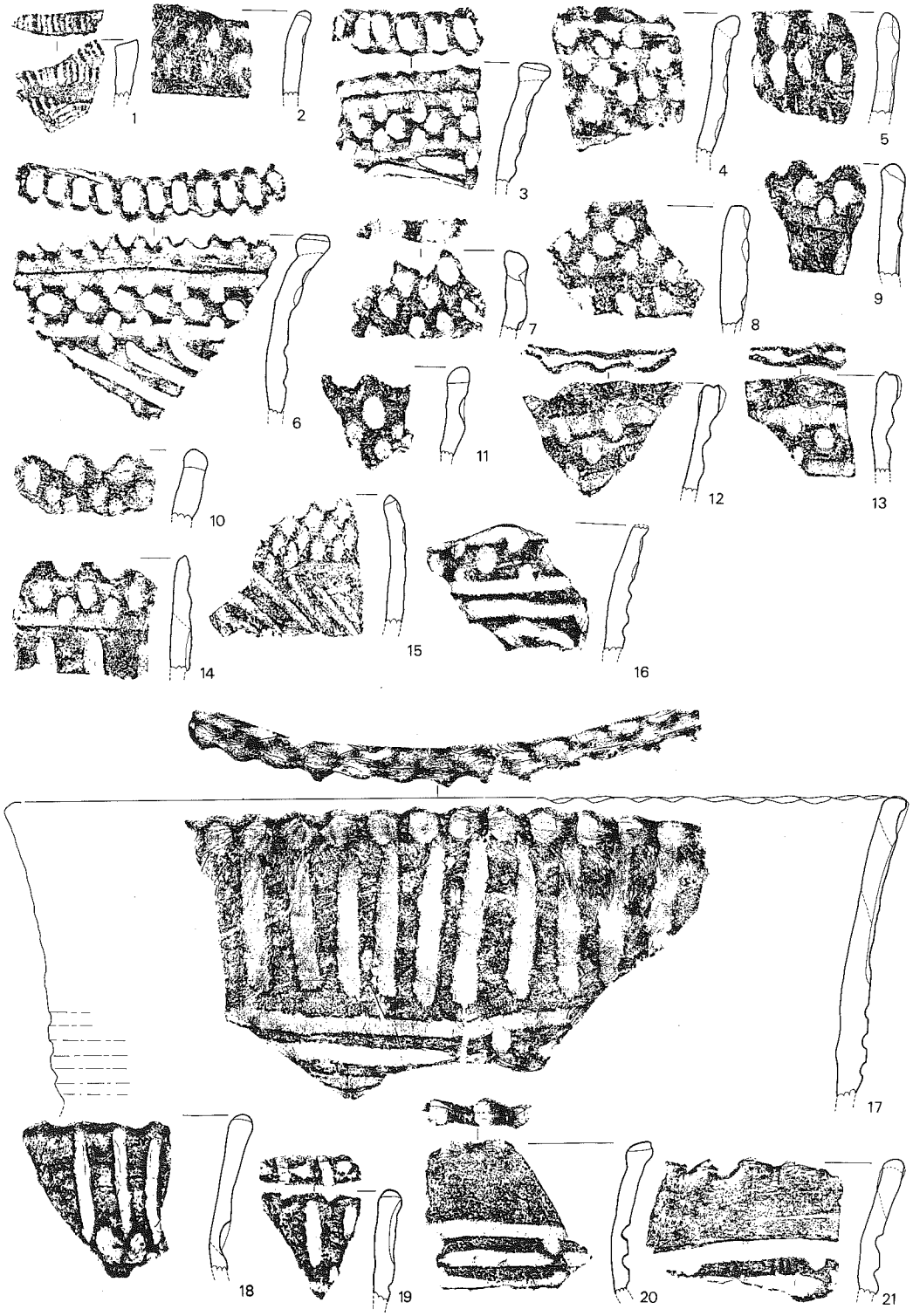
せの部分が剝落している）がある。39は鯨背柱骨の圧痕が残り、40は指頭で押された痕跡がある。模様は3点とも底部近くまで凹線が施文されている。

V類土器（43～47）

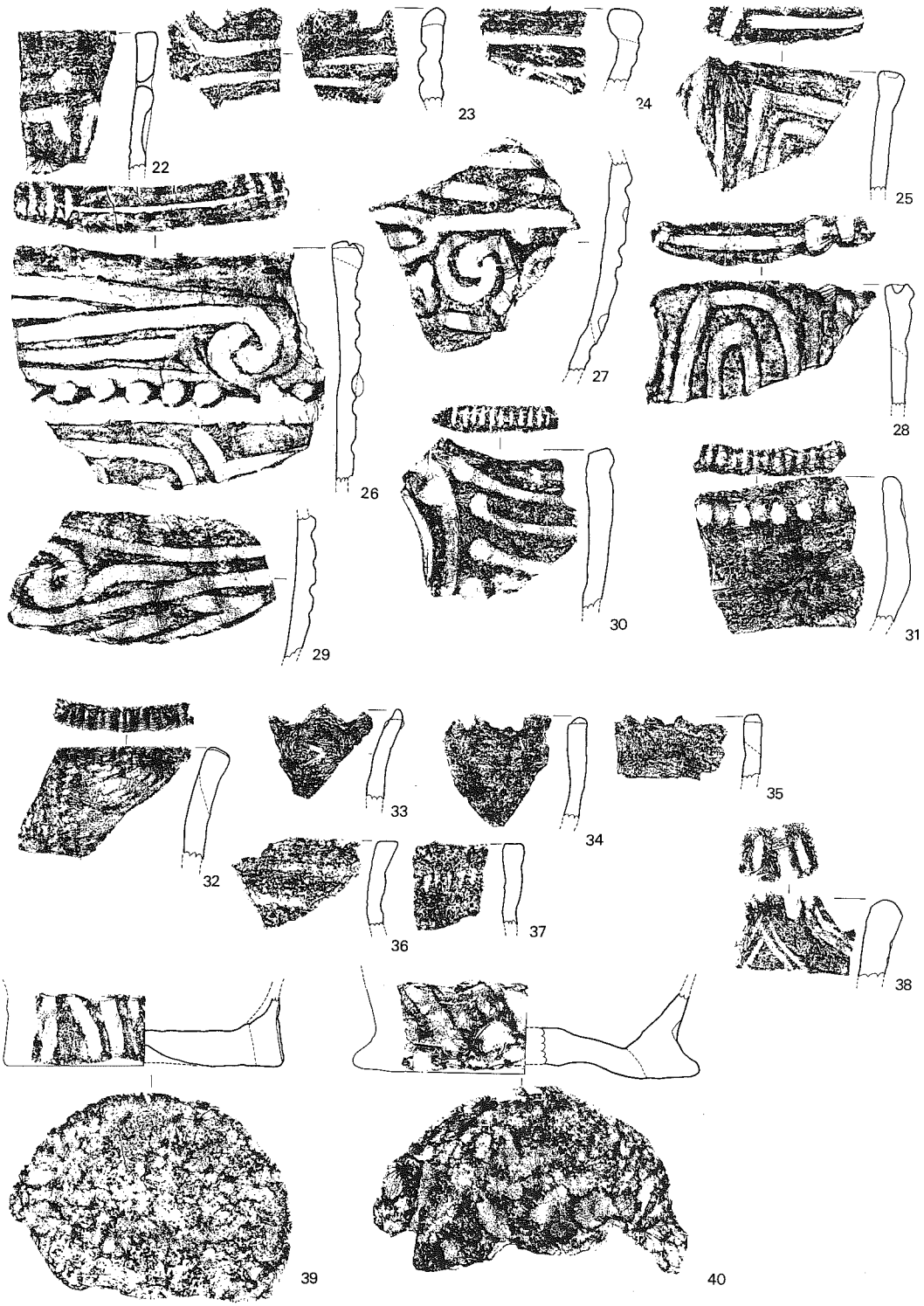
把手と土製有孔円盤をまとめた。43は磨耗があるが楕円形の膨らみの中央に一孔がある。胎土に多量滑石粉末をふくんでいる。44は半円形の肉厚把手で渦巻き状の凹文が両面に施されている。上下からする穿孔があるが、貫通していない。44は楕円形の把手で、橋状になっており、上下にも穿孔されている。太い凹文があり、朱の跡がある。滑石を含んでいる。46は滑石の粉末を多量に含む把手である。角張った断面をもち、旧状は橋状把手であろう。47は半分欠損しているが、土製有孔円盤であり、太型凹文土器の二次加工品である。

〔参考文献〕

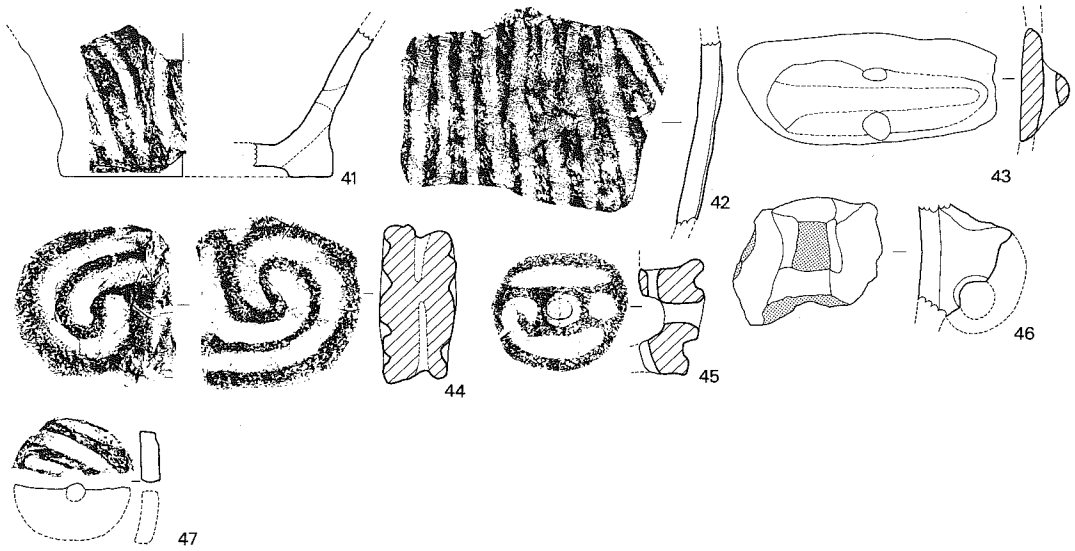
1．田中良之『中期阿高式土器の研究』古文化談叢6　1979
2．佐賀県立博物館『坂の下遺跡の研究』佐賀県立博物館調査研究書　第2集1979



第17図　縄文中期の土器実測図Ⅰ（1/3）



第18図　縄文中期の土器



第19図　縄文中期の土器及び土製品（底部）、（把手及び有孔円盤）（1／3）

第Ⅰ表　縄文中期土器観察表

掲載No.	出土区	番号	色調	胎土				調整	文様	備考
				滑石	石英	輝石	他			
1	B_2	14	黄灰色	○				貝？	凹文十連続刺突文	
2	SA	467	赤褐色				貝殻	不明	ヘラによる凹点、曲線文	
3	C_2	81	黒褐色	○				横方向ナデ・貝？	刻目凹点2列斜位凹点不連続凹点	
4	C_2	1512	黄橙色				貝殻	〃	横4列凹点、横位凹線	
5	W	19	茶褐色				〃	ナデ	凹点列2条凹線	
6	B_2	296	赤褐色	○				横方向ナデ・貝？	刻目凹点2列斜位凹線	
7	C_2	1417	茶褐色	○				ナデ・貝か？	3列の点列	
8	E_3	225	黄橙色				雲母片岩	指ナデ	3列の凹点、凹点＋凹線	
9	SA	1075	茶褐色				結晶片岩	横位	横1列凹点、横位凹線長い凹点	
10	C_2	1431	茶褐色				貝殻	指おさえ凹点はヘラ先（内）		
11	CA	1068	黒褐色	○					凹点3列	
12	B_2	295	〃	○				横方向ナデ・貝？	凹線、凹点	$B_2$295と同一固体か？
13	C_3	1422	〃							
14	C_2	1421	〃				雲母片岩	ナデ・貝？	市松模様凹点凹線凹文	
15	C_2	1525	赤褐色～黒褐色				貝殻	貝殻？	〃　〃　〃	
16	C_2	1531	黒褐色	○				横位ナデ・貝？	凹点凹線	
17	C_2	76 75	茶褐色						凹点列縦直線、横直線	
18	B_2	297	黒褐色	○			雲母片岩	指頭、横ナデ	凹点、凹線	
19	B_2	2	黄褐色	○				〃　〃	〃　、〃　刺突点	
20	B_2	298	茶褐色	○				指ナデ	横位凹線文	
21	C_2	72	黒褐色				雲母片岩	横ナデ	〃　、凹点	
22	W	20	黄土色	○				ヘラナデ	太い凹線	
23	SA	1074	赤褐色	○				不明	〃	
24	C_2	91	茶褐色	○				貝殻	凹線	
25	SA	1080	茶褐色～黒褐色	○				指頭＋？	太い凹線	
26	C_2	74	茶褐色～黒褐色	○				貝殻横位	凹点凹線、沈線	
27	B_2	291	黄褐色	○				指頭	渦巻き、直線文	
28	SA	1079	黒褐色	○				横ナデ	凹文の曲線文	
29	F_2	2160	灰褐色	○				貝殻か	渦巻、横位凹線	
30	SA	1076	黄灰色	○				指頭	連続刺突、凹点凹線	
31	C_2	1496	黄橙色				頁岩	〃	凹点	
32	SA	502	茶紅色	○				指ナデ	刺突点列	
33	C_2	1426	赤茶褐色				頁岩	不明	沈線	
34	C_3	1452	赤褐色				〃	横ナデ		
35	H	112	黄橙色					横方向貝殻	貝殻	
36	D_2	114	茶褐色					不明	凹線	
37	SA	91	黄橙色	○				貝か？	刺突点	
38	C_2	70	黄灰色					〃　？	沈線	
39	C_2	67	茶褐色					指頭	凹線文	
40	B_2	292 365	〃	○				〃	凹文、凹点	
41	SA	1073	黄灰色	○				貝殻	縦縞凹文	
42	C_2	93	茶黄茶灰色	○				指頭＋貝殻？	〃	
43	SA	5	灰褐色	○				不明		
44	D_3	1	赤褐色	○				不明	凹文	
45	E_3	288	茶黄色		○				凹点、凹線	
46	C_2	22	赤褐色	○				指頭	太い凹線	
47	SA	6	灰黄色	○				〃		

(4) 縄文時代後期の土器（第24～30図）

Ⅰ類土器（1～25）

基本形として頸部がくびれ、短く口縁部が外反する深鉢型土器である。橋状把手をもつものがあり、模様としては沈線と磨消縄文を主模様とする一群をまとめた。いわゆる鐘ケ崎式土器である。1～3・6・7・11・15～17は渦巻き文を主模様としているが、退化した段階のものと考えられる。前田義人氏の縄文後期土器の分類（註1）を適用すれば、有文鉢A-1-(1)に近いものであろう。16・17は塗朱の残った資料である。18・21・22は浅鉢である。18・21は器形でいえば、同氏の有文浅鉢B-1、22はB-2になる。24・25ほ無文の浅鉢A-2に属するであろう。23は口唇の平らな山型口縁部で図の中央縦方向に稜が立ち、両側を沈線と縄文で飾っている。器形全体は明らかでないが、山型を口縁部4箇所に位置し、山型と山型の間が平坦になる深鉢であろう。下吉田B区包含層出土の土器（註2）で前田義人氏が近畿系の土器か、とされた資料に器形的には似ている。

Ⅱ類土器（26～32・34）

器形的には、後円部がやや肥厚し、頸部が締まった有文深鉢を一括した。26は山型口縁上に逆W字状の模様をはりつけた深鉢でいわゆる北久根山式である。肥厚した口縁部の刻み文は27・29のように斜め一方向のもの、30・32のように斜格子状になるものがある。

Ⅲ類土器（35～57）

深鉢型（35～37・39～41・48～57）、浅鉢型（45～47）があり、縄文を使用しない一群を一括した。35はやや胴が張り、頸部は緩やかにくびれ、口縁部がやや内湾する深鉢である。頸部から口縁部にかけて沈線と疑似縄文でかざっている。40の器形は35に似るが、山型の口縁部直下に沈線と疑似縄文を飾る特異なものである。48は口縁部が緩い山型になる深鉢で、頸部がやや長く伸びている。頸部をはさんで、上下それぞれの2条の沈線間に磨消縄文風に疑似縄文と沈線で飾っている。57も頸部を無文で放置した資料で、口縁部を弧文風の文様でかざる。この一群は北久根山系とすることができよう。80はヘラで全体を研磨するらしいが、口縁部のみ疑似縄文を飾っている。46・47は浅鉢で口唇は平坦であり、47は沈線がめぐっている。両者とも低い貼り付けがあり、疑似縄文を飾る。46は内側にも沈線と疑似縄文で飾っている。

Ⅳ類土器（53～66・68）

貝殻条痕の地文を主体とし、特に主文様をもたない一群を一括した。頸部が締まり、口縁部がやや開く深鉢型土器が多く、浅鉢もある。53は復原径41cm。54はゆるい山型の口縁部に疑似縄文をもつ。55は復原径46.3cmを計り、頸部下際に整然とした横方向の条痕をもつ。56～60は口縁部に刻みのある深鉢で下吉田遺跡B-2類有文深鉢であろう。57は口縁部下際にくずれた重弧文状の文様をもつ。66・68は無文の深鉢で下吉田深鉢C-3であろう。

Ⅴ類土器（67・69・70）

厚手の無文深鉢で頸部のくびれない一群を一括した。条痕をもつものともたないものがある。

VI類土器（71～83）

その他の土器を一括した。

71は口縁部が直立する深鉢で貝殻の粗粒を多く含んでいる。口唇は丸くおさめ、波形口縁の下際に丸い突帯を貼りつけている。口縁部は晩期的要素を感じさせる。72・73は貝殻条痕を内外に施す粗製土器で器形は口縁部が僅かに内湾する薄手の深鉢である。口縁部下際に突帯を2条近接して貼り、部分的にきざみを連続させている。類似を知らないが、黒崎貝塚IV層出土の素製土器（註2）に近いものがある。74は山型口縁に把手を貼りつけているが、橋状にはならない。把手上に深く長い刻みをもち、口縁部下際に幅広の突帯を貼り、刻みをつけている。75は厚手の粗製土器で波形の口縁を二分する溝をもつ。76は薄手の粗製土器で口縁部は僅かに外反しながら直立ぎみに立ち、肩が緩く折れている。口縁部はたいらで沈線をはさんで、刺突点列がある。78は薄手粗製土器で口唇に刻みをもち、口縁部下際にも刻みをもった突帯を貼りつけている。79は薄手精製土器の深鉢であり、竹管刺突を3点のこしている。80も深鉢の口縁部と考えられるが口唇は平らで、口縁下際に浅い沈線2条を断続的に横走させている。82は、橋状の把手であり、側面に沈線2条がある。

VII類土器（84～87）

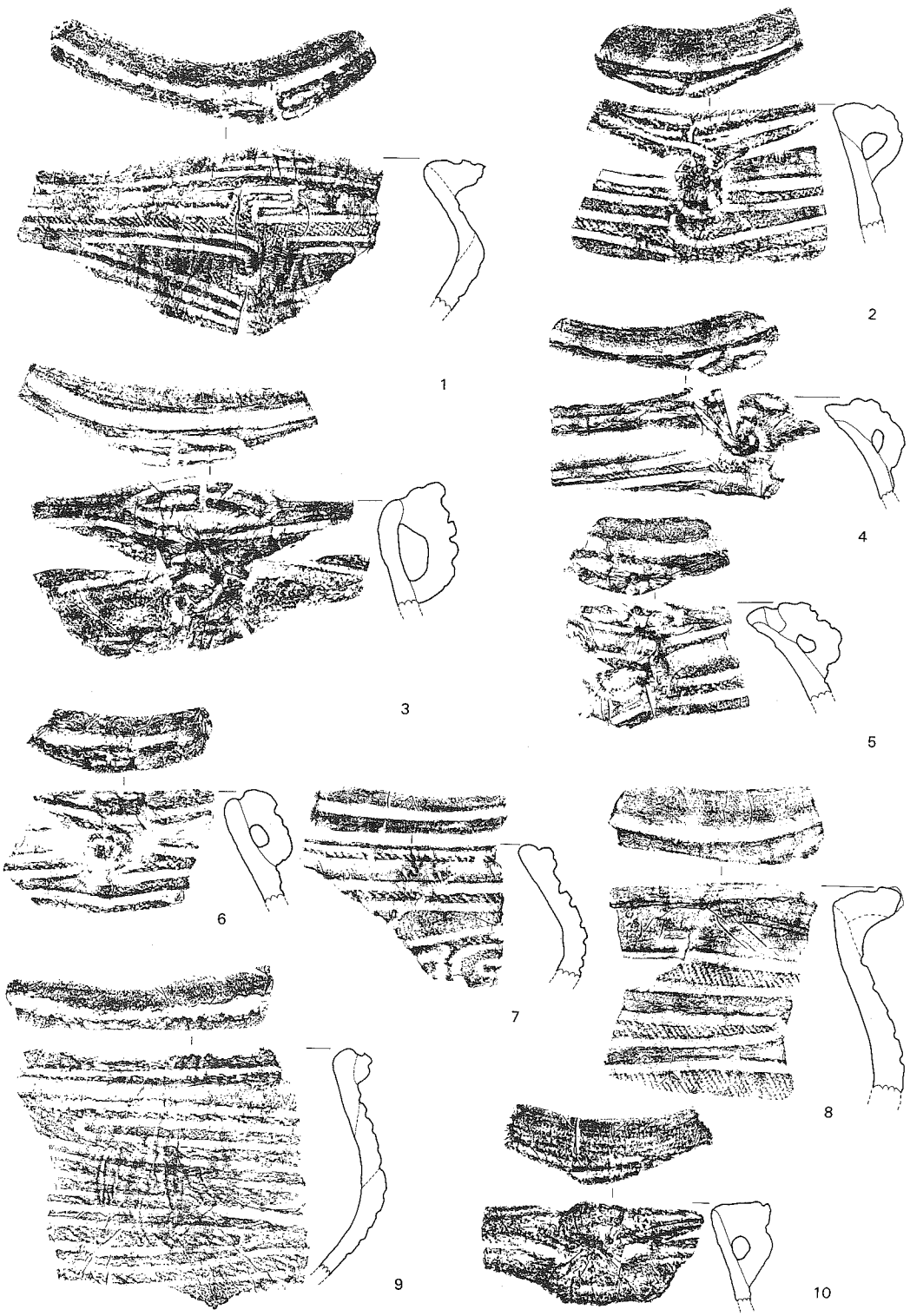
土製有孔円盤である。

VIII類土器（89～108）

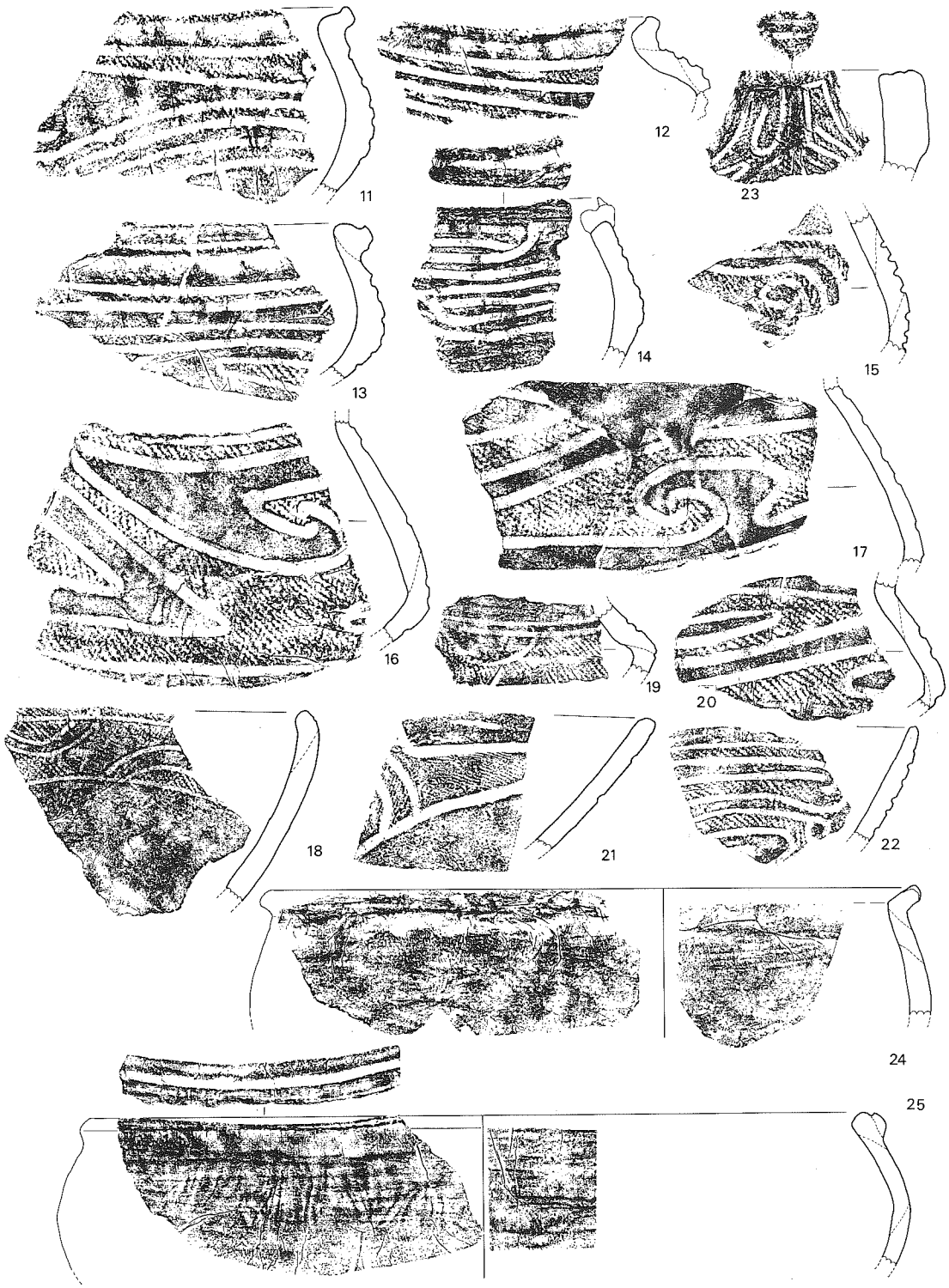
土器底部を一括した。93・95は鯨背柱骨の圧痕があり、97は木の葉の葉脈の圧痕がある。103は底部内側にヘラによる深い記号状の刻みがある。104～106は高台状の底部である。104は透かしまどを有する例で、下際に刻みがある。105・106は裾開きになる高台、107は三脚を有し刻みのある短い突帯を貼りつけている。108は疑似縄文を凹点の底に配した高台、109は丸底である。

〔註〕

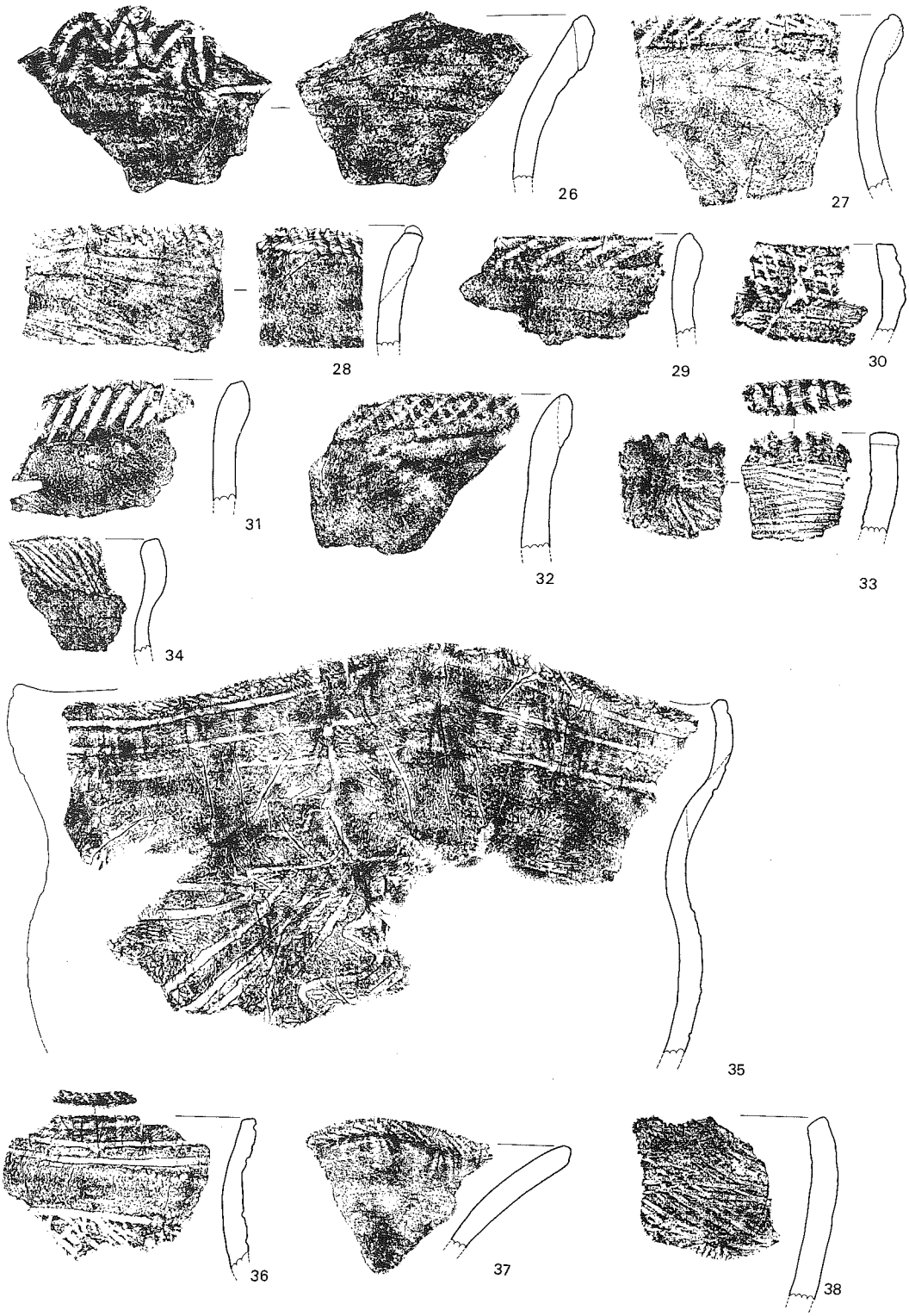
1．2前田義人他『下吉田遺跡』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1985



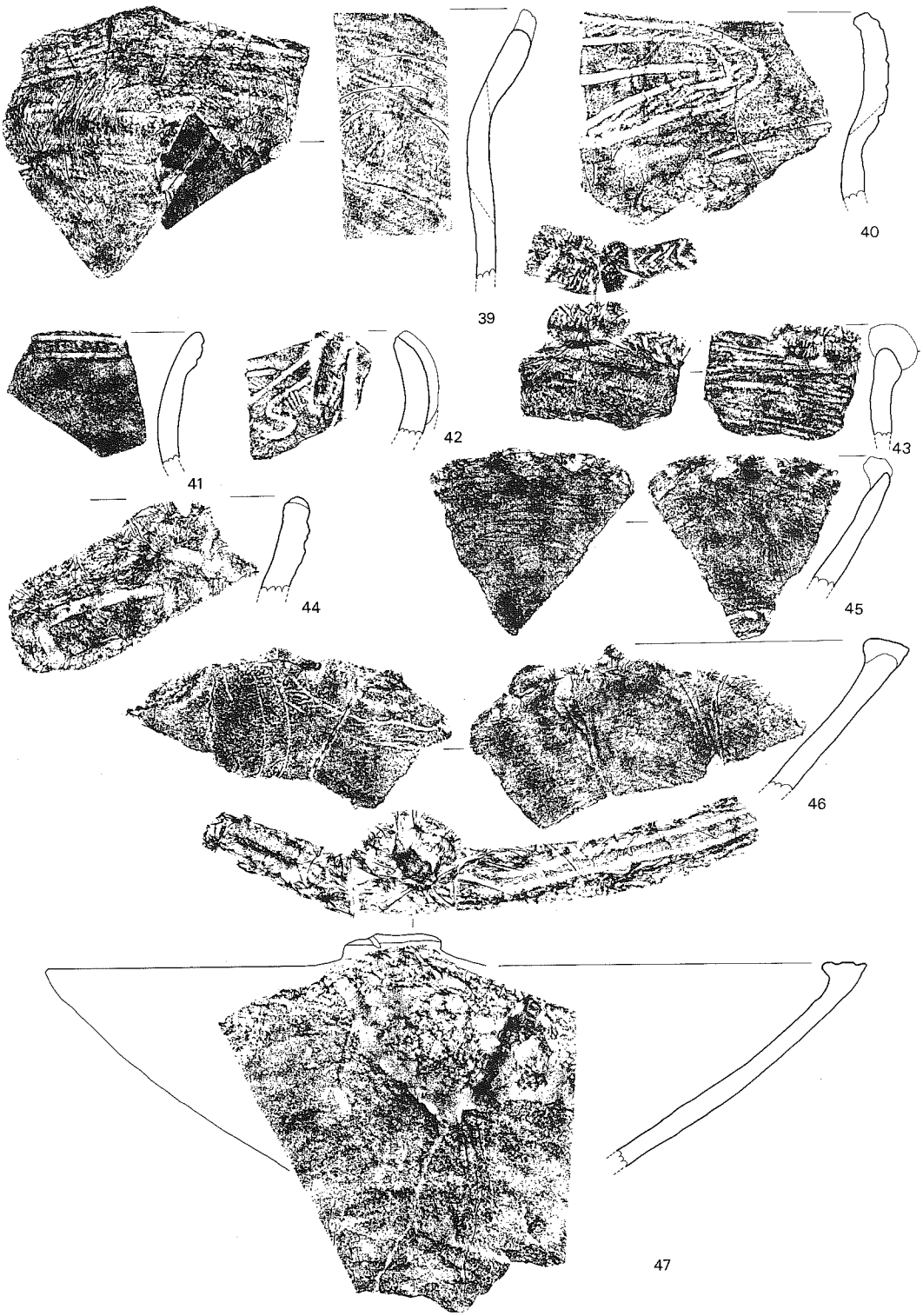
第20図　縄文後期の実測図Ⅰ（1/3）



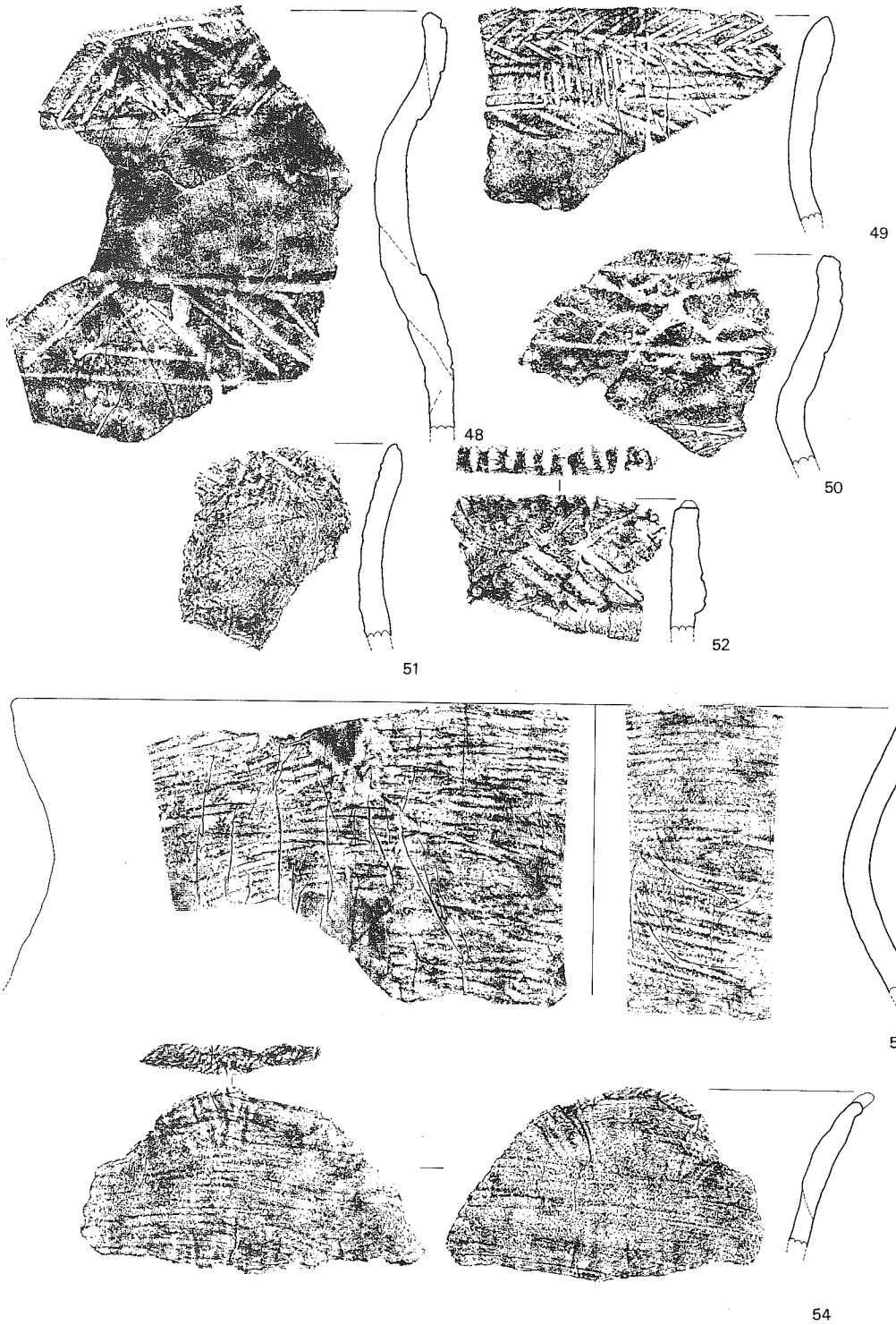
第21図　縄文後期の土器実測図２（１/３）



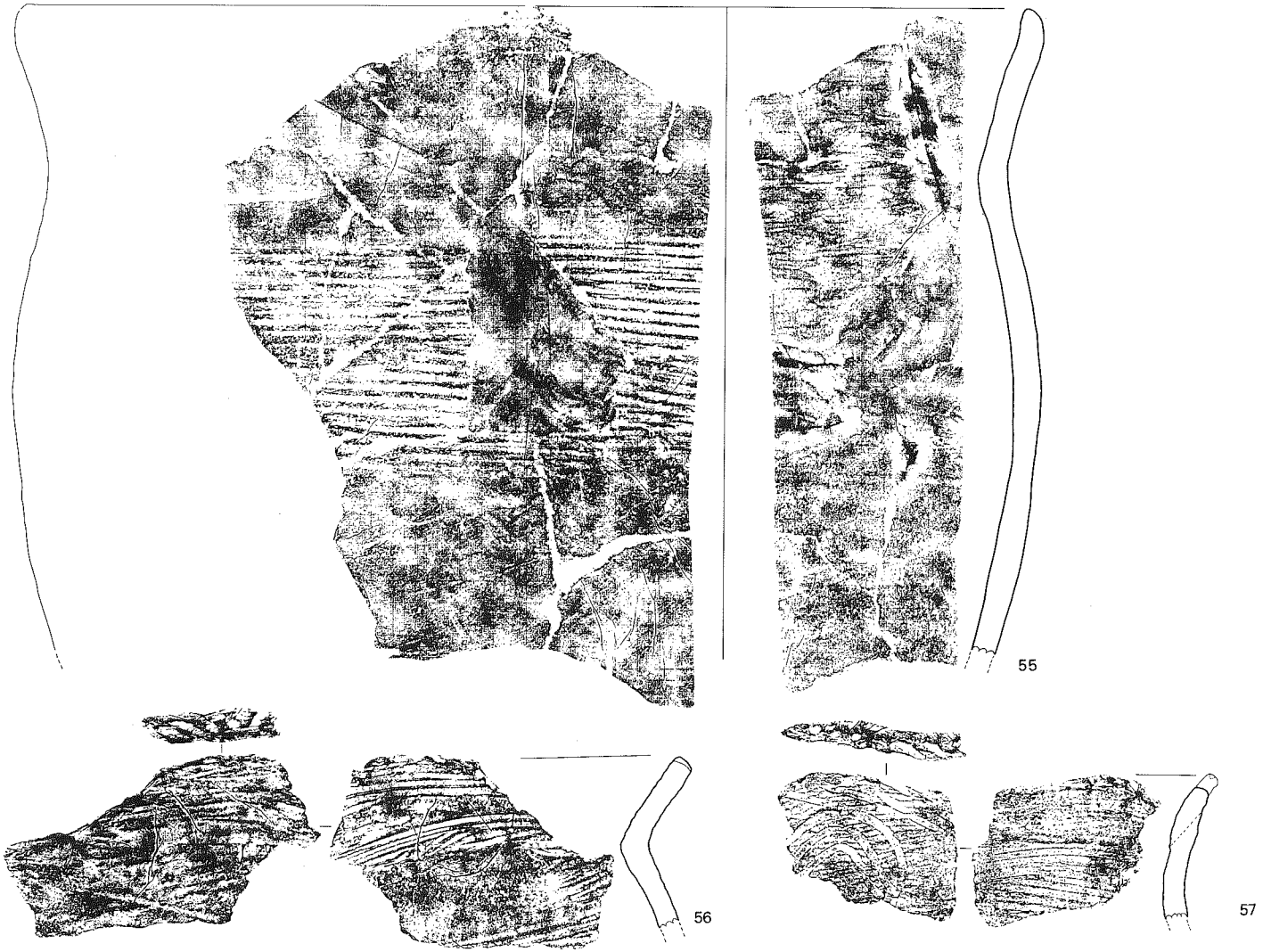
第22図　縄文後期の土器実測図３（１/３）



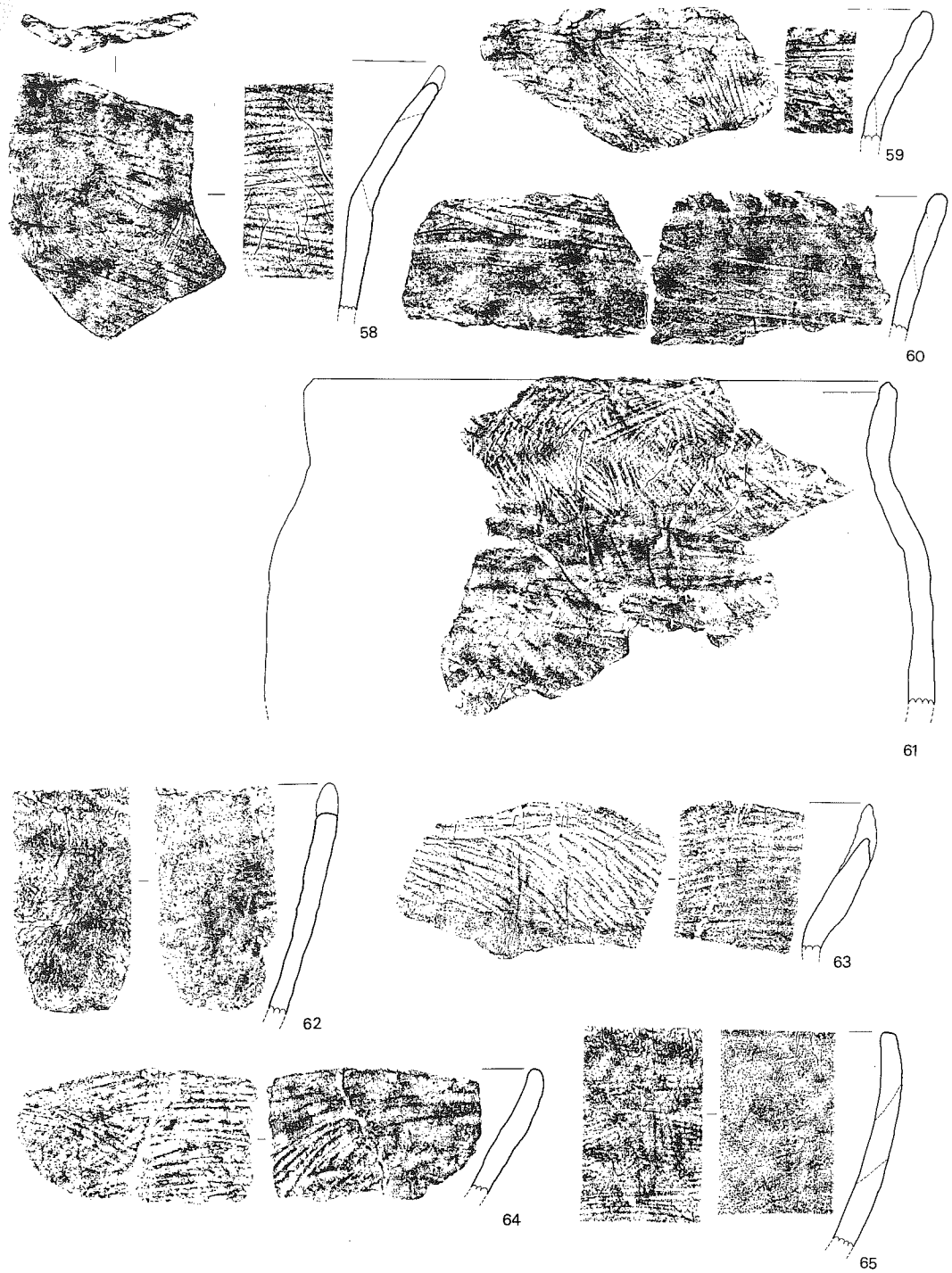
第23図　縄文後期の土器実測図４（１／３）



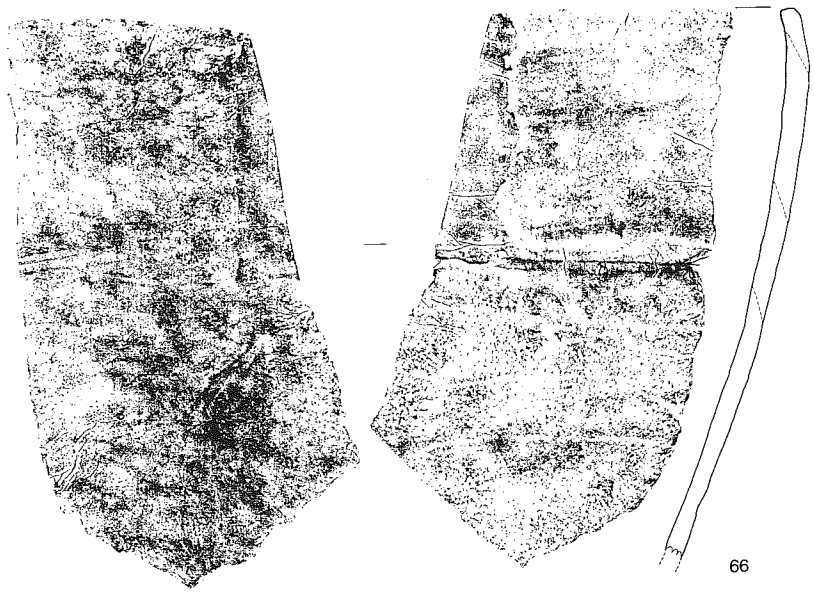
第24図　縄文後期の土器実測図５（１/３）

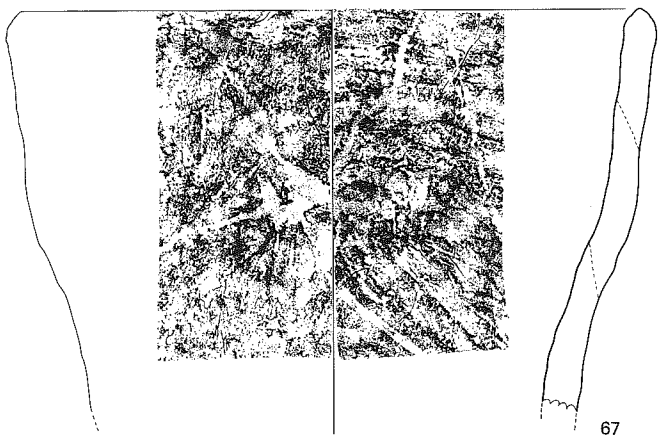


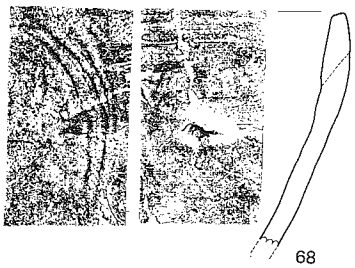
第25図　縄文後期の土器実測図６（１/３）

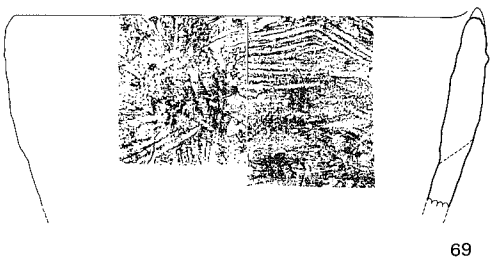


第26図　縄文後期の土器実測図７（１/３）

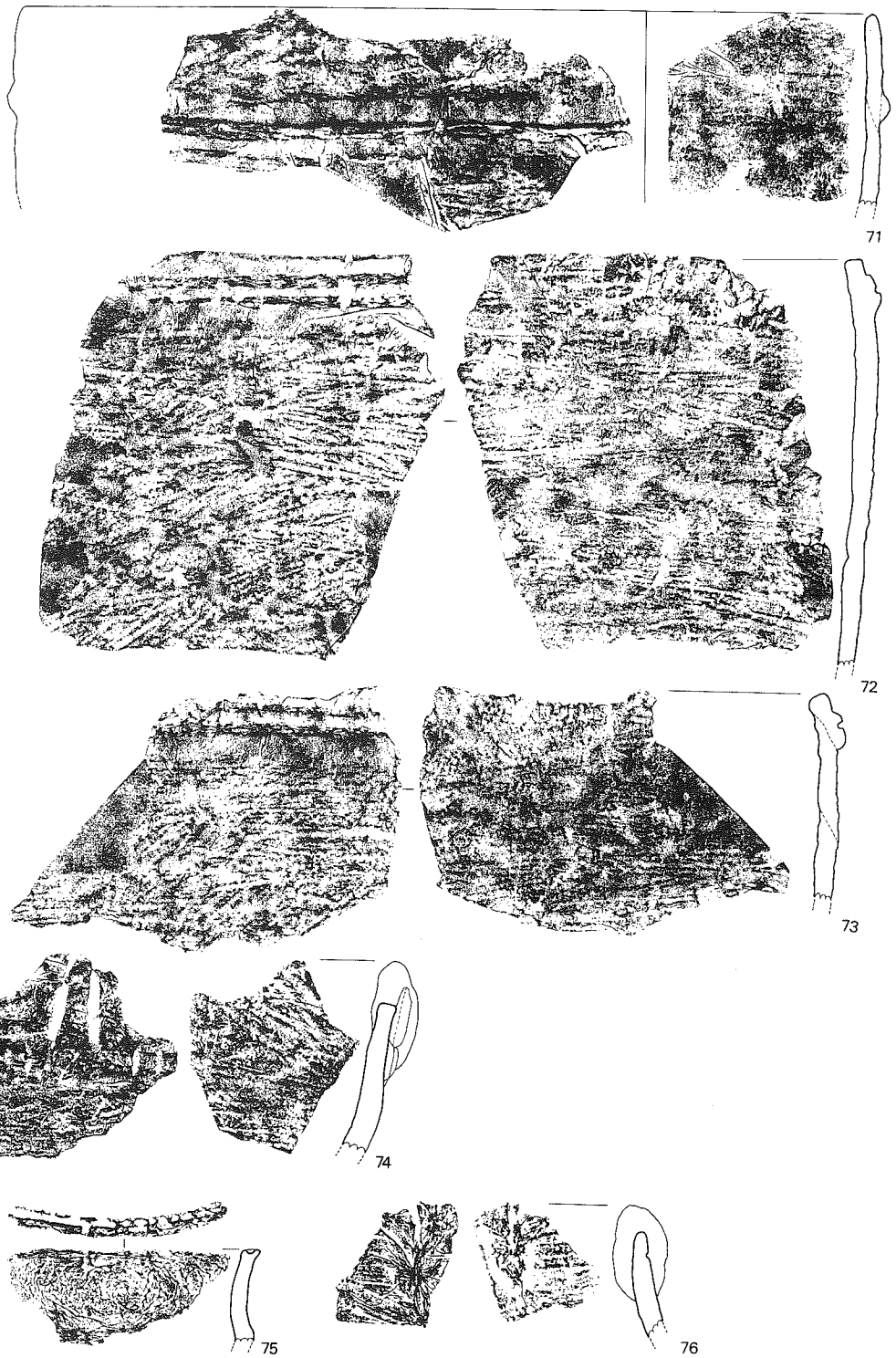




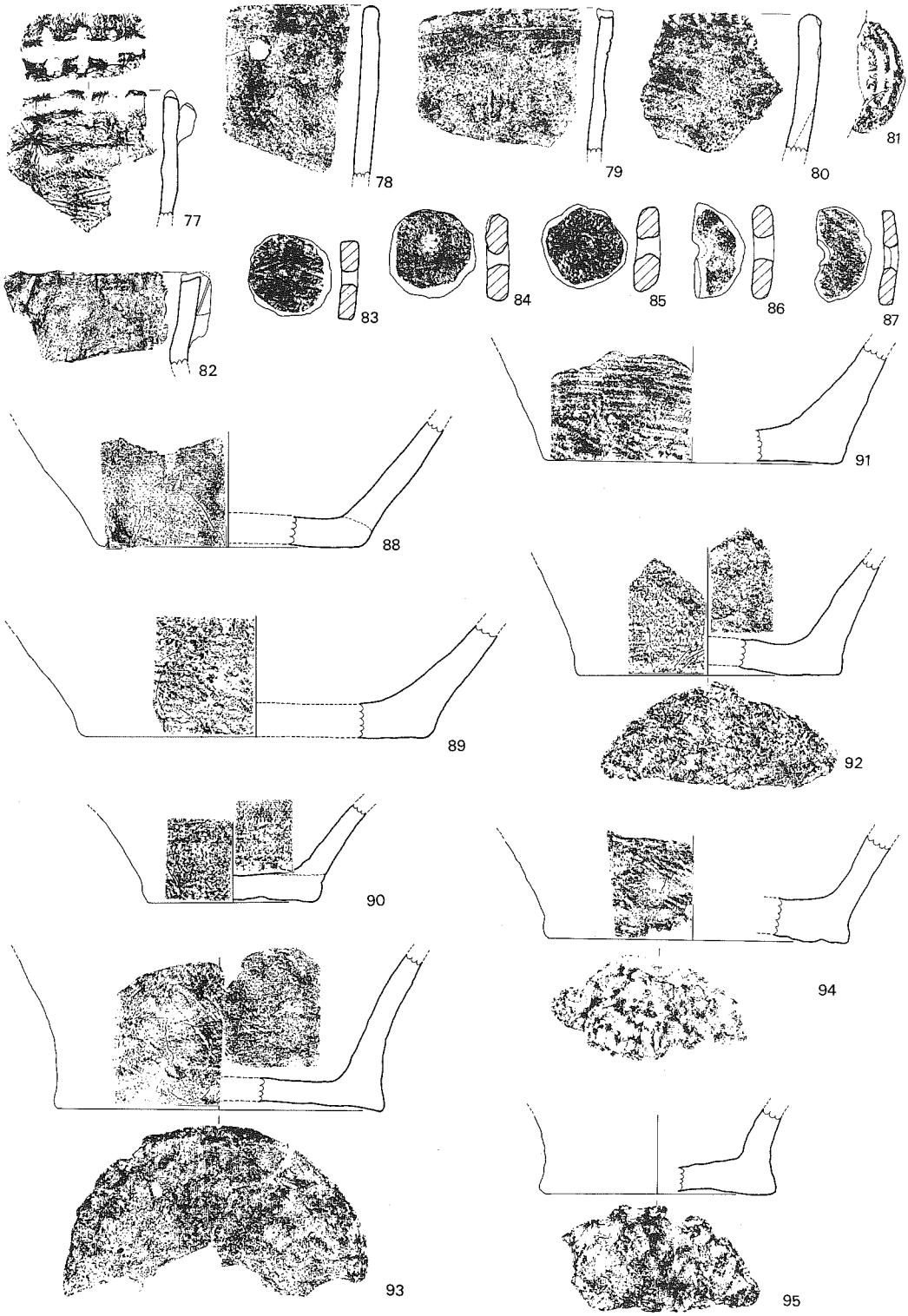




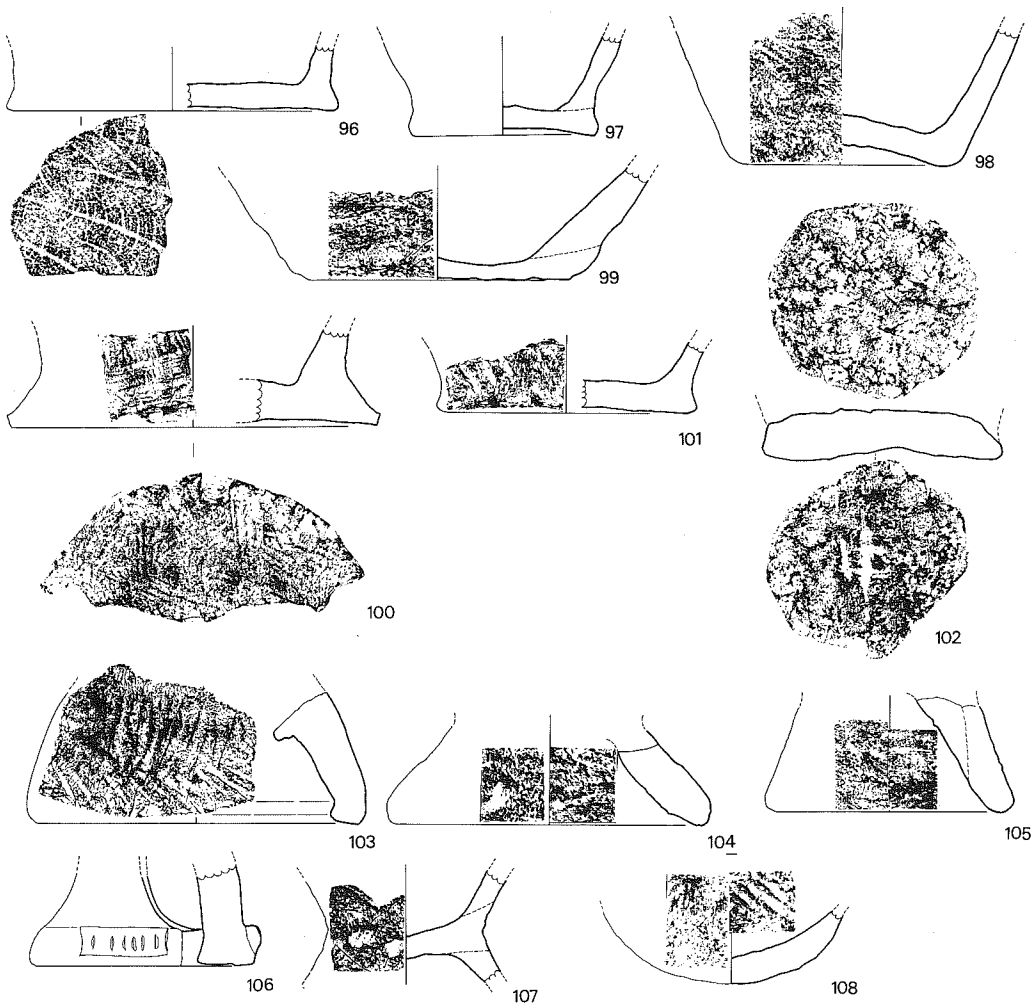
第27図　縄文後期の土器実測図８（１／３）



第28図　縄文後期の土器実測図９（１／３）



第29図　縄文後期の土器実測図10（1／3）



第30図　縄文後期の土器実測図II（1/3）

第２表―(1)　縄文後期土器観察表

掲載No.	出土区	番号	色調	胎土				調整	文様	備考
				滑石	石英	輝石	他			
1	F_3	160	黄土色				貝殻	ヘラ磨き	磨消縄文	
2	F_3	3197	〃				金雲母	〃	沈線＋磨消縄文・上渦巻文	
3	F_2	1	〃		○	○		〃	沈線	
4	F_2	85	赤褐色		○	○	金雲母	〃	磨消縄文、渦巻文	
5	F_2	445	黄土色				貝殻・金雲母	ヘラ	〃	
6	F_3	32	茶褐色				金雲母	ヘラ磨き	沈線	
7	F_3 F_2	363 158	黒色				貝殻	ヘラ磨き	磨消縄文	
8	F_2	83	黒褐色		○		金雲母	〃	磨消縄文・塗朱の痕跡	
9	F_2	151	黄土色				貝殻	〃	磨消縄文	
10	E_2	205	茶橙色					ヘラ	沈線文	
11	F_2	58	灰赤色				貝殻	ヘラ磨き	磨消縄文	
12	F_2	155	(内)茶褐色・(外)黒褐色		○	○		ヘラ	〃	
13	F_3 F_2	163 147	黄褐色				貝殻	ヘラ磨き	〃	
14	F_2	137	茶橙色				〃	ヘラ	沈線	
15	F_2	52	黒褐色		○			〃	渦巻文磨消縄文	
16	C_2	1	黄土色		○			ヘラ磨き	沈線、縄文・磨消塗朱混	
17	D_2	102	黄土色		○			〃	沈線、縄文・塗朱	16と同一個体か
18	E_3	124 383	黒色		○			〃	沈線２条刺突点と曲線、磨消縄文	
19	F_2	177	(外)黄土色 (内)灰色		○		金雲母	ヘラ	磨消縄文	
20	F_3	50	黄土色		○			〃	磨消縄文・沈線	
21	C_2	1523	黄土色				金雲母	カイガラ	沈線、縄文	
22	F_2	179	茶褐色		○			ヘラ	磨消縄文	
23	F_2	181	茶褐色		○			ヘラ	２条の沈線＋縄文	
24	F_3	340 341	黄土色		○		金雲母	ヘラ磨き	無文	
25	E_3	60	黒褐色		○	○	結晶片岩	横方向のヘラ磨き		
26	E_2	170	黒～茶褐色		○			ヘラ	逆W字の沈線	
27	F_2	162	茶褐色			○		ヘラ磨き	斜の沈線、擬似縄文	
28	E_3	767	茶褐色				金雲母	貝殻条痕	ヘラ刻目	
29	E_3	166	茶褐色		○		金雲母	ヘラ	刺突点＋斜沈線	
30	D_2	812	灰黄色				貝殻片	貝殻条痕	沈線による斜格子文、貝殻条痕	
31	D_3	112	茶褐色			○		ヘラ	斜位の刻み鋭いヘラ	
32	F_2	332	灰褐色				貝殻	不明	沈線	
33	F_2	440	黄灰色				〃	ヘラ	曲線文＋刺突文	
34	F_2	1881	黒褐色				金雲母	ヘラ磨き	貝殻条痕、斜線	
35	SA	1・2・3	〃		○			ヘラナデ	３条の沈線、擬似縄文	
36	C_3	108	黄茶色				金雲母	ナデ	沈線３条＋擬似縄文	
37	C_2	1516	赤褐色				〃	ヘラ磨き	アルカ属、蝶番押圧	
38	F_4	3960	茶褐色				〃	貝殻条痕	擬似縄文	
39	E_2	2	〃				〃	〃	ヘラ刻目	
40	F_2	2	黒褐色		○			ヘラ	沈線擬似縄文	
41	F_3	3178	黄褐色				貝殻粉？	ヘラ	コの字形沈線、刺突？	
42	C_2	1365	茶・黒褐色	○	○			ヘラ磨き	S字形沈線、ヘナタリ縄文	
43	F_2	433	黄土色				金雲母	(内)貝殻条痕 (外)ヘラ	「く」の字形文、擬似縄文	
44	E_2	148	茶褐色		○		貝殻	ヘラ	凹文・縄文	
45	F_3	73	赤褐色				金雲母	ヘラ磨き	擬似縄文	
46	F？	425	(内)茶灰色 (外)黄茶色		○			〃	沈線、貝蝶番部押圧	
47	F_2	99	黒褐色		○			ヘラナデ	擬似縄文	
48	F_3	30	〃		○			ヘラ研磨	２条の横送沈線間に山形	
49	F_2	36	〃		○	○		貝殻か？	沈線	
50	E_4	1	(裏)黄灰色 (外)黄土色		○		金雲母	ヘラ	２条の沈線、刺突点列	

第2表一(2)

掲載No.	出土区	番号	色調	胎土				調整	文様	備考
				滑石	石英	輝石	他			
51	D_3	32	茶褐色		○		結晶片岩	ヘラ	沈線	
52	F_1	3016	黒褐色				貝殻	〃	曲線文、刺突文	
53	D_3	6 43	(表)黄土色 (外)黒褐色		○			貝殻条痕		
54	F_2	1870	茶褐色		○		金雲母	貝殻	貝殻条痕	
55	C_3	1	〃		○		結晶片岩	ヘラ	〃	
56	E_3	127	〃				貝殻	貝殻条痕	刻み、刺突	
57	E_2	217	黒灰色		○		金雲母	貝殻	貝殻条痕、同心円短斜線	
58	F_3	44	茶褐色				〃		刻目	
59	E_2	179	黒灰色				貝殻	貝殻粒	刻み、ヘラ	
60	F_3	124	黄土色				貝殻	貝殻	刻目連続	
61	E_2	1744	赤褐色				〃	〃	綾杉状	
62	E_1	353	茶黄色				〃	(外)不明 (内)貝殻		
63	E_2	218 212	黄土色		○	○		貝殻ナデ		
64	F_3	2015 3626	茶褐色				貝殻	貝殻	刻目連続	
65	F_2	156	赤褐色				〃	〃		
66	E_2	154 180	黒褐色				〃	ヘラ？		
67	F_2	245	茶褐色				貝殻	貝殻条痕	ヘラ、貝殻	
68	F_2	161,164 165,166	赤褐色				〃	指ナデ貝殻		
69	E_4	556	〃				〃	貝殻条痕		
70	C_2	314 1412	茶褐色				〃	貝殻		
71	F_2	457～9 357他	黒褐色				〃	貝殻条痕		E_1の251と同一固体
72	E_1	250 251	〃				砂岩片	〃		
73	E_1	251	〃				〃	〃		
74	C_2	1380	茶褐色				貝殻	〃	凹線、刻目	
75	E_2	148	〃		○		〃	ヘラ凹文	凹文	
76	F_2	690 691	黒褐色				軽石粉	貝殻？	沈線、刺突	
77	SA	71	茶褐色				貝殻	貝殻条痕		
78	F_2	338	赤褐色		○			〃		
79	F_2	356	茶褐色				混入物不明	ヘラ磨き	丸い刺突点	
80	F_3	349	〃		○			指ナデ	沈線2条	
81	F_3	3540	〃		○			貝殻条痕	刻目	
82	F_2	1225	〃		○			牛づくね	沈線2条	
83	E_2	1758	〃				貝殻	フデ	刺点点列	
84	SA	1105	〃				〃	貝殻		
85	E_2	1706	赤褐色					ヘラ		
86	C_2	65	黄土色				貝殻	貝殻条痕		
87	SA	1370	赤褐色				〃	〃		
88	D_2	177	〃				〃	〃		
89	F_4	143	黄土色			○	〃	ヘラ		
90	E_3	198 199	〃				〃	貝殻		
91	E_3	115	茶黄色		○			〃		
92	F_3	94	黄褐色				貝殻	貝殻条痕		
93	E_1	352	黄土色				〃	貝殻、指押		
94	F_3	37	赤褐色				〃	ヘラ		
95	F_2	55	〃				〃	底面鯨底		
96	C_2	1497	黄土色				粗	〃		
97	F_2	954	茶褐色				貝殻	ヘラ	底面に木の葉葉脈圧痕	
98	C_2	69	黒褐色				結晶片岩	〃		
99	E_3	182	茶褐色				貝殻	貝殻		
100	E_2	126	黄土色		○	○		ヘラ		

第２表―(3)

掲載No.	出土区	番号	色調	胎土				調整	文様	備考
				滑石	石英	輝石	他			
101	F_2	351	赤褐色				貝殻	貝殻		
102	C_2	64	黄橙色				〃	(内)指頭ナデ (外)不明	ヘラによる凹文	
103	F_1	3149	黄土色				〃	ヘラ文	無文	
104	E_2	215	〃		○		結晶片岩	ヘラ磨き	斜線文	
105	D_3	5	黄土色		○			ヘラナデ		
106	E_5	1839	〃		○		金雲母	ヘラ		
107	C_2	1422	赤褐色				貝殻 金雲母	〃	突帯上刻目	
108	B_3	670	黄土色		○			〃	擬似縄文、太い凹点	
109	F_2	346	黒褐色				貝殻	(内)貝殻 (外)不明		

(5) 縄文時代後期の剝片石器（第31～43図）

佐賀貝塚で出土した剝片石器および剝片類、石核は総数3,741点である。この数は縄文後期貝塚における出土数として、多い方ではないが、内容的に優れた資料があり、本報では140点を図示した。各石器の法量等については別記一覧表に示した。以下これらの概要を述べる。

1）大型石鏃（1～15）

上下３cm以上のものを「大型」とした。最大6.4cmにたっする。いずれも黒曜石の縦長剝片を用いている。基部に抉入加工があるほか、側縁加工も簡単な二次加工か未加工の状態が見られる。剝片の原形に即した加工であり、定形的な整形の意図が見られる。用途は「銛」であろう。

2）石銛（16～22）

大型石鏃の側縁に鋸歯状加工をしたもの７点がある。深堀遺跡（註１）で安山岩を用いた大型資料が出土して、従前見られたサイドブレイドに鋸歯状加工のある「石鋸」と組合わせる石銛の考えが定着したが、近年西九州の海岸遺跡で事例が普遍的に見られている。大型石鏃とも「石銛の先端」と考える。

3）石鋸（23・24）

広くいわれてきた「石鋸」である。23は杉山寿栄男氏分類（註２）IIIａ、24はＩａにあたるであろう。この種石器は長崎県五島列島各地にとくに発見例が多いが対馬海流域にも広く見られる。石鋸については「石鎌」とする考え（註３）もあるがこの地方では海岸部の遺跡での出土例が圧倒的に多い点を考えれば、漁撈具とするのが妥当であろう。

4）剝片鏃（25～79）

剝片石器の中で55点があり、定形的な石器の中で約39％をしめている。小型の縦長剝片を用い、基部の抉入加工のほかは側縁の加工は簡単に行われている。これらの石器の中には、25～33・35のように側縁に微細な鋸歯状の加工を施した例がある。また、32は石鏃とは異なる

尖頭器もある。

5）つまみ形石器（80・81）

縦長剝片の一部を用い、小さな「つまみ」を造り出した資料である。用途は不明であるが、西九州海岸の縄文遺跡に普遍的に認められる石器であり、縄文後期には確実に出土するが、上限は明らかではない。

6）剝片及び使用痕のある剝片（82～115）

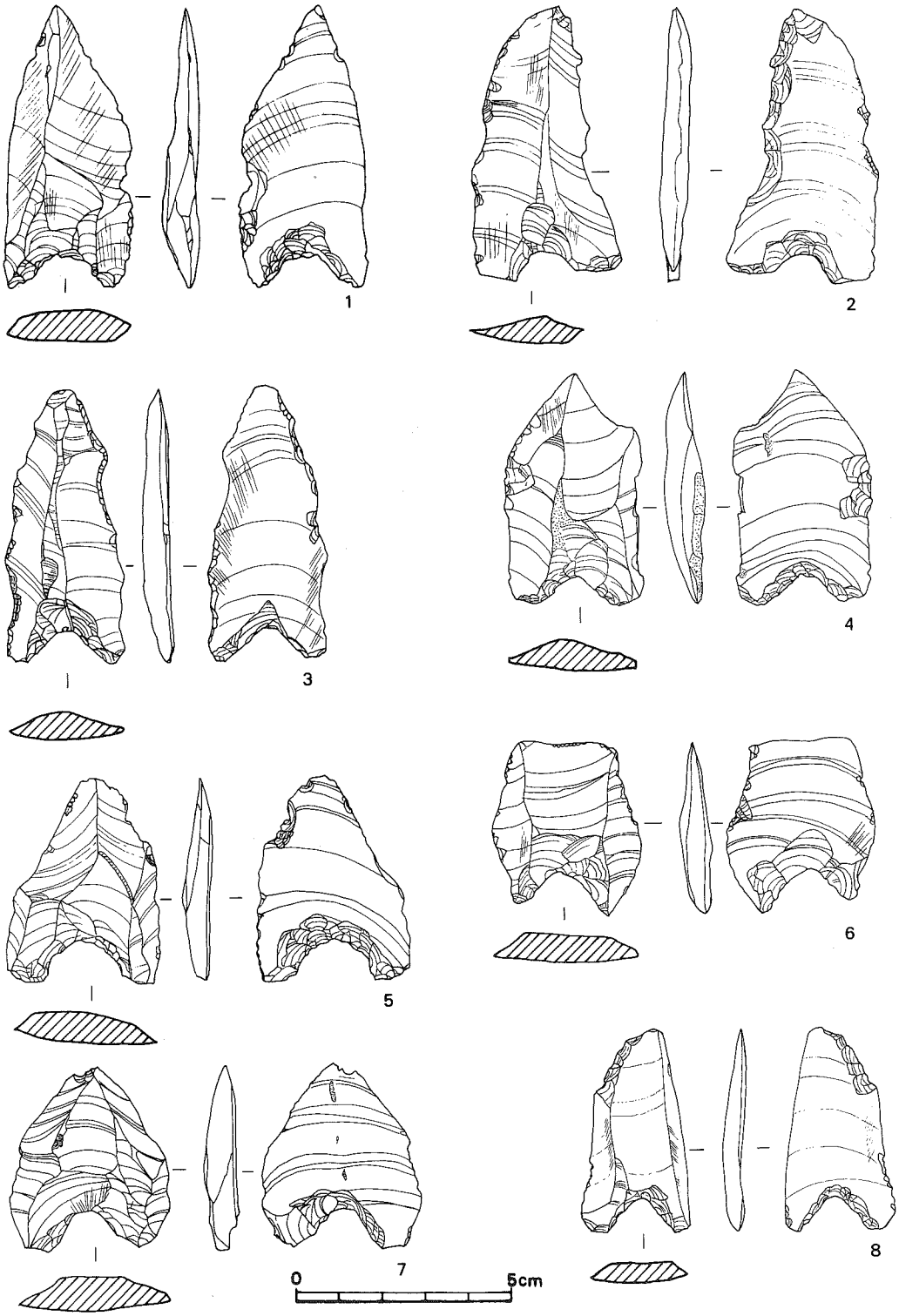
大小の縦長剝片とその側縁に使用痕のある剝片がある。最大のものは上下9.1cmであり、幅、長さとも違いがあるが、打撃面が小さいことと、反りのある側面観の点では共通している。この種の石器に関しては長崎県筏遺跡、佐賀県鈴桶遺跡（註5）の調査で注目されたが、各種剝片石器の素材として西九州に普遍的な物であることが知られている。

7）掻器・彫刀型石器（116～129）

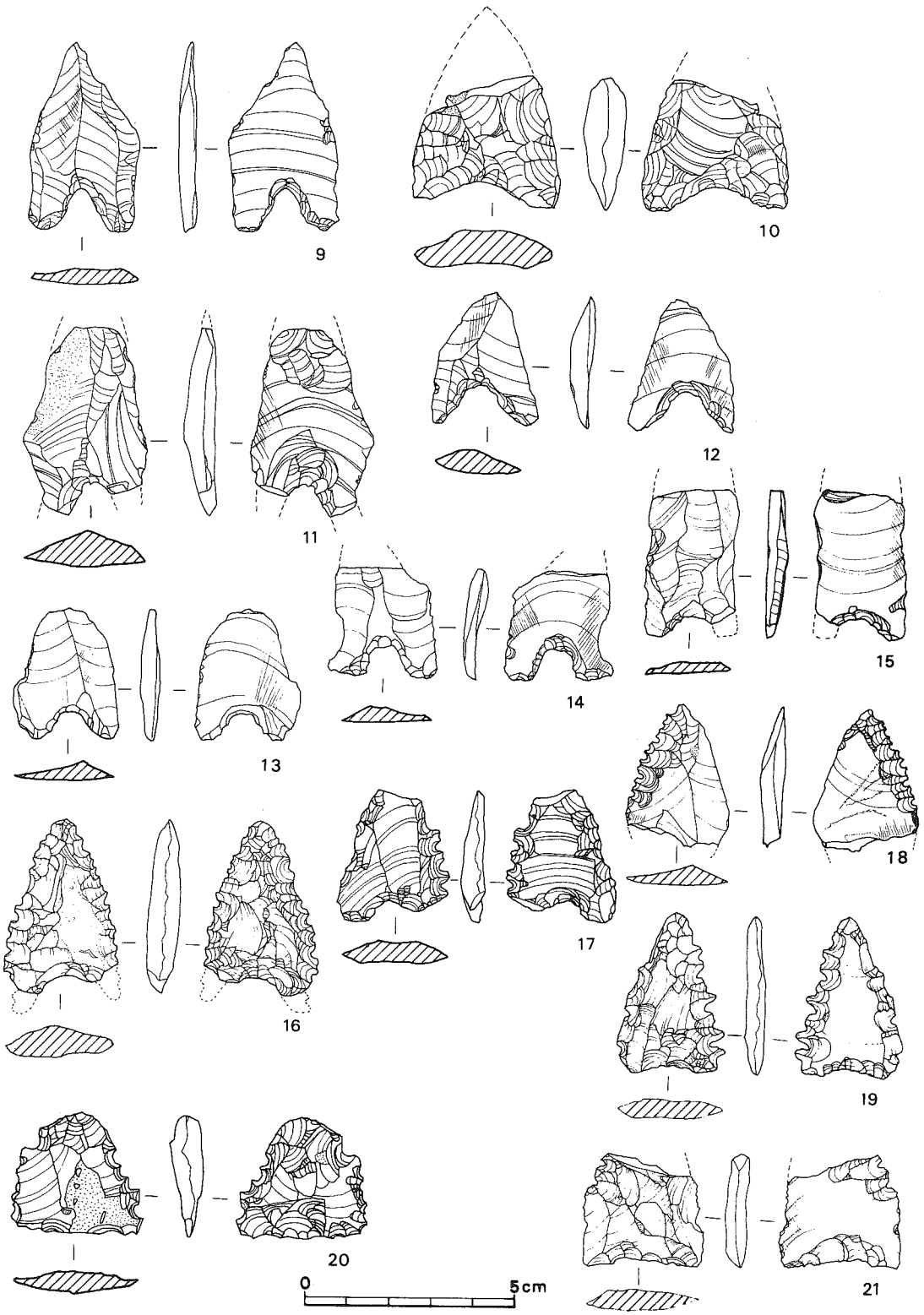
縦長剝片の側縁に微細な二次加工をしたもの（**116～118**）や一端に施したもの（**119～121**）等、彫刀型石器（**125～130**）がある。素材としては縦長剝片が利用されている。**132～140**は石核である。比較的小型のものと大型の**140**がある。

〔註〕

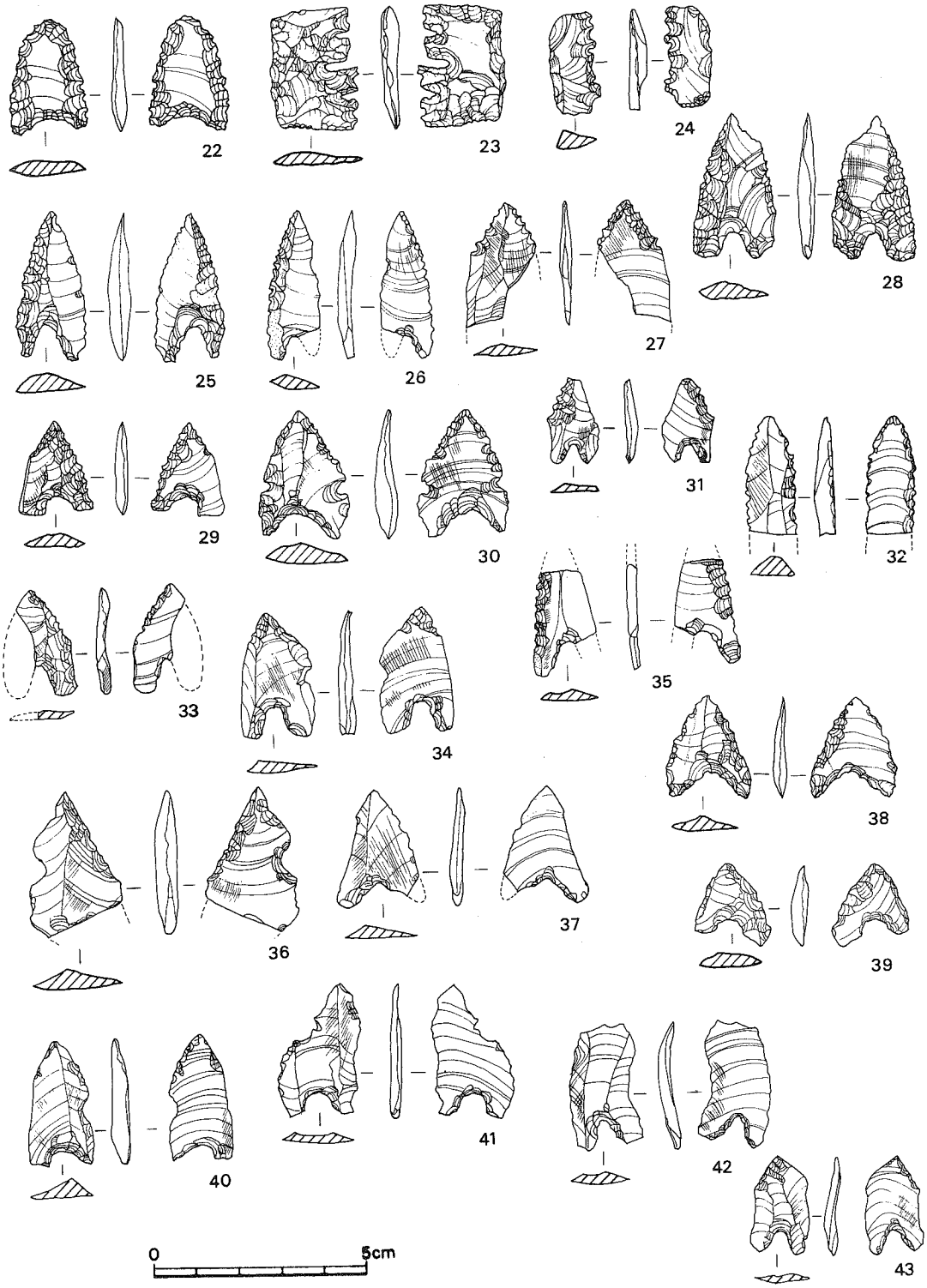
1．内藤芳篤・賀川光夫・小田富士雄『深堀遺跡』長崎大学医学部解剖学第二教室　1967
2．賀川光夫・古田正隆他『剝片利用の石器文化』西日本史学会研究発表要旨1962
3．芹沢長介『周辺文化との関係』「日本の考古学」II縄文時代　1986
4．杉原荘介・戸沢光則・横田義章『九州における特殊な刃器技法』考古学雑誌51-3　1966



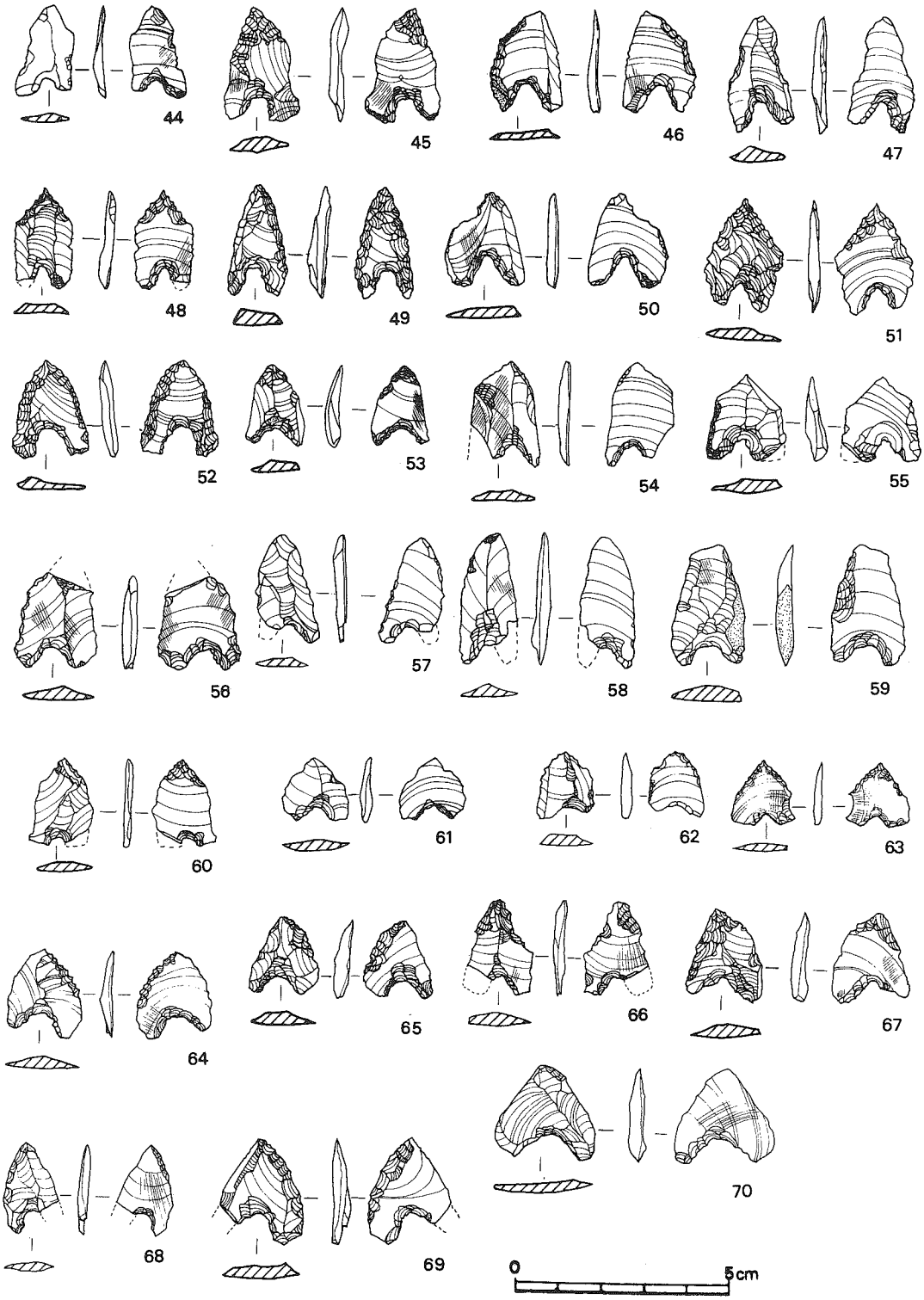
第31図　縄文後期の石器実測図Ⅰ（2/3）



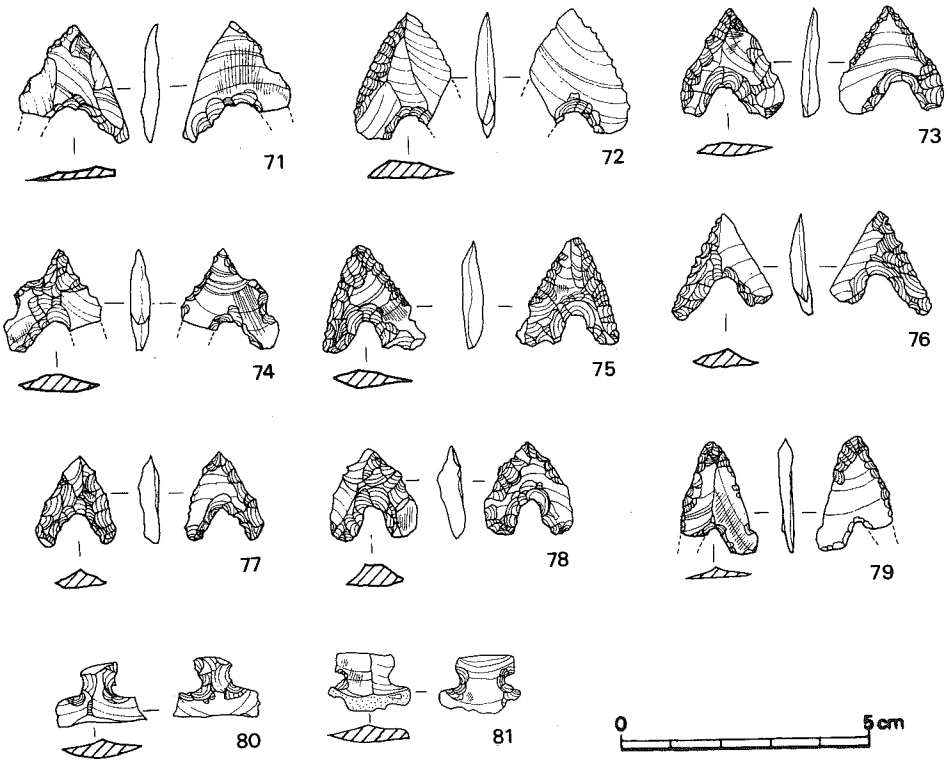
第32図　縄文後期の石器実測図２（２/３）



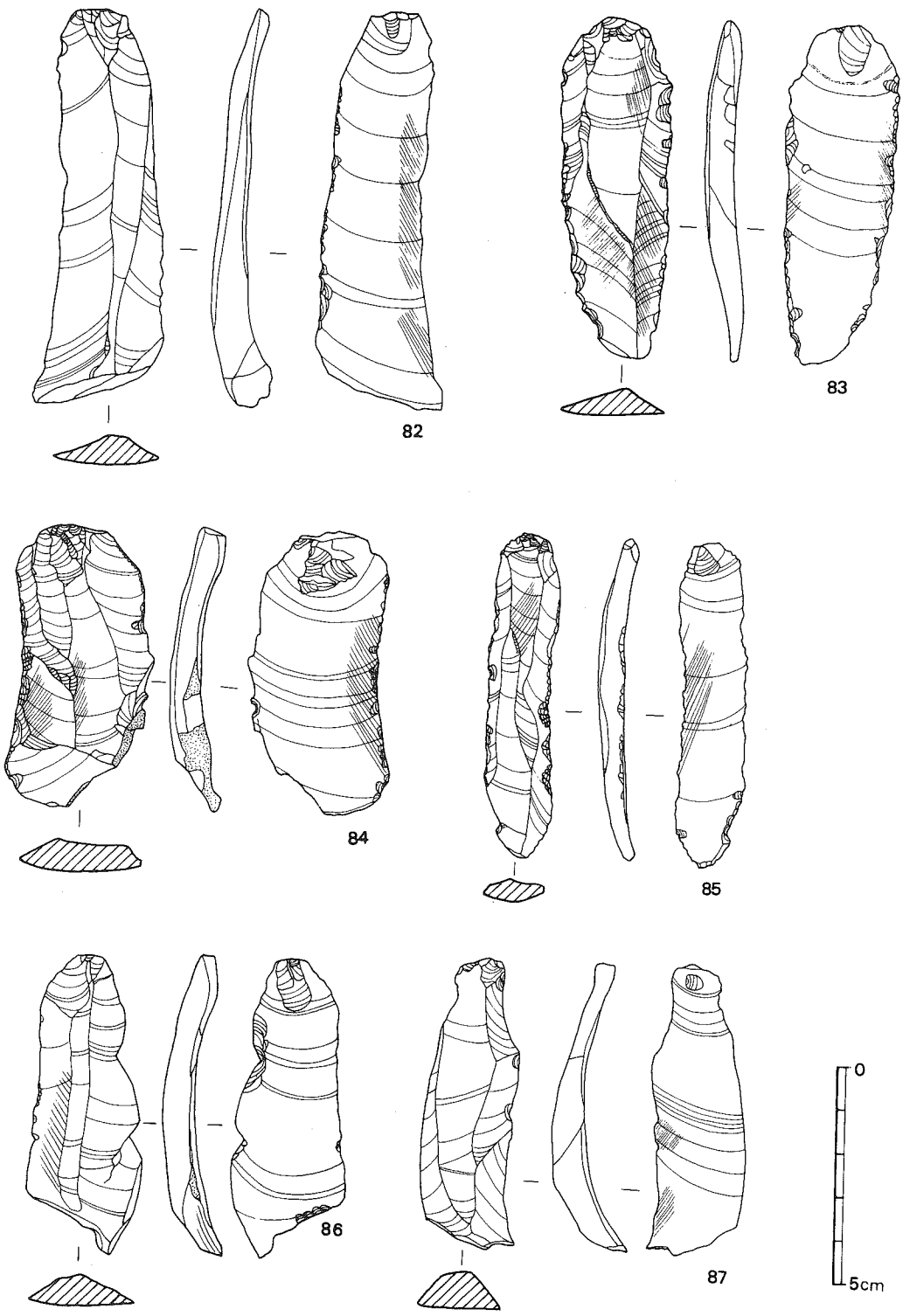
第33図　縄文後期の石器実測図３（２/３）



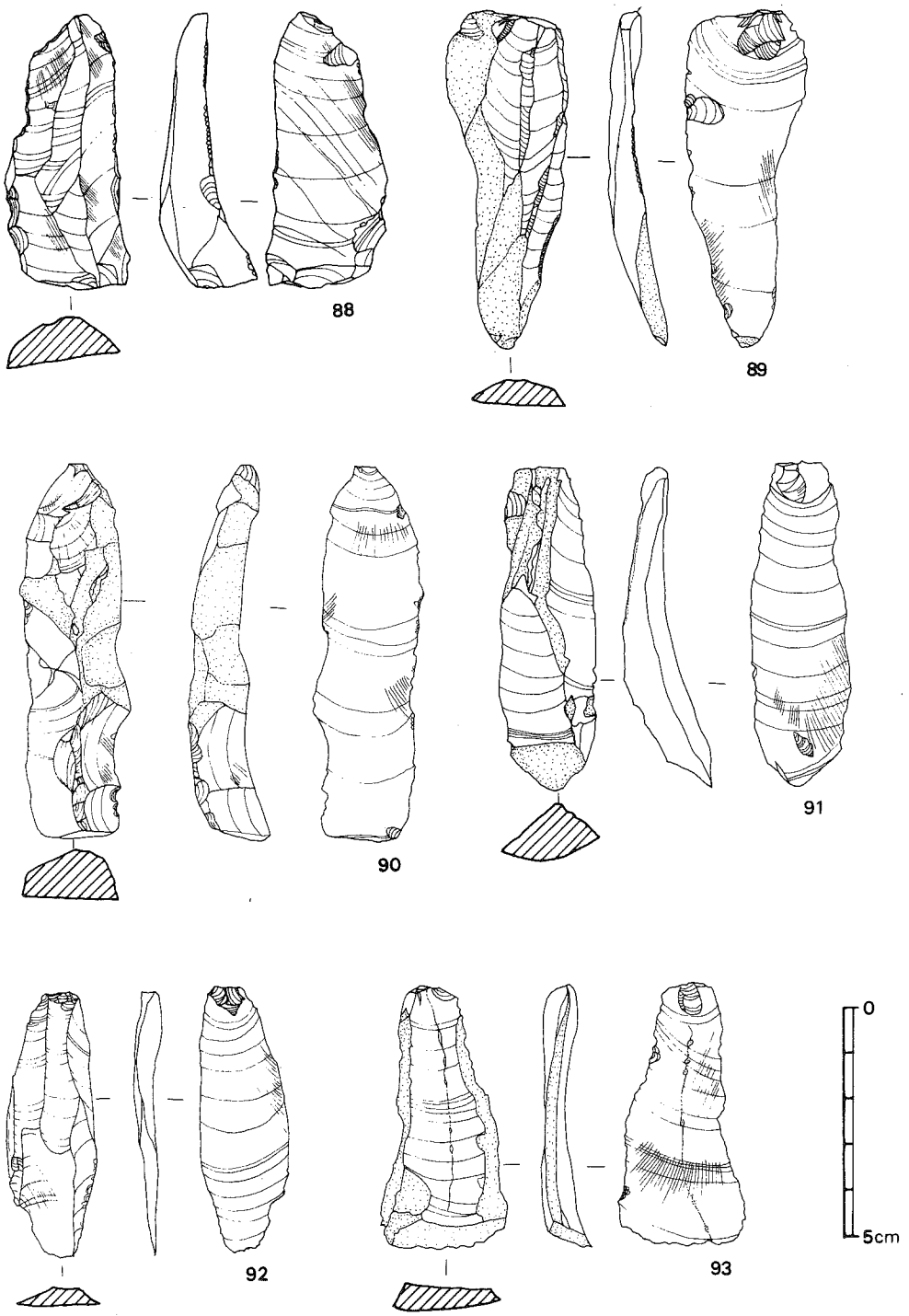
第34図　縄文後期の石器実測図４（２/３）



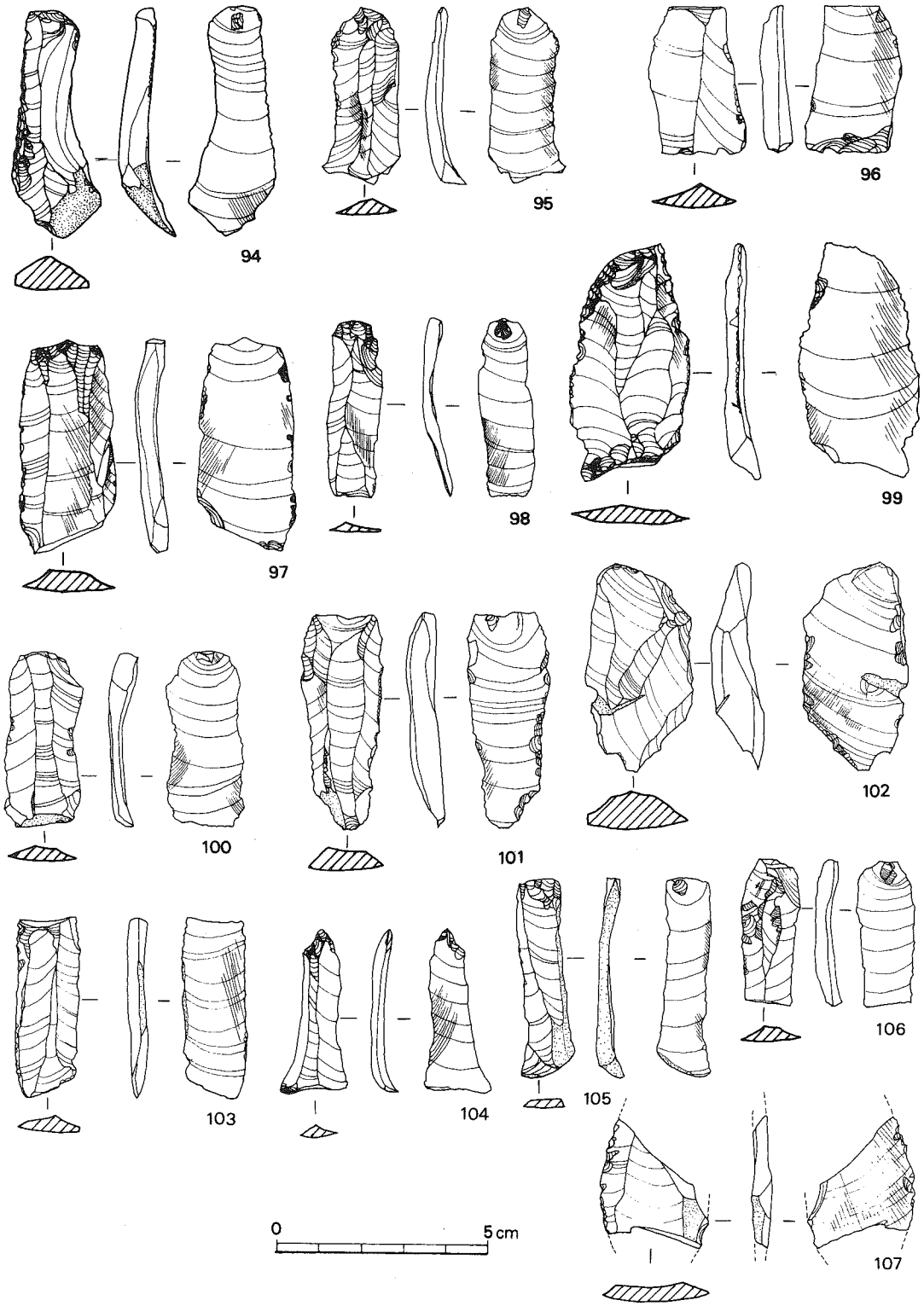
第35図　縄文後期の石器実測図５（２/３）



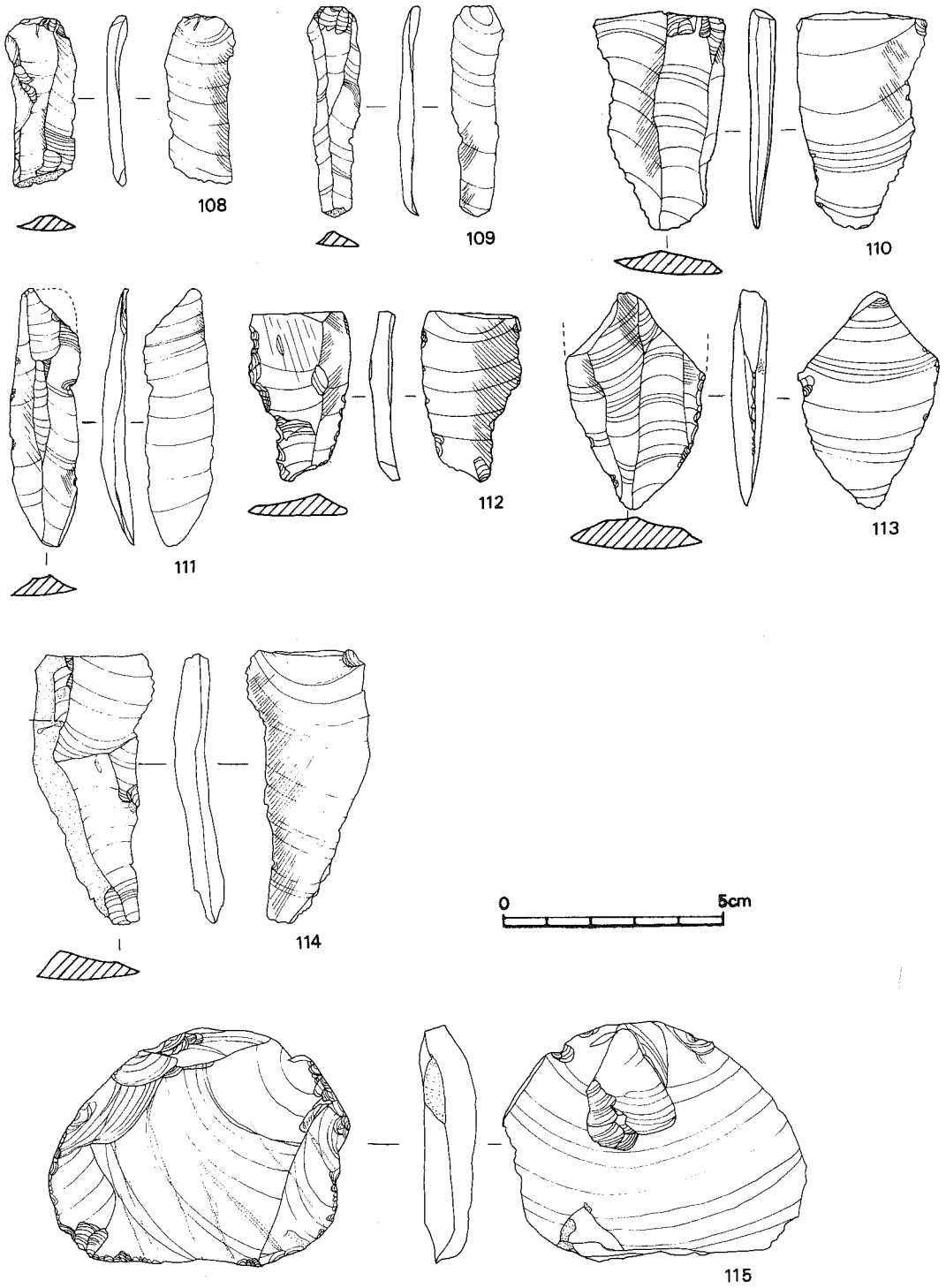
第36図　縄文後期の石器実測図６（２/３）



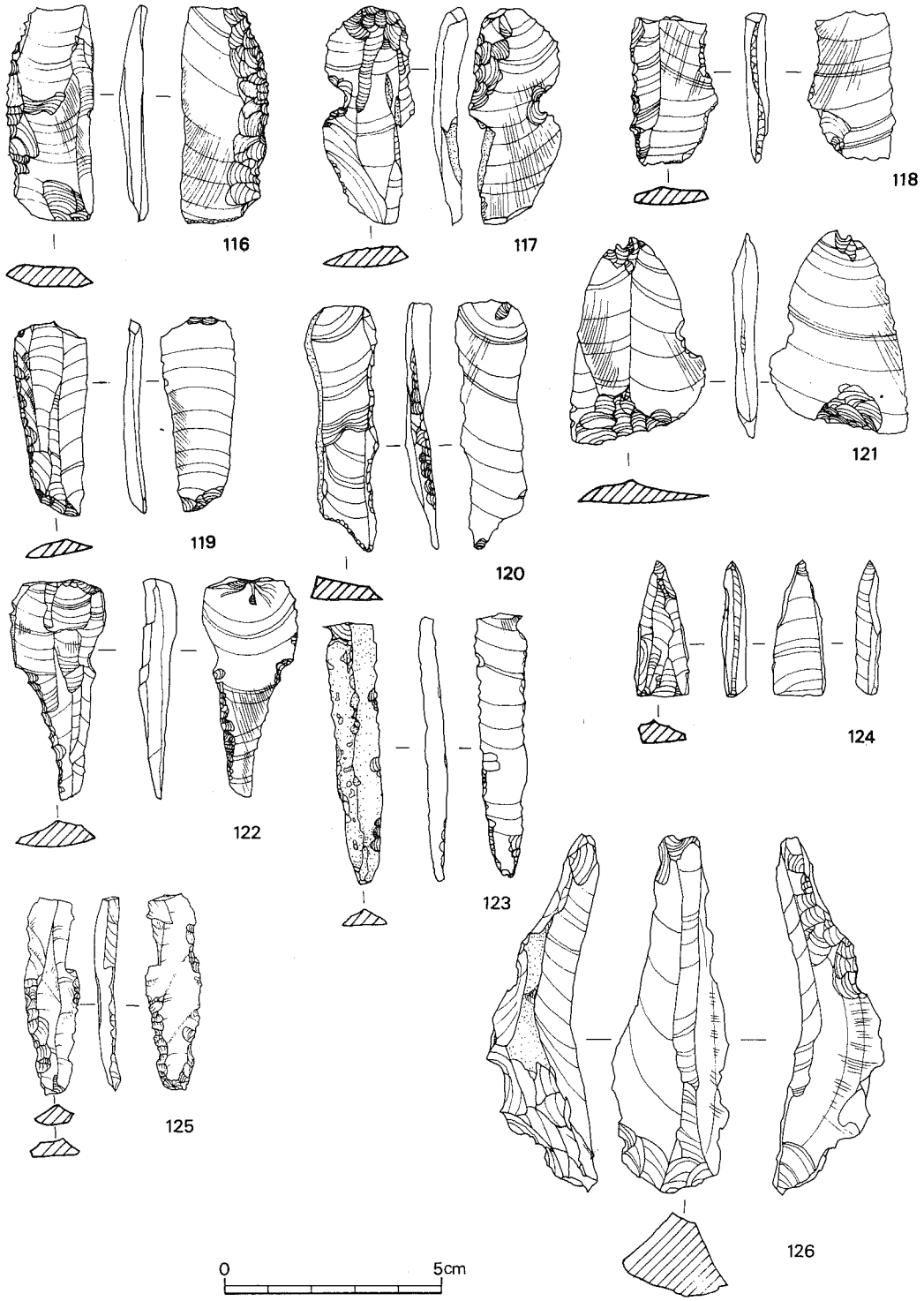
第37図　縄文後期の石器実測図７（２/３）



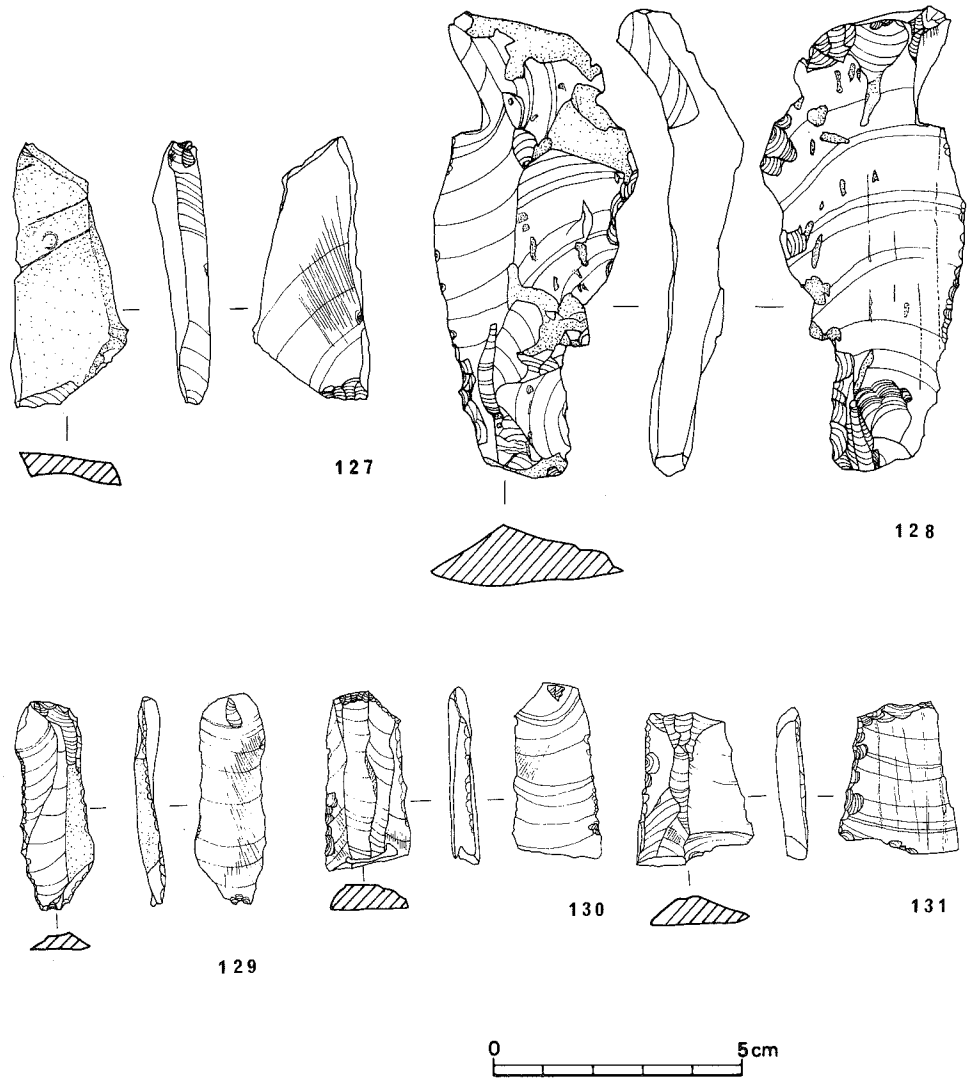
第38図　縄文後期の石器実測図８（２/３）



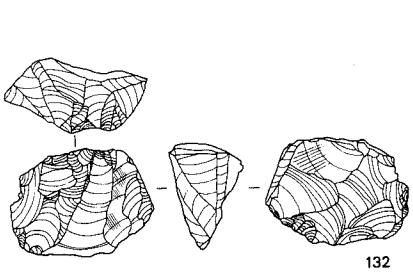
第39図　縄文後期の石器実測図９（２／３）

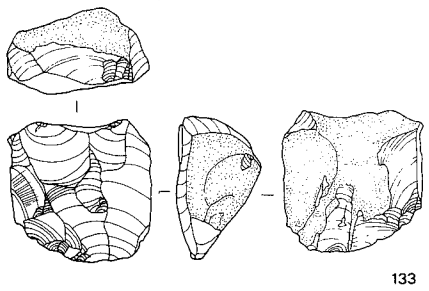


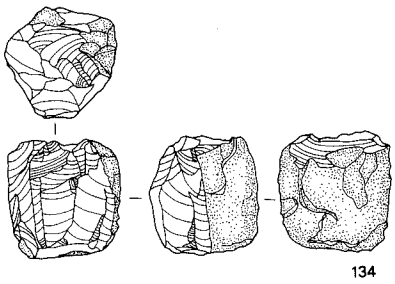
第40図　縄文後期の石器実測図10（2/3）

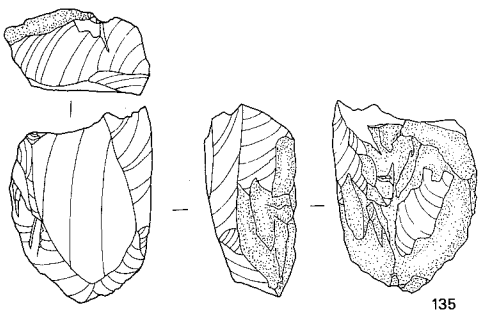


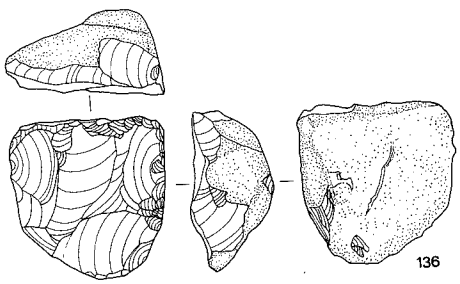
第41図　縄文後期の石器実測図11（2/3）

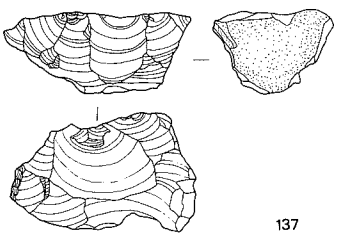


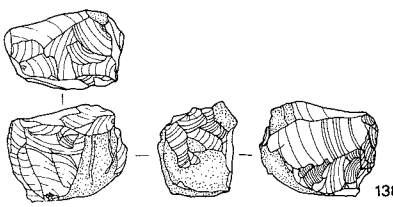




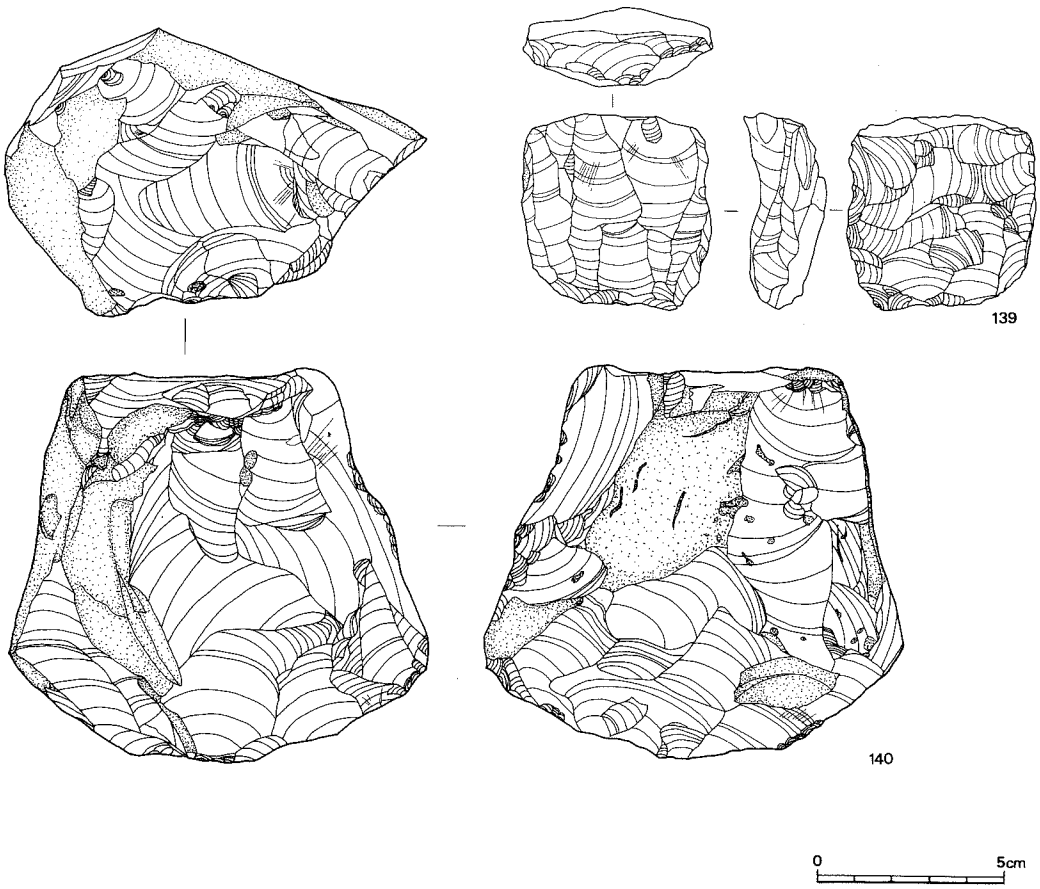








第42図　縄文後期の石器実測図12（1/2）



第43図　縄文後期の石器実測図13（1／2）

第3表—(1)　剝片石器観察表

掲載No.	出土区	番号	器種	長さ	最大幅	重量	現状・特長
1	不明	不明	石鋸	6.4	2.9	10.7	完存
2	SA—C_3	39	〃	〃	3.4	〃	〃
3	—F_3	454	〃	6.3	2.7	9.9	〃
4	SA	13	〃	5.4	3.2	10.2	〃
5	不明	不明	〃	4.7	3.6	7.8	〃
6	SA—F_2	521	〃	4.0	3.4	7.2	〃
7	—D_3	63	〃	4.2	3.7	8.6	〃
8	—D_2	226	〃	4.7	2.5	4.7	〃
9	SA—F_2	124	〃	4.5	2.6	3.5	〃
10	—E_2	52	〃	現存 3.2	3.5	8.6	上部欠損
11	—D_4	107	〃	〃 4.4	2.9	7.9	上・下端欠損
12	—E_3	109	〃	3.1	2.5	2.3	完存
13	—D_2	127	〃	3.1	2.4	2.3	〃
14	—F_2	522	〃	現存 2.7	3.1	2.5	上端欠損
15	—D_1	225	〃	〃 3.5	2.1	3.7	上端片脚欠損
16	—C_3	67	鋸歯状石鉞	〃 4.1	2.8	7.2	鋸歯一部欠損、脚部折損
17	SA	68	〃	〃 3.1	2.6	3.4	上端片脚欠損
18	〃	69	〃	3.3	2.4	3.1	下部欠損
19	—C_3	64	〃	3.7	2.6	4.0	片側鋸歯欠損
20	—C_2	122	〃	2.8	3.1	5.2	完存
21	—F_1	377	〃	現存 3.2	2.9	4.0	上部欠損
22	—B_3	185	〃	2.7	1.7	1.5	完存
23	—C_3	12	石鋸	2.3	2.0	2.2	〃
24	—H	2	〃	2.4	1.0	1.0	〃
25	—C_2	312	石鏃	3.5	1.6	1.8	〃
26	SA	38	〃	3.4	1.2	0.9	片脚欠損
27	〃	617	〃	現存 2.9	1.5	0.9	下半欠損
28	—D_2	355	〃	3.4	1.9	2.0	完存
29	—H	18	〃	2.2	1.7	0.8	〃
30	—H	14	〃	3.0	2.1	2.0	〃
31	SA	31	〃	現存 1.9	1.2	0.5	上端欠損
32	—D_4	628	〃	〃 2.7	1.2	1.3	下端欠損
33	—D_2	360	〃	2.5	現存 1.0	0.5	片側欠損
34	SA	114	〃	2.9	1.7	1.2	完存
35	—D_2	357	〃	現存 2.5	2.1	0.9	上端、片脚欠損
36	SA	67	〃	3.4	2.2	2.3	下半欠損
37	—D_2	899	〃	2.8	2.0	0.8	片脚欠損
38	—D_2	356	〃	2.4	2.0	1.0	完存
39	—C_2	53	〃	1.9	1.8	0.9	〃
40	—H	7	〃	2.9	1.5	1.4	〃
41	SA	113	〃	3.1	1.8	1.1	〃
42	—D_2	383	〃	3.0	1.5	1.1	〃
43	—D_2	363	〃	2.3	1.4	0.6	〃
44	—D_2	588	〃	2.1	1.3	0.5	〃
45	—D_2	586	〃	2.7	1.7	1.1	〃
46	SA	74	〃	2.3	1.7	0.7	〃
47	—C_2	343	〃	2.7	1.4	0.9	〃
48	—D_2	85	〃	2.3	1.3	0.7	〃
49	—D_2	14	〃	2.6	1.8	1.1	〃
50	—E_4	355	〃	2.2	1.8	0.8	〃

第3表―(2)　剝片石器観察表

掲載No.	出土区	番号	器種	長さ	最大幅	重量	現状・特長
51	SA	72	石鏃	2.6	1.8	0.8	完存
52	—D_2	86	〃	2.3	1.8	0.9	〃
53	—D_2	589	〃	1.8	1.3	0.6	〃
54	—D_2	801	〃	2.4	1.5	0.8	片脚欠損
55	—D_2	358	〃	2.0	1.8	1.0	〃
56	—D_5	632	〃	現存 2.2	1.7	1.4	上半折損
57	SA	239	〃	2.5	1.3	0.8	片脚欠損
58	—D_2	128	〃	3.0	1.3	1.1	〃
59	—D_2	21	〃	1.5	1.5	0.4	完存
60	SA	75	〃	2.9	1.8	1.7	〃
61	〃	47	〃	2.1	1.8	0.5	片脚欠損
62	—D_4	104	〃	1.5	1.3	0.4	完存
63	—H	20	〃	1.5	1.4	0.3	〃
64	—D_2	591	〃	2.1	2.1	1.2	〃
65	—D_2	361	〃	2.1	1.3	0.4	片脚欠損
66	—H	15	〃	2.1	1.8	0.9	完存
67	SA	53	〃	2.2	1.5	0.6	片脚欠損
68	—D_2	221	〃	2.1	1.8	0.6	完存
69	—D_2	20	〃	1.8	1.6	0.7	〃
70	—D_2	585	〃	2.5	2.0	1.2	片脚欠損
71	SA	70	〃	2.2	2.3	1.2	完存
72	—D_3	676	〃	2.5	2.1	1.4	〃
73	SA	112	〃	2.2	2.1	1.0	完存
74	—D_2	350	〃	1.5	2.0	0.8	片脚欠損
75	—D_2	591	〃	2.1	2.1	1.2	完存
76	—D_2	227	〃	2.1	2.0	0.6	〃
77	—B_6	133	〃	1.8	1.6	0.6	〃
78	—D_2	590	〃	1.9	1.7	1.0	〃
79	—C_2	318	〃	2.3	1.6	0.5	片脚欠損
80	SA	152	つまみ型石器	1.2	1.8		完存
81	—H	23	〃	1.2	1.7		〃
82	—C_3	65	使用痕ある剝片	9.1	2.9	15.2	〃
83	—F_2	452	〃	7.8	2.5	13.6	〃
84	—E_2	2	〃	6.0	3.0	15.6	〃
85	—C_2	121	〃	7.4	1.5	7.3	〃
86	—D_2	17	〃	6.8	2.6	12.0	〃
87	—F_2	74	〃	6.5	2.1	9.9	〃
88	—F_2	24	〃	6.0	2.5	16.4	〃
89	—F_2	75	〃	7.3	2.6	10.6	〃
90	—F_2	773	剝片	8.1	2.2	18.2	〃
91	—E_1	32	〃	7.0	2.1	11.7	〃
92	—F_3	451	〃	5.7	1.9	3.9	〃
93	—D_3	224	〃	5.7	2.7	8.7	〃
94	—D_2	255	使用痕ある剝片	5.4	1.8	5.5	〃
95	—D_2	228	剝片	4.2	1.6	2.9	〃
96	—F_2	37	掻器	3.4	2.0	4.4	〃
97	—D_2	732	〃	5.0	2.4		〃
98	SA	227	剝片	4.2	1.2	1.6	〃
99	—E_2	348	掻器	5.5	2.8	7.9	〃
100	—D_2	393	剝片	4.1	1.7	3.6	〃

第3表一(3)　剝片石器観察表

掲載No.	出土区	番号	器種	長さ	最大幅	重量	現状・特長
101	SA—D_2	103	掻器	5.0	1.9	6.5	完存
102	—D_2	194	使用痕ある剝片	4.9	2.5		〃
103	—D_4	236	掻器	4.2	1.5	3.0	〃
104	—D_2	420	剝片	3.9	2.1	1.3	〃
105	—D_2	456	〃	4.8	1.2	2.2	〃
106	SA	611	〃	3.5	1.4	2.0	〃
107	—F_3	734	掻器	3.1	2.5		上下部欠損
108	SA	386	剝片	3.8	1.4	1.7	完存
109	〃	395	〃	4.8	1.1	1.3	〃
110	—D_3	40	使用痕ある剝片	5.0	3.0	6.0	〃
111	—D_2	16	剝片	5.9	1.5	3.6	上端欠損
112	—D_4	722	使用痕ある剝片	3.8	2.3	3.9	完存
113	—D_5	472	〃	4.9	3.2	8.5	〃
114	—C_2	287	剝片	6.1	2.7	9.7	〃
115	—C_2	10	使用痕ある剝片	5.3	6.7	43.3	〃
116	—F_4	34	掻器	4.9	1.9	5.4	〃
117	—D_2	30	〃	4.9	1.9	5.0	〃
118	—E_3	36	〃	3.1	2.4	4.2	〃
119	—D_3	790	〃	4.4	1.7	2.8	〃
120	—F_3	838	〃	5.6	1.6	4.0	〃
121	—D_2	640	〃	4.6	3.0	7.1	〃
122	—E_2	326	〃	5.0	2.2	5.6	〃
123	—D_2	8	〃	6.0	1.2	3.0	〃
124	—D_2	933	彫器	3.1	1.2	2.0	〃
125	—D_2	639	〃	4.4	1.3		〃
126	—E_2	192	〃	8.2	2.6	25.4	〃
127	—D_4	803	掻器	4.2	1.9	2.6	〃
128	SA	137	〃	3.6	1.7	3.7	〃
129	—D_5	469	〃	3.1	2.4	4.2	〃
130	SA—W(?)	75	使用痕ある剝片	9.3	3.8	42.7	〃
131	SA	244	彫器	5.3	2.3	9.9	〃
132	—C_3	62	石核	2.8	3.8		〃
133	SA	307	〃	3.7	3.8		〃
134	—F_3	83	〃	3.1	3.0		〃
135	—D_2	597	〃	5.1	3.8		〃
136	—D_2	431	〃	4.2	4.0		〃
137	—E_2	27	〃	4.9	2.9		〃
138	—D_2	403	〃	2.5	3.1		〃
139	SA	110	〃	5.0	5.0		〃
140	〃	138	〃	10.2	11.1		〃

(6) 縄文時代後期の石斧（第44～81図）

佐賀貝塚の調査において、312本の石斧が出土した。すべて縄文時代後期に帰属する資料である。本報ではこれらの内、完形品もしくは完形品に近い状態で法量計測可能のもの190点について報告する。形態の上でⅠ～Ⅺ類に分類し、さらに大小等によって細分した。法量等は別表のとおりである。1986年（昭和61年）本貝塚に関する調査略報（『佐賀貝塚』略報峰町教育委員会）において、石斧の数316点、その内、未製品が183点（57.9%）と報じた。その後検討において、この数字について若干、修正の必要が生じた。ここにおいて修正点を記しておくことにする。

石斧総数は冒頭の312点が正しい。次に、未製品の数とパーセンテイジについてであるが、まず、完成品の状態を「刃部の研磨されたもの」として理解した結果が「未製品57.8%」という先報になった次第である。しかしながら、刃部未研磨のまま打製石斧として使用したものもあり、先報の「未製品183点57.9%」を「未製品152点48.7%」としておきたい。

以下、各類別に概説する。

石斧Ⅰ類（1～15）

上下殆ど幅がかわらず、「短冊型」とも言うべき石斧の一群をまとめた。**2**のごとく全長が32cmの大型から**9**の10.2cmまで大小の差があり、全長24cm以上のものをⅠa、24cm未満18cm以上をⅠb、18cm未満14cm以上をⅠc、14cm以下の資料をⅠdとした。

4・7・8・10等は幅広、**15**のように刃部の幅が最も狭くなる例もあり、狭幅のものと広幅のものは機能面で異なるとも考えられるが、機能面の考察が不十分なまま、全長の差によって分類を試みた。

石斧Ⅱ類（16～50）

全体に上端が細くなり、中程から刃部にかけての幅がほぼ等しくなる一群をまとめた。この類も大小の差が著しく、全長27cm以上をⅡa、27cm未満20cm以上をⅡb、20cm未満18cm以上をⅡc、18cm未満10cm以上をⅡd、10cm未満をⅡeとして細分類した。**50**の場合7.3cmと極端に小型であり、用途が如何なるものであるか興味深いが、石斧というよりも「楔」の機能を想起させるものがある。**49**は、その未製品であろうか。この類は比較的数量が多く、35点11%をしめている。

石斧Ⅲ類（51～114）

64点20.4%を占め、佐賀貝塚の石斧中もっとも数量がおおい。Ⅱ類に近い形であるが、上端から刃部までが直線的であり、したがって刃部が最大幅となる石斧群である。**52・53・55**などが好例である。この類も大小の差が著しく、全長によって4類に細分類した。

51のように全長30cm以上のもの（Ⅲa）が全体の中で数例あり、重量が1,760gに達するものがある。例数も限られている点を見ると極めて限られた用途のものか、象徴的なものであろう。

全長30cm未満20cm以上をIIIｂ、20cm未満15cm以上をIIIｃ、15cm以上をIIIｄ、12cm以下をIIIｅ、とした。

石斧IV類（115～130）

完成段階の本類は、**115・119**などのように、刃部が斜めに研ぎだされている。**116・122・129**等のような剝離整形段階、さらに**117・120**のように研磨作業を始めた段階の資料が伴っていることからして、「斜刃」の制作意図が窺われる。例数は16点、刃部のみの資料を加えても21点(6.7％）と少なく、限られた用途がかんがえられる。大小の差が小さい。

石斧Ｖ類（131～145）

131～136が好例であるが斧身の曲がったもの、「曲身斧」ともいうべき一群をまとめた。**133**の場合、刃部を整え、斧身の一側を「曲げ加工」にかかった未製品**132・137**は研磨加工直前の段階とみられる。**132・137・138**のように、内湾側に自然面の残ったものがあるところを見ると、素材段階での選択が計られている、と考えられる。この類も大小の差が小さい。数量的には少なく、破損資料を含めて18例（5.8）％に留まる。

石斧VI類（131～150）

完成品は**147**。小型で、片刃状になっている。147は研磨が始められている。**150**は未研磨の状態であるが、細かい使用痕があり、未研磨のものでも使用されるらしい。

石斧VII類（151～153）

石斧というよりも「たがね」ないし「尖頭器」に近い形状で、刃部らしいものはないが、一応石斧として扱った。完成品の状況が不明であるが、**153**の状況からして片刃の石器とも考えにくい。数少なく類例について教示を期待したい。

石斧VIII類（154～161）

平面観はさまざまであるが、厚みがなく、扁平な片刃石器である。厚みに比して幅があり、二枚鉋の刃の観がある。現地の大工職がカミソリ砥石と称するきわめて緻密な硬質の砂岩が多用されている。完形品の規模は**158**程度で、大型のものはない。大きさ・厚み等からして木柄に着装しての使用は考えにくく、ハンディな工具と考えられる。**156**は１号人骨の副葬品である。この種の石器は有喜貝塚（註１）・草野貝塚（註２）・名切遺跡（註３）等でも事例があり、縄文後・晩期の北部九州や西九州の海岸地方で出現するようである。

石斧IX類（162～171）

全体に細長く、幅の狭い片刃石器を一括した。**167・168**は黒灰色の頁岩、他はVIII類と同じ石材が使用されている。刃部は何れも鋭い片刃仕上げで幅が狭く、特に167・168は刃部幅を意識的に狭くしている。VIII類同様、木柄への装着は考えにくい。有喜貝塚(註４)・草野貝塚(註５)例があり、弥生時代の片刃石器に比して刃部幅が狭く、平面観も整っていない。

石斧Ｘ類（172～177）

石材はVIII類・IX類と同じものが使用されているが、全体的に台型の平面観をもち、VIII・IX類

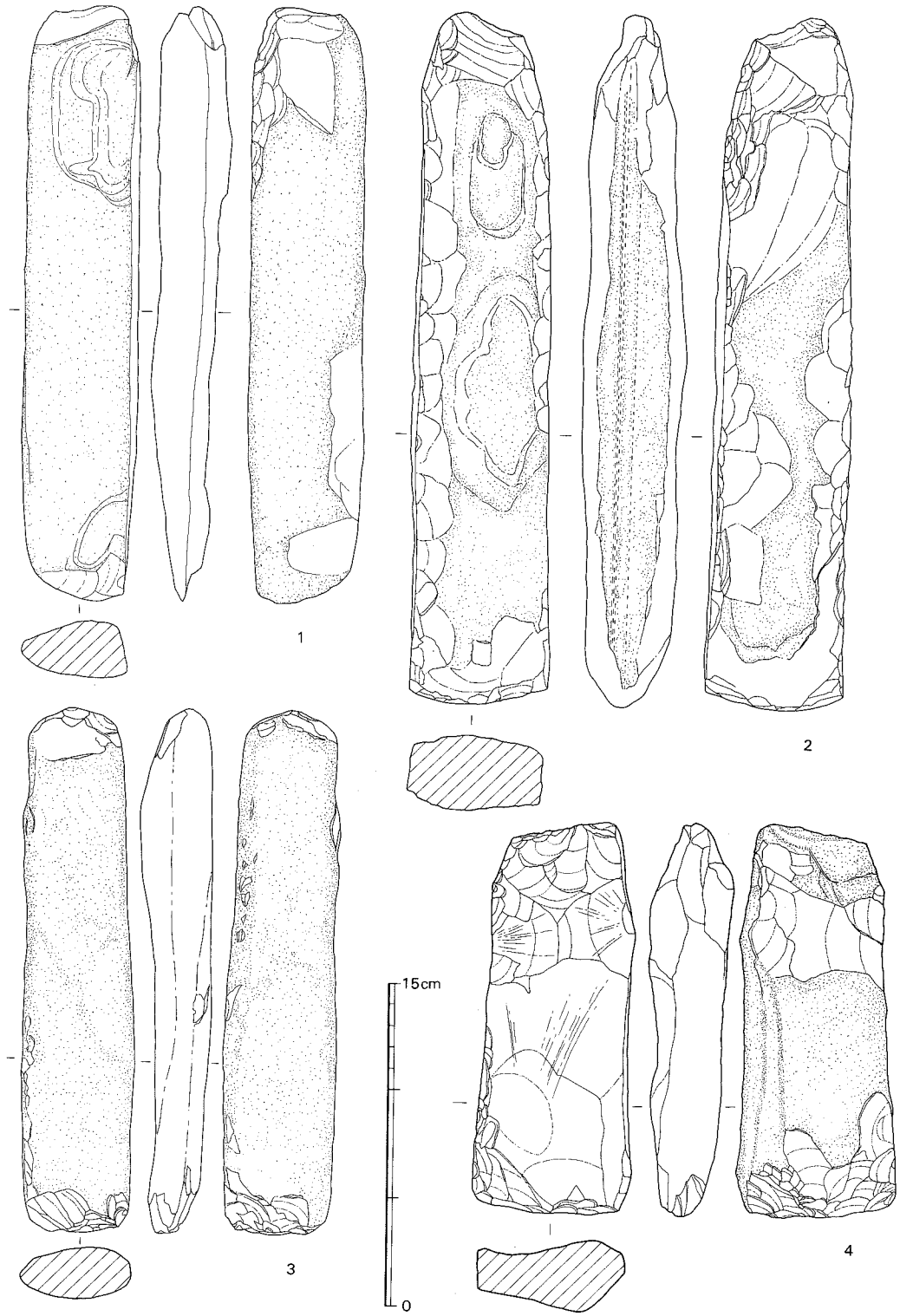
より大型かつ肉厚の扁平片刃石器群をまとめた。**177**は本遺跡では珍しい蛇文岩製である。西北九州では蛇文岩は広く石斧の素材に利用されているが、結晶片岩類を含めて壱岐島への搬入は比較的少なく、対馬への搬入はまことに希少である。

石斧XI類（178～190）

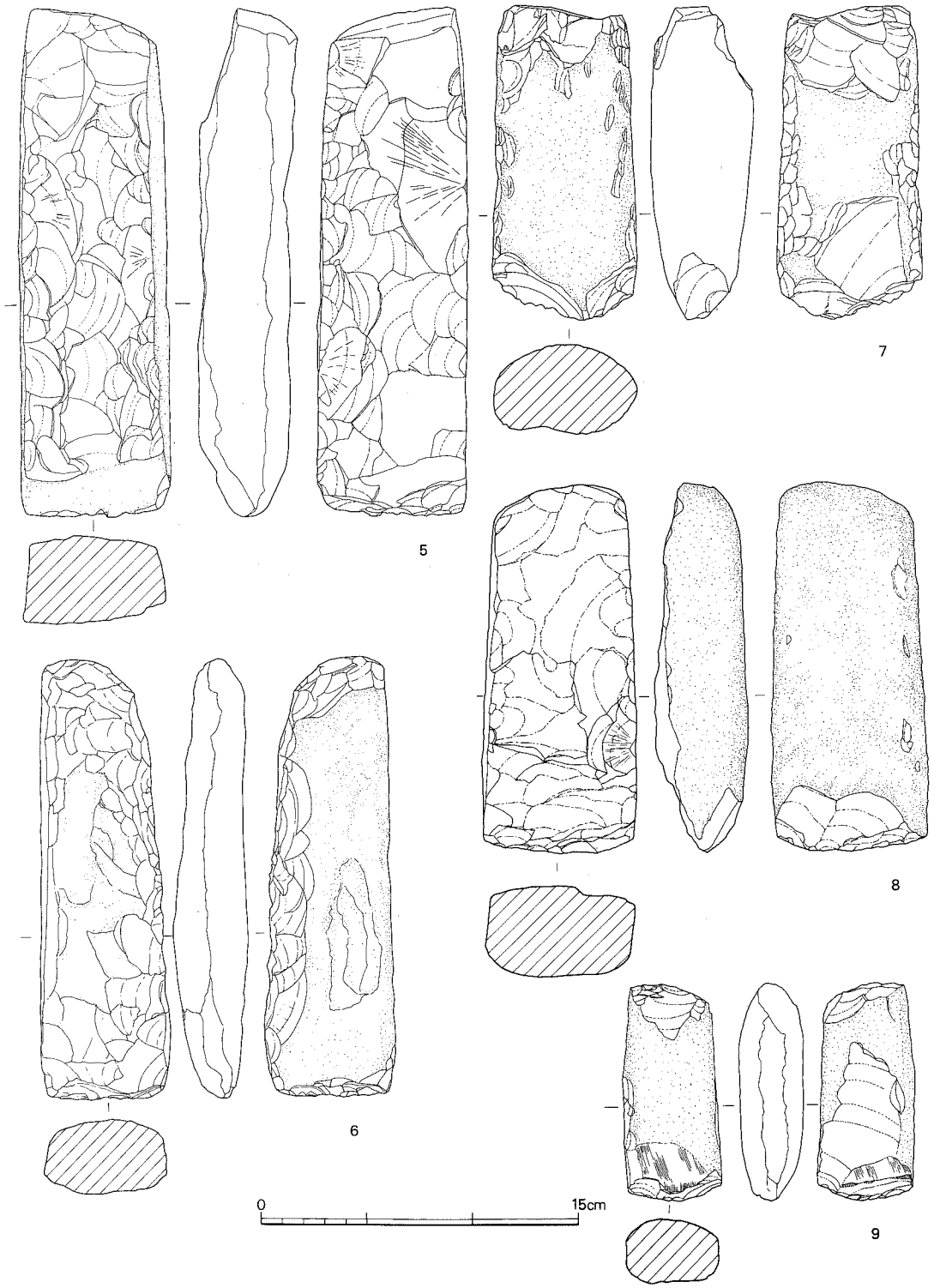
Ⅷ～IX類に比して大型で、片刃、ないし片刃状の一群をまとめた。**178～185**は背の低い台型の平面形で、**186～190**は形状が異なる。完成状態は178・181・182である。この種の規模であれば木柄に装着して切削具としての使用が可能であろう。

〔註〕

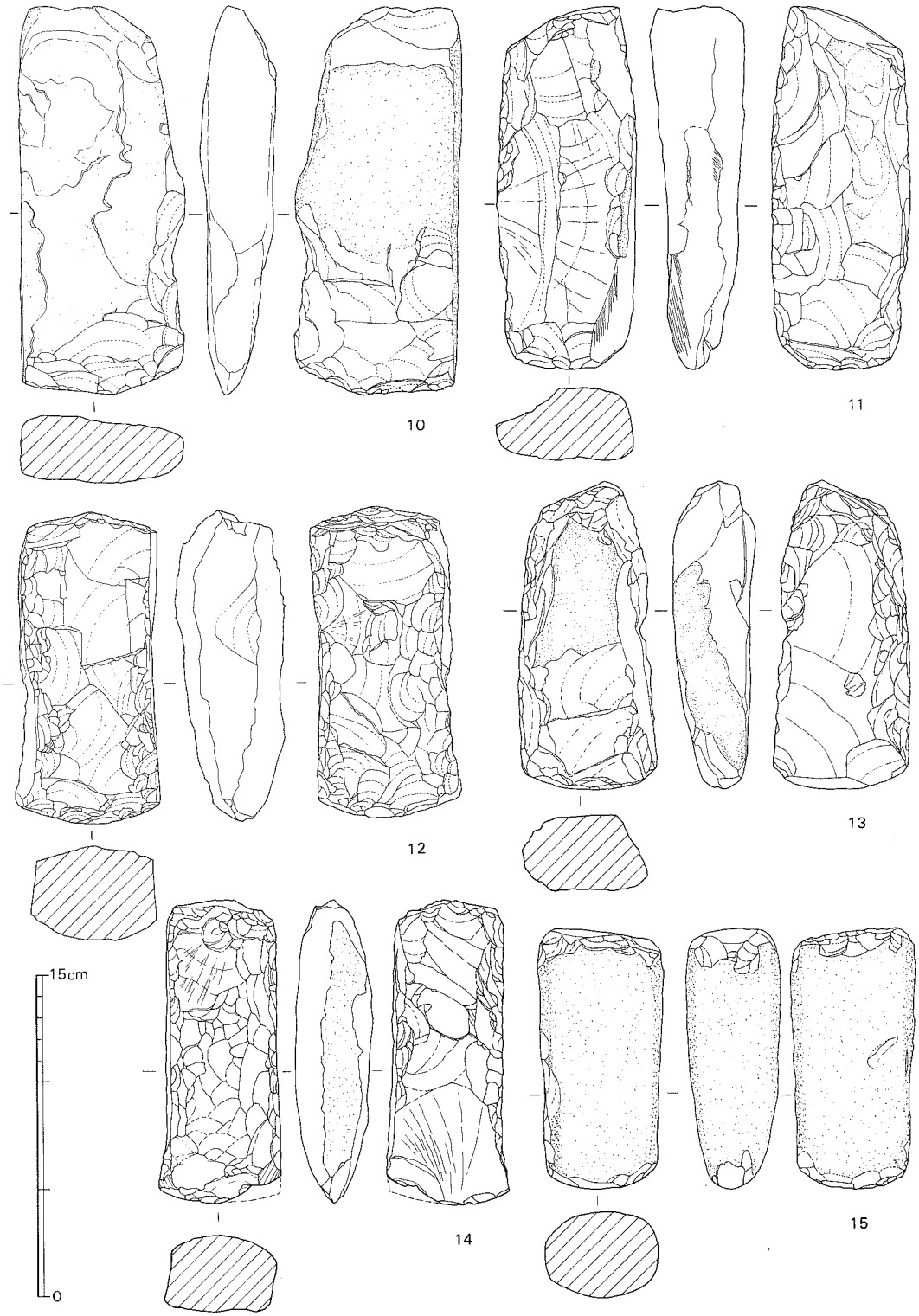
1．秀島貞康他『有喜貝塚』諫早市教育委員会1984
2．池畑耕一『石器』「草野貝塚」鹿児島市教育委員会1988
3．安楽勉・藤田和裕『名切遺跡』長崎県教育委員会1985
4．註1
5．註2



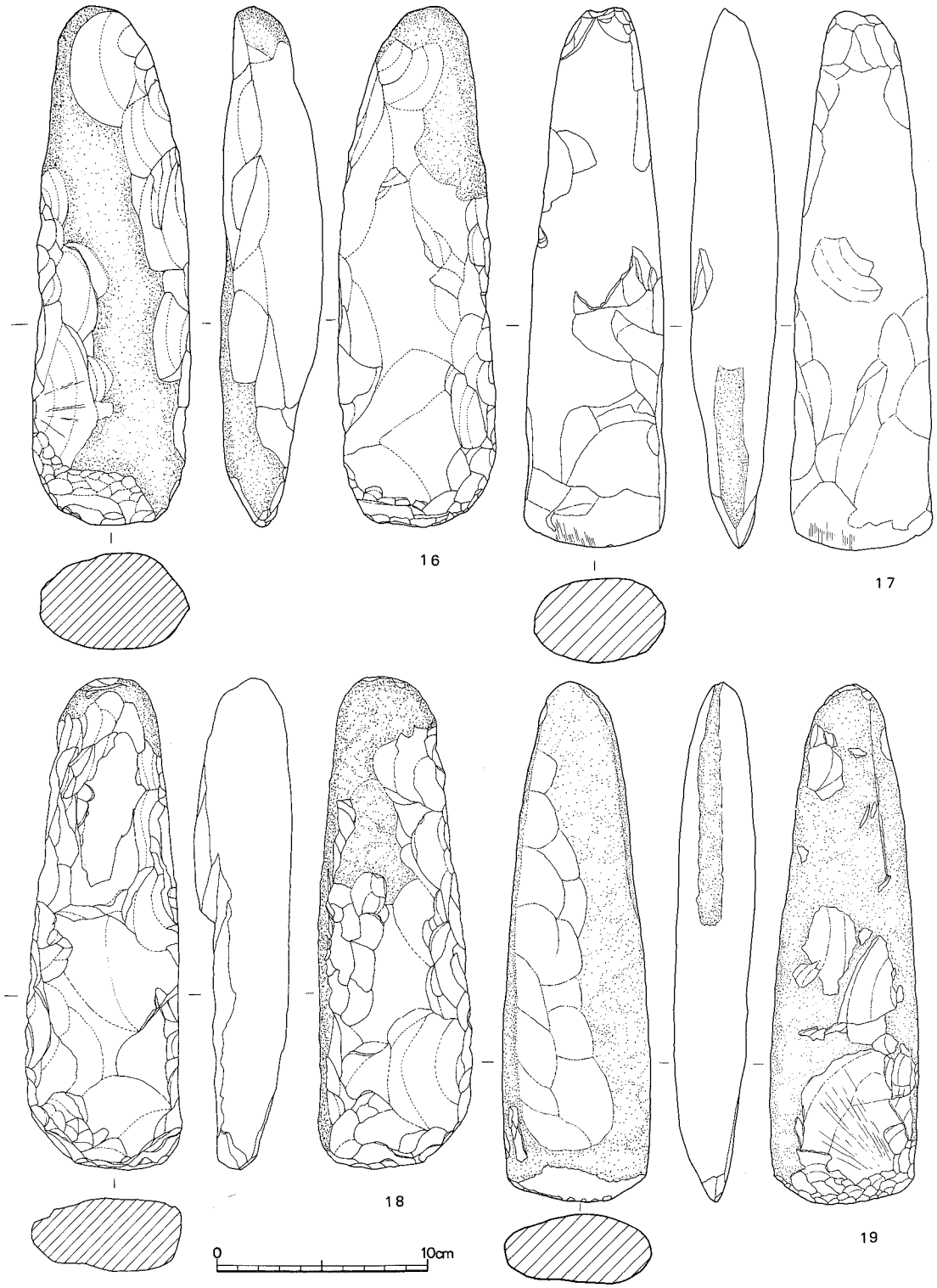
第44図　縄文後期の石器実測図（1/3）



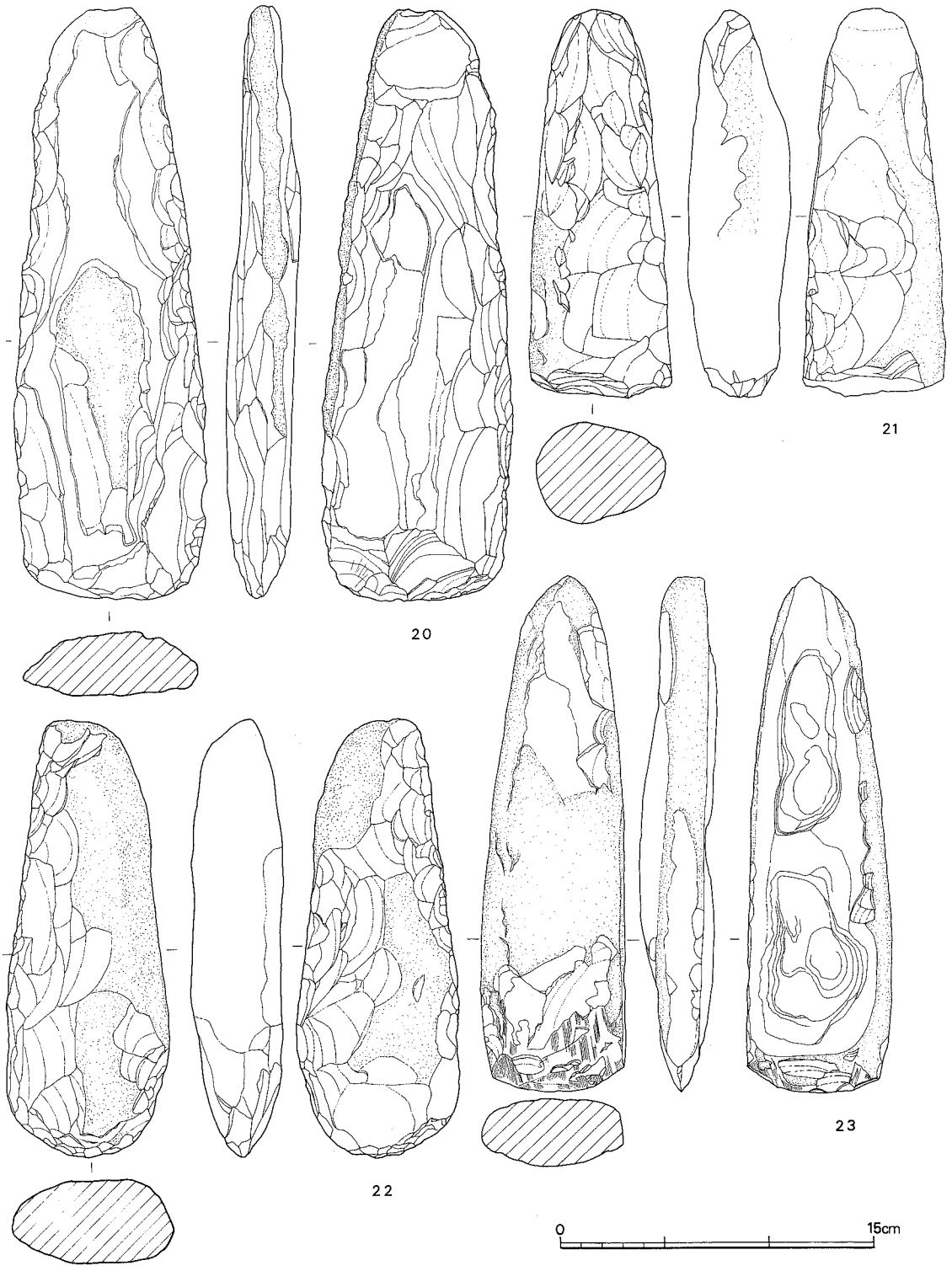
第45図　縄文後期の石器実測図（1／3）



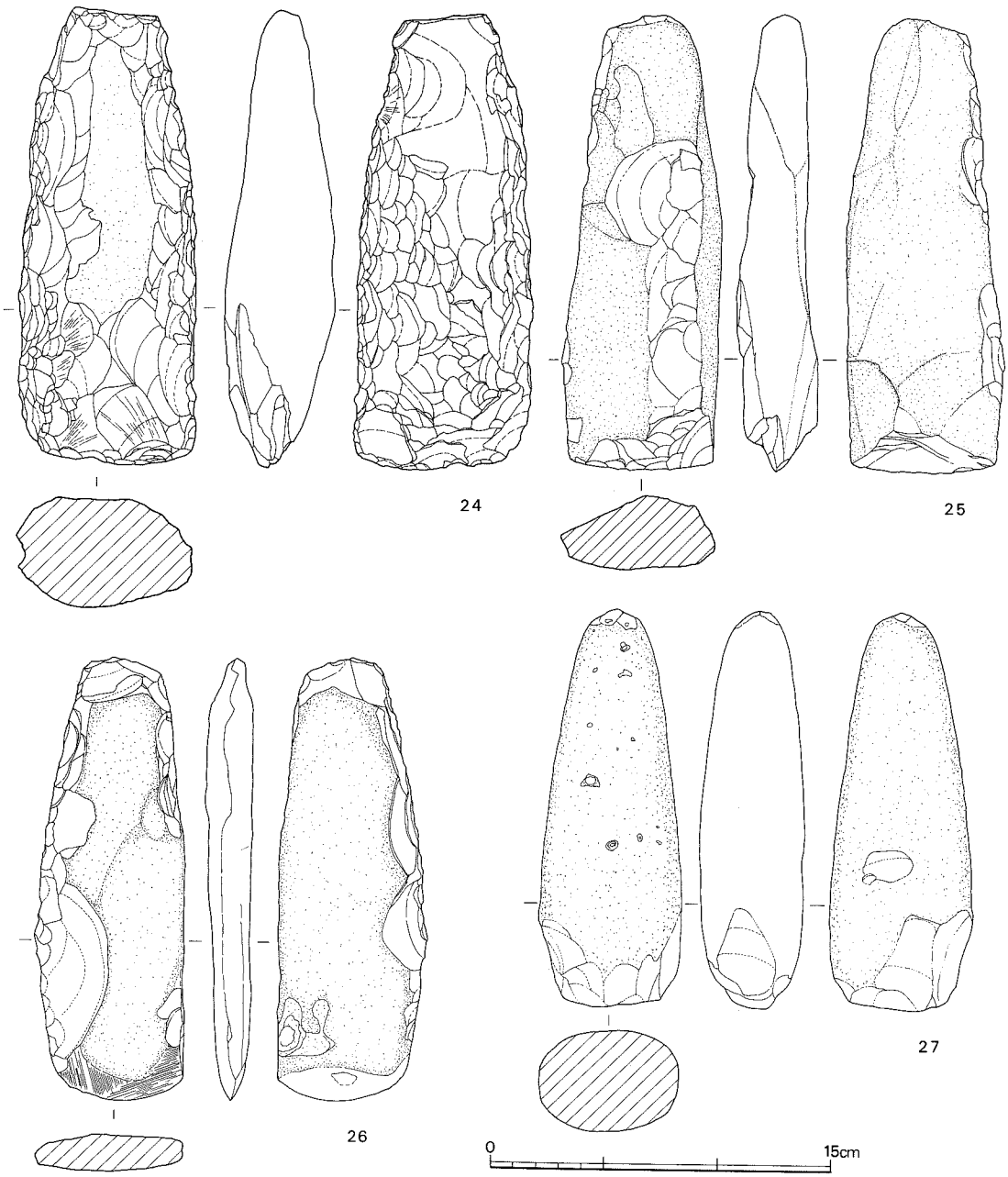
第46図　縄文後期の石器実測図（1／3）



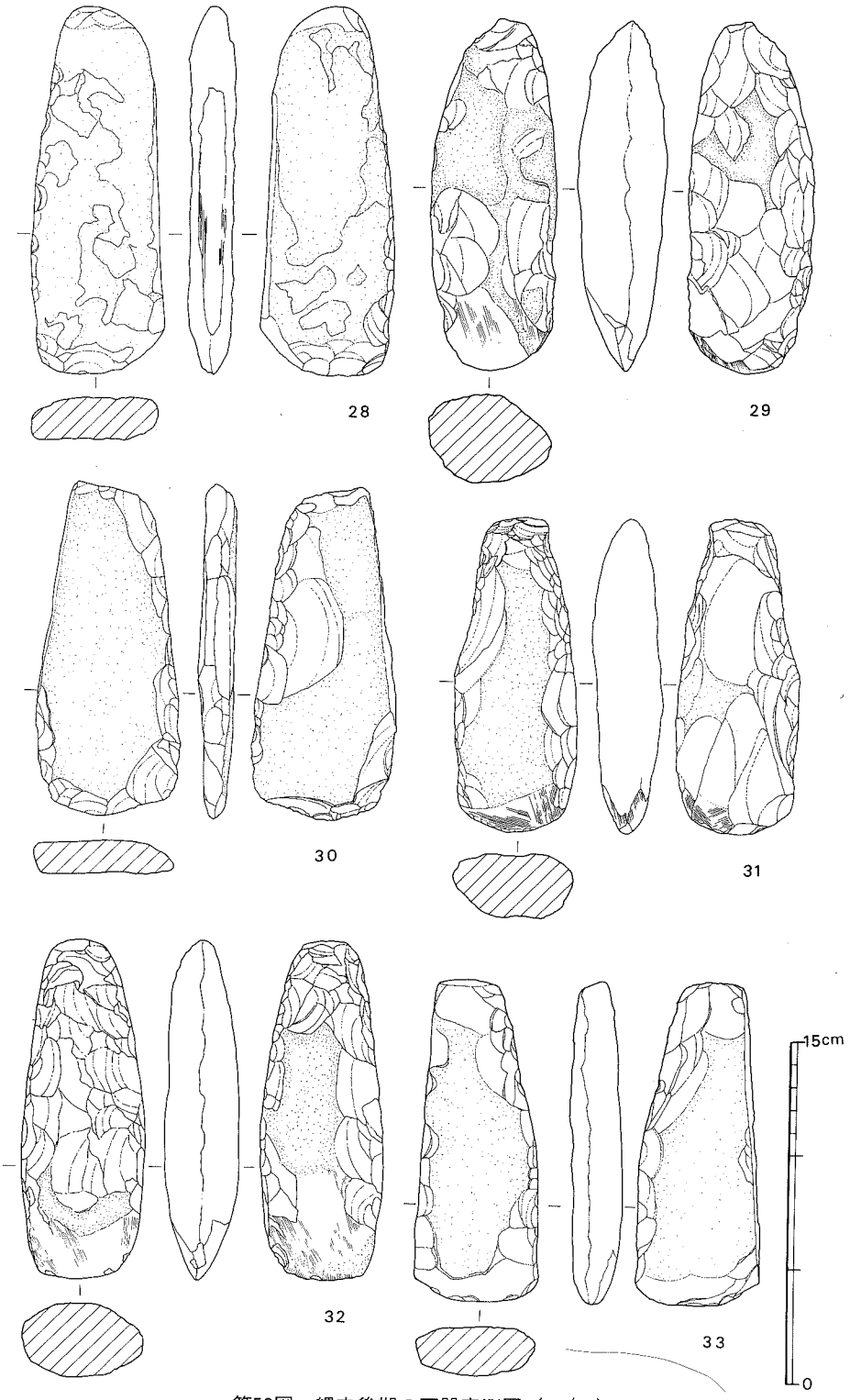
第47図　縄文後期の石器実測図（1/3）



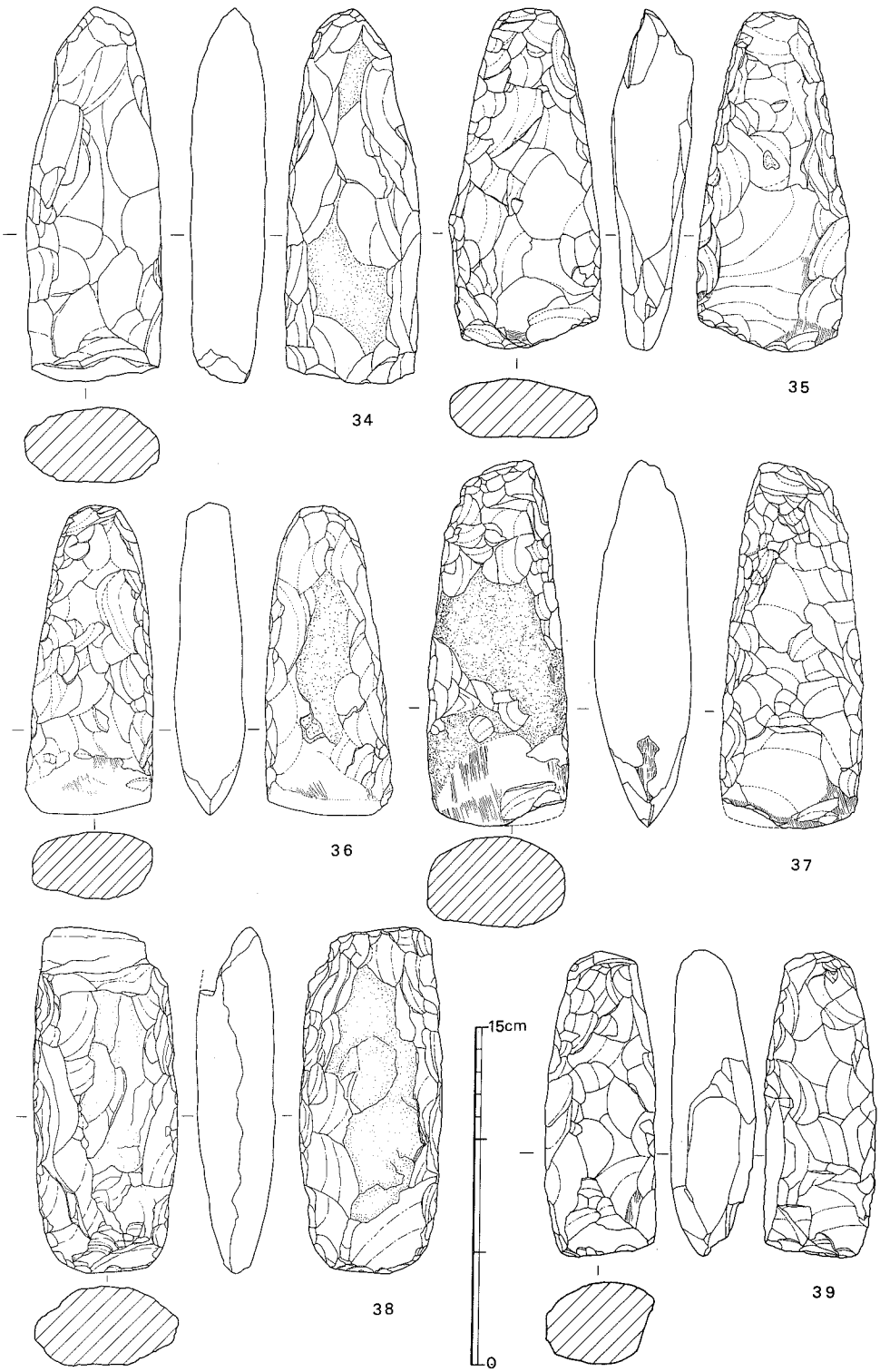
第48図　縄文後期の石器実測図（1/3）



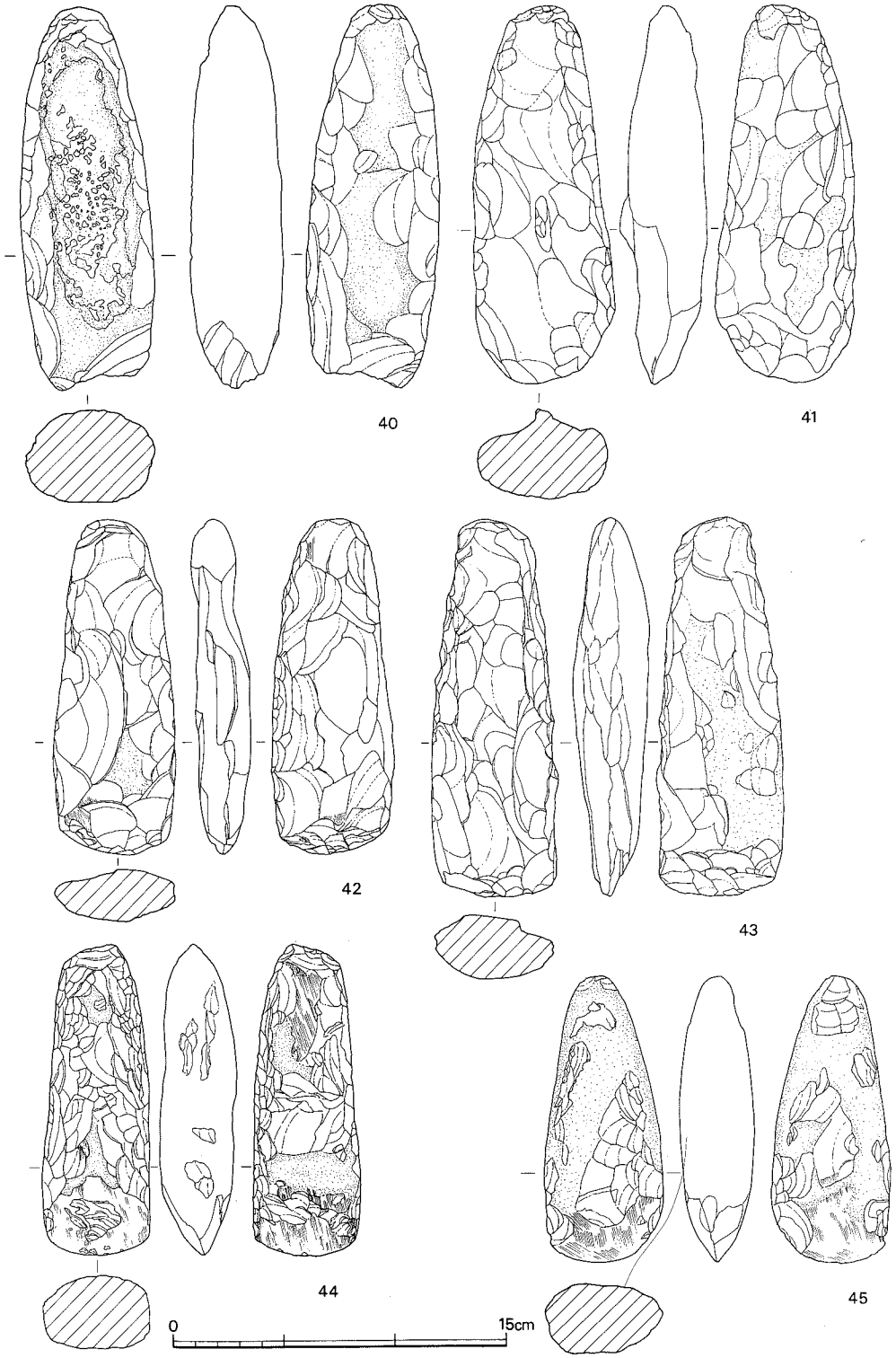
第49図　縄文後期の石器実測図（1/3）



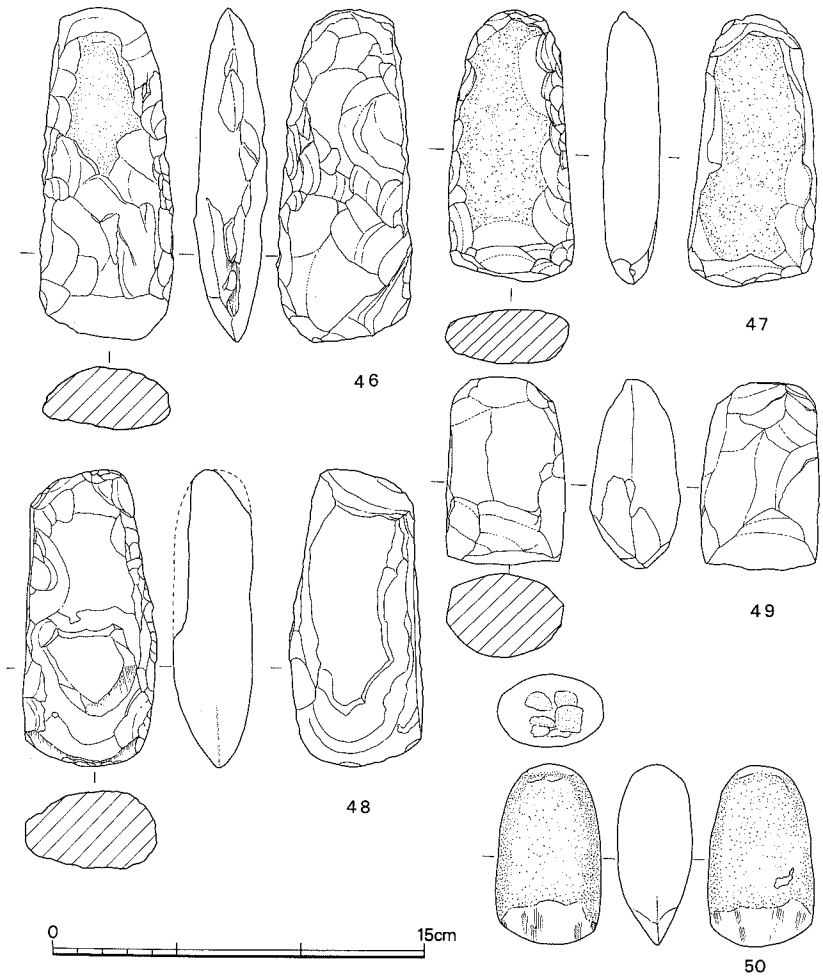
第50図　縄文後期の石器実測図（1/3）



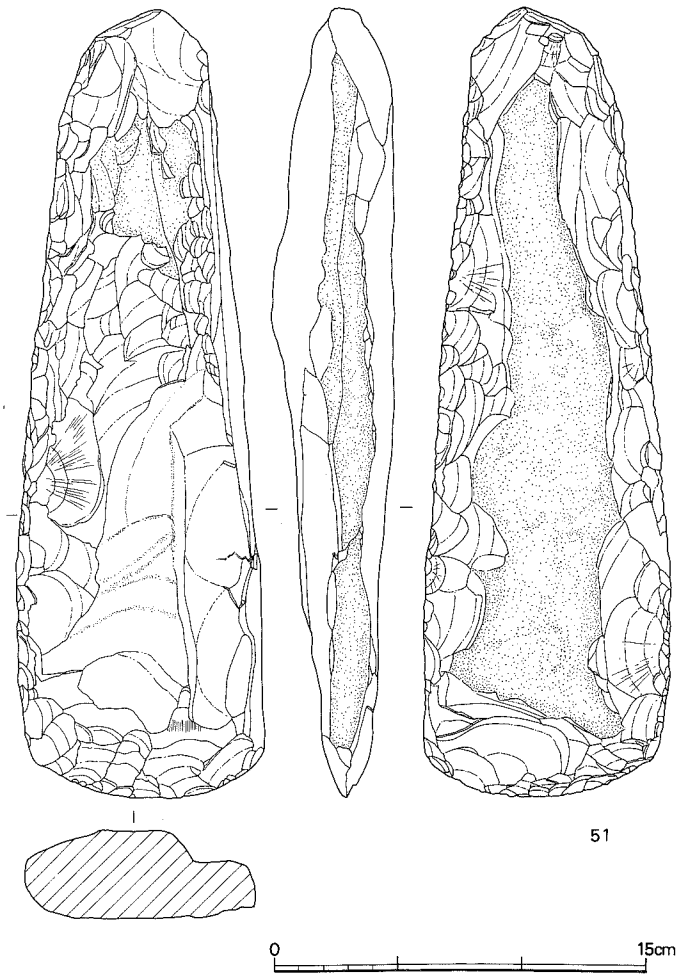
第51図　縄文後期の石器実測図（1/3）



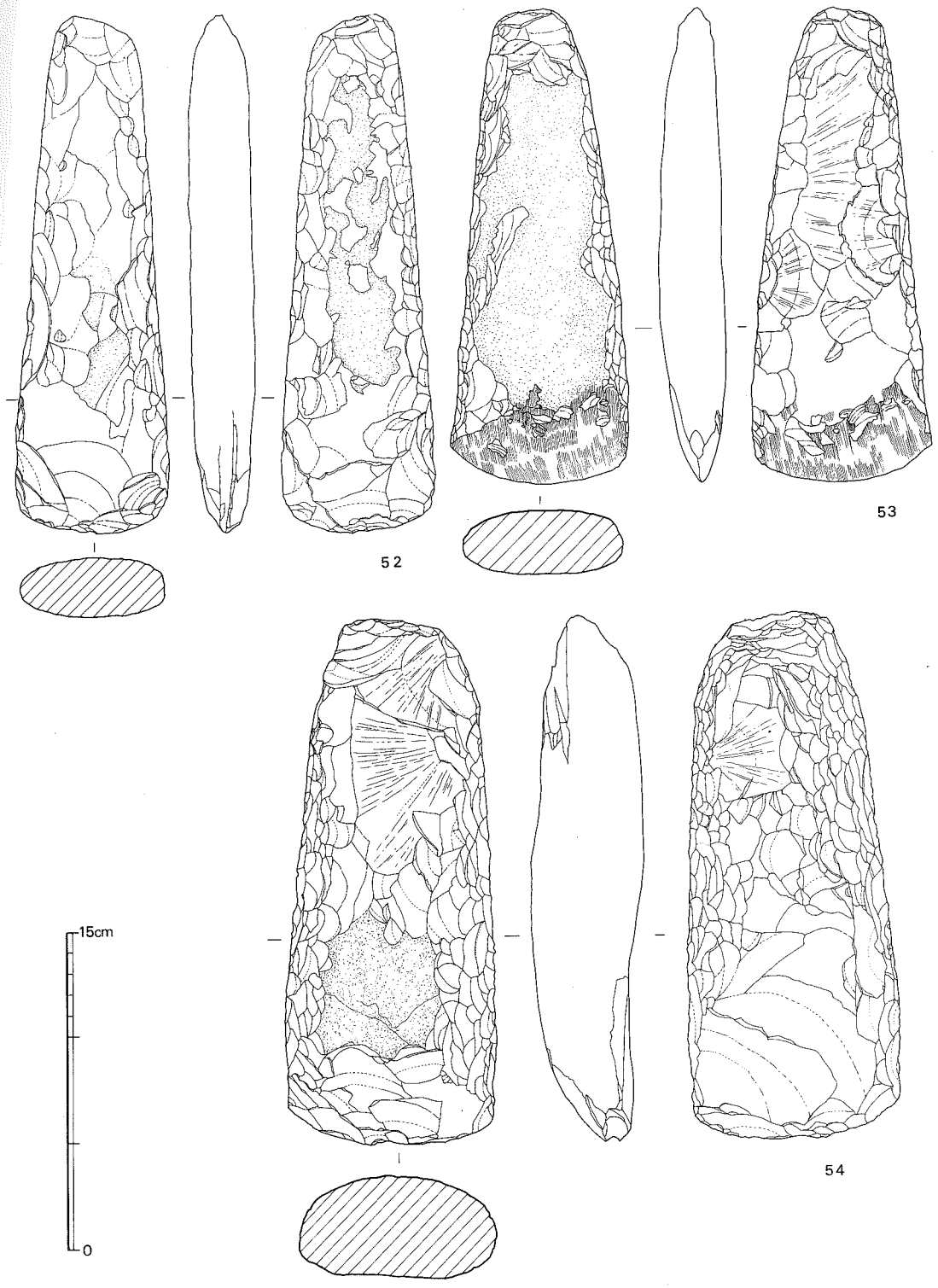
第52図　縄文後期の石器実測図（1/3）



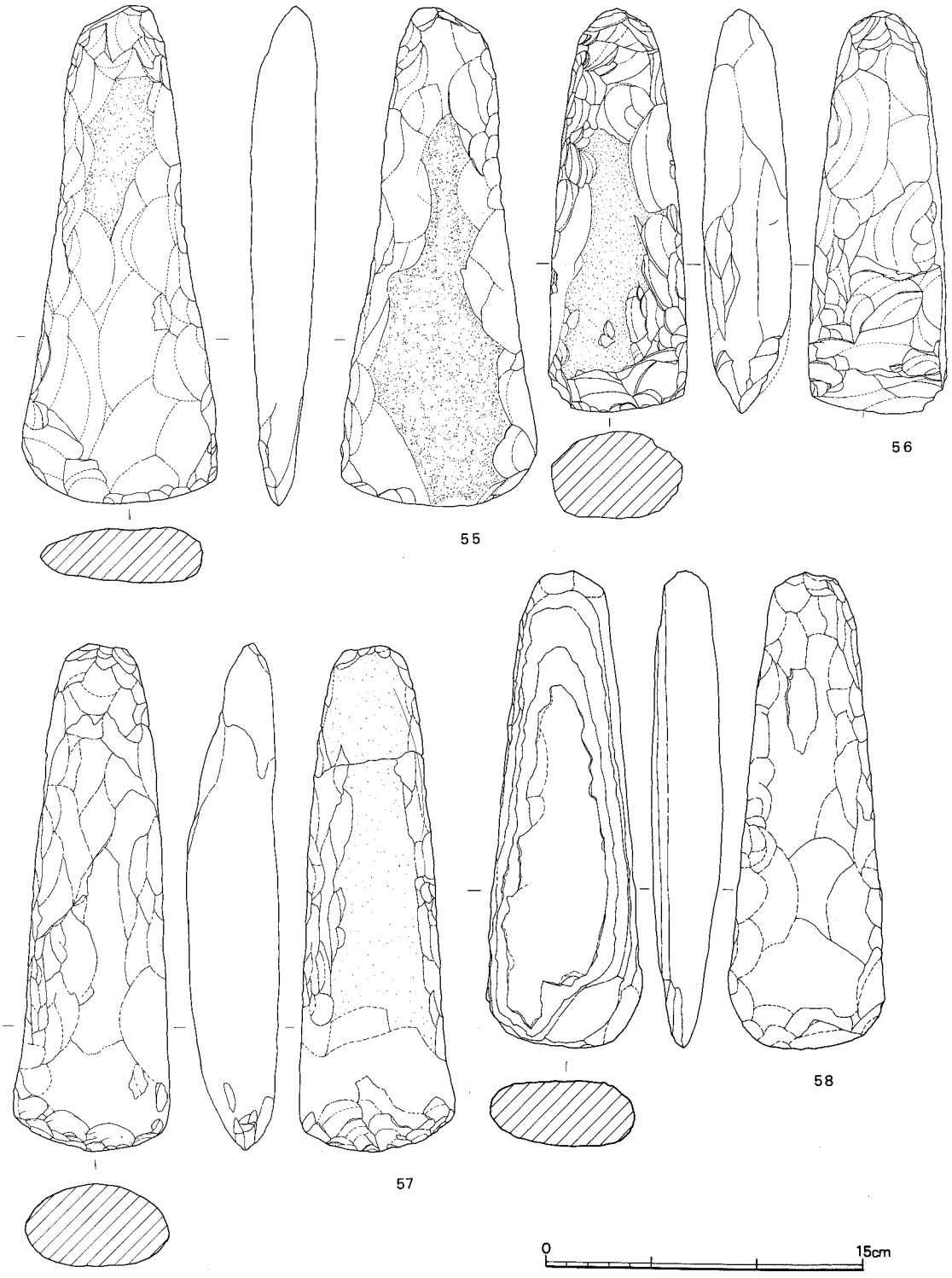
第53図　縄文後期の石器実測図（1／3）



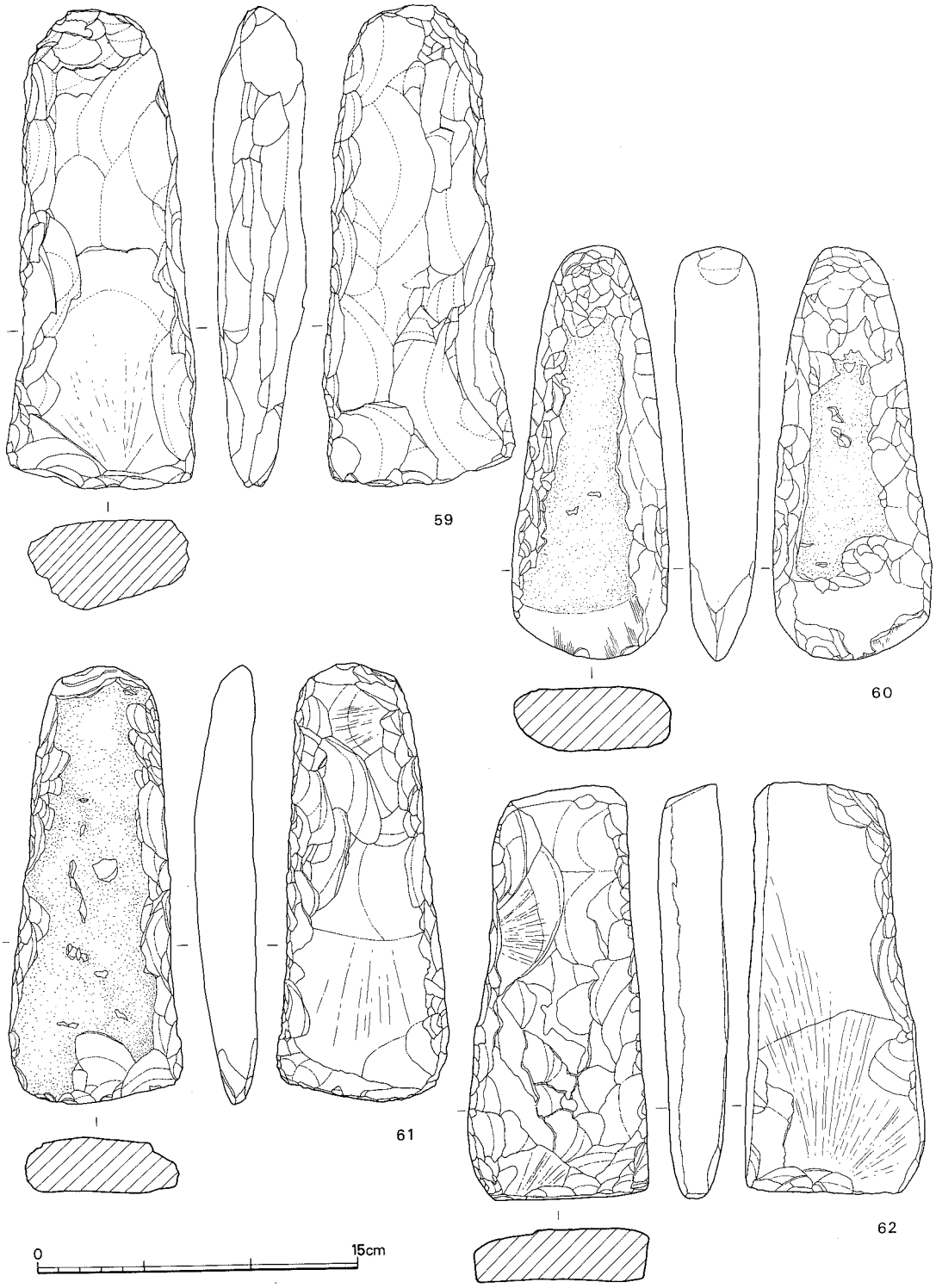
第54図　縄文後期の石器実測図（1/3）



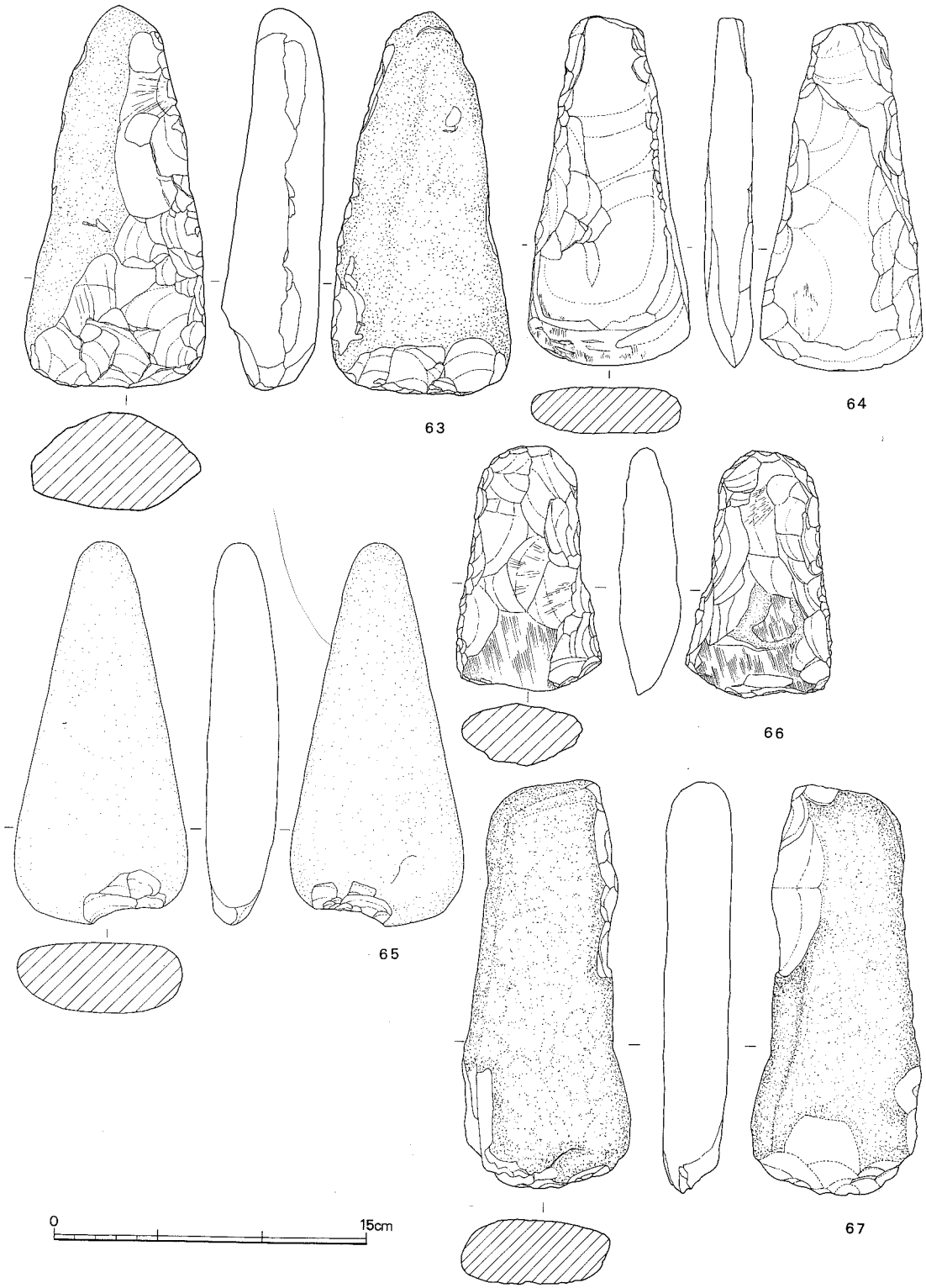
第55図　縄文後期の石器実測図（1/3）



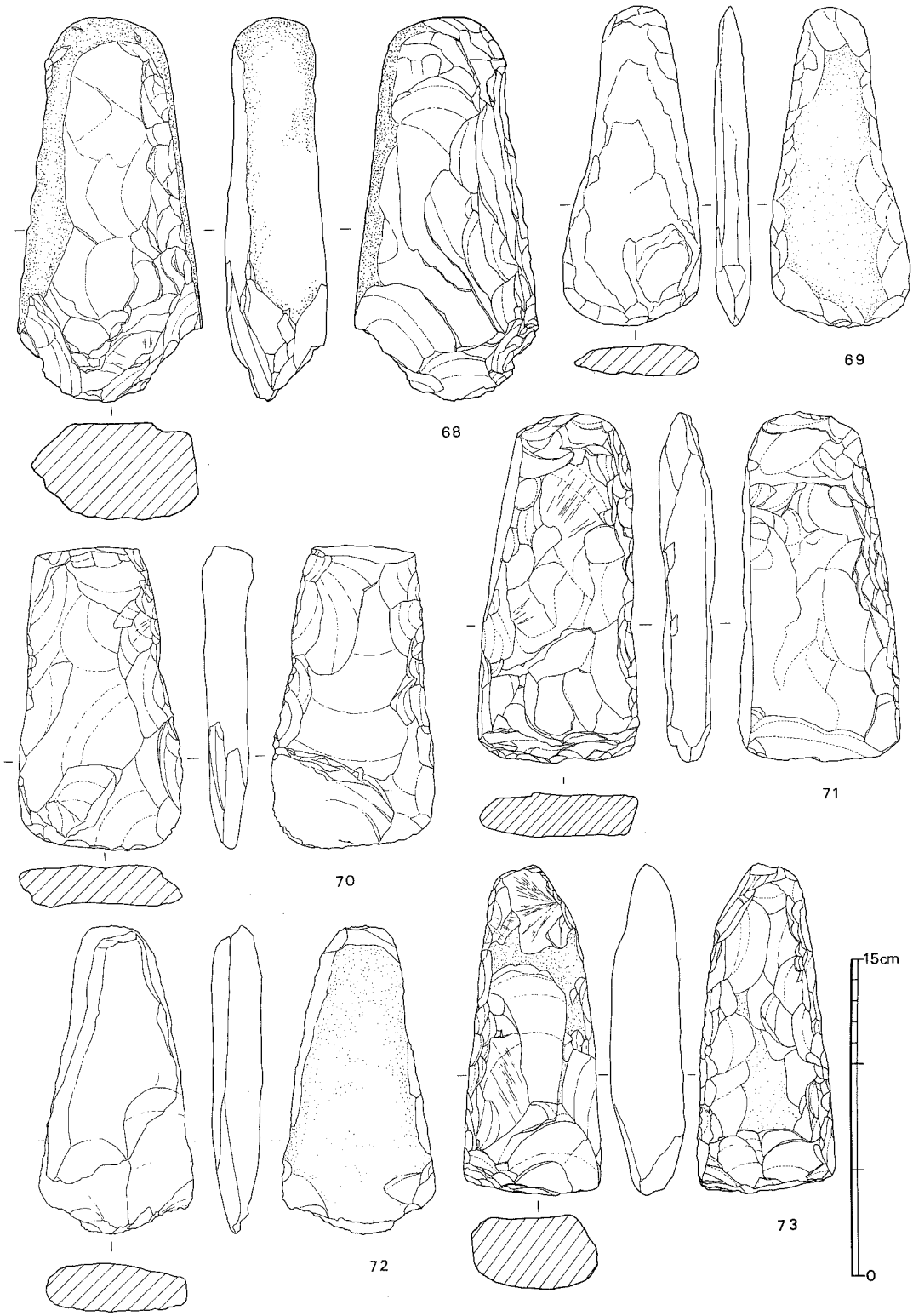
第56図　縄文後期の石器実測図（1/3）



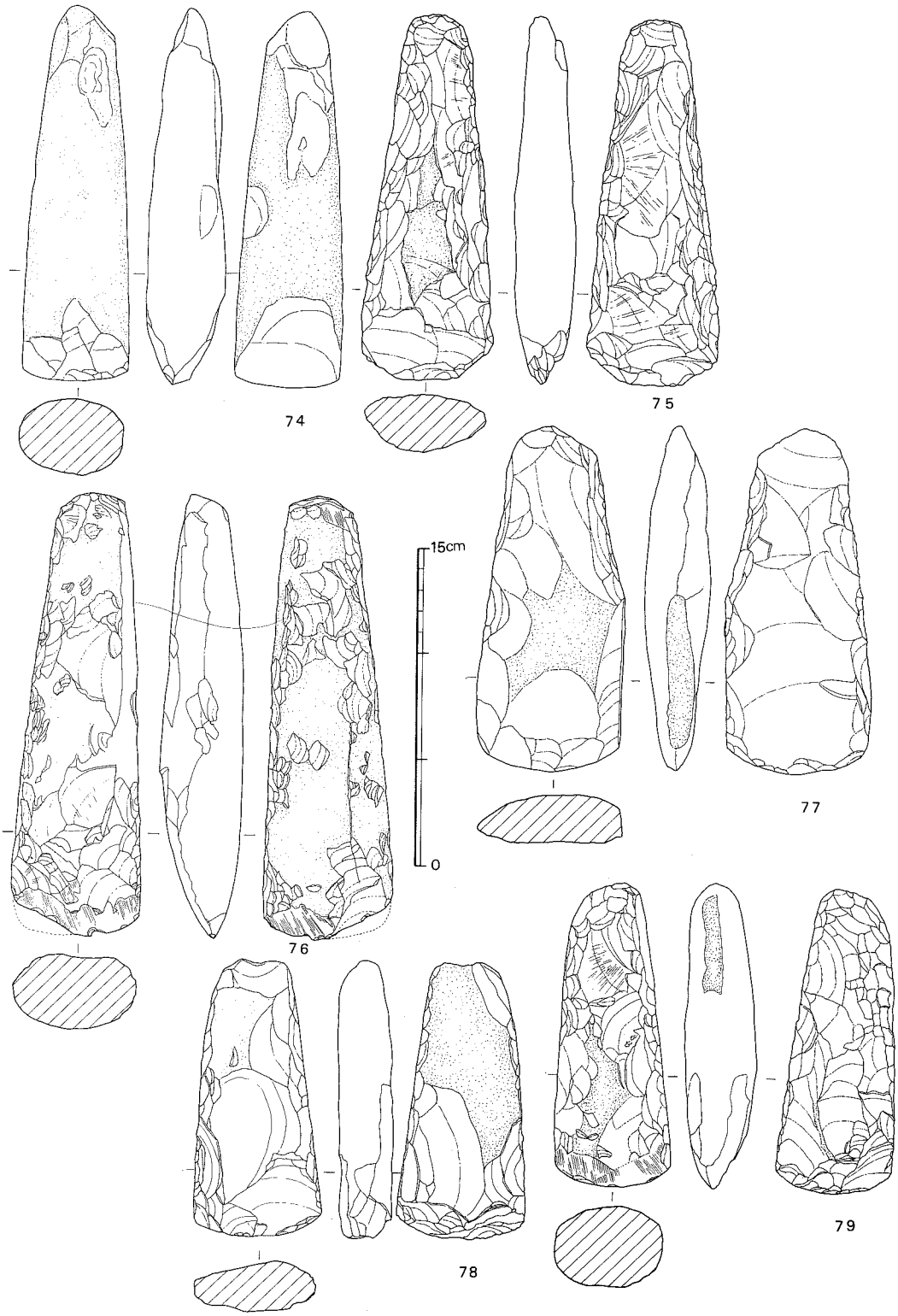
第57図　縄文後期の石器実測図（1/3）



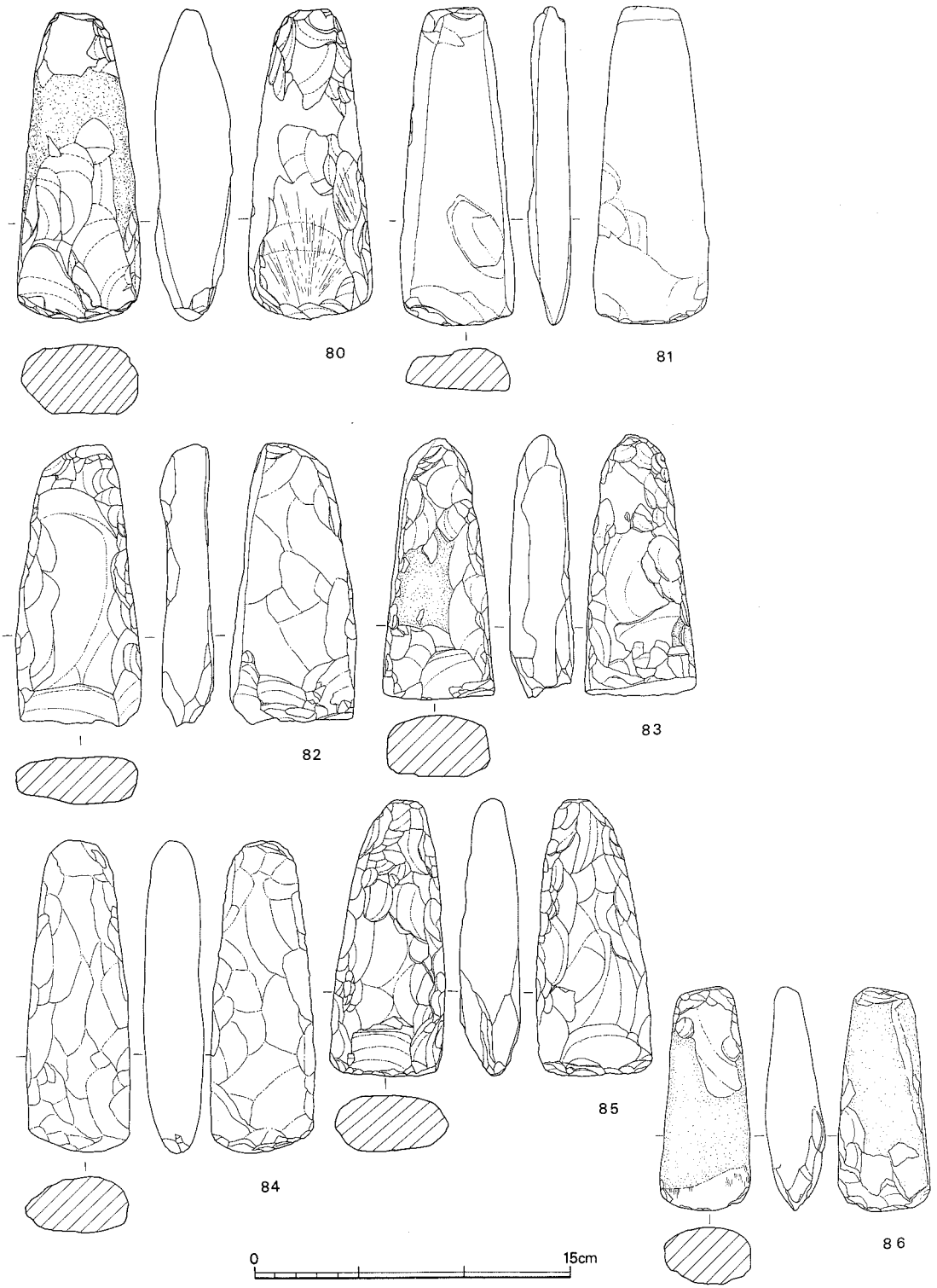
第58図　縄文後期の石器実測図（1/3）



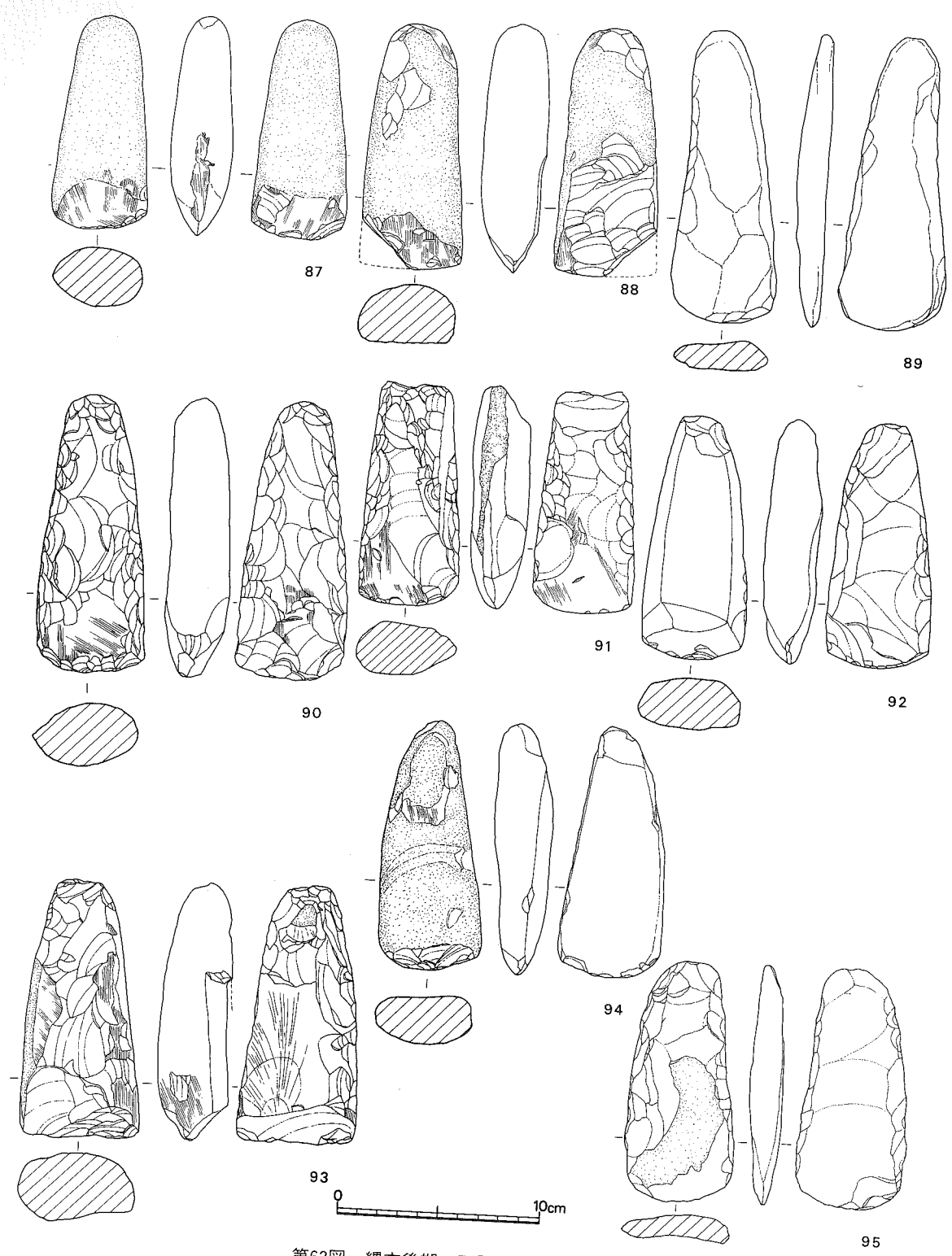
第59図　縄文後期の石器実測図（1/3）



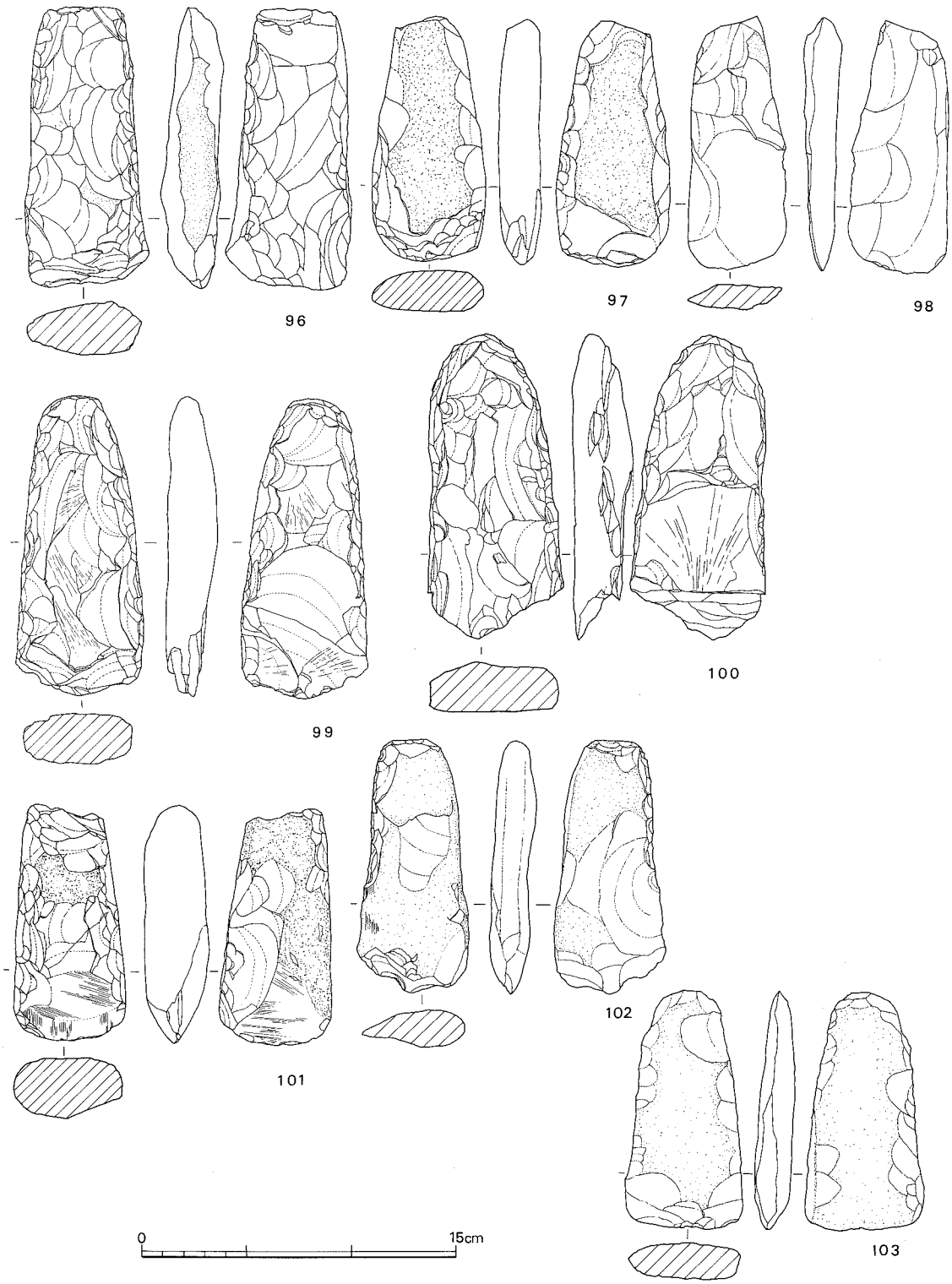
第60図　縄文後期の石器実測図（1/3）



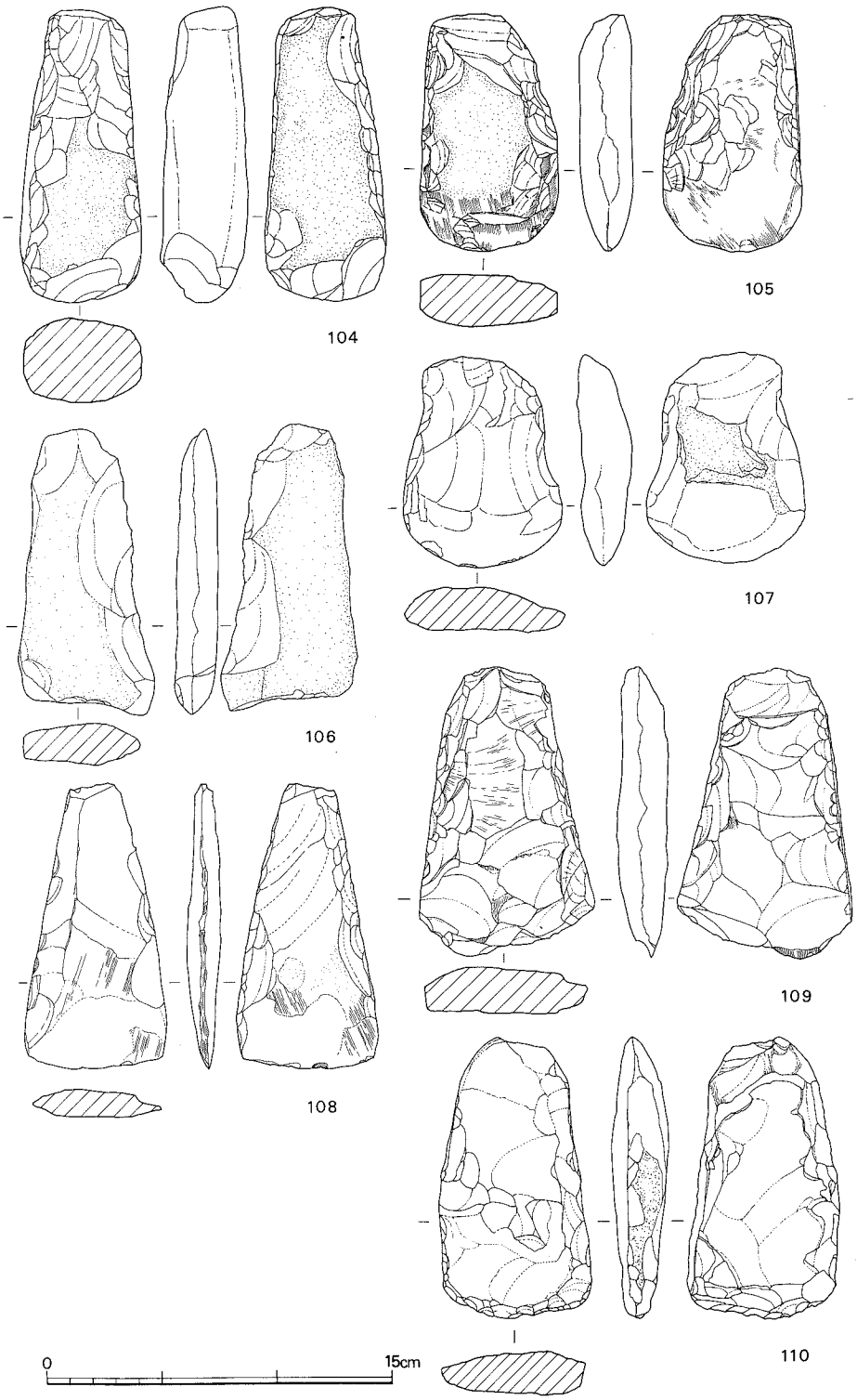
第61図　縄文後期の石器実測図（1/3）



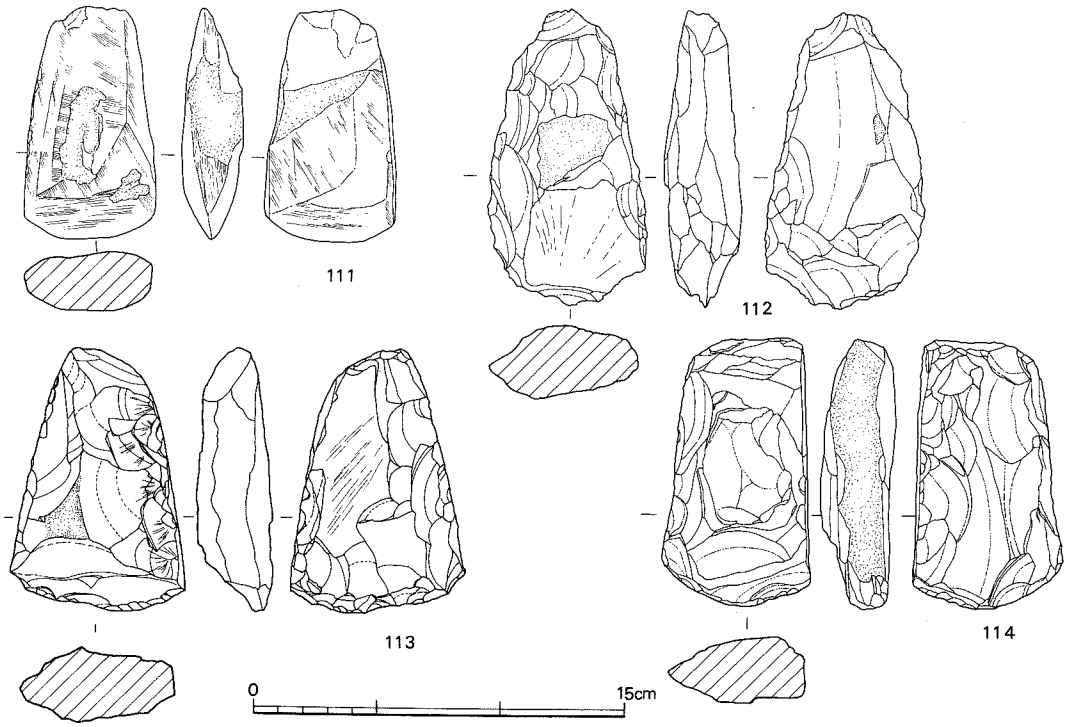
第62図　縄文後期の石器実測図（1/3）



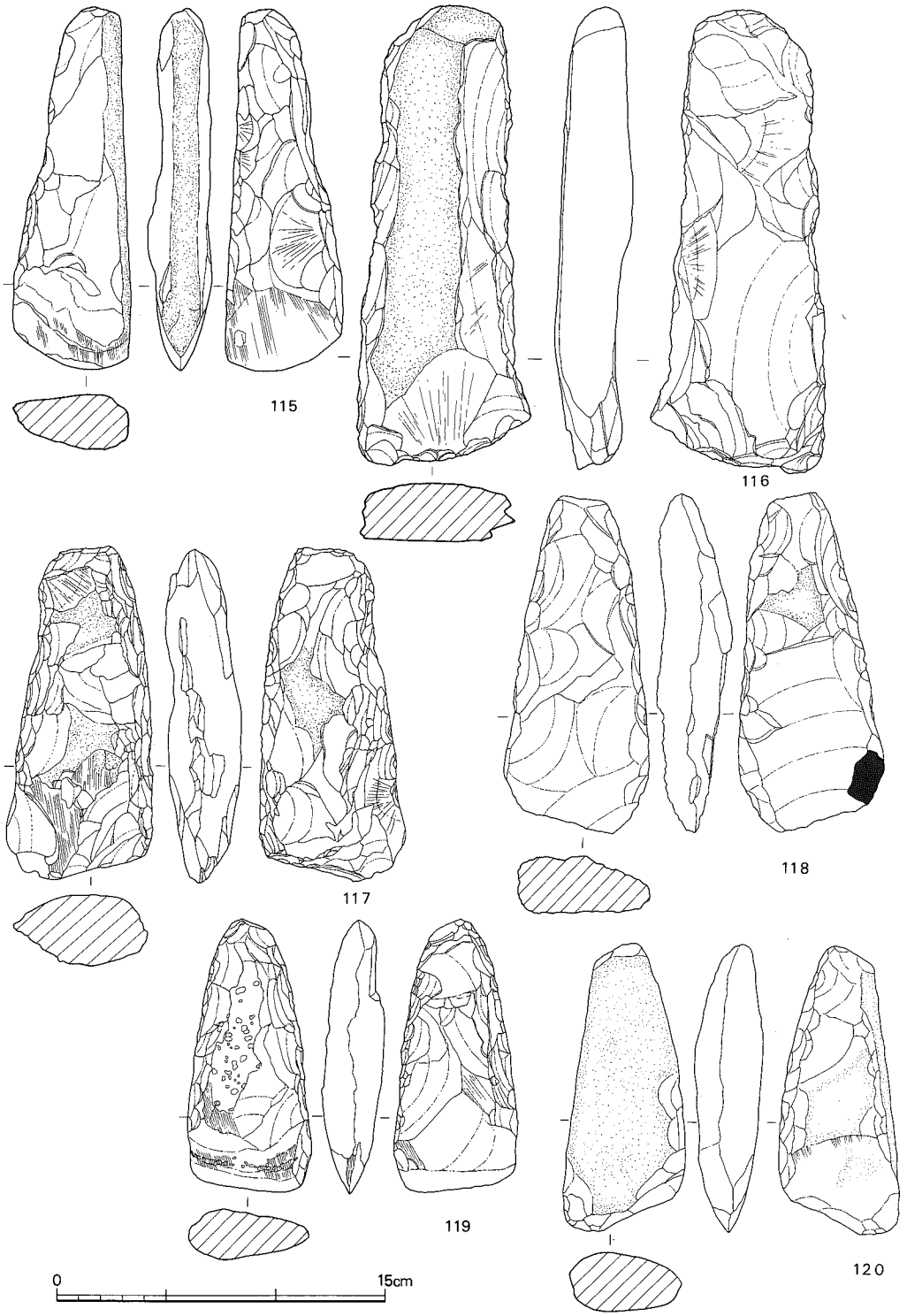
第63図　縄文後期の石器実測図（1/3）



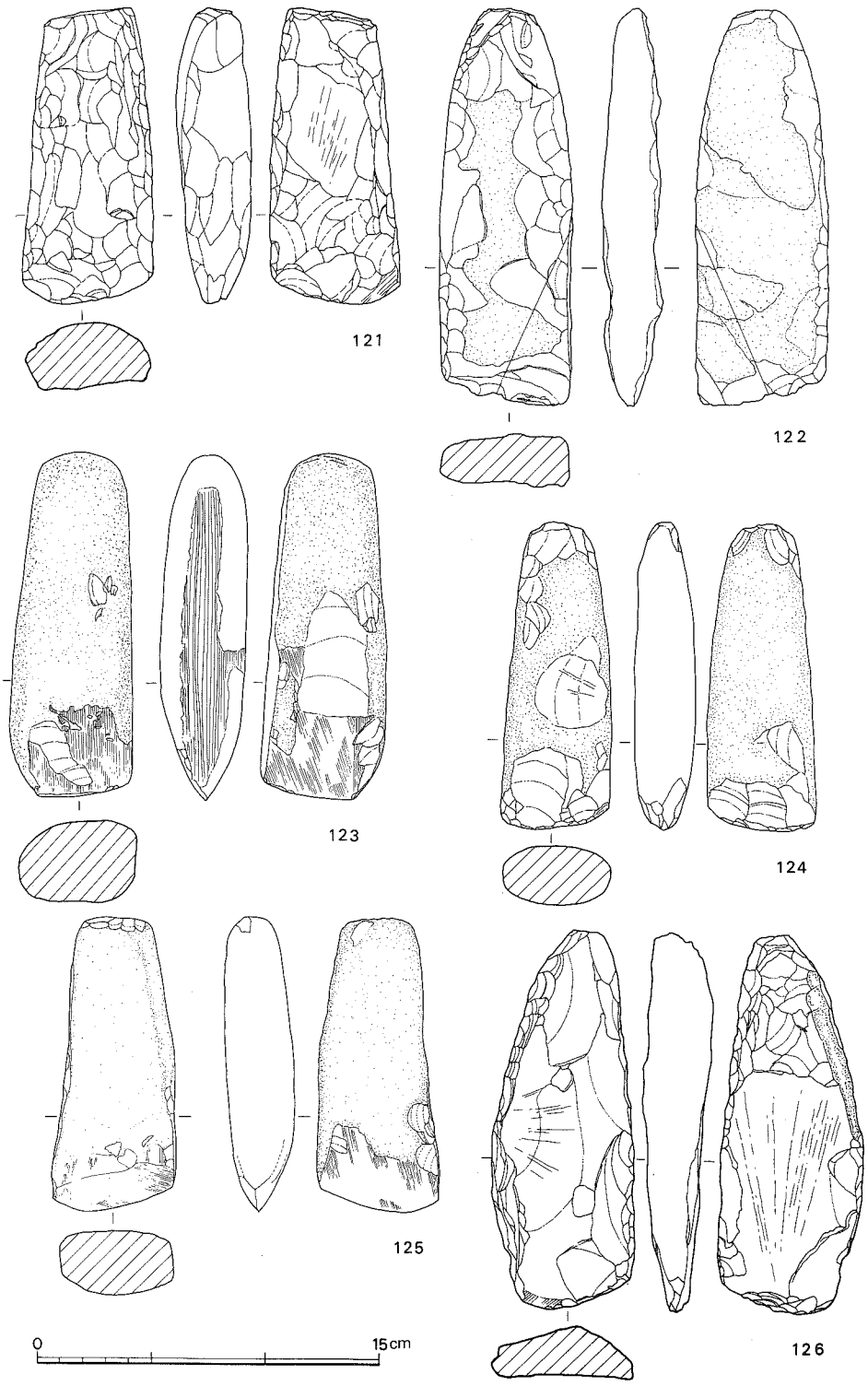
第64図　縄文後期の石器実測図（1／3）



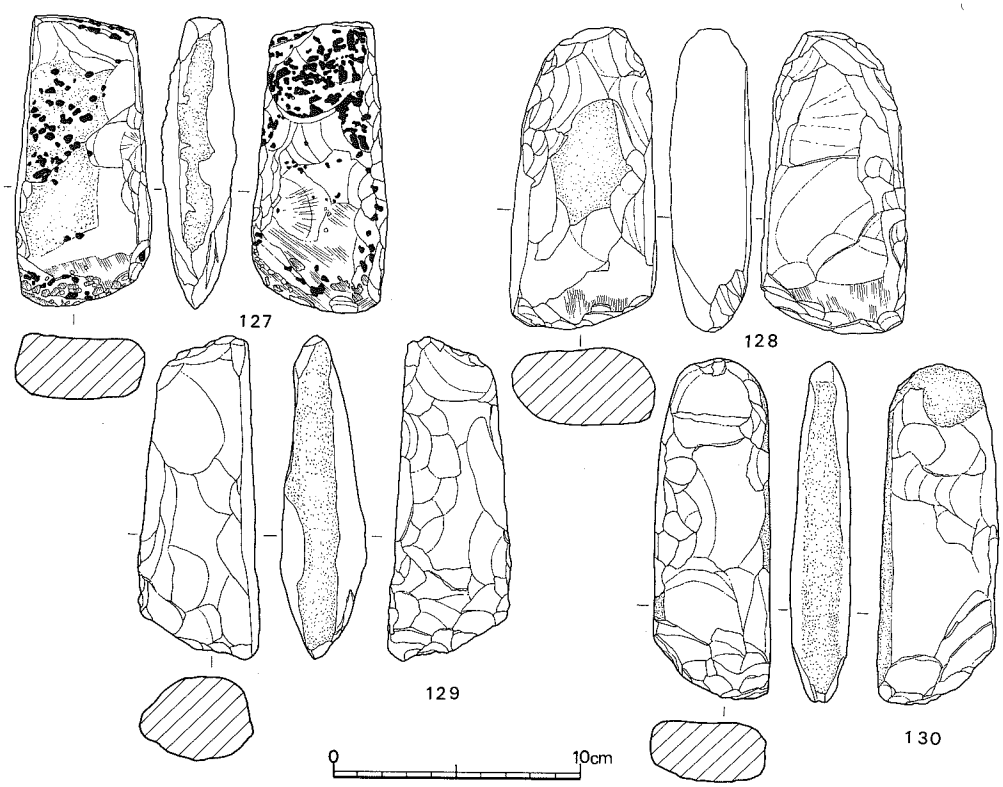
第65図　縄文後期の石器実測図（1／3）



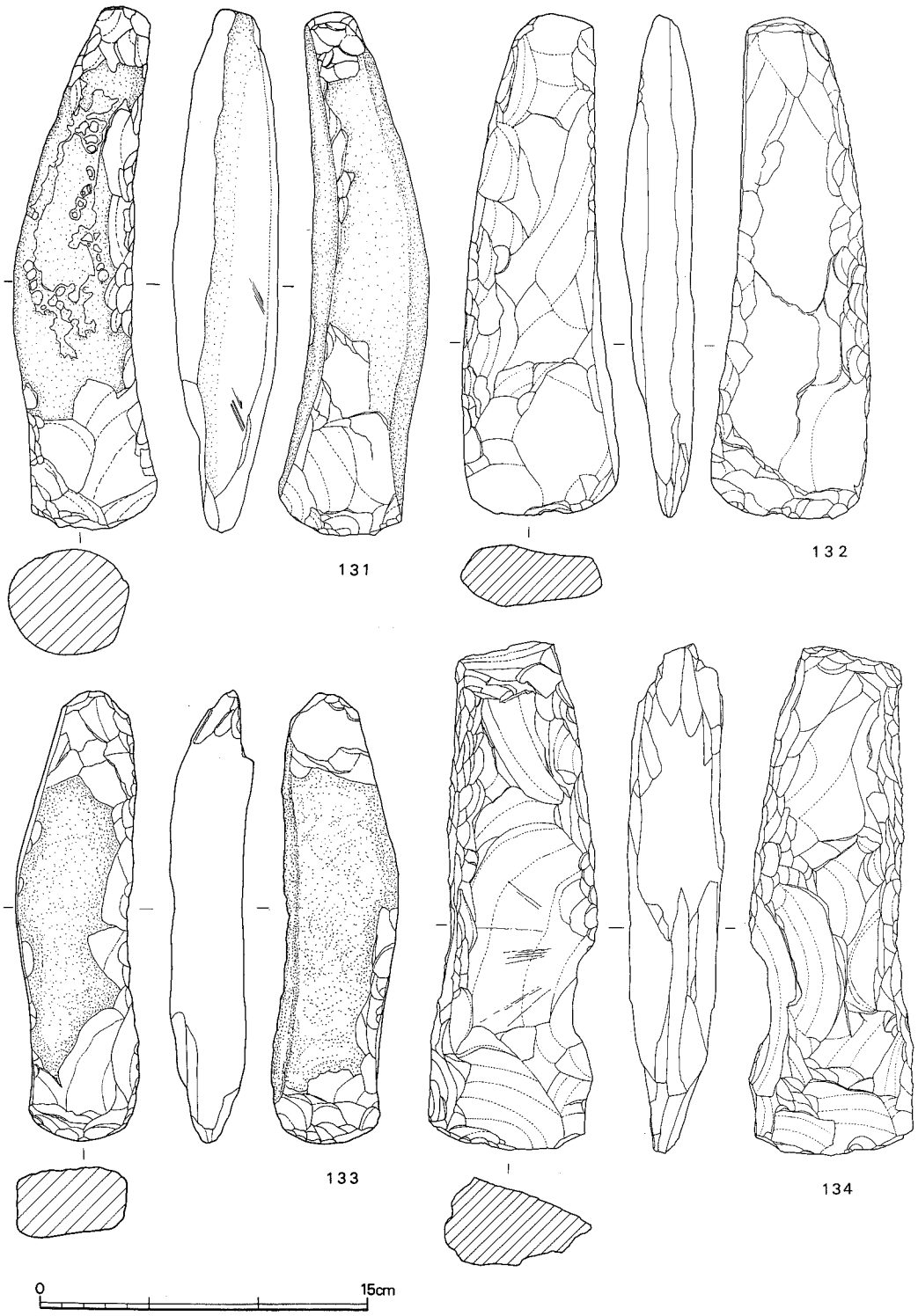
第66図　縄文後期の石器実測図（1/3）



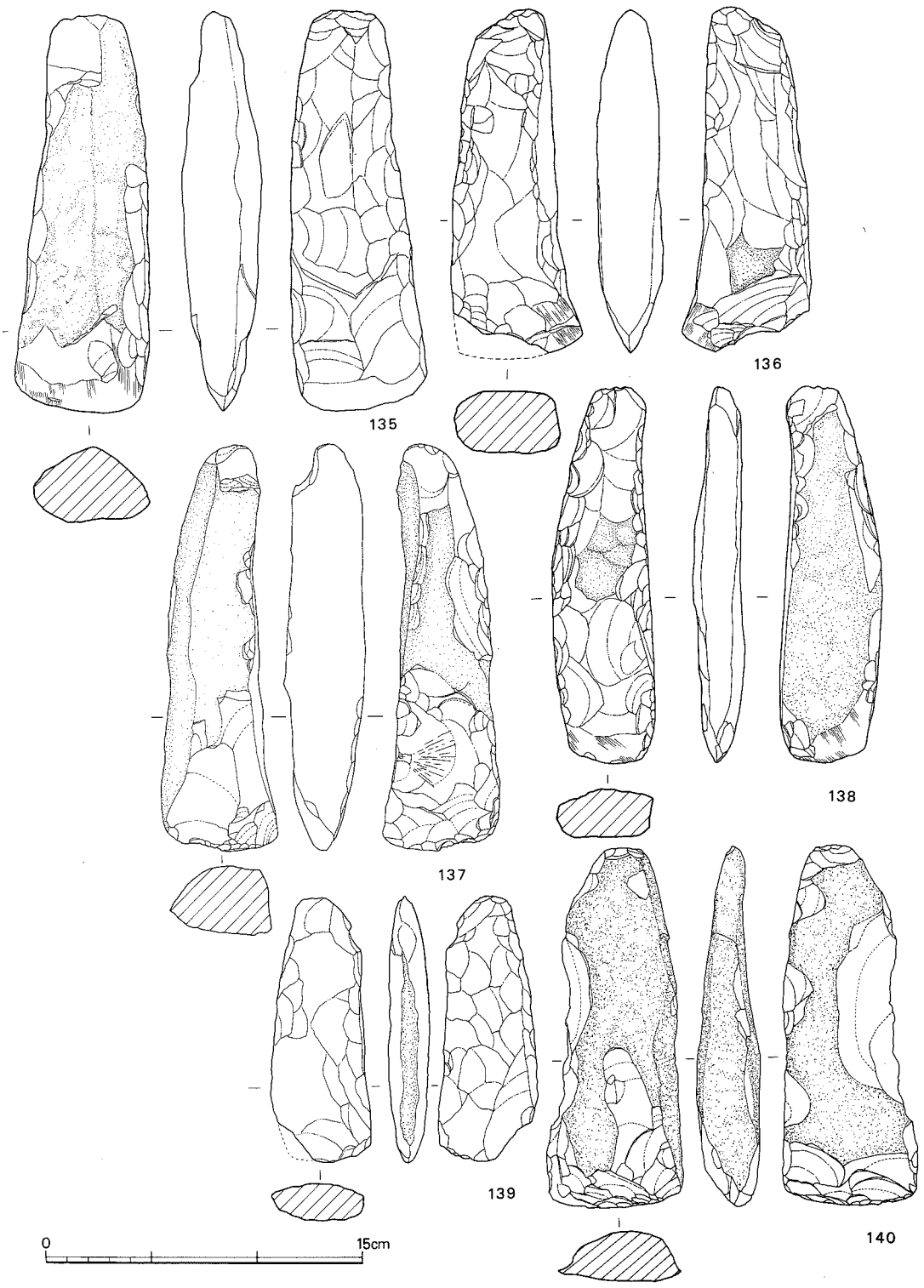
第67図　縄文後期の石器実測図（1/3）



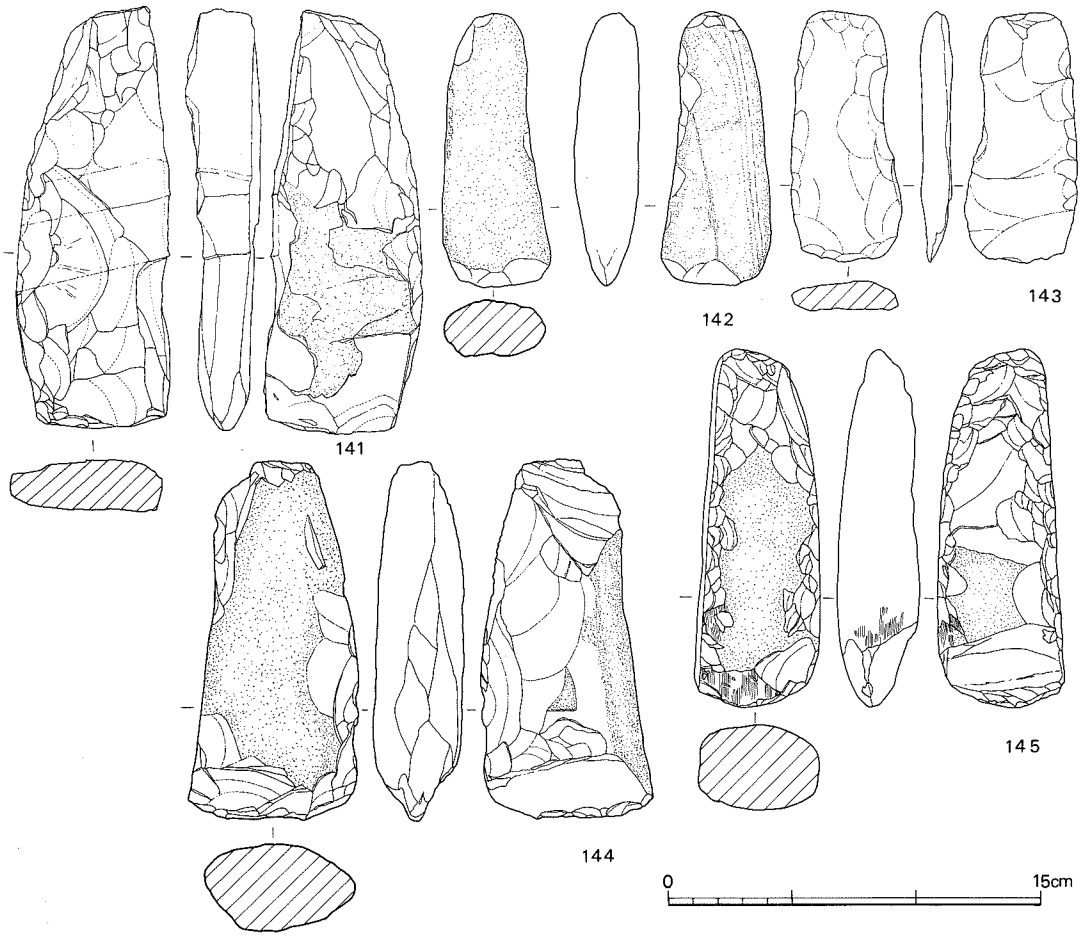
第68図　縄文後期の石器実測図（1/3）



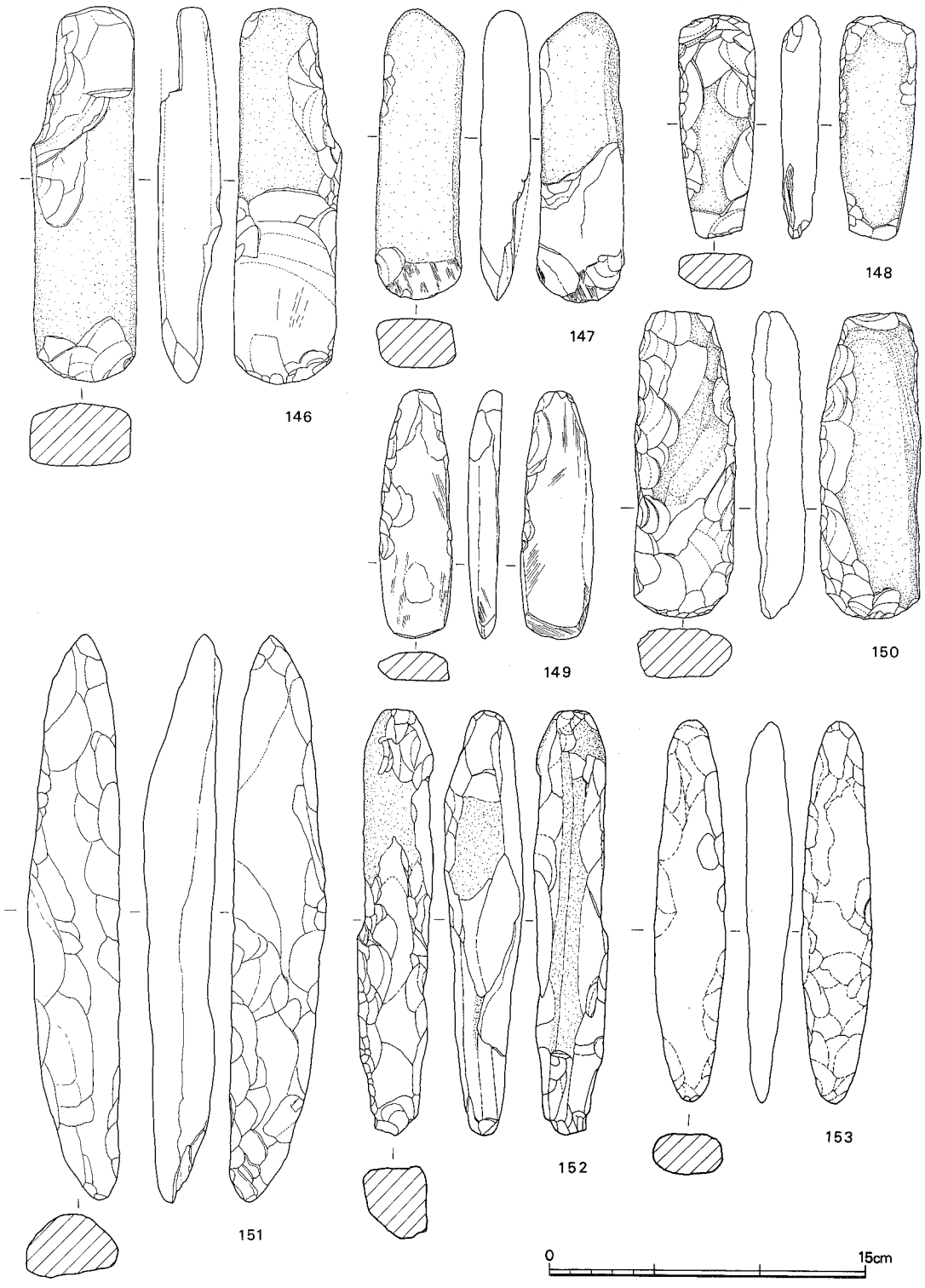
第69図　縄文後期の石器実測図（1/3）



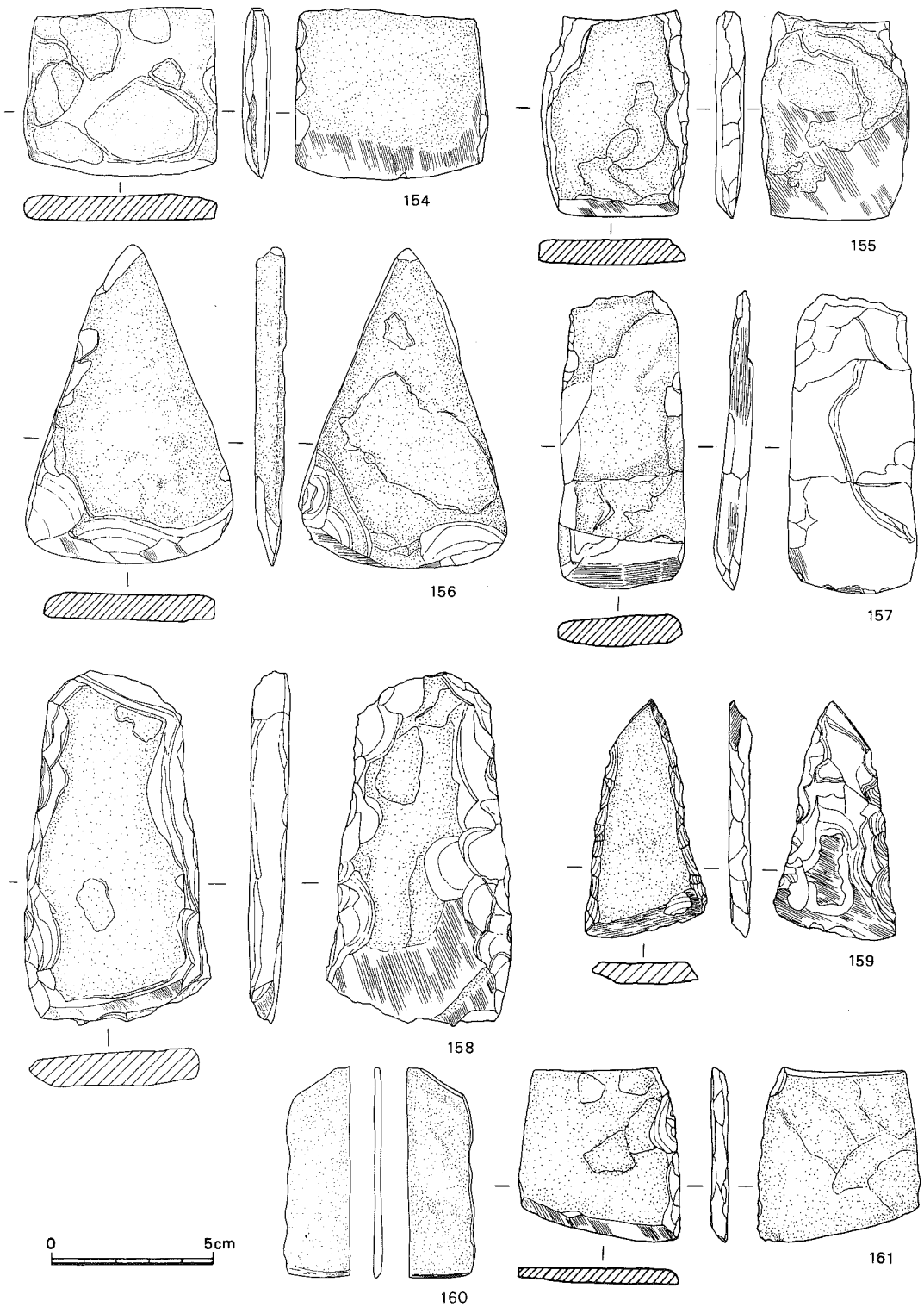
第70図　縄文後期の石器実測図（1/3）



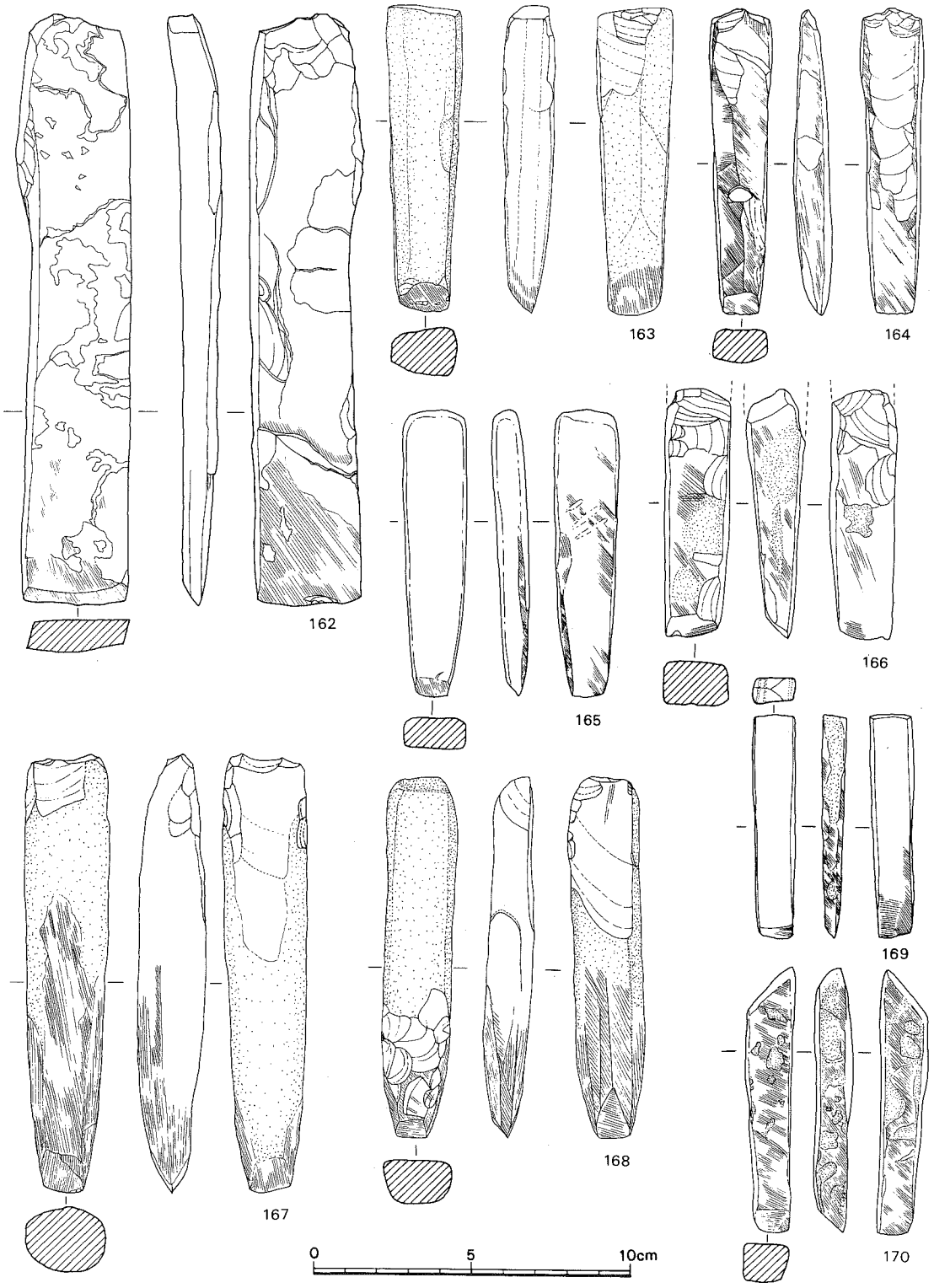
第71図　縄文後期の石器実測図（1/3）



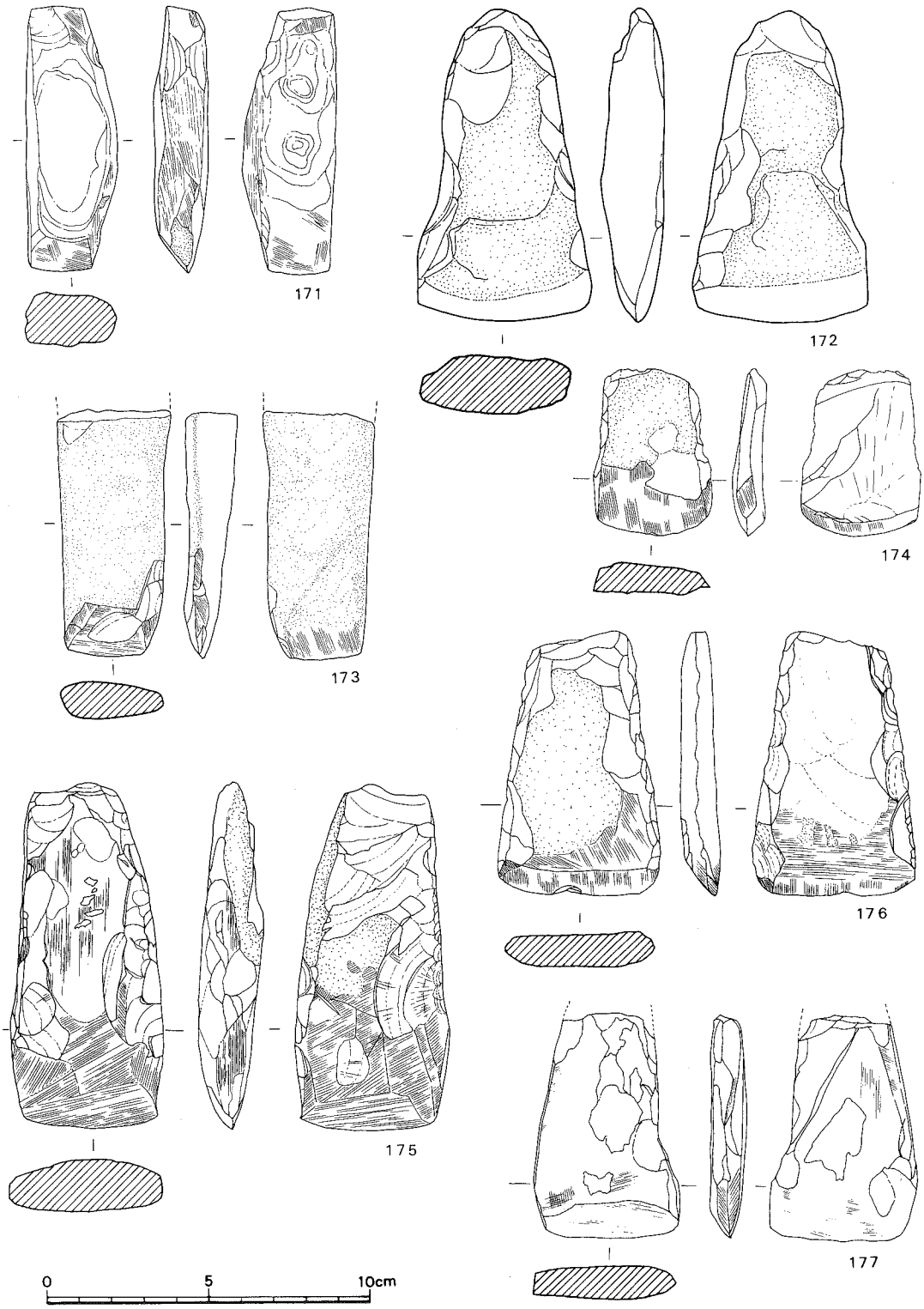
第72図　縄文後期の石器実測図（1/3）



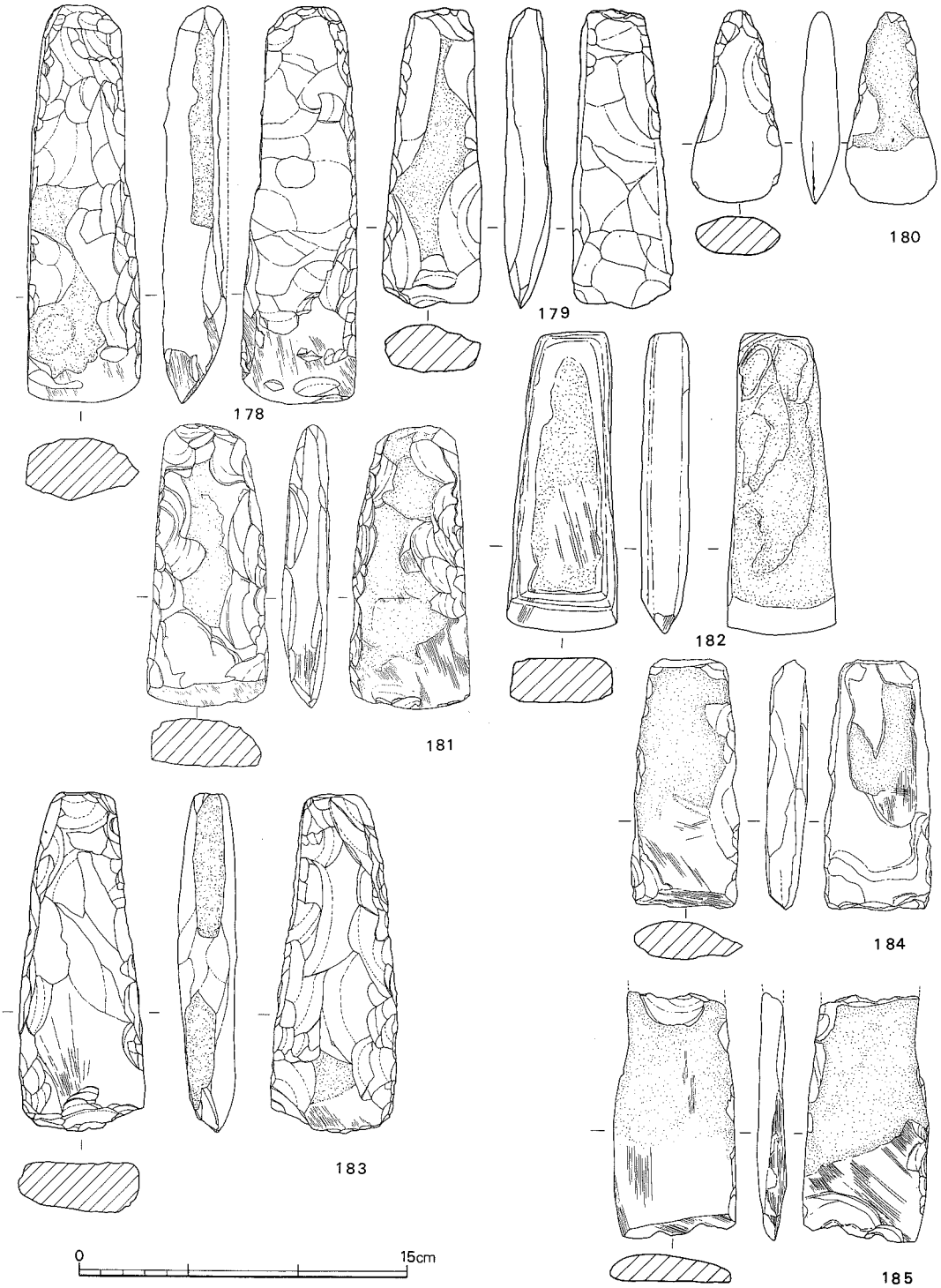
第73図　縄文後期の石器実測図（1／2）



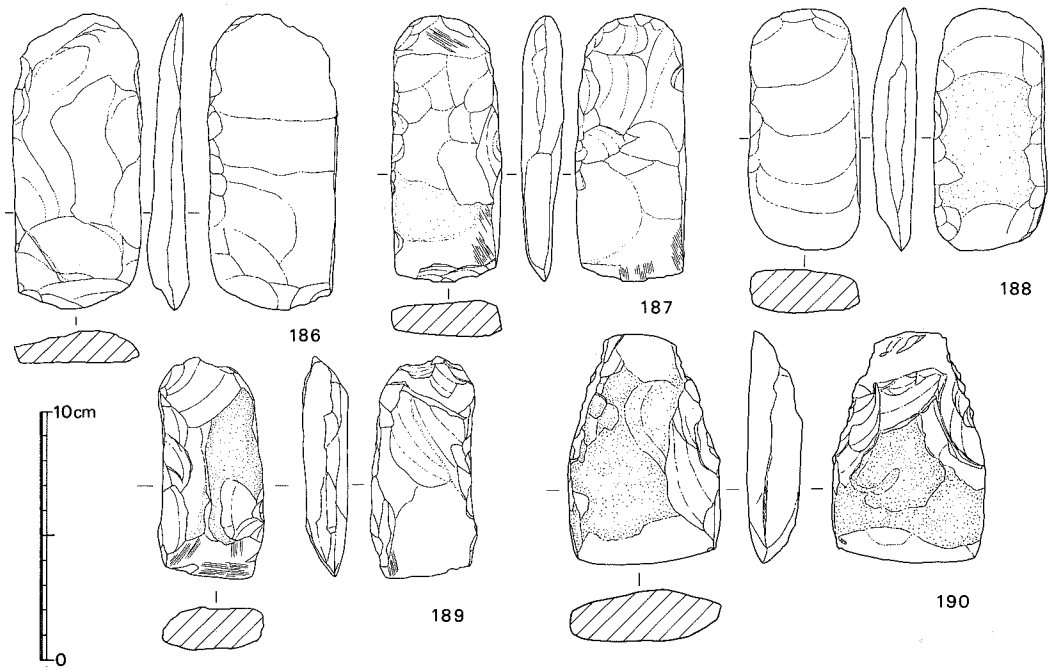
第74図　縄文後期の石器実測図（1／2）



第75図　縄文後期の石器実測図（1/2）



第76図　縄文後期の石器実測図（1／3）



第77図　縄文後期の石器実測図（1／3）

第4表　出土区別石斧一覧

分類 / 出土区	1	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	不明	計
B－1													
2			1		1								2
3		1	2									1	4
4				1									1
5													
C－1													
2	1	6	4	2	1			1	2	1	3	7	28
3	1	1	5								1	2	10
4												1	1
5													
D－1	1											1	2
2	1	3	9			1	1				2	2	19
3		3	5	1	3	1						5	18
4	1	2	3		1							3	28
5								1				1	2
E－1		1	1		1								3
2	1	1	4	1	1							2	10
3		1	4	1			1	1	2			3	13
4				2								2	4
5												1	1
F－1	1	2	3		1								7
2	4	3	5	1	1	1		4	3	1	4	8	35
3		1	2	1		1		1		1	1	5	13
4	1	3										1	5
5													
包含層内	3	7	16	6	5	1	1		2	4	2	63	110
合　計	15	35	64	16	15	5	3	8	9	7	13	126	316

第5表　石斧Ⅰ類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
1	F_2—113	Ⅰa	27.6	4.9	4.4	700	23　砂岩
2	SA—99	〃	31	6.4	6.4	1,665	1　〃
3	F_1—44	〃	24.3	5.2	3.3	660	24　頁岩
4	D_2—80	Ⅰb	18.2	7.4	7.4	640	139　〃
5	SA—420	〃	23.7	7.0	6.9	1,270	31　砂岩
6	F_2—910	〃	20.6	6.1	3.5	650	73　〃
7	F_4—580	〃	14.5	6.8	6.5	710	30　〃
8	C_2—48	Ⅰc	17.3	7.2	7.2	860	142　頁岩
9	F_2—41	Ⅰd	10.2	4.4	4.4	245	39　砂岩
10	SA—417	Ⅰc	17.3	7.5	7.3	754	19　〃
11	F_2—46	〃	16.8	6.5	6.8	640	22　〃
12	D_1—1	〃	14.5	6.7	6.7	750	26　〃
13	E_2—12	〃	14.3	6.3	6.3	489	79　〃
14	C_3—7	〃	14.1	5.2	5.2	430	163　〃
15	D_4—96	〃	15.1	5.8	5.0	508	27　〃

第6表　石斧Ⅱ類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
16	B_3—6	Ⅱb	24.6	7.3	7.3	1,170	147　安山岩
17	F_1—69	〃	25.6	6.6	6.6	940	174　頁岩
18	C_2—3	〃	23.3	7.3	7.3	950	138　砂岩
19	F_1—77	〃	24.6	6.9	6.6	875	175　砂岩
20	F_2—99	Ⅱa	28.1	9.2	8.4	1,050	173　〃
21	D_4—99	Ⅱc	18.5	6.2	6.2	820	76　砂岩
22	E_3—100	〃	20.9	7.8	7.8	940	132　〃
23	SA—103	Ⅱb	24.5	6.8	5.2	769	2　〃
24	SA—418	Ⅱc	19.9	7.7	7.6	960	135　頁岩
25	SA—424	〃	19.9	6.9	6.3	562	72　砂岩
26	C_2—49	〃	19.3	6.6	5.6	355	3　〃
27	F_2—2		17.5	6.3	6.2	748	32　〃
28	E_1—81	Ⅱd	16.2	5.6	5.5	281	59　〃
29	F_4—788	〃	15.3	5.5	4.2	426	35　〃
30	C_2—24	〃	16.7	6.2	6.0	193	50　〃
31	F_4—16	〃	13.8	5.4	4.8	304	38　頁岩
32	F_2—785	〃	14.8	5.4	4.7	364	36　砂岩
33	E_2—219	〃	14.1	5.4	5.4	248	51　〃
34	D_2—60	〃	16.6	6.6	5.6	465	81　〃
35	C_2—9	〃	15.1	6.7	6.2	410	95　〃
36	W—79	〃	13.7	5.6	5.6	336	119　〃
37	SA—70	〃	16.2	6.3	6.0	590	120　〃

第6表—(2)　石斧II類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　考
38	F_3—11	II d	15.3	6.3	5.7	475	25　砂岩
39	SA—91	〃	13.6	5.0	4.5	345＋α	112　〃
40	D_4—115	〃	17.1	5.8	4.2	620	34　〃
41	F_4— 6	〃	16.9	6.2	6.2	450	92　〃
42	D_2—107	〃	15.1	5.4	4.9	272	91　〃
43	D_3— 5	〃	16.9	5.7	5.3	396	89　〃
44	D_3—44	〃	13.9	4.8	4.5	335	80　頁岩
45	C_3—61	〃	12.8	5.2	5.2	295	37　砂岩
46	D_2—180	〃	13.4	5.4	5.4	269	86　〃
47	C_2—31	〃	10.9	5.0	5.0	178	114　〃
48	C_2—42	〃	12.0	5.2	5.1	265	88　〃
49	SA—68	II e	7.5	4.7	4.5	170	28　〃
50	D_3—45	〃	7.3	4.2	4.0	140	7　花崗岩

第7表—(1)　石斧III類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　考
51	D_2—105	III a	31.7	9.8	9.6	1,760	93　砂岩
52	SA—35	III b	24.3	7.2	7.2	785	70　〃
53	E_3—119	〃	22.3	8.3	8.3	780	94　頁岩
54	SA—151	〃	24.7	9.8	9.8	1,860	125　〃
55	SA—67	〃	23.4	9.2	9.2	640	143　〃
56	E_2—43	〃	24.0	6.5	6.5	682	71　砂岩
57	E_3—118	〃	23.9	7.3	7.3	980	176　頁岩
58	SA—74	〃	22.5	7.2	7.2	680	177　〃
59	SA—73	〃	22.5	9.0	9.0	1,055	134　〃
60	D_3—66	III c	19.3	7.3	7.3	753	137※砂岩
61	SA—415	III b	20.4	7.9	7.9	645	133　頁岩
62	SA—417	III c	19.2	8.3	8.3	750	130　〃
63	D_2—36	III c	18.2	8.6	8.6	780	129　〃
64	SA—75	III c	16.7	7.8	7.8	406	128　砂岩
65	D_4—64	〃	18.3	8.3	8.3	650	33　〃
66	F_1—29	III d	11.8	6.9	6.9	268	44　頁岩
67	H—227	III c	19.6	7.9	7.9	720	145　砂岩
68	D_3—61	III c	18.1	8.7	8.7	940	141　頁岩
69	D_3—92	III c	15.0	6.5	6.5	202	52　〃
70	F_2—39	III d	14.3	7.7	7.7	310	47　砂岩
71	H—319	III c	16.5	6.6	6.6	487	140　〃
72	E_3—60	III d	14.6	7.3	7.3	305	49　〃
73	E_2—48	III c	15.6	6.5	6.5	467	96　頁岩
74	D_2— 5	III c	17.2	5.0	5.0	428	9　砂岩

第7表—(2)　石斧III類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
75	D_3—3	III c	17.2	6.2	6.2	367	97　砂岩
76	F_2—1933	III b	20.7	6.1	6.1	640	69　〃
77	F_2—779	III c	16.2	6.8	6.6	409	103　頁岩
78	F_1—86	III d	13.1	6.0	6.0	297	82　砂岩
79	E_1—85	〃	14.3	5.4	5.4	348	104　頁岩
80	SA—140	〃	14.6	5.7	5.6	426	105　〃
81	W—86	III c	15.0	5.3	5.3	212	58　砂岩
82	D_2—8	III d	13.2	5.8	5.8	267	122　〃
83	C_2—40	〃	12.3	5.3	5.3	285	123　〃
84	C_3—41	〃	14.7	4.8	4.8	306	109　頁岩
85	D_2—78	〃	13.0	5.4	5.4	264	121　砂岩
86	CA—77	III e	10.5	4.3	4.3	168	40　〃
87	F_2—23	〃	10.8	4.7	4.6	220	8　〃
88	D_2—232	III d	12.3	5.1	5.1	286＋α	110　〃
89	E_2—47	〃	14.4	5.2	5.2	124	53　頁岩
90	D_3—99	〃	13.8	5.3	5.3	320	108　砂岩
91	C_2—21	III e	11.0	4.9	4.9	222	117　頁岩
92	SA—71	III d	12.0	5.0	4.9	240	116　砂岩
93	F_2—89	〃	12.8	5.8	5.8	354	111　頁岩
94	E_2—11	〃	12.4	5.1	5.1	228	100　砂岩
95	B_2—9	III e	11.9	5.4	5.2	128	55　〃
96	C_3—43	III d	13.3	5.7	5.7	286	84　〃
97	C_2—25	III e	11.6	5.4	5.4	195	127　〃
98	C_3—40	III d	12.1	4.7	4.7	93	61　頁岩
99	W—116	III d	14.3	6.0	6.0	270	106　〃
100	B_3—2	III d	14.5	6.5	6.5	332	78　〃
101	C_2—59	III e	11.2	5.3	5.3	264	126　頁岩
102	D_4—77	III d	12.0	5.3	5.3	158	56　砂岩
103	B_2—10	III e	11.3	5.6	5.6	136	60　〃
104	C_3—44	III d	12.7	5.2	5.2	365	85　砂岩
105	F_2—585	III e	10.2	6.0	5.8	210	4　〃
106	D_2—25	III d	12.4	5.7	5.5	164	57　〃
107	D_2—71	III e	9.1	6.9	6.9	156	43　〃
108	D_2—122	III d	12.3	6.1	5.8	115	12　〃
109	C_2—178	〃	12.5	7.6	7.6	249	77　〃
110	F_3—66	〃	12.2	6.4	6.4	256	118　〃
111	W—109	III e	9.3	5.2	5.2	180	6　蛇文岩
112	F_3—65	〃	11.9	7.3	6.0	248	45　頁岩
113	F_1—782	〃	10.6	7.0	7.0	247	169　〃
114	D_2—123	〃	10.8	5.9	5.9	246	124　砂岩

第8表　石斧IV類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
115	B_4－3	IV	16.4	5.3	5.3	286	160　砂岩
116	SA－72	〃	21.0	7.8	7.8	660	137　頁岩
117	E_3－286	〃	15.3	6.7	6.7	420	90　〃
118	SA－102	〃	15.4	6.6	6.6	352	107　〃
119	C_2－22	〃	12.5	5.5	5.5	224	99　砂岩
120	C_2－328	〃	13.0	5.4	?	245	14　〃
121	F_2－64	〃	12.8	5.2	5.2	332	164　〃
122	F_3－137	〃	17.3	5.8	5.8	377	54　〃
123	SA－411	〃	15.0	5.3	4.0	466	98　〃
124	E_2－30	〃	13.4	4.8	4.7	260	15　〃
125	E_4－79	〃	12.8	5.4	5.4	306	13　〃
126	D_3－96	〃	16.6	6.2	5.1	360	155　頁岩
127	E_4－294	〃	12.8	5.5	5.2	265	168　〃
128	H－327	〃	12.2	5.8	5.8	375	115　〃
129	W－70	〃	13.0	4.8	5.0	244	165　〃
130	SA－139	〃	13.7	4.7	4.7	240	166　〃

第9表　石斧V類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
131	D_3－1	Va	24.0	5.5	5.5	870	16　砂岩
132	D_3－101	〃	22.9	7.0	7.0	615	148　〃
133	SA－413	〃	20.6	5.0	4.7	571	156　〃
134	F_1－121	〃	23.2	7.5	7.5	976	146　頁岩
135	F_2－734	Vb	18.9	6.1	6.1	480	149　砂岩
136	SA－104	〃	16.4	推定　5.9	推定　5.9	362＋α	152　〃
137	D_3－2	〃	19.1	5.4	5.4	433	17　〃
138	E_1－84	〃	17.7	4.6	4.3	280	151　〃
139	C_2－8	Vc	12.5	4.6	推定　4.4	148	167　頁岩
140	E_2－24	Vb	17.0	6.3	6.3	367	154　〃
141	SA－101	〃	17.0	6.1	5.2	409	153　砂岩
142	SA－98	Vc	11.0	4.2	4.2	150	150　〃
143	SH－243	〃	10.1	4.3	4.3	66	62　〃
144	D_4－47	Vb	14.5	6.7	6.7	435	159　頁岩
145	B_2－7	〃	14.4	4.9	4.9	342	83　砂岩

第10表　石斧VI類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
146	D_3－38	VI	17.7	4.7	4.5	373	20　砂岩
147	F_2－86	〃	13.6	4.0	4.0	191	21　〃
148	F_2－42	〃	10.5	3.6	2.2	95	11　〃
149	D_2－87	〃	11.7	3.4	2.5	88	10　頁岩
150	W－123	〃	14.5	4.8	4.5	256	18　砂岩

第11表　石斧Ⅶ類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
151	D_3—66	Ⅶ	26.7	3.4	—	500	172　頁岩
152	E_3—99	〃	20.1	3.4	1.8	330	171　〃
153	SA—H	〃	18.1	3.4	2.2	164	170　〃

第12表　石斧Ⅷ類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
154	F_2—457	Ⅷ	5.2	6.0	5.7	41	12　砂岩
155	F_2—118	〃	6.4	4.5	3.6	40＋α	11　〃
156	E_3—116	〃	9.8	6.3	6.3	73	15　〃
157	F_3—364	〃	9.2	3.9	3.2	52	18　〃
158	F_2—56	〃	10.8	5.6	≒ 4.8	124	24　〃
159	F_2—116	〃	7.4	3.7	3.7	23	16　〃
160	D_5—637	〃	6.4	2.0	1.8	6	14　〃
161	C_2—29	〃	5.4	5.0	4.9	22	13　〃

第13表　石斧Ⅸ類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
162	F_2—772	Ⅸ	18.4	3.4	3.4	148	1　砂岩
163	E_3—47	〃	9.7	2.3	1.6	57	4　〃
164	SA—36	〃	9.6	2.0	1.1	29	5　〃
165	C_2—50	〃	9.0	2.0	1.0	32＋α	6　〃
166	H—1	〃	7.8	2.0	1.6	49	8　〃
167	C_2—300	〃	13.8	2.7	1.3	119	2　〃
168	E_3—51	〃	11.3	2.2	1.0	62	3　頁岩
169	F_2—119	〃	7.0	1.3	1.0	14＋α	9　〃
170	F_2—120	〃	8.3	1.5	0.9	25	7　砂岩
171	W—58	〃	8.2	2.8	1.9	64	10　砂岩

第14表　石斧Ⅹ類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
172	C_2—34	Ⅸ	9.7	5.4	5.4	124	41　砂岩
173	F_3—114	〃	7.6	3.5	2.2	58	17　頁岩
174	F_2—458	〃	5.1	3.6	3.4	24	23　〃
175	SA—34	〃	10.7	4.8	4.1	128	20　砂岩
176	SA—69	〃	8.2	5.0	4.8	69	21　〃
177	W—55	〃	6.9	4.5	4.1	52＋α	22　蛇文岩

第15表　石斧XI類観察表

図　No.	出土区等記号	類型	長さ（cm）	最大幅(cm)	刃部幅(cm)	重量（g）	備　　考
178	F_3—57	XI	18.1	5.2	5.2	365＋α	101　砂岩
179	C_2—57	〃	13.6	4.4	4.4	177	87　〃
180	W—87	〃	8.7	4.1	4.1	70	42　頁岩
181	D_2—52	〃	12.9	5.5	5.3	226	19　砂岩
182	F_2—58	〃	13.7	5.0	5.0	262	28　〃
183	F_2—781	〃	15.4	5.7	5.7	338	102　頁岩
184	C_3—62	〃	10.8	4.9	4.5	160	26　砂岩
185	C_2— 7	〃	11.2	5.6	5.1	128	25　〃
186	F_2—113	〃	11.9	5.1	4.7	122	63　〃
187	D_2—77	〃	10.7	4.5	4.1	123	64　〃
188	SA—414	〃	9.3	4.5	4.3	114	65　〃
189	F_2—766	〃	8.9	4.3	3.8	102	27　〃
190	C_2— 2	〃	9.2	6.1	5.5	168.5	5　〃

(7) 縄文時代後期のその他の石器（第78～81図）

石鏃・石錐・石鋸等の剝片石器、各種の石斧・石ノミ等以外の石器群をまとめた。叩石・磨石・石錘などである。この類の石器については一覧表を示していないので、以下に説明をくわえておこう。

1．叩石・磨石・凹石（1～9、18・19・23）

1～9、18・19である。いずれも砂岩・花崗岩などの自然の円礫をそのまま使用している。規模と形状に差異がある。**1**は756ｇの黄灰色砂岩礫を使用、図の左辺にかなり激しい稿打痕があり、側周にも稿打痕がある。片面は緻密な研磨の跡があり、使い減りがいちじるしい。

2も同様に一面研磨に用い、側周は稿打に使用されている。重量885ｇ。黄土色砂岩。**3**は側周に稿打痕が著しく、一面は稿打を受けて凹みが著しい。950ｇ。黄色安山岩製。**4**は図の上下に稿打による剝離があり、一部ヒビが入っている。重量1490ｇと本遺跡のこの種資料の中で最も重い。黄色砂岩製。**5～7**はいずれも黄色砂岩円礫製で重量は、420ｇ・860ｇ・890ｇ、専ら稿打に利用されている。**8・9**とも黄色砂岩製、他の資料に比べ歪んだ礫が利用されている。図番号が飛ぶが18～20・23も叩石であり、いずれも黄色の砂岩製である。**23**は縦に長く重量も2,640ｇと超大型である。本遺跡の場合も叩石・磨石・凹石がそれぞれ一機能のみを持つものではなく、複数の機能を併せもっている。

2．石錘（11～13）

10は黄土色砂岩製、やや扁平な自然礫の長軸上の両端を打ち欠いて、紐掛けとしている。重量1,060ｇ。**11**もやや扁平な砂岩礫の短軸上に二箇所の打ち欠きをつくり、紐掛けとしている。**12**は黄色の砂岩製で重量3.5kg、**13**も同じく黄色砂岩製の石錘で重量10kgの巨大な石錘で三点の内の2点を図示した。この種超重量級の石錘は、海岸遺跡においてしばしば見られ、漁網錘ではなく、碇石とかんがえられている。1kg以上の石錘についていえば長崎県殿崎遺跡（註1）・伊木力遺跡（註2）・同江湖貝塚（註3）等の遺跡で出土している。

3．大型刃器（14）

一点のみであるが切りだしナイフ型のスレート製刃器が出土した。上下長45.2cm・最大幅8cm、厚さ1.5cm、重量750ｇの大型品である。基部を整形し、上端三分の一程が鋭く整形されている。左図の左辺に入念な刃潰しがあり、右辺を刃部として使用しているが用途不明である。

4．軽石製品（17・32）

17は軽石製の「磨石」であろう。殆ど自然面が残らないまでに全面が研磨に使用され、不定

形の多面体になっている。32は上げ底台付き容器の脚部の形をしており、上半部は欠損している。草野貝塚（註４）で多量の軽石製品が出土しているが、対馬では軽石は産せず、搬入品か、漂流物が利用されたものであろう。

５．石皿（16・17）

２点の花崗岩製石皿を図示したが、断片を含めると13点が出土しており、図示した花崗岩製の他に緻密な砂岩製もある。16は半分ほどが欠損しているが、最大幅26cmである。17は四つに割れており、その一つがないが長軸36cm、短軸22.7cmあり、皿面は緩く凹んでいる。

６．砥石（21・22）

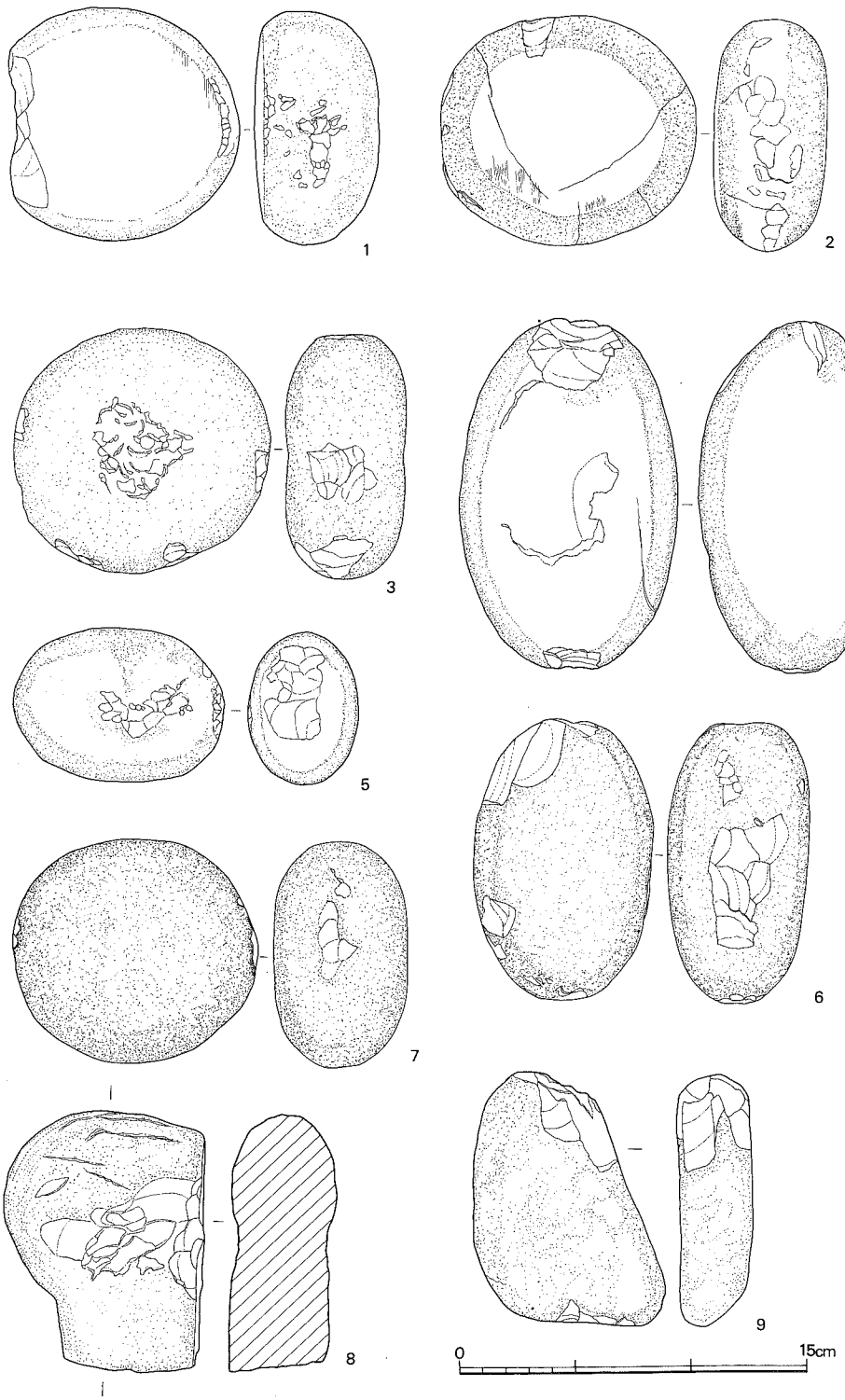
砥石はすべて砂岩製である。精粗二種のものがあり、21は緻密な砂岩製、22は粗い砂岩が使用されている。全部で30点近い出土例があるが、３号住居跡か、その周辺で出土している。

７．その他の石製品（26～32）

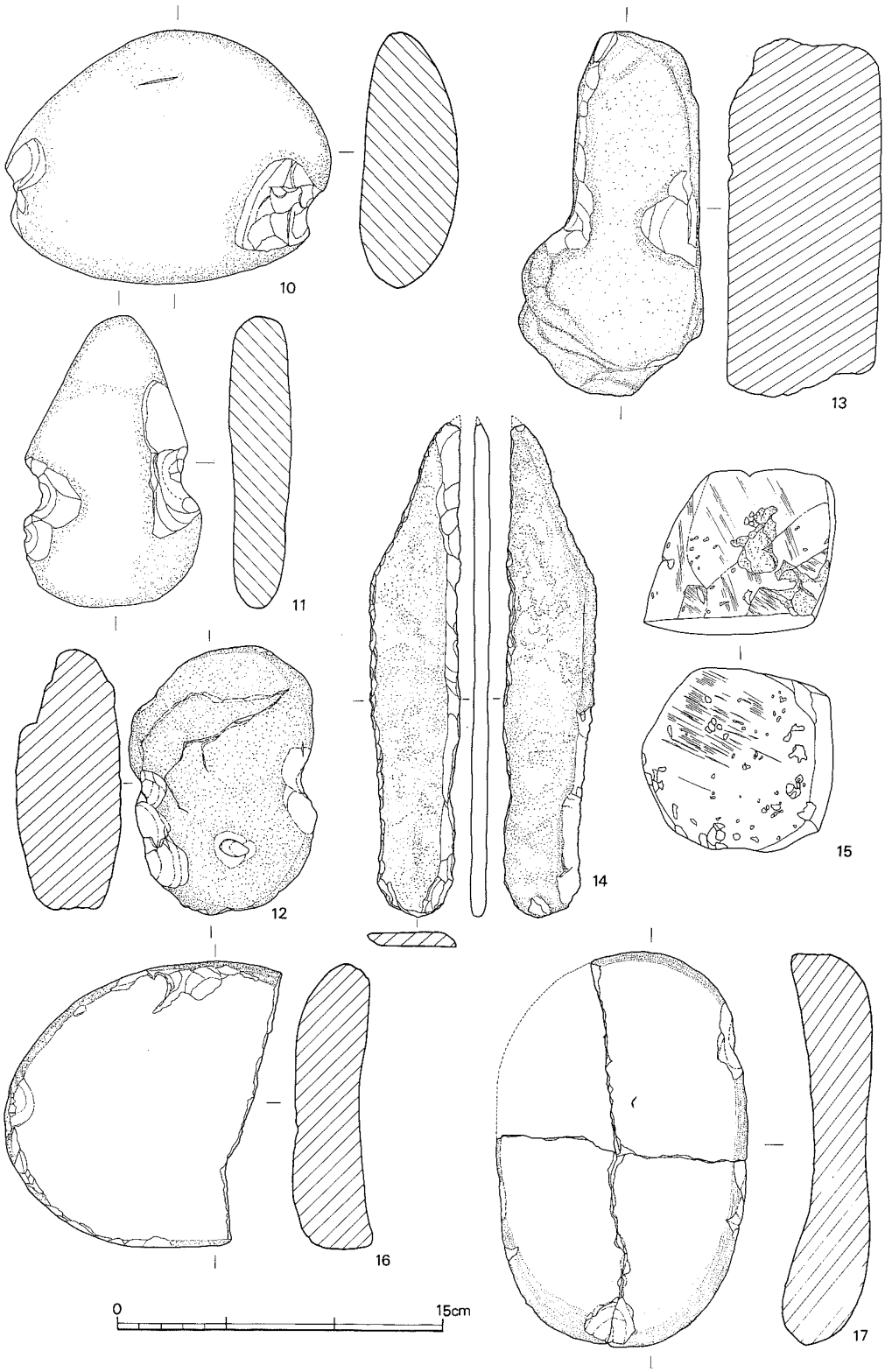
26は卵型の黄灰色砂岩礫に一を穿った物で重量228ｇをもつ。装飾品とは考えにくく、漁網錘の一種であろうか。27は淡緑色斑のある石製垂飾と考えられ、一孔が上方からあけられている。石材は西彼杵変成岩の蛇文岩の一種と考えられるが、明確でない。28・30は小豆色の緻密な石材を利用した飾り玉の未製品である。29は灰色の安山岩製大珠であり、中央よりやや上に一孔があり。塗朱の跡がわずかに残っている。31は上端に一孔があり、下端の面に十字の溝を開けている。錘の類と考えられ、十字の溝になんらかのものを組み合わせるものらしいが、明確でない。33は上下9.9cm・幅1.7cm・厚み0.7cmの小豆色の石材が利用され、片側に刻みを３箇所つけている。意味ないし用途は不明であるが、一応装飾品と考えておきたい。

〔註〕

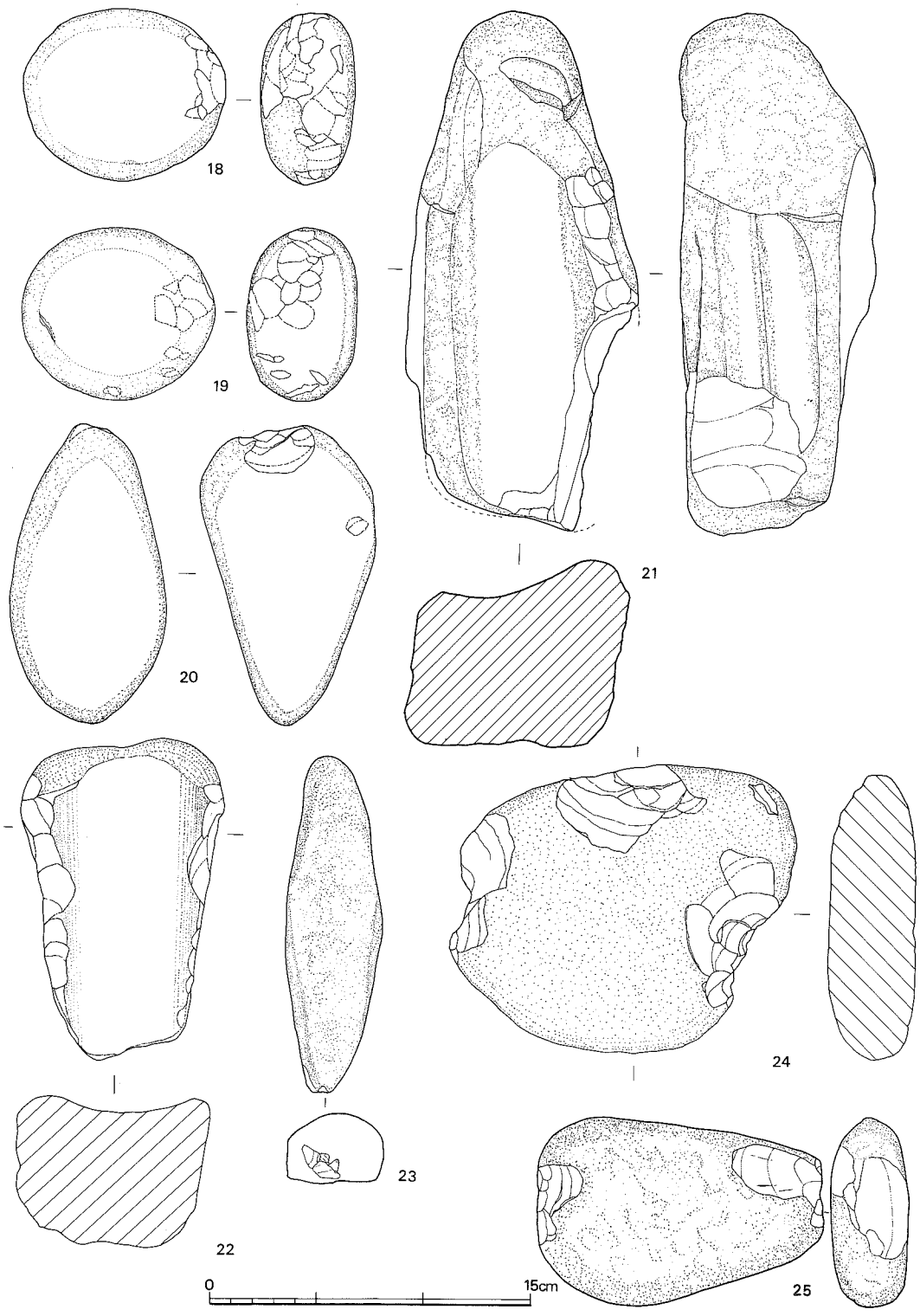
１．高野晋司他『殿崎遺跡』長崎県教育委員会1986
２．松藤和人他『伊木力遺跡』多良見教育委員会・同志社大学考古学研究室1985
３．坂田邦洋『曽畑式土器に関する研究』江湖貝塚1972
４．雨宮瑞生『軽石製品』「草野貝塚」鹿児島市教育委員会1988



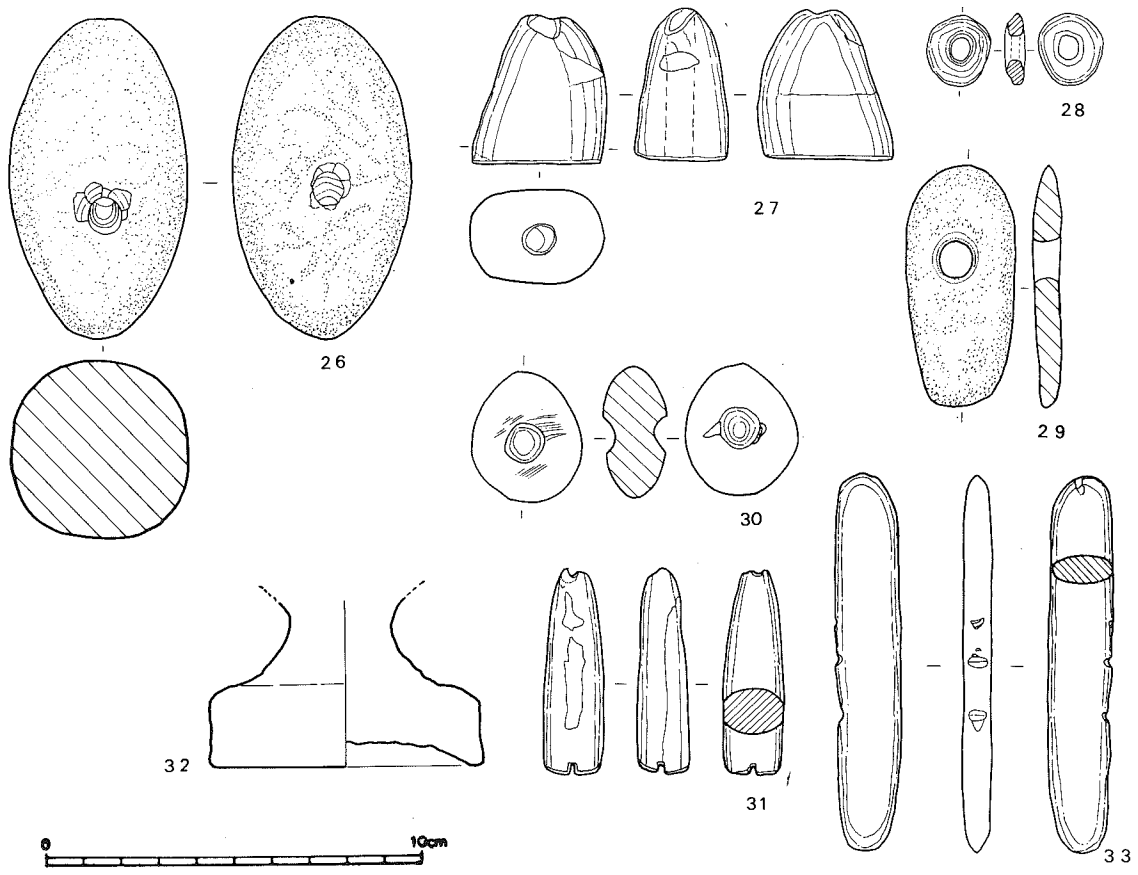
第78図　敲石・磨石（1／3）



第79図　石錘・軽石製磨石・石皿（10・11・15　1／3、他は1／4）



第80図　敲石・砥石・石錘（1/3）



第81図　縄文後期の石器実測図（1/2）

(8) 縄文時代後期の骨角器（第83～105図）

佐賀貝塚で出土した骨角器の総数は、500点に近い。このうち本報では369点について報告する。内訳は、骨製刺突具186点、釣針25点、狩猟具５点、その他の利器13点、装身具140点である。装身具の中には貝輪115点を含む。この分類に従って、以下要点を述べる。番号は骨角器全体をとおして１～369番としている。時期は縄文後期である。

１）骨製刺突具（第83～90図）

形状・規模等によってⅠ～Ⅸ類に分類し、必要におうじてさらに細分した。刺突具各部位の名称であるが、「先端」・「かかり」・「茎部」・「反り」等を第82図のとおり用いる。

（Ⅰ類） 第83図１～６

大型で、側縁に緩いかかりを持ち、穿孔を有する。完形の資料がなく、本来の規模と形状は不明であるが、おそらく15cm近い大型品であろう。**1**は穿孔の跡を一部残しており、離頭銛の類であろう。

（Ⅱ類） 第83図７～８

全長の半端を先端部とし、半端を茎部とするもの、茎部は反りがある。一対の緩いかかりを中程に持つ。大小があり、ａ、ｂに細分類できる。

（Ⅲ類） 第83図９～14

全体的にⅡ類に似ているが、かかりが、上半部にあがり、反りのあるもの（９～11）と、ないもの（12～14）がある。**9・10**は殆ど同じ形状であるが、７cm近い９（Ⅲａ）と小型の10（Ⅲｂ）を区別した。**11**（Ⅲｃ）はかかりが二段になっている。**12～14**はともに反りを有しない資料であるが、14（Ⅲｅ）はかかりが片方のみにつけられている。Ⅱ類とⅢ類９～11は金子浩昌氏の分類による開窩式Ⅱａ（註１）、渡辺誠氏のいう一王子型（註２）になるのであろうか。

ⅡとⅢａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ（反りのあるもの）は西九州や対馬海域の骨角器には類例に乏しいもので、一王子型（青森県八戸市一王子貝塚）に近い離頭銛である（註３）。

（Ⅳ類） 第84図15～23

完形品**15**のタイプで先端をやや太目にして尖らせる。茎部は細目にしてあるが、尖らない。**17**のように茎部が曲がり、やや反りのついた例があるが、細分類すべきかもしれない。西九州では福岡県新延貝塚（註４）に類似資料がある。

（Ⅴ類） 第84～86図24～72

両端とも尖り、上下の区別のつかないものもある。**24・27・43・70**等が代表例であるが、大小の差が顕著であり、６cm以上（Ⅴａ）、５cm以上６cm未満（Ⅴｃ）に分類できる。反りはつかない。量的に多く、49点26％を占める。

（VI類） 第86～88図73～127

一端のみが尖り、下端が極端に太い**77、87**等もあるが大小の差によって、7cm以上（VIa）、4cm以上7cm未満（VIb）、4cm未満（VIc）、側縁に刻みをもつもの（VId 126・127）に分類できる。量が多く、30%を占める。VIdとした刻みのある例が鵝鑾鼻公園遺跡（中華民国屏東県春我鵝鑾里　註5）にある。

（VII類） 第88図128～146

VIに平面観は似るが、上下対称で、長い菱型で反りがある。菱形で長幅比（最大幅÷全長）が20未満のもの（VIIa）と、やや幅の広い長幅比20以上のもの（VIIb）がある。またa・bそれぞれに(1)5cm以上のもの、(2)5cm未満がある。図でいえば、VIIaは**128～136**、VIIbは**137～146**であり、大小の細分類をVIIaでいえば、**128～130**がVIIa 1、**131～136**がVIIb 2である。数量的には多くなく、19点10.2%を占める。この類の出土例は多く、白浜貝塚（長崎県福江市　註6）、志多留貝塚（長崎県上県郡上県町　註7）、宮下貝塚（長崎県南松浦郡富江町　註8）など類例はおおい。

（VIII類） 第89図147～176

全体に細長く、断面が丸みを帯びたものを一括してVIII類とした。4種の分類は次のとおりである。VIIIaは一面を扁平に研ぎだしたもの(**147～156**)、VIIIbは先端の研ぎだしがあまり鋭くないもの（**159～164**)、VIIIcは両端とも研ぎだしがあり、平均的に断面がまるいもの（**166～173**)、VIIIdは管状骨の辺端を研ぎだしたもの（175・176）である。

（IX類） 第90図177～186

この類にはI～VIII類に該当しないものを一括した。欠損例もあり、完形品であれば分類可能の資料もあろう。**186**は側面を研磨しており、未製品であろう。

2）骨製釣針 第**91～92**図

猪牙製と動物の骨製がある。総数25点全部（187～211）を図示した。内訳は結合式釣針19点単式釣針6点である。説明の用語であるが、結合式釣針の場合、アグのある方を針軸部、釣り紐をかける方を軸部と呼び、現材料の猪牙については、歯冠部・歯根部・頬側・舌側の用語を用いる。法量等については一覧表（第18表）によられたい。

（I類） 第**91**図187～196

大型の結合式釣針で、針軸部の長さ6cm以上のもの、以上になると思われるもの、である。**187～193・195**針軸部、**194～196**は軸部である。188・189・199はアグ部を欠いているが、おそらく単式釣針外アグであろう。アグ部に猪牙歯根部を用いる例（**187～191**）と歯冠部を用いるもの192・195がある。歯根部を用いる例のうち187・189は咬合部をそのまま放置しているが未製品かもしれない。**194**は針軸部であるか不明であるが、**196**は細かい刻みが歯冠部に三箇所あり、軸部であろう。複数外アグを持つ192は西九州ないし対馬海域における類似に乏しいが、金

子浩昌氏が単式釣針Ⅰb③として分類された（註9）岩手県大洞例に近いものであろうか。

（II類） 第92図197～201

針軸部の長さ6cm以下、もしくは以下と考えられるもの、である。すべて猪牙製の単式外アグである。**198**は研磨が全面に及んでいて不明であるが、他は歯根部にアグがつけられている。軸部との結合部は浅い抉りのあるものIIa（**197・201**）と突起を持つIIb、（**198・199**）がある。IIb類は渡辺誠氏上老大島貝塚の釣針分類でB類（西北九州型）とされた（註10）に近い資料である。

（III類） 第92図202～205

複式釣針の軸部である。いずれも猪牙の曲がりを利用した完形品である。坂田邦洋氏のいう脇岬A型に近い資料である（註11）。II類の資料と組み合わせるものであろうか。

（IV類） 第92図206～211

完存資料がなく、アグの有無、あるとしてもアグの数と位置は不明であるが、いずれも動物の骨を利用している。209～211を除いて軸部の上端部に紐を緊縛する刻みが見られる。

3）狩猟具 第94図

狩猟具としてあげたのは、鹿笛1点（225）とサメ歯製牙鏃4点（226～229）である。鹿笛は、鹿角製、おそらく第2枝製であろう。楕円形の盤状部と円筒部が一体構造になっており、円筒部（吹口）から盤状部に一孔が通じている。盤状部背面、円筒部下際に穿孔のある突起が一対あり、縣吊用紐掛けになっている。盤状部の側縁に張皮を緊縛する溝がある。考古資料としては熊本県年の神貝塚（7世紀前半　報告書未刊　註12）と北海道恵山貝塚（続縄文　註13）がある。民俗例としては、北海道・岩手・群馬・栃木・長野・静岡・奈良・宮崎・鹿児島の各道県に16例ほどがある（註14）。

226～229の点はサメ歯製牙鏃である。歯根部を扁平に研磨し、先端も一部研磨している。この種のサメ歯製品を装飾品とする向きもあるが、歯根部に穿孔や刻みを入れるなどした例とは区別して牙鏃として掲げた。

4）その他の骨角製利器 第93図

刺突具・釣針・狩猟具以外の利器（**212～229**）をまとめた。212・216の二点は鯨骨製品である。うすいシャモジ型に整形している。「鮑おこし」（註15）であろう。**215**は先端部の資料で丸くうすく研磨している。**217**はヘラ先状に整形研磨された獣骨製品で、これも「鮑おこし」の類であろうか、**218**は用途不明の骨角器であるが、片側を研磨し、さらにノッチ状の凹みをつけている。**219**は下端を欠損しているが、入念な先端加工がある。**220**は管状骨の両端を切断研磨している。金子浩昌氏が「針入れ」とされた（註16）管状骨角器の類であろう。

221～226は、金子浩昌氏が「磨製刃器」とされた（註17）類であろう。いずれも図の下端部

を鋭いノミ状に研磨している。223・224は同氏の「斧型」で猪牙製、221・222は骨製の「不定形型」にあたる。

5）装飾品　第95～105図

総数140点を図示した。230～254は骨製装飾品。255・256は猪牙製、257～369は貝製腕輪である。

(1)　ヘヤピン状骨器（230・231・233～235）

230・231は骨製品、断面を丸く削り、部分的に残したふくらみ上に刻みを入れている。上端に何れも一孔がある。**233**は上端に一孔があり、沈線状の刻みを持つ。**234**は上端に一孔があり、鳥骨製、**235**は上下端とも欠損しているが、表面に光沢が出るまで研磨している。**232**は半端が欠損しているが、突起状の膨らみと上端面側の刻みが目立つ。鹿児島県草野貝塚（註18）で「刀形製品」とされた資料と同類であるが用途不明。塗朱の痕跡がある。

(2)　歯牙製垂飾（236～243）

236はオットセイか？、**237**は猪牙、**238**はバンドウイルカ、**239**はカマビレサカマタ頬歯、**240・241**はサメ歯、**242**はキバノロ上顎犬歯、**243**はイノシシ下顎犬歯R、をそれぞれ使用している。注目されるのは242のキバノロ上顎犬歯製の垂飾である（註19）。本邦には生息しないジャコウジカの一種とされ、朝鮮半島以北で生息するという。出土遺跡の位置を考えれば搬入されて当然かもしれない。歯根部はうすく削られ、一孔があり、歯冠部は一部を除いて原状のままである。

(3)　魚類背柱骨製品（244～246）

大小あるが、中央に穿孔がある。

(4)　骨製垂飾（248・250）

イルカ下顎骨製、**248**は完形品である。上端に小さな突起を削り出し、下半部はヘラ状に整形している。上方に四孔がある。**249**は損傷があり、全形はわからないが、側面の一部と上部に肩状の造り出しがあり、**248**の大型品の類であろう。

(5)　貝製品（251～253）

251はマガキ製、**252**はホシキヌタ製、**253**はヒオギガイ製。**251**は二孔があり、側縁三箇所に刻みを連続してつけている。252はホシキヌタの外唇部を残して縦四分割したものを用いている。切断面を研磨し、両端に溝を設け、中央と両端に計四孔をあけている。上下長9.2cmの大型品で、この規模のものは南島地域でなければ入手困難という（註20）。遠距離を搬入したものであろう。**253**は損傷しているが、小孔1を穿っている。**254**は鯨骨製の骨板で周縁を研磨整形している。

(6)　猪牙製・貝製腕輪（255～369）

猪牙製2点（**255・256**）、貝製112点（257～369）を図示した。**255**はイノシシ下顎犬歯R製、

両端を欠損しているが、図の下端に二孔がある。**256**は、イノシシ下顎犬歯L製、頬側面を全面削りとり、舌側面を使用している。全面光沢が出るまで研磨されている。側縁に大小の刻みを入念に入れている。図の中央に二孔、欠損した両端にもそれぞれ一孔がある。255と同じく結合式の腕輪である。

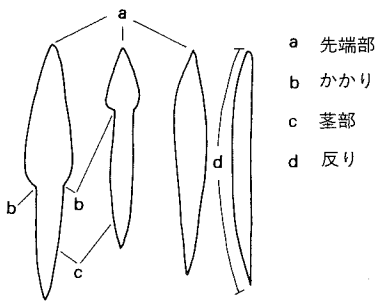
257～369の113点は貝製腕輪であり、完成品と未製品がある。貝の種類別点数（利用率）は次のとおりである。サルアワビ３（2.7)、ユキノカサ（2.4)、ウチムラサキ１（0.9)、マツバガイ１（0.9)、マツバガサ１（0.9)、チョウセンハマグリ１（0.9)、タマキガイ４（3.5)、サルボウ４（3.5)、ウミウサギ１（0.9)、ベンケイガイ95（84)

10種の貝が利用されているが、大半はベンケイガイであることがめだつ。一方、サルアワビ（257～259）北海道・東北・日本海北部・朝鮮半島の海域に生息し、ユキノカサはサハリン・シベリヤ・千島・北海道・東北・朝鮮半島海域に生息する（註21)。山本愛三氏によれば、本邦東北であれば入手可能であるが、佐賀貝塚の位置から考えれば朝鮮半島北東海域からの搬入と見るのが自然である、という。**266**の貝輪はただ一点であるが、側縁に低い台状の造り出しがあり、その中央部に刻みを入れている。この手法は猪牙製（256）の飾り手法を想起させる。同様の造り出しのある貝輪は草野貝塚例（タマキガイ）（註21）がある。

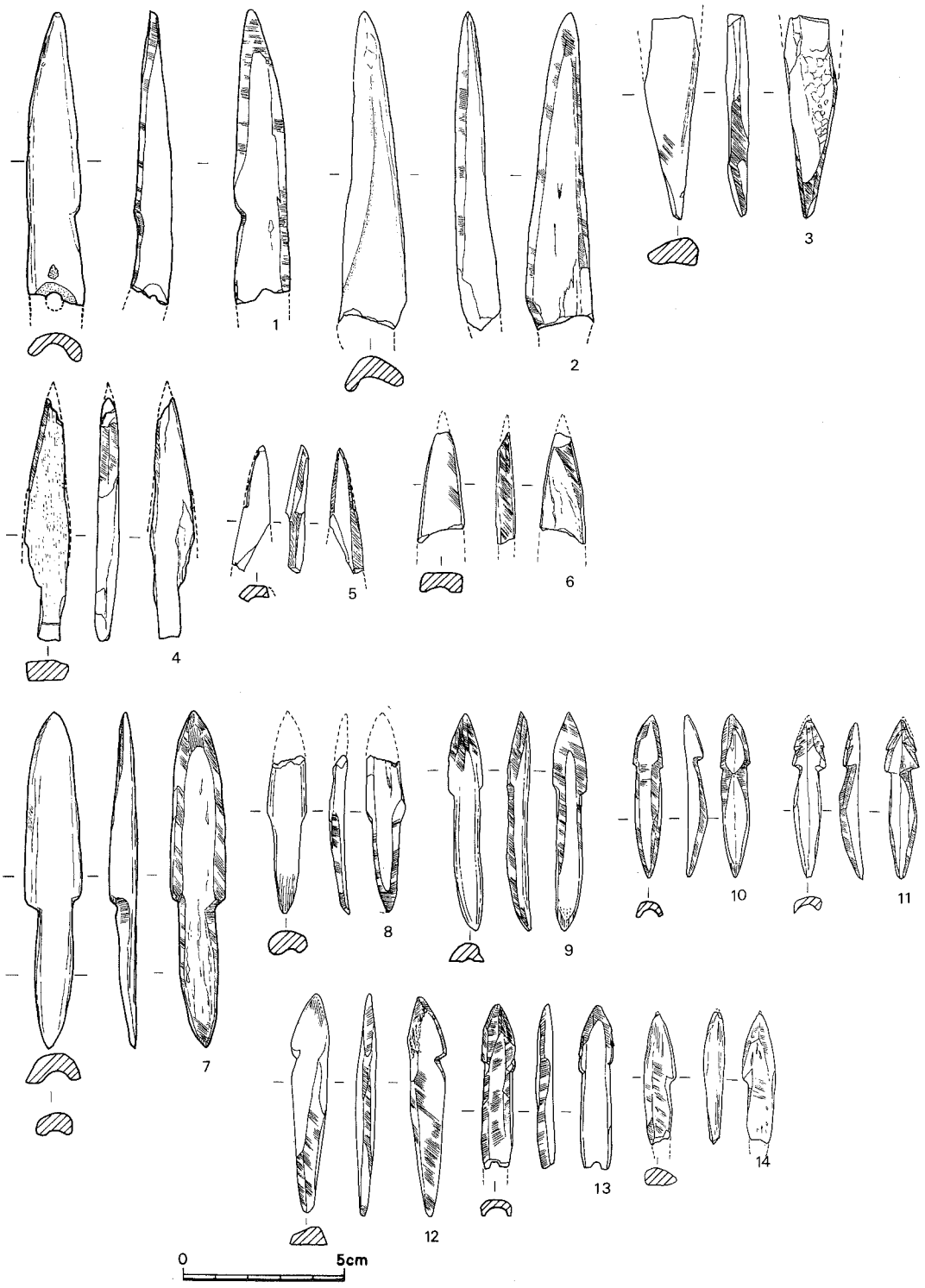
〔註〕

1．金子浩昌・忍沢成視『骨角器の研究』縄文篇Ⅰ慶友社1986
2．渡辺誠『西九州の縄文時代漁撈文化』「列島の日本文化史」日本エデタースクール出版部1986
3．註２
4．木村幾太郎『骨角牙器・貝輪』「新延貝塚」鞍手町埋蔵文化財調査会1980
5．雨宮瑞生氏の教示による。
6．安楽勉・正林護『白浜貝塚』福江市教育委員会1980
7．坂田邦洋『西九州・対馬・韓半島西南』「考古学ジャーナル特集縄文時代の漁撈具」ニューサイエンス社1988
8．坂田邦洋他『宮下貝塚』長崎県教育委員会1971
9．註１
10．註２
11．註７
12．松本健郎・木村幾太郎氏の教示による。
13．木村英明『骨角器』「縄文文化研究」６続縄文・南島文化、有山閣1982
14．鹿笛は本体盤状部の表（吹鳴孔のある側）にサンゴ（サゴ＝鹿の胎児）の皮もしくはボウコウ、内耳の皮、まれにヒキガエルの腹皮を張り、スリットを開けることが民俗資料で明らかである。鹿の発精期に雌鹿の擬声を発して雄鹿を誘引して狩りをする狩猟具である。近刊予定の拙稿『鹿笛考』「乙益重隆先生古希記念論集」を参照されたい。
15．壱岐島原ノ辻遺跡・カラカミ遺跡等の鯨骨生ヘラ状骨角器について鮑取りの漁撈具とする見解を岡崎敬氏が示されている。岡崎敬『倭の水人』「日本文化と南方文化」1968

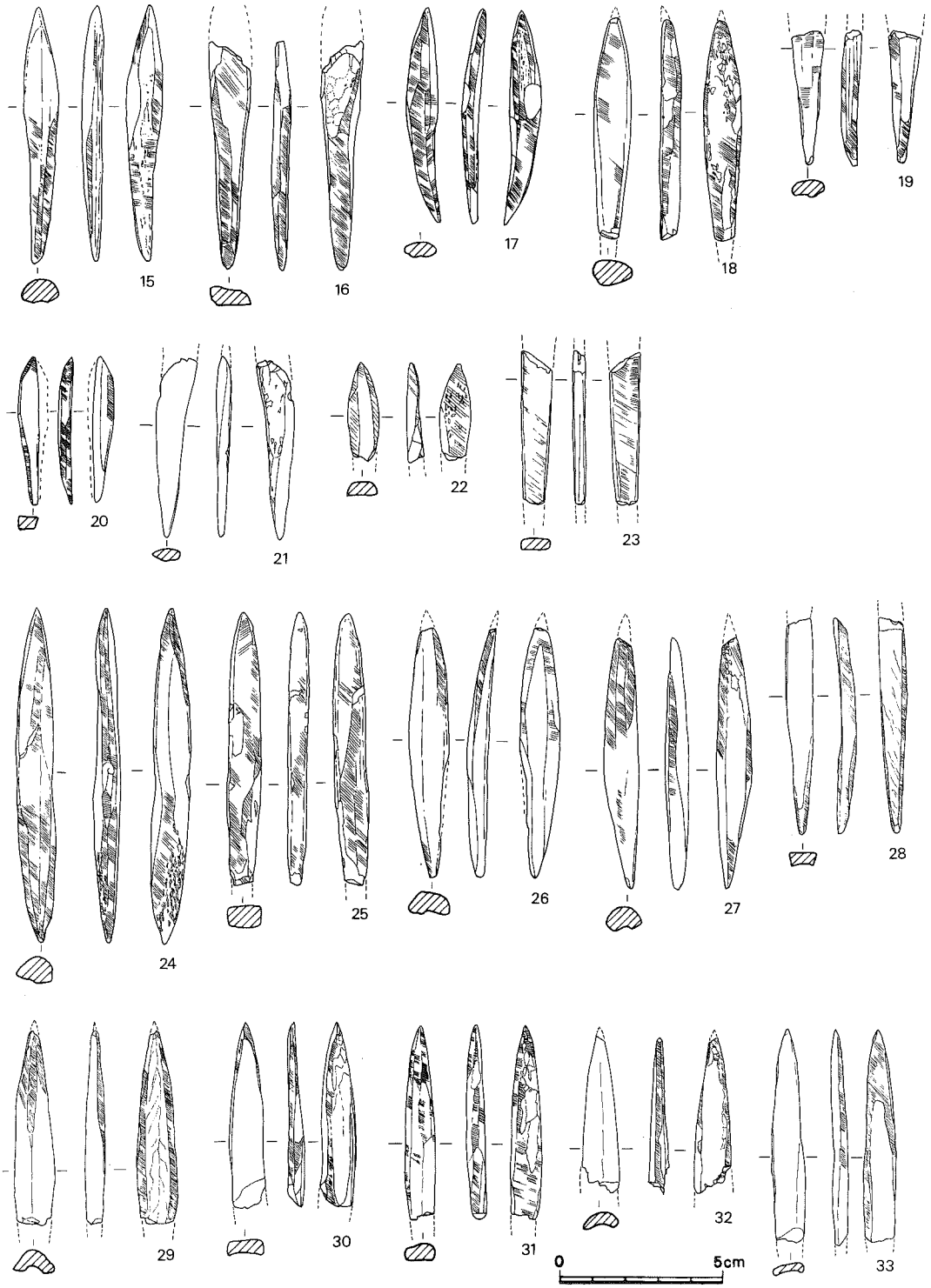
16. 註1
17. 註1
18. 雨宮瑞生『骨角器』「草野貝塚」鹿児島市教育委員会1988
19. 金子浩正氏の教示による。
20. 山本愛三氏の教示による。
21. 池田耕一『貝器』註18報告書



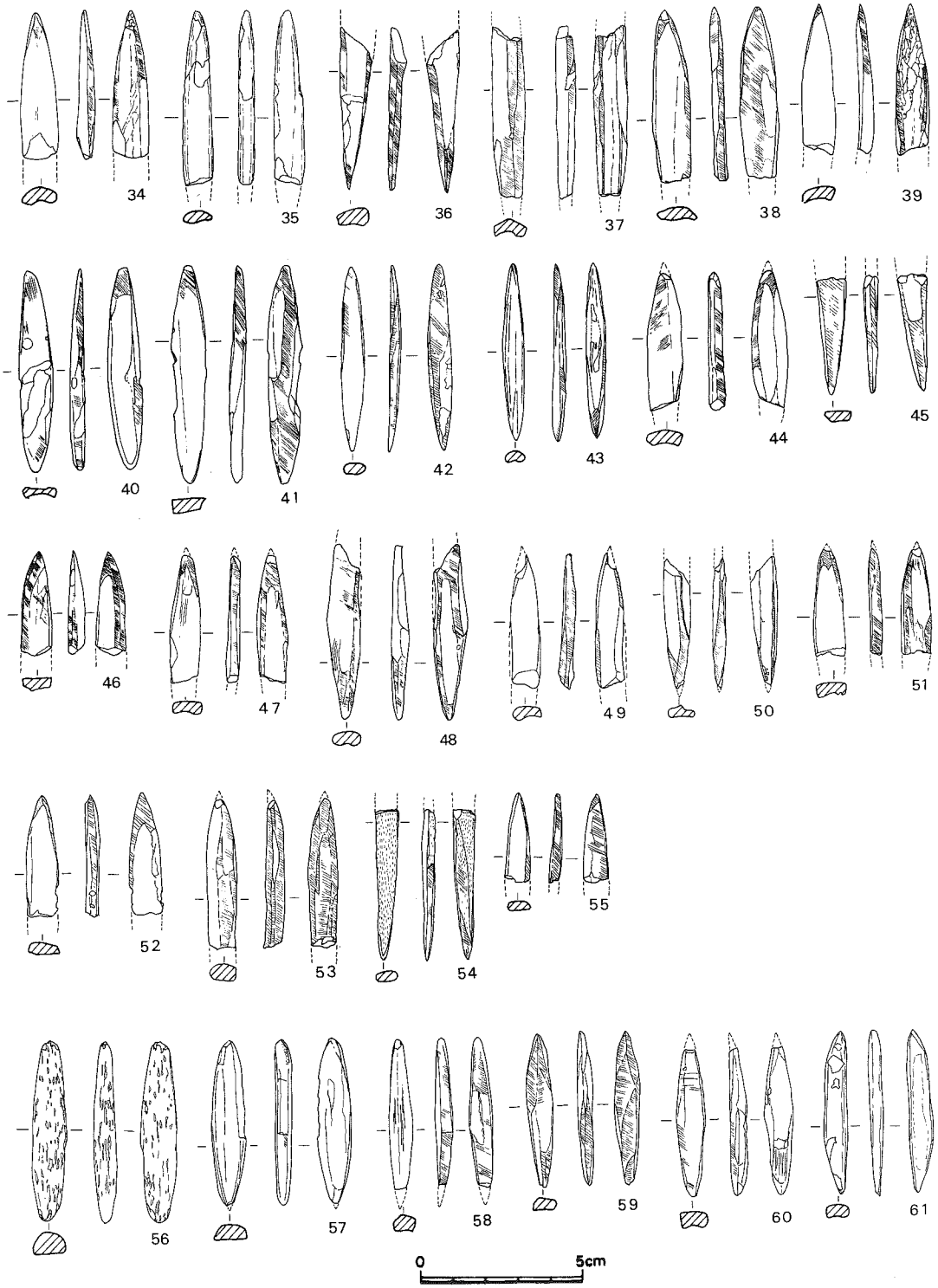
第82図　骨製刺突具各部の名称



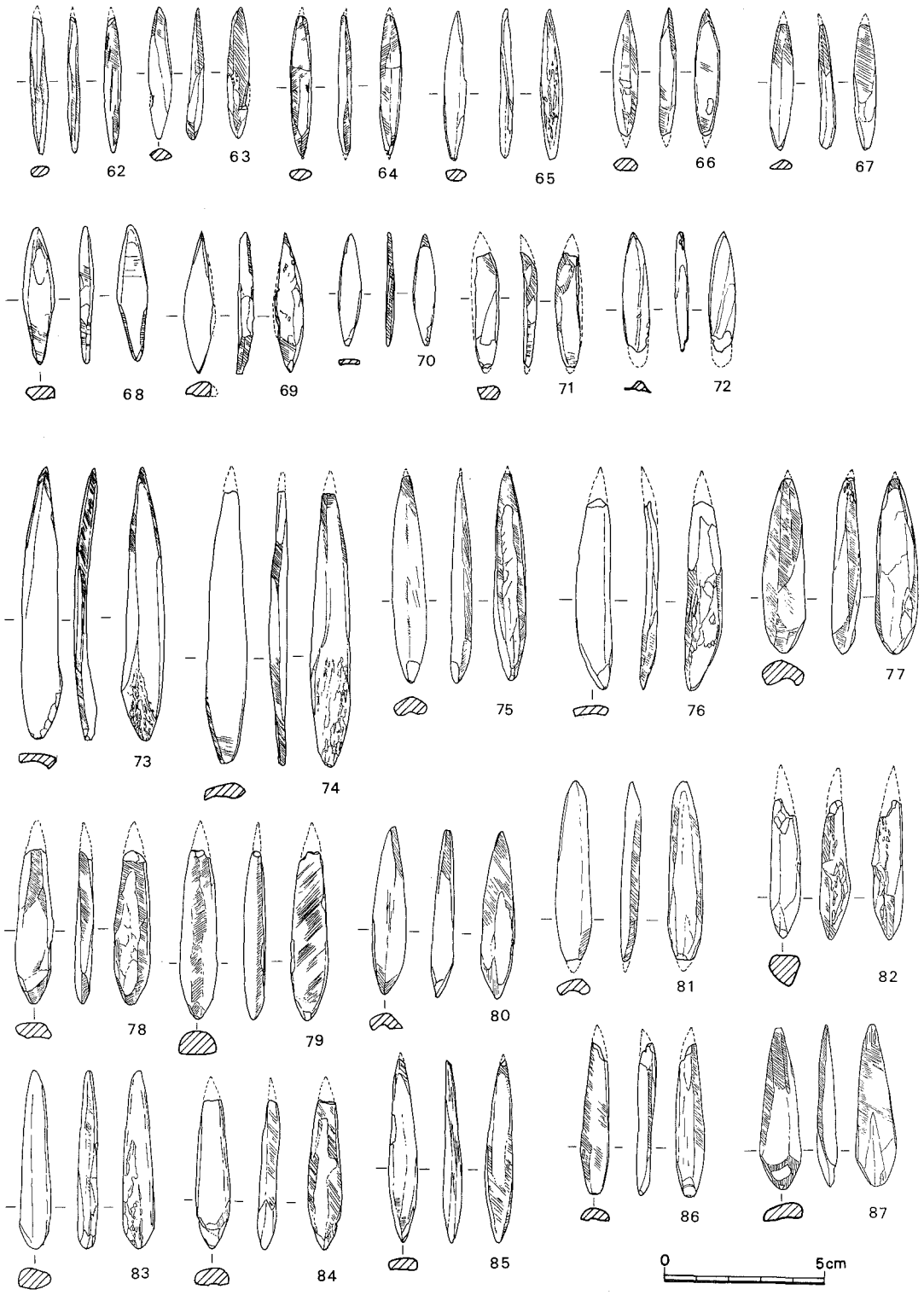
第83図　骨製刺突具第Ⅰ類（1～6）第Ⅱ類（7～8）第Ⅲ類（9～14）実測図（1/2）



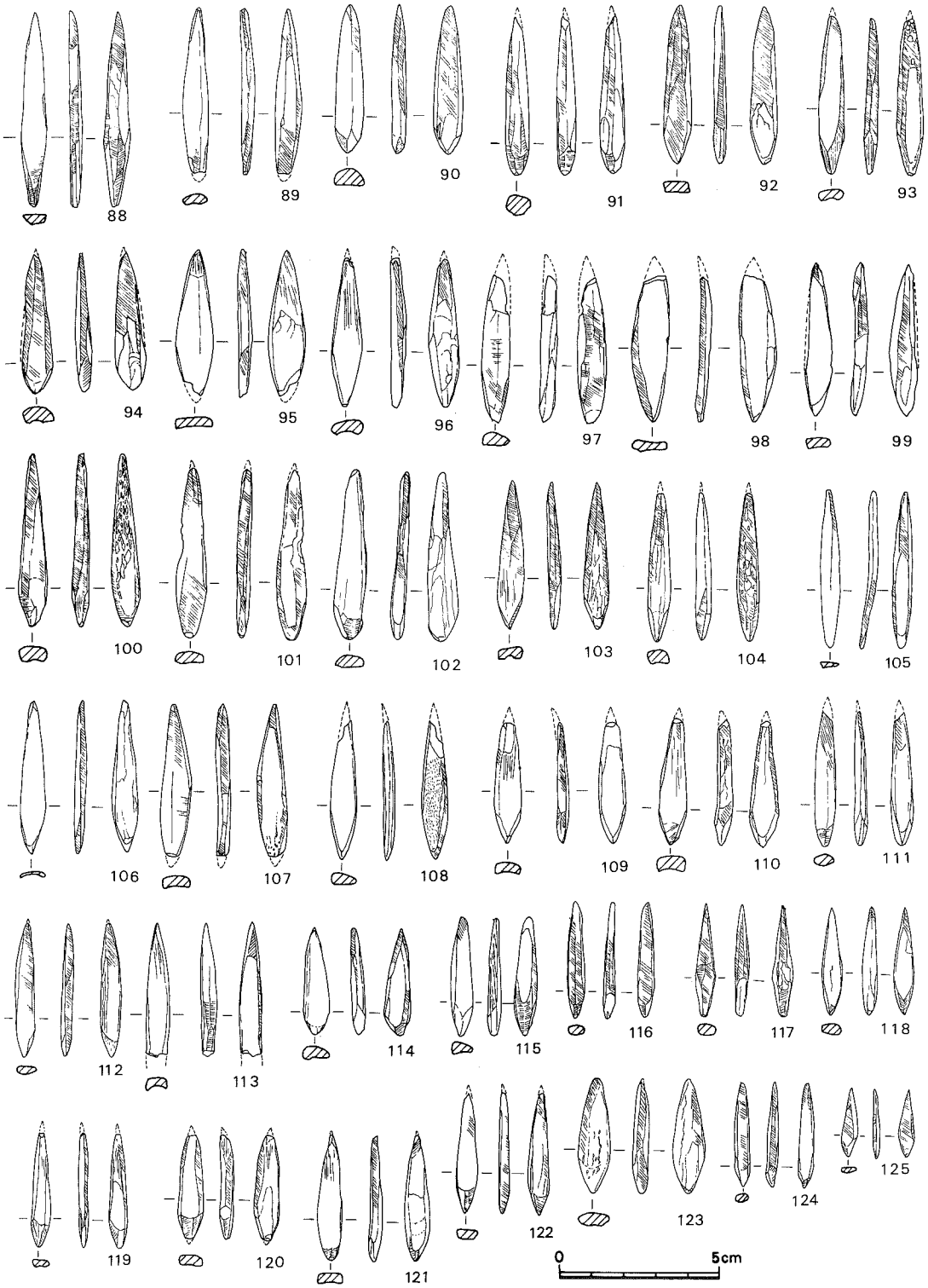
第84図　骨製刺突具第IV類実測図（1／2）



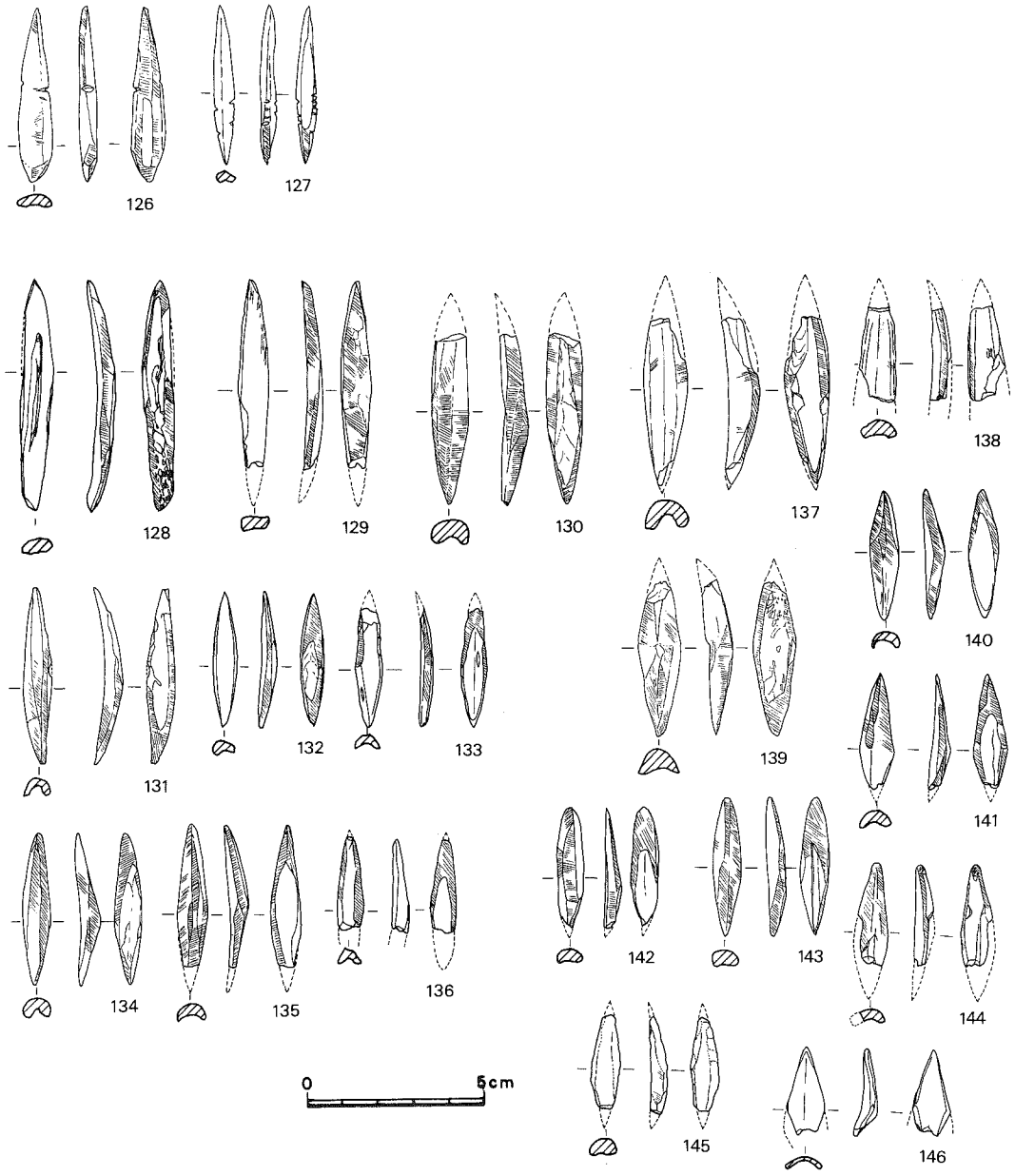
第85図　骨製刺突具第Ⅴ類（34～61）実測図（1/2）



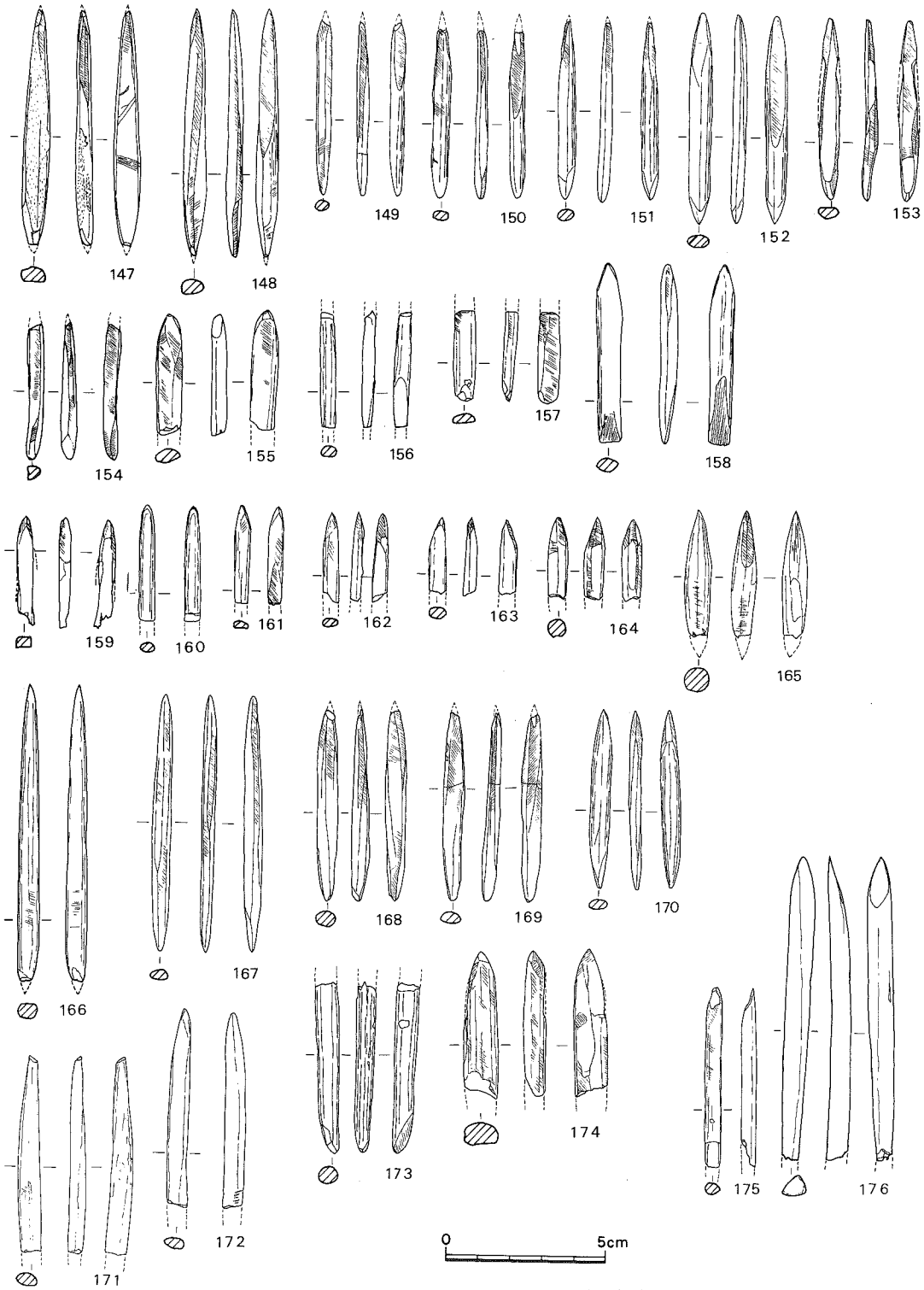
第86図　骨製刺突具第Ⅰ類（1～6）第Ⅱ類（7～8）第Ⅲ類（9～14）実測図（1/2）



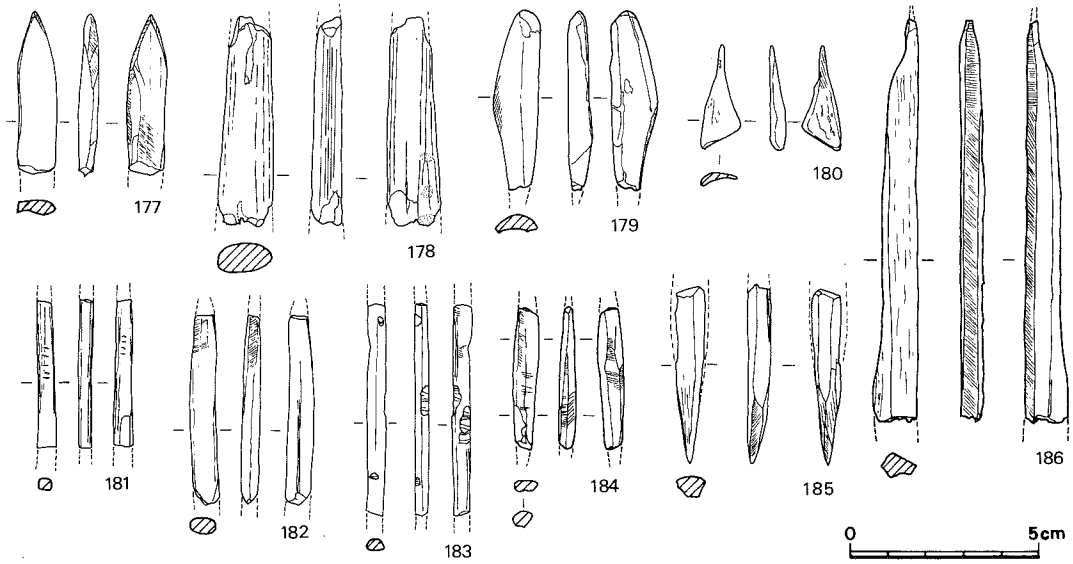
第87図　骨製刺突具第Ⅵ類実測図（1／2）



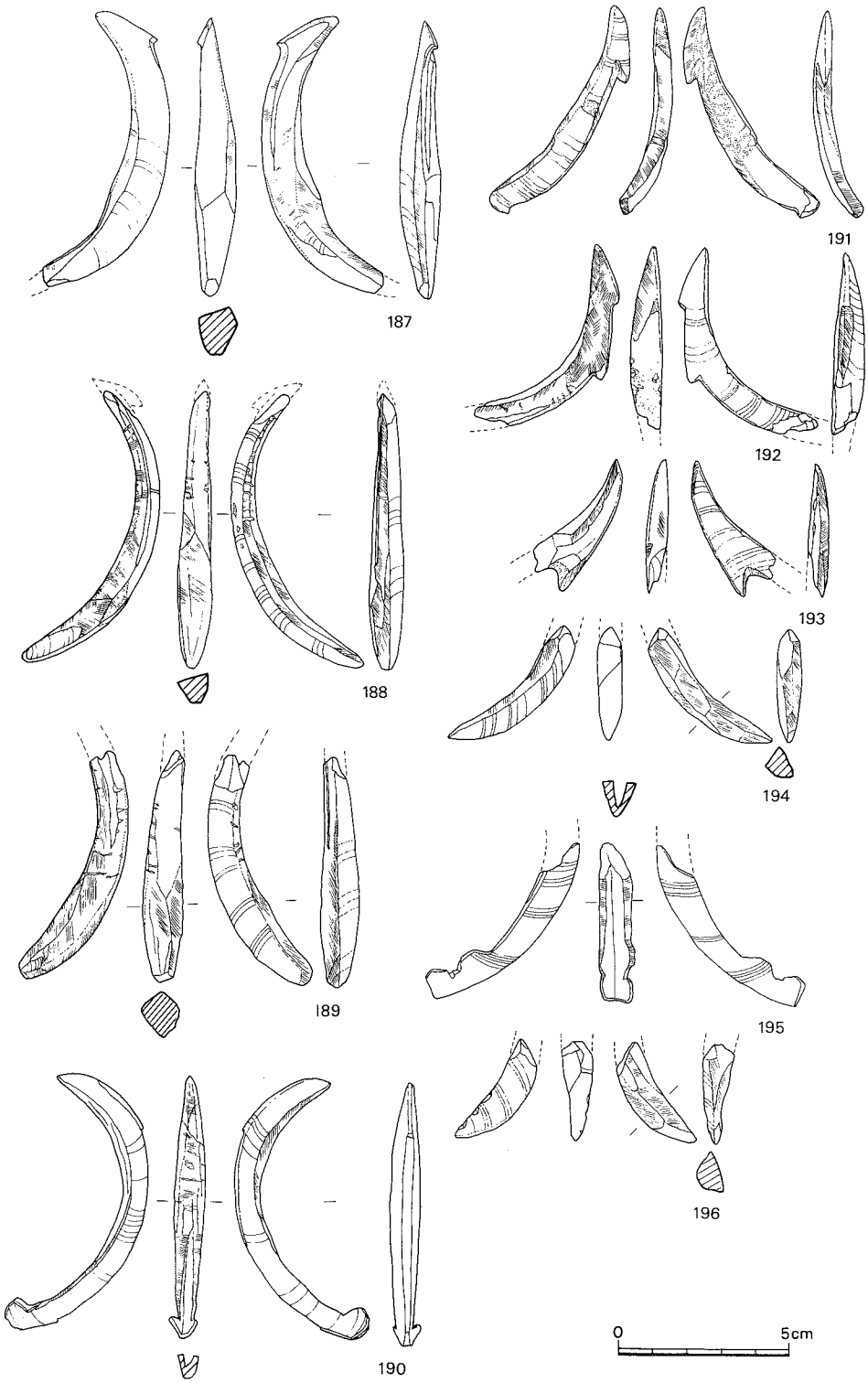
第88図　骨製刺突具第VI類（126～127）第VII類（128～146）実測図（1／2）



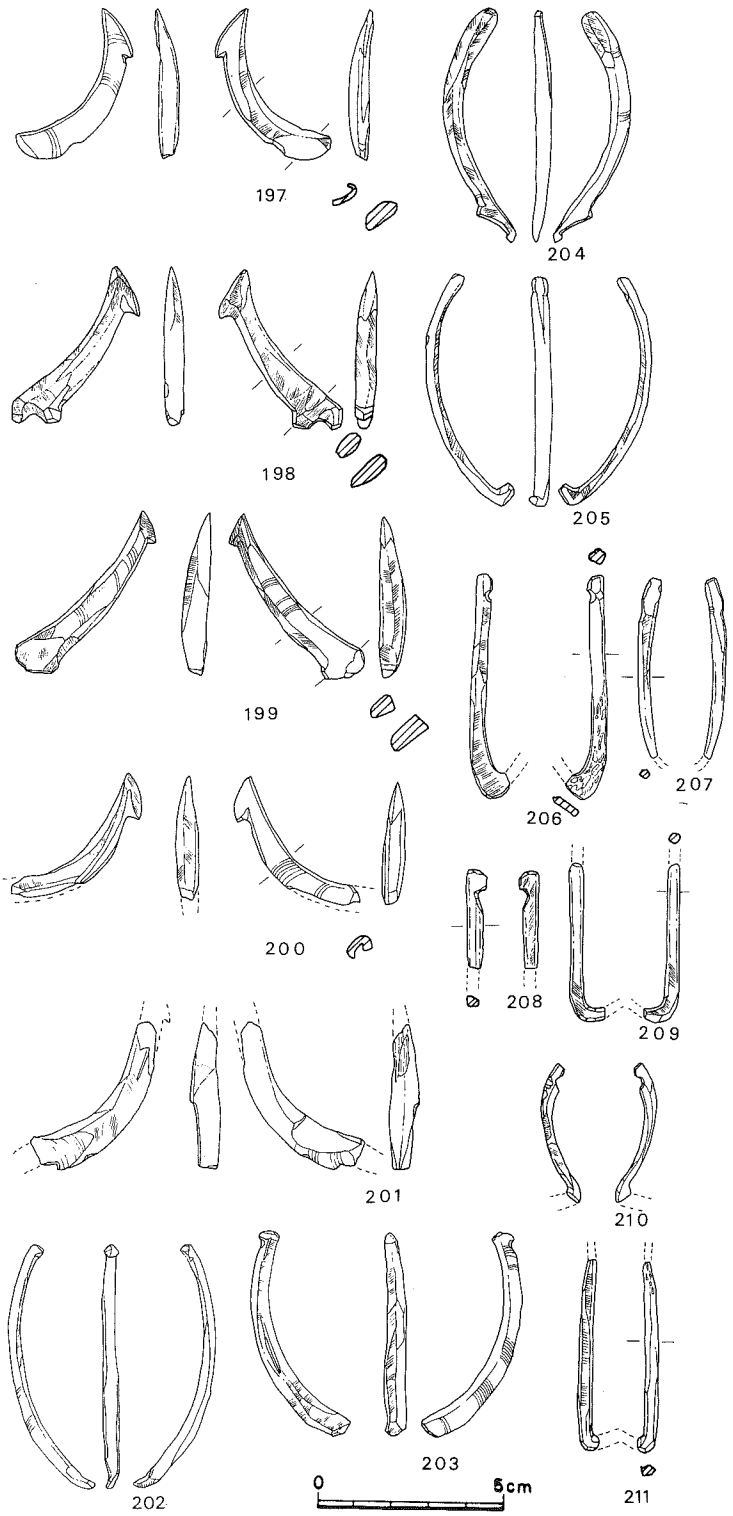
第89図　骨製刺突具第Ⅷ類実測図（１／２）



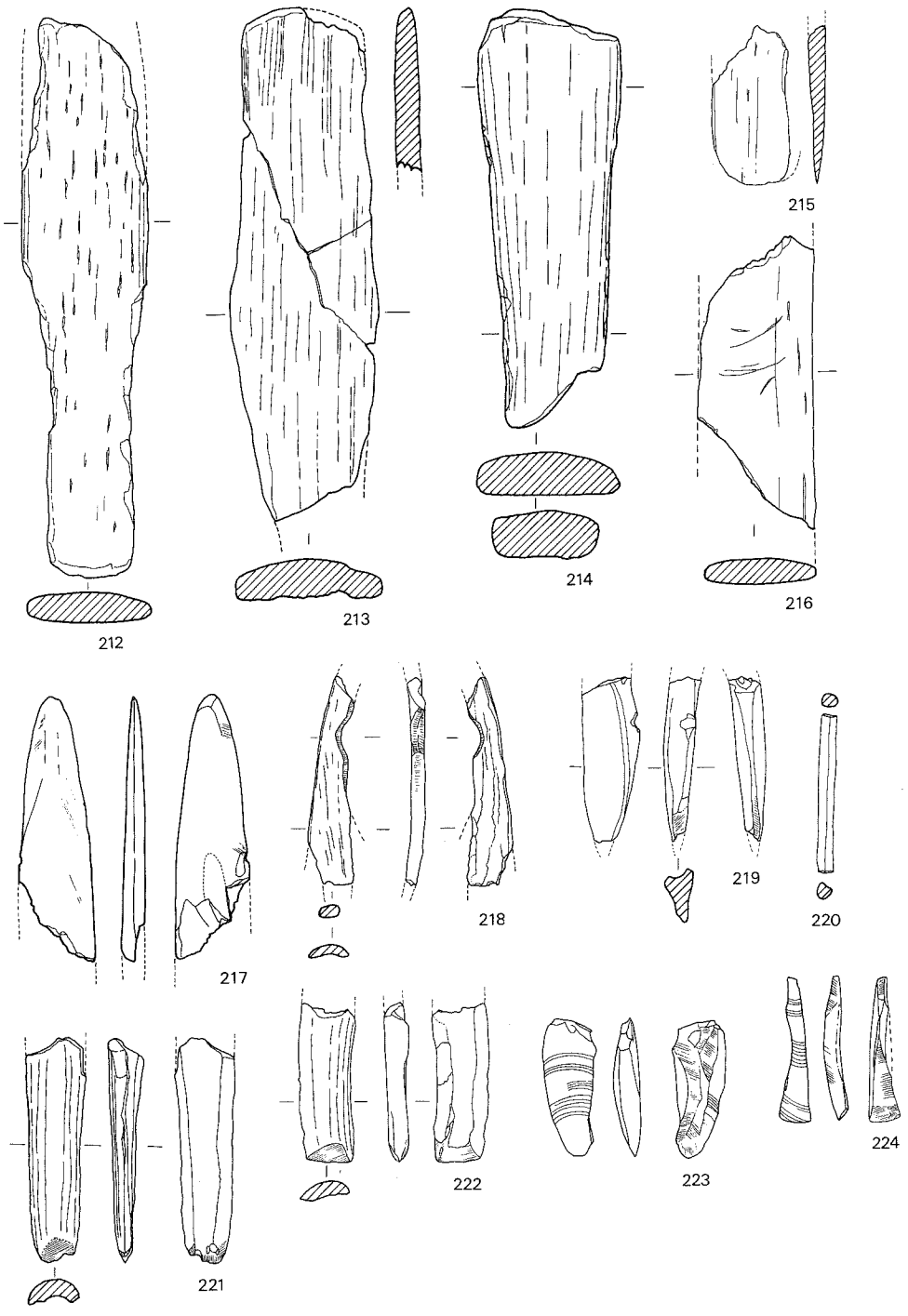
第90図　骨製刺突具第IX類実測図（1／2）



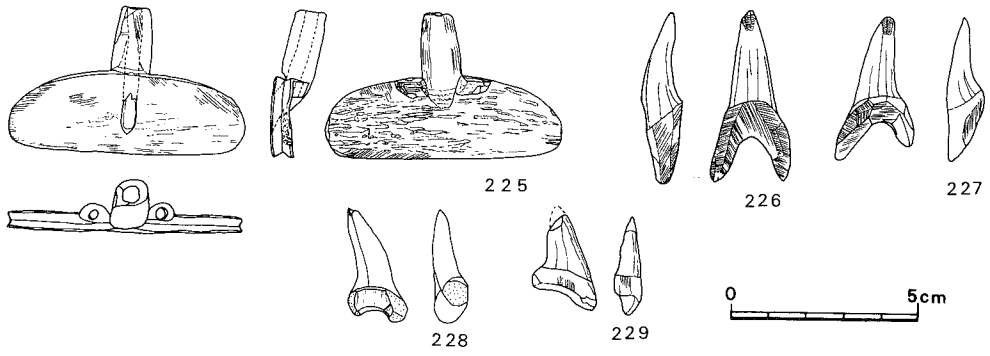
第91図　猪牙製釣針実測図（1/2）



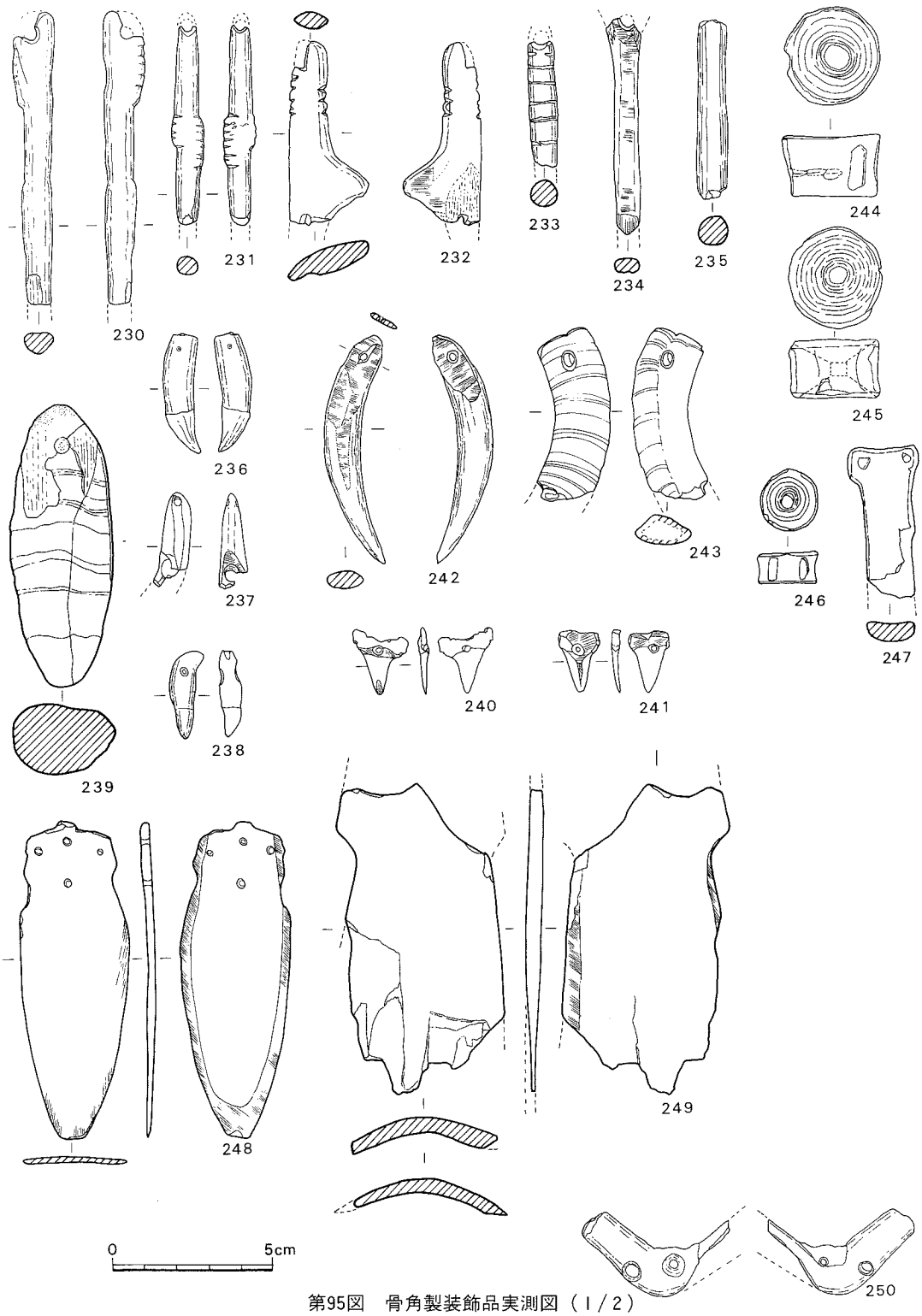
第92図　猪牙および骨製釣針実測図（1/2）



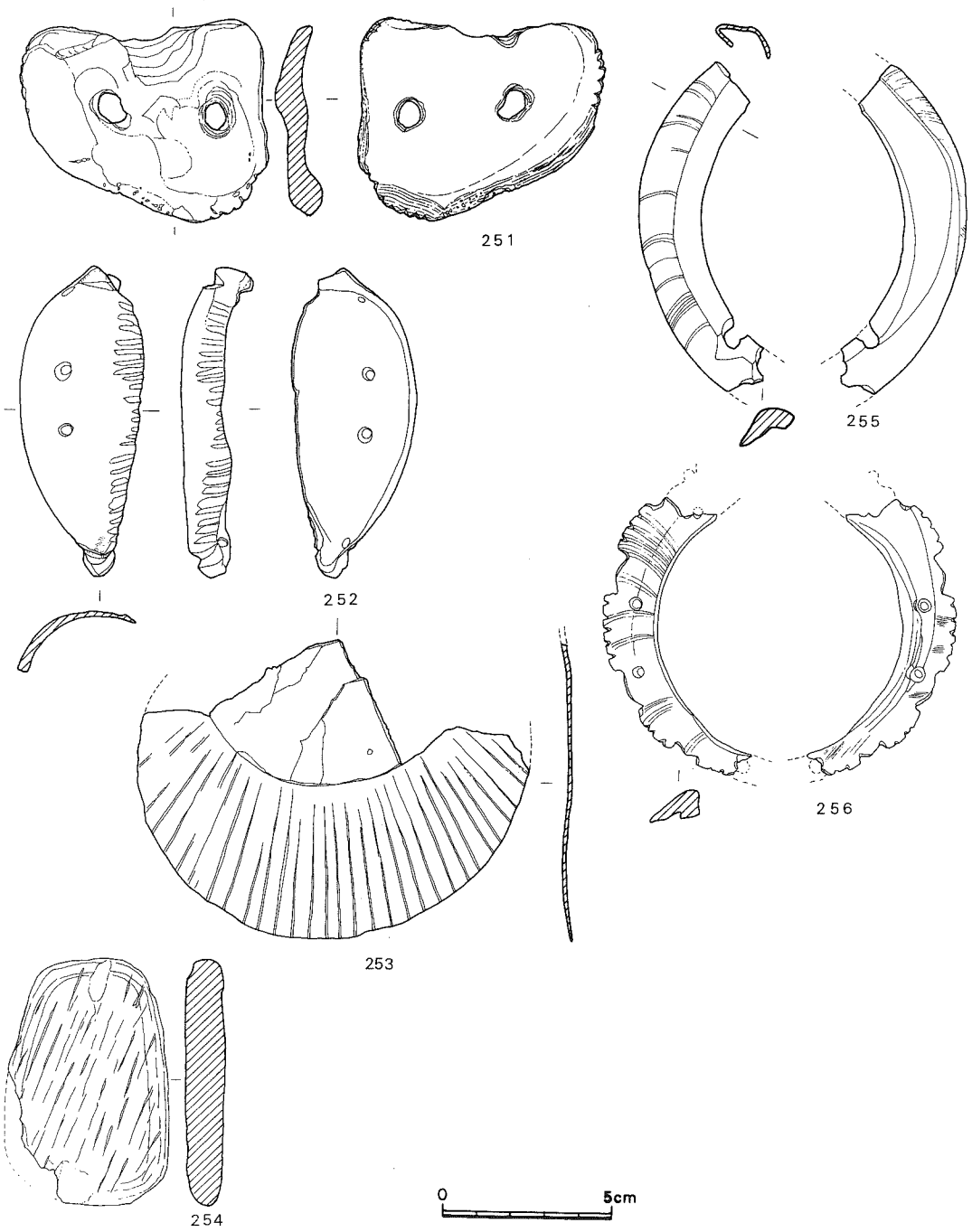
第93図　鯨骨製骨器他実測図（1/2）



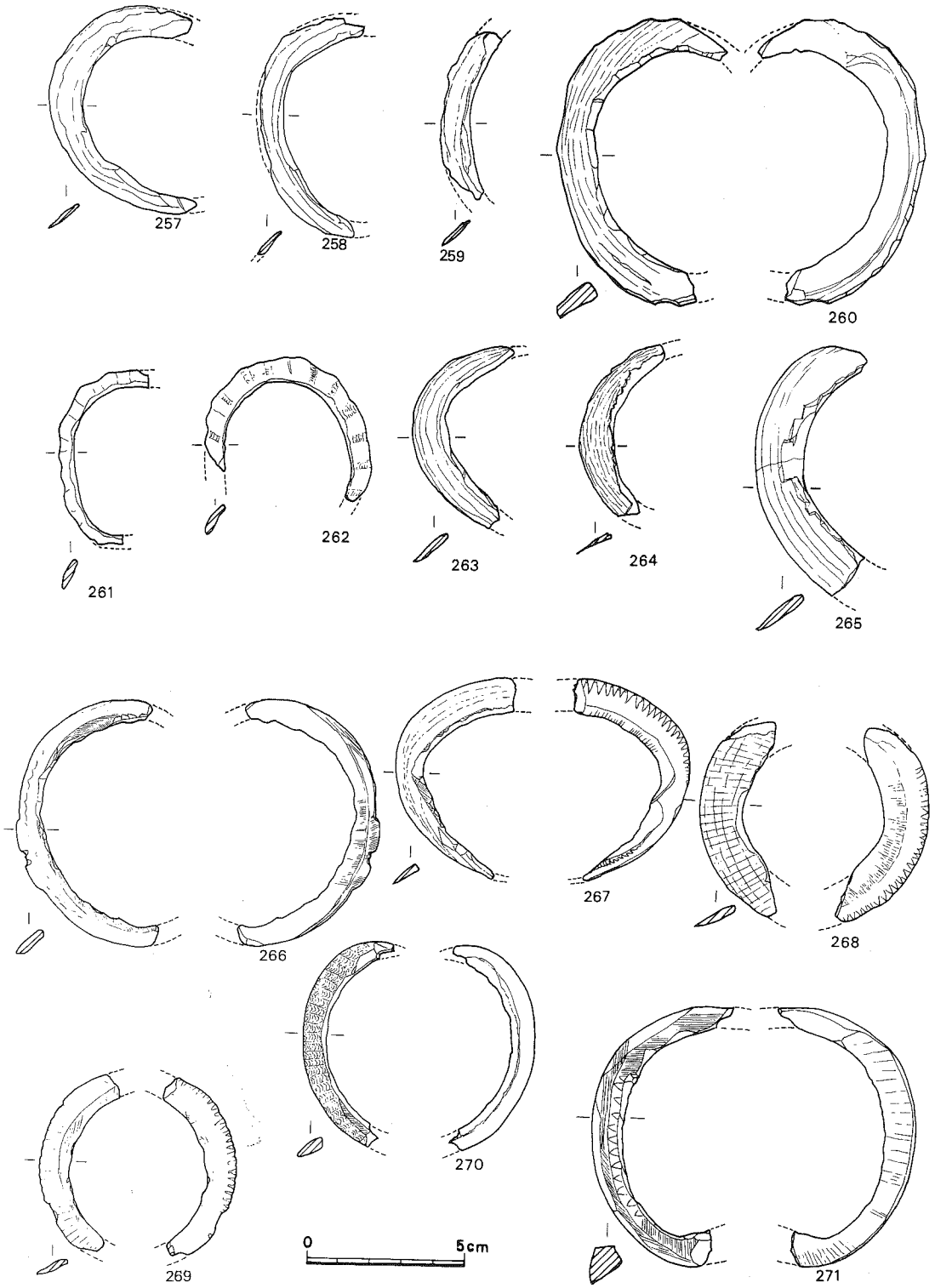
第94図　狩猟用骨角器実測図（１/２）



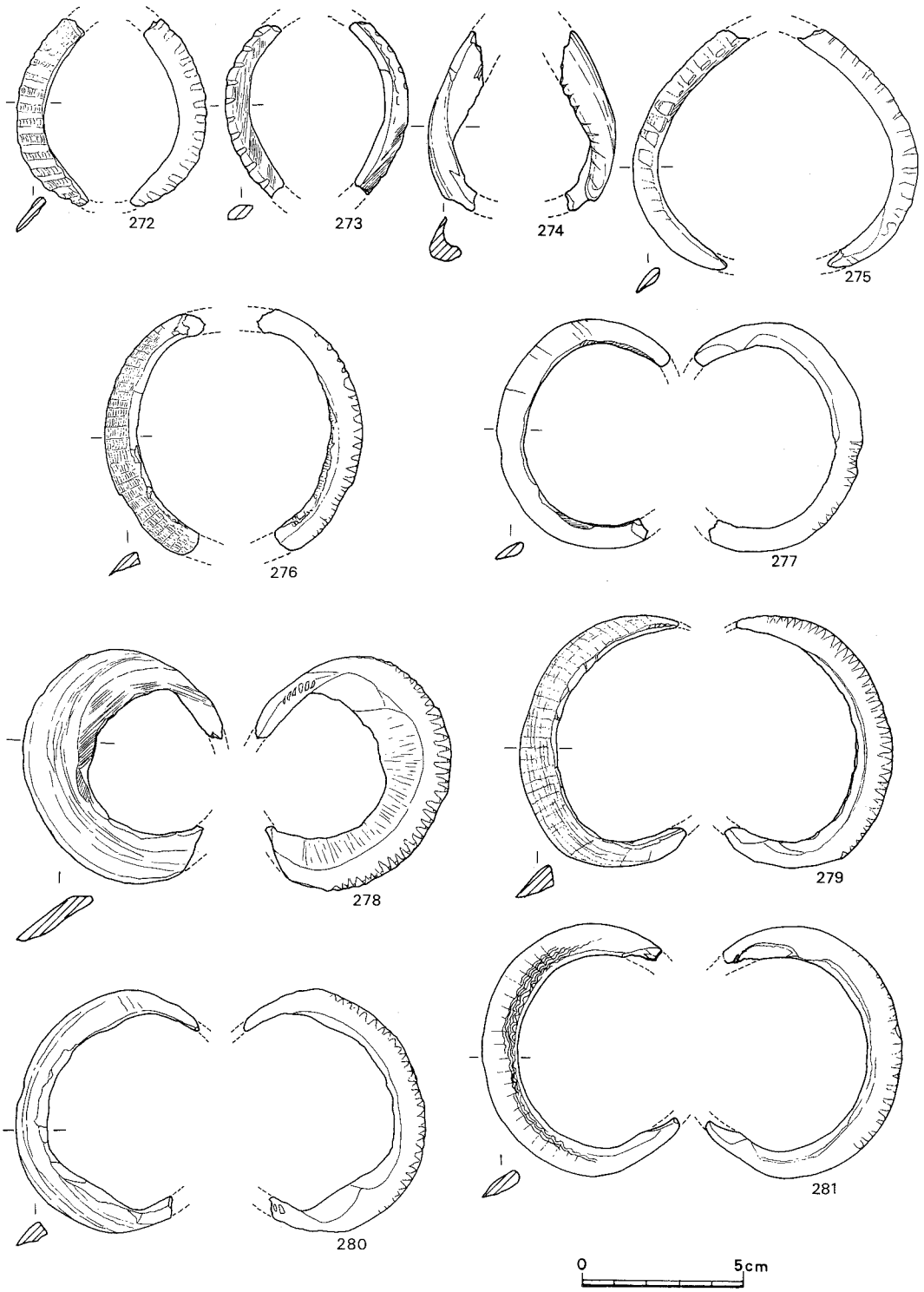
第95図　骨角製装飾品実測図（1/2）



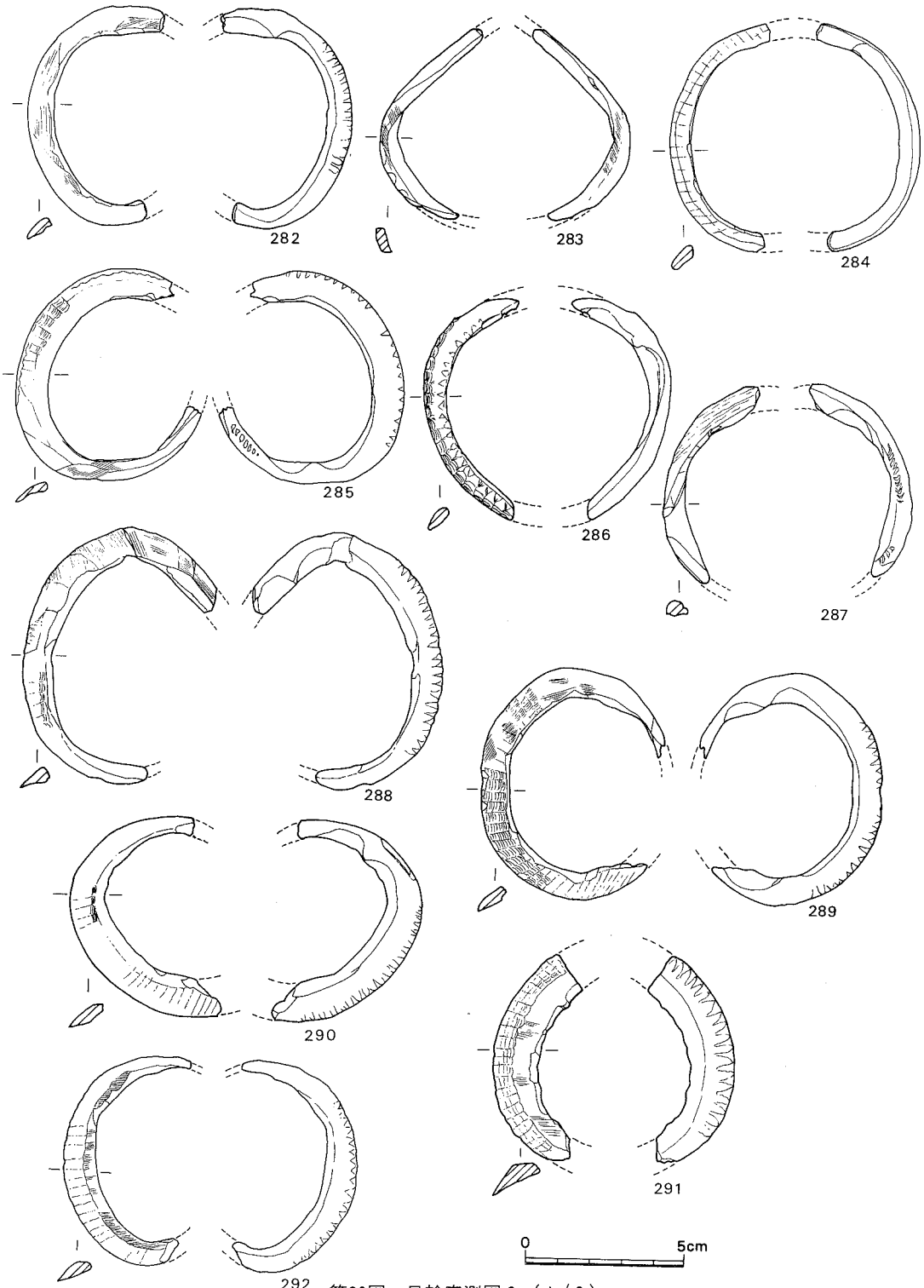
第96図　骨角具製装飾具実測図（1/2）



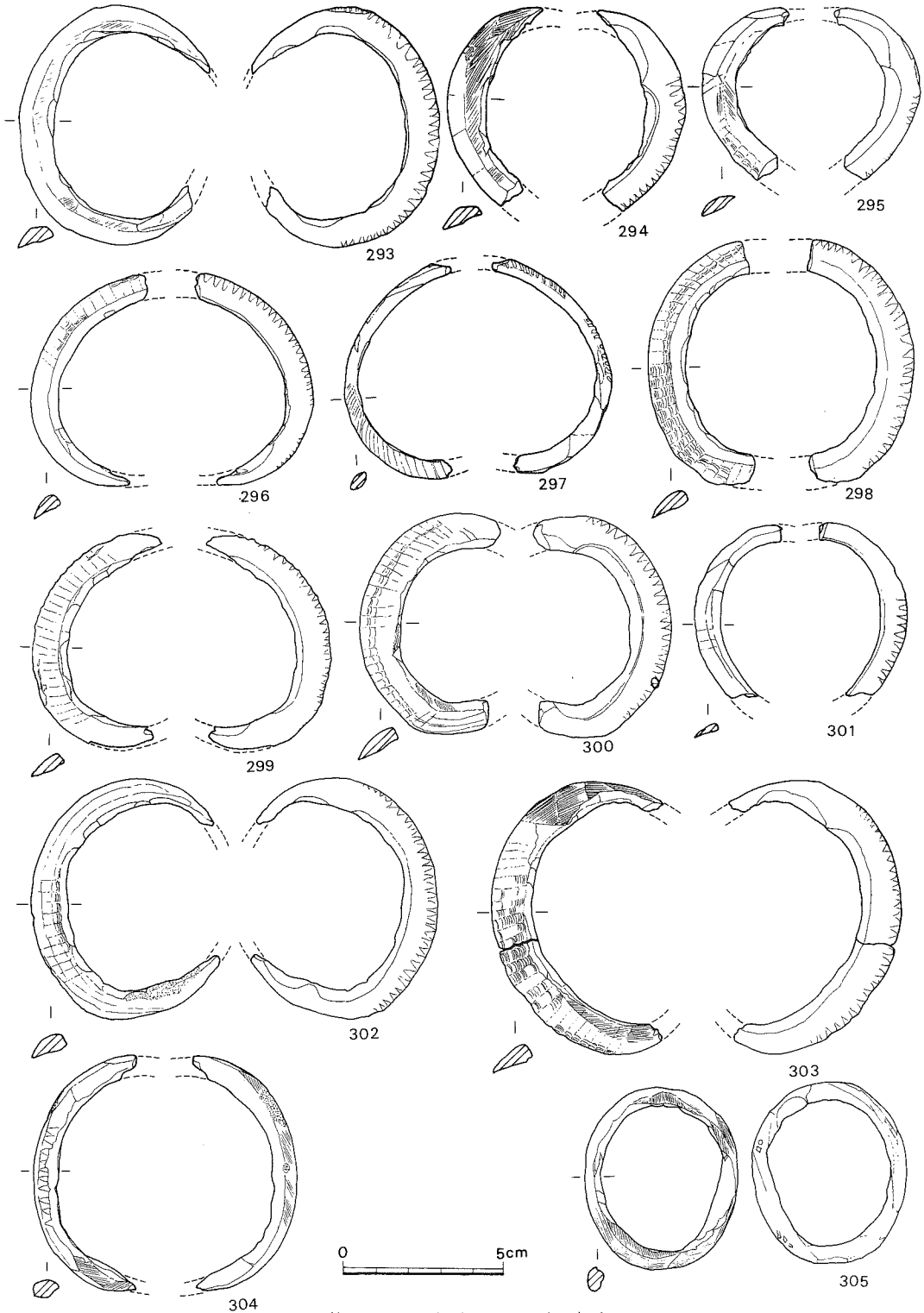
第97図　貝輪実測図Ⅰ（1/2）



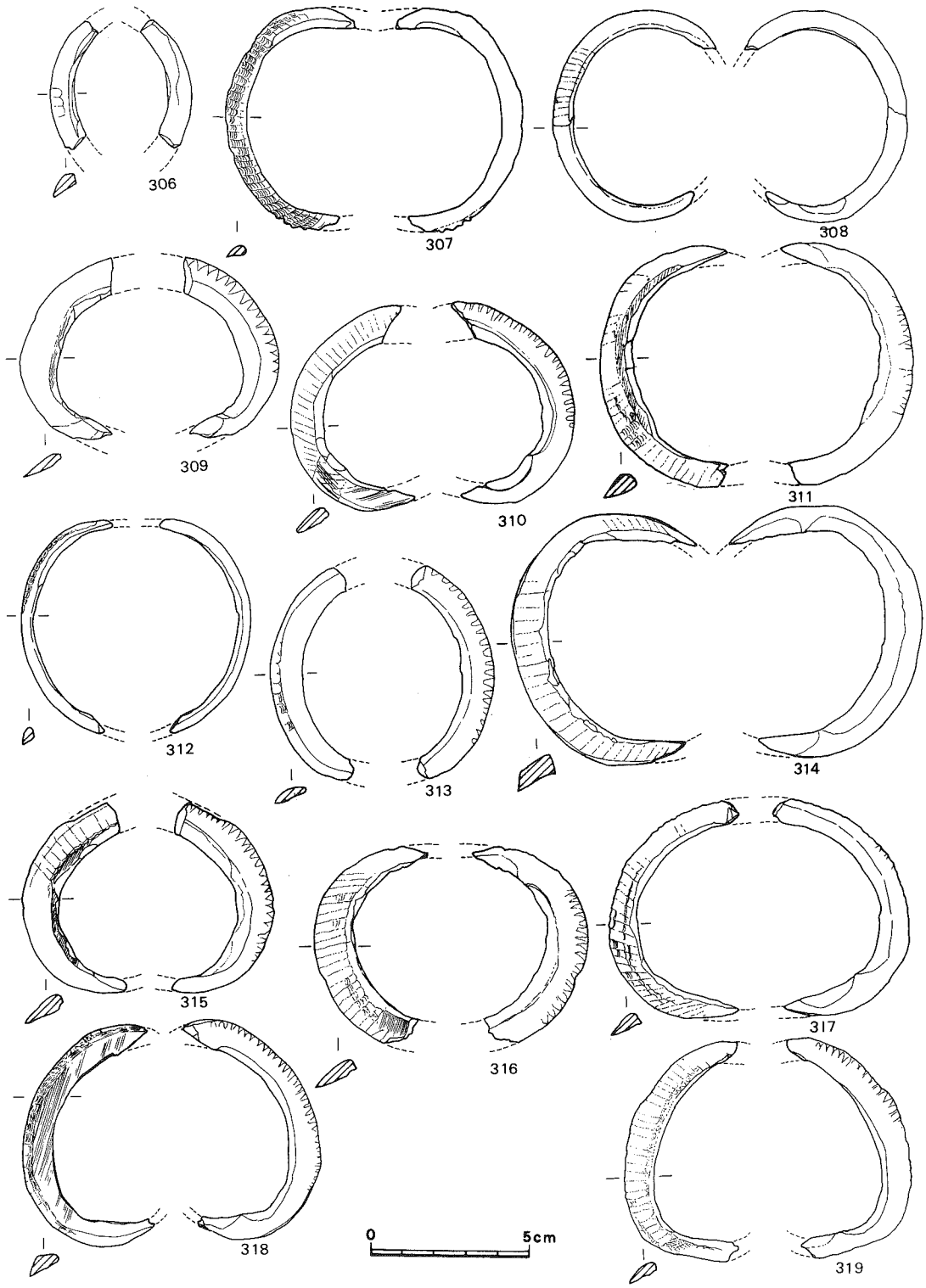
第98図　貝輪実測図２（１/２）



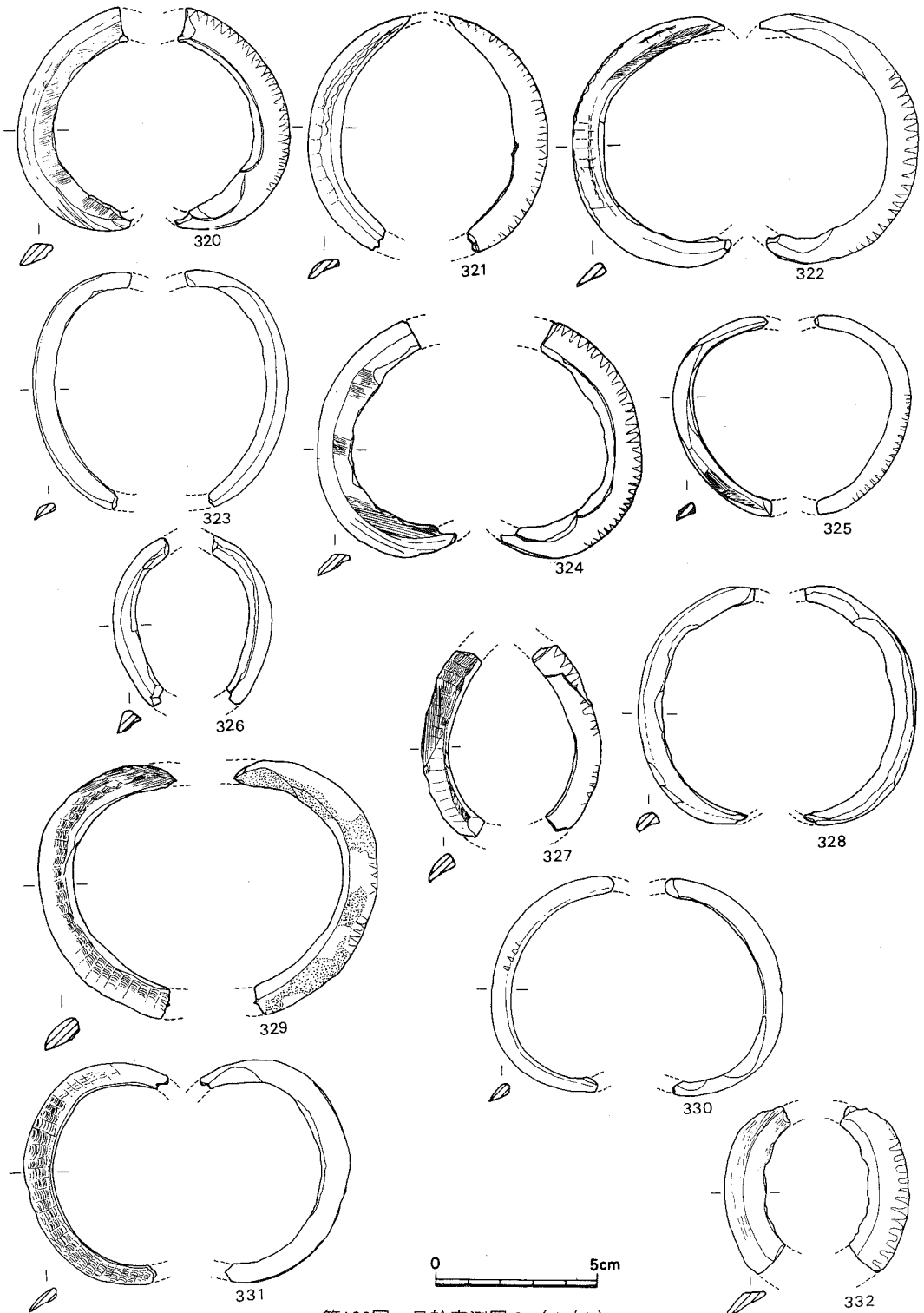
第99図　貝輪実測図３（１/２）



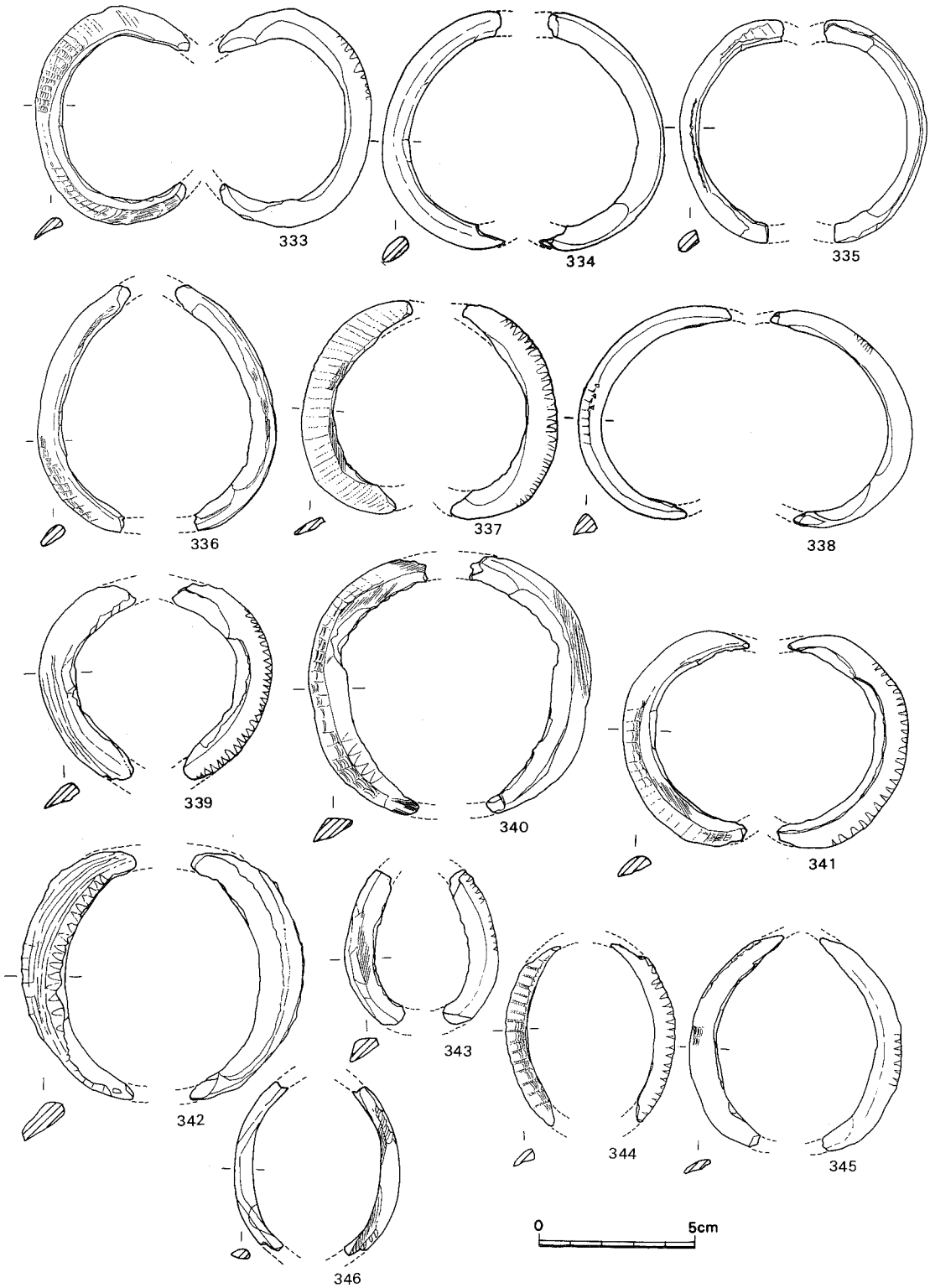
第100図　貝輪実測図4（1/2）



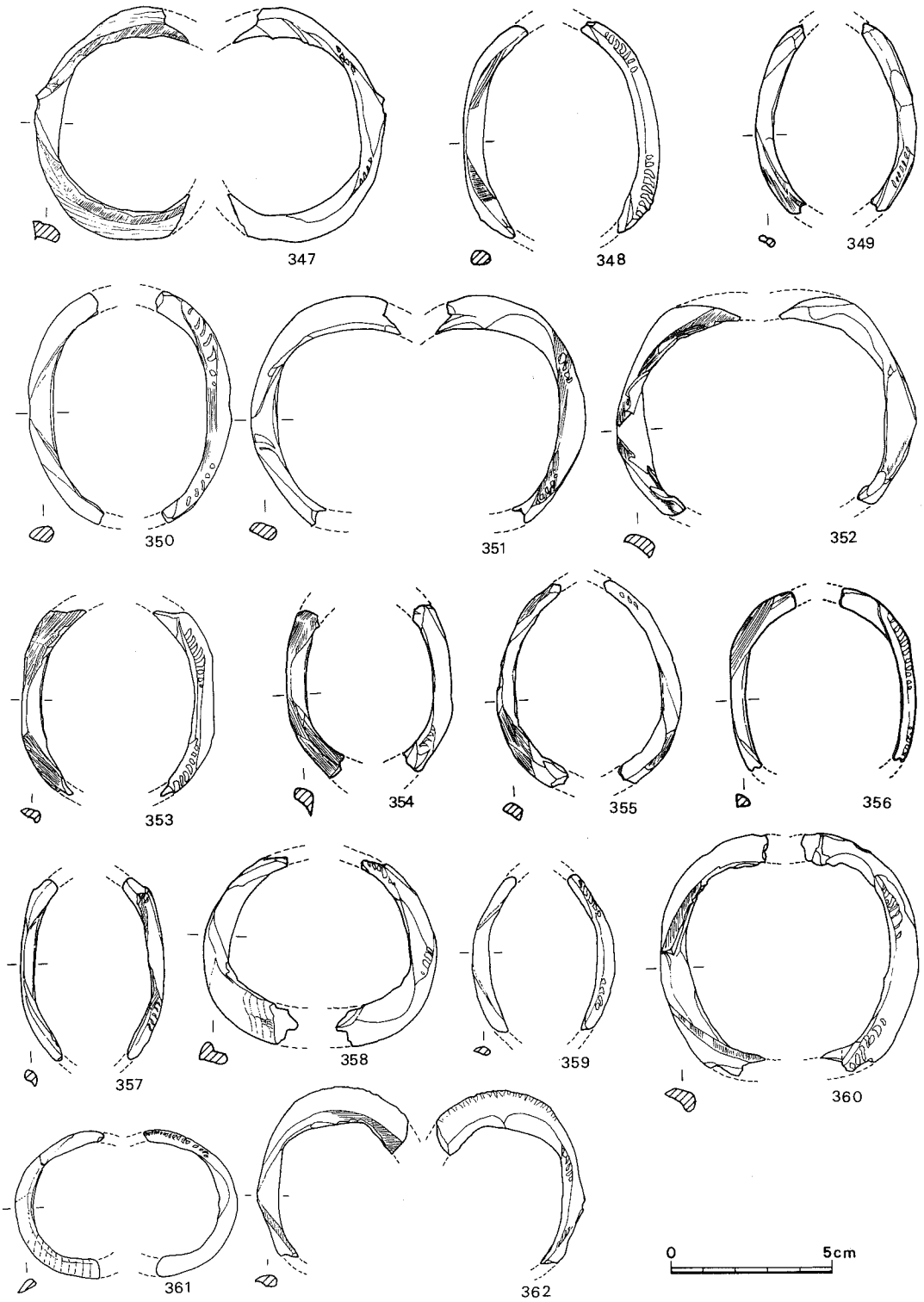
第101図　貝輪実測図5（1/2）



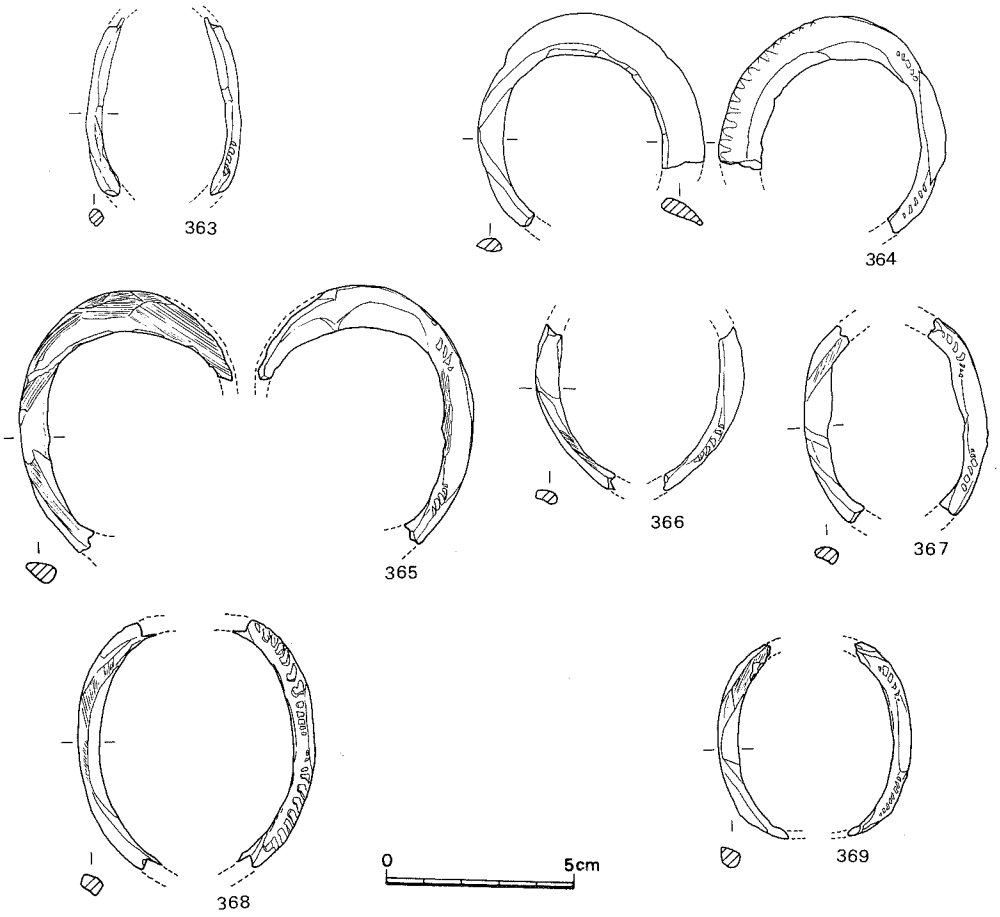
第102図　貝輪実測図6（1/2）



第103図　貝輪実測図7（1/2）



第104図　貝輪実測図８（１／２）



第105図　貝輪実測図9（1/2）

第16表(1)　骨角製刺突具観察表

掲載No.	出土区	遺物No.	種類	長さ(cm)	最大幅(cm)	現況	特長
1	SA—E_3	10	I	8.8	1.6	現存	
2	—C_2	2	〃	9.8	2.0	現存	
3	SA—E_1	2	〃	6.2	1.5		下端部か？
4	—E_3	339	〃	7.3	1.4	破損品	上端部か？
5	—E_3	97	〃	3.9	1.0	完存	
6	SA	60	〃	3.3	1.4	現存	？
7	SA—D_3	42	II—a	10.3	1.7	完存	
8	—E_3	12	II—b	4.9	1.2	尖端折損	
9	SA—E_1	1	III—a	6.6	1.1	完存	全体に反る、鏃1対
10	—E_3	1	III—a	5.0	0.9	完存	〃　〃
11	—C_2	3	III—c	4.8	1.1	完存	〃　鏃2対
12	—F_3	10	III—d	6.6	1.4	完存	反りなし、鏃1対
13	—F_3	8	III—d	5.0	1.0	下半部欠損	〃　〃
14	—C_2	32	III—e	4.0	1.0	下部欠損	〃　片鏃
15	SA—C_2	15	IV	7.1	1.1	完存	断面半円形
16	SA—F_3	2	〃	7.0	1.3	尖端部半損	断面肉厚
17	SA—C_2	23	〃	6.6	0.9	完存	ややまがる
18	SA—D_2	2	〃	6.8	1.1	下端尖端欠損	
19	SA—E_3	36	〃	4.0	1.0	尖端部欠損	
20	SA—E_3	10	〃	4.4	0.8	一部割損	
21	SA—F_3	57	〃	5.4	1.0	尖端欠損	
22		1083	〃	3.5	1.0	下端欠損	
23	SA—D_3	16	〃	4.6	0.9	扁平上下欠損	
24	SA—E_2	90	V—a	10.3	1.1	完存	
25	—E_3	341	〃	8.3	1.0	下端欠損	
26	—D_2	56	〃	7.8	1.3	尖端欠損	
27	—F_3	364	〃	8.3	1.1	〃	
28	—F_2	244	〃	6.6	0.8	〃	
29	—E_3	85	〃	5.9	1.3	下端欠損	
30	—F_2	10	〃	5.6	1.0	〃	
31	—H	2	〃	6.0	1.0	〃	
32	—F_3	9	〃	4.7	1.2	〃	
33	—D_2	57	〃	6.6	1.1	〃	
34	—E_3	4	〃	4.6	1.1	〃	
35	SA	34	〃	5.3	0.9	〃	
36	—F_4	281	〃	5.0	1.0	上半欠損	
37	—F_3	338	〃	5.3	1.0	上下欠損	
38	—F_2	291	〃	5.2	1.1	上半欠損	
39	—D_2	7	〃	4.7	1.0	〃	
40	—E_4	23	V—b	6.2	1.0	完存	
41	—F_2	378	〃	6.7	1.1	〃	
42	—F_2	289	〃	5.7	0.7	〃	
43	SA	22	〃	5.6	0.6	〃	
44	—E_3	8	〃	4.1	1.1	下端欠損	
45	—F_3	92	〃	3.8	0.9	尖端欠損	
46	—C_3	3	〃	3.2	1.0	下半欠損	
47	—F_2	385	〃	4.1	1.0	〃	

第16表(2)　骨角製刺突具観察表

掲載No.	出土区	遺物No.	種類	長さ(cm)	最大幅(cm)	現況	特長
48	SA—C_2	47	V—b	5.4	1.1	上半欠損	
49	—F_4	245	〃	4.1	0.9	下半欠損	
50	—F_2	314	〃	4.0	0.8	上半欠損	
51	—F_4	17	〃	3.3	1.0	下半欠損	
52	—D_2	21	〃	3.7	1.0	〃	
53	—D_3	42	〃	4.5	0.9	〃	
54	—F_3	367	〃	4.6	0.7	上半欠損	
55	—D_3	34	〃	2.7	0.8	下半欠損	
56	SA	42	V—c	5.5	1.1	完存、やや磨耗	
57	—D_4	8	〃	5.1	1.1	完存	
58	—F_3	368	〃	5.2	0.7	一端欠損	
59	—E_2	96	〃	4.7	0.8	完存	
60	—F_2	355	〃	5.0	0.9	一端欠損	
61	—C_2	34	〃	4.9	0.8	完存	
62	—D_3	23	〃	4.6	0.6	一端欠損	
63	—E_3	102	〃	4.1	0.8	完存	
64	SA	1	〃	4.8	0.7	ほぼ完存	
65	—F_2	270	〃	4.7	0.7	完存	
66	—F_3	91	〃	4.4	0.8	一端欠損	
67	—D_3	34	〃	4.2	0.7	〃	
68	—C_2	16	〃	4.3	1.0	完存	
69	SA	36	〃	4.4	1.0	〃	
70	—E_5	122	〃	3.5	0.7	〃	
71	—F_4	282	〃	4.4	0.9	一端欠損	
72	—E_4	21	〃	4.3	0.8	〃	
73	SA—E_3	1	VI—a	8.5	1.3	完存	
74	—F_2	312	〃	9.2	1.2	ほぼ完存	
75	—C_2	31	VI—b	8.7	1.1	〃	
76	—F_3	60	〃	6.9	1.1	〃	
77	—C_2	5	〃	5.7	1.4	〃	
78	SA	58	〃	5.7	1.2	〃	
79	〃	12	〃	6.2	1.2	〃	
80	〃	49	〃	5.2	1.1	完存	
81	—E_2	71	〃	5.8	1.1	ほぼ完存	
82	—C_2	33	〃	5.4	1.0	〃	
83	—F_2	326	〃	5.5	1.0	完存	
84	—H	24	〃	5.3	1.1	ほぼ完存	
85	—F_3	365	〃	5.9	0.9	〃	
86	SA	51	〃	5.3	1.0	〃	
87	—D_3	11	〃	5.1	1.3	完存	
88	—F_2	285	〃	6.1	0.8	〃	
89	SA	14	〃	5.4	0.9	ほぼ完存	
90	—F_3	8	〃	4.1	0.9	完存	
91	SA	41	〃	5.1	0.8	ほぼ完存	
92	〃	53	〃	4.9	0.9	完存	
93	—E_3	107	〃	5.2	0.8	〃	
94	—E_3	74	〃	4.5	1.0	〃	
95	—C_2	20	〃	4.7	1.2	ほぼ完存	
96	—H	4	〃	4.9	1.0	〃	

第16表(3)　骨角製刺突具観察表

掲載No.	出土区	遺物No.	種類	長さ(cm)	最大幅(cm)	現況	特長
97	SA—D_2	28	VI—b	5.2	0.9	ほぼ完存	
98	—F_2	322	〃	5.2	1.2	〃	
99	—F_3	3	〃	4.8	0.9	完存	
100	—E_3	86	〃	5.4	0.9	〃	
101	—D_3	19	〃	5.5	0.9	ほぼ完存	
102	SA	59	〃	5.3	1.0	完存	
103	—E_3	44	〃	4.6	0.8	〃	
104	—D_3	33	〃	5.0	0.7	ほぼ完存	
105	—C_2	40	〃	4.9	0.6	完存	
106	—E_3	9	〃	4.7	0.8	〃	
107	—C_2	12	〃	5.0	1.0	ほぼ完存	
108	—E_3	92	〃	4.8	0.9	ほぼ完存	
109	—D_2	36	〃	4.2	0.9	〃	
110	—E_3	71	〃	4.3	1.0	〃	
111	SA—E_3	13	〃	4.5	0.7	半端欠損	
112	—F_3	370	〃	4.3	0.6	完存	
113	—F_3	254	〃	(現存) 4.1	0.7	下半欠損	
114	—D_3	45	VI—c	3.4	0.8	完存	
115	—F_3	342	〃	3.2	0.7	〃	
116	—F_3	246	〃	3.5	0.5	〃	
117	—D_3	43	〃	3.5	0.7	〃	
118	—F_2	382	〃	3.5	0.7	〃	
119	—E_3	71	〃	3.9	0.6	ほぼ完存	
120	—D_3	24	〃	3.5	0.8	〃	
121	—E_3	2	〃	3.9	0.8	〃	
122	—H	5	〃	4.0	0.7	〃	
123	SA	37	〃	3.6	1.1	完存	
124	—C_2	14	〃	3.3	0.5	〃	
125	—F_3	274	〃	2.3	0.5	〃	
126	—F_2	247	VI—d	4.9	1.0	〃	両側縁に刻み
127	—E_3	17	〃	4.4	0.6	〃	〃
128	SA—C_2	18	VII—a_1	6.4	0.9	完存	反りが強い
129	—E_3	57	〃	6.3	0.9	一端欠損	
130	—W	1	VII—a_2	5.9	1.1	〃	
131	—E_2	66	〃	5.0	0.8	完存	反りが強い
132	SA	44	〃	3.8	0.7	〃	
133	—F_2	39	〃	不明	不明	損傷あり(計測不能)	
134	—E_2	61	〃	4.2	0.8	完存	
135	SA	63	〃	4.7	0.8	一端欠損	
136	—E_3	68	〃	(現存) 9.7	0.8	半端欠損	
137	—E_2	120	VII—b_1	6.0	1.3	両端欠損	
138	—F_3	356	〃	不明	1.0	一端、半端欠損	
139	SA	54	〃	5.0	1.2	一端欠損	
140	—E_3	33	VII—b_2	3.6	0.9	完存	
141	SA	52	〃	3.5	1.0	一端欠損	
142	—E_2	63	〃	3.4	0.7	一端欠損	
143	—D_3	18	〃	3.9	0.8	完存	
144	—E_3	16	〃	2.7	1.0	半端欠損	
145	—D_2	33	〃	3.5	0.8	両端欠損	

第16表(4)　骨角製刺突具観察表

掲載No.	出土区	遺物No.	種類	長さ(cm)	最大幅(cm)	現況	特長
146	SA－C_2	46	Ⅷ－b_2	不明	不明	半端欠損	
147	SA－H	1	Ⅷ－a	7.7	0.8	一端欠損	
148	－E_3	70	〃	8.0	0.7	〃	
149	－F_2	377　383	〃	5.7	0.5	〃	
150	－E_3	6	〃	5.7	0.5	〃	
151	－F_4	18	〃	5.7	0.5	〃	
152	－C_2	11	〃	6.5	0.7	完存	
153	－F_3	9	〃	5.6	0.6	〃	
154	－F_4	330	〃	不明	0.5	半端欠損	
155	－H	23	〃	〃	0.8	〃	
156	－E_2	105	〃	〃	0.5	両端欠損	
157	－E_3	113	〃	〃	0.7	〃	
158	－E_3	5	〃	5.6	0.8	完存	
159	－C_2	24	Ⅷ－b	不明	0.6	半端欠損	
160	－E_2	11	〃	〃	0.5	〃	
161	－F_3	369	〃	〃	0.5	〃	
162	－F_3	93	〃	〃	0.5	〃	
163	－H	38	〃	〃	0.6	〃	
164	－E_3	100	〃	〃	0.6	〃	
165	－E_2	75	〃	4.7	0.8	一端欠損	
166	－F_2	32	Ⅷ－c	9.3	0.7	一端欠損	
167	－D_2	62	〃	7.9	0.6	完存	
168	－F_2	389	〃	5.9	0.7	〃	
169	－E_2	47	〃	6.1	0.7	一端欠損	
170	－F_2	11　12	〃	5.6	0.6	完存	
171	－D_2	61	〃	不明	0.7	一端、半端欠損	
172	SA	4	〃	〃	0.7	〃	
173	－E_2	46	〃	〃	0.7	半端欠損	
174	－F_3	362	Ⅷ－b	〃	1.1	〃	
175	－F_3	343	Ⅷ－d	ϕ＝0.5×0.4		〃	鳥管骨利用
176	－E_3	3	〃	ϕ＝0.8×0.6		〃	〃
177	SA	50	Ⅸ	不明	1.1	半端欠損	半端の研磨粗い
178	－C_2	35	〃	〃	1.1～1.4	先端、半端欠損	鯨骨製
179	－D_2	7	〃	〃	1.2	半端欠損	原形不明
180	SA	56	〃	〃	不明	完存、磨耗あり、三角形	揉錐器類か
181	－E_2	104	〃	〃	0.4～0.5	上下端欠損	Ⅷ類か
182	－F_1	235	〃	〃	0.7	〃	〃
183	－E_2	103	〃	〃	0.7	〃	〃
184	－E_2	15	〃	〃	0.7	〃	〃
185	－D_2	52	〃	〃	不明	上半欠損	Ⅴaの下半部か
186	－F_2	271	〃	〃	〃		鹿四肢骨製、未成品か

第17表(1)　貝輪観察表

掲載 No.	出土区	番　号	原　材　料	掲載 No.	出土区	番　号	原　材　料
257	SA—H	8	サルアワビ	295	—F_2	227	ベンケイガイ
258	SA	68	〃	296	SA	67	〃
259	SA—H	9	〃	297	—E_1	27	〃
260	—C_2	311	ウチムラサキガイ	298	—F_4	26	〃
261	—F_3	272	ユキノカサ	299	—F_2	422	〃
262	—D_3	36	〃	300	—E_4	29	〃
263	—E_3	16	マツバガイ	301	—E_2	37	〃
264	—F_2	234	マツバガサ	302	—F_5	24	〃
265	—E_3	94 93	チョウセンハマグリ	303	—F_2	221	〃
266	—E_3	89	タマキガイ	304	—F_2	294	〃
267	—F_2	232	〃	305	—C_2	7	〃
268	—F_2	331	〃	306	SA	64	〃
269	—E_3	87	〃	307	SA—F_4	240	〃
270	—H	13	サルボウ	308	—E_2 —E_3	45 92	〃
271	—E_3	13	〃	309	—F_2	293	〃
272	—F_2	353	〃	310	—E_3	18	〃
273	—C_2	3	〃	311	—H	11	〃
274	—F_2	333	ウミウサギ	312	—D_3	40	〃
275	—F_2	239	ゲンケイガイ	313	—F_3	27	〃
276	—H	16	〃	314	—F_4	234	〃
277	—H	20	〃	315	—H	12	〃
278	—E_4	25	〃	316	—F_4	327	〃
279	SA	21	〃	317	—E_4	55 56	〃
280	—H	6	〃	318	—E_3	98	〃
281	—E_2	20	〃	319	—F_3	28	〃
282	—F_4	241	〃	320	—E_3	62	〃
283	—F_3	23	〃	321	—F_3	227	〃
284	—E_1	10	〃	322	—F_2	284	〃
285	—F_2	20	〃	323	—D_2	59	〃
286	—E_2	14	〃	324	—E_3	99	〃
287	—F_3	316	〃	325	—F_3	265	〃
288	—F_3	26 25	〃	326	—E_3	114	〃
289	—H	7	〃	327	—F_3	29	〃
290	—D_4	5	〃	328	SA	24	〃
291	—H	14	〃	329	—F_3	281	〃
292	—F_2	222	〃	330	—H	43	〃
293	—E_3	17	〃	331	—F_4	229	〃
294	—F_2	229	〃	332	—F_2	287	〃

第17表(2)　貝輪観察表

掲載 No.	出土区	番　号	原　材　料	掲載 No.	出土区	番　号	原　材　料
333	—F_3	231	ベンケイガイ	352	—F_3	144	ベンケイガイ
334	SA	33	〃	353	—D_2	23	〃
335	—D_2	58	〃	354	—F_2	320	〃
336	—F_2	288	〃	355	—C_2	25	〃
337	—F_4	237	〃	356	—F_2	321	〃
338	—E_2	97	〃	357	—F_2	233	〃
339	—F_3	277	〃	358	—F_2	321	〃
340	—F_2	354	〃	359	—F_2	332	〃
341	—F_3	232	〃	360	—F_2	375	〃
342	—F_2	352	〃	361	—D_3	38	〃
343	—F_4	310	〃	362	—F_4	269	〃
344	SA	1086	〃	363	SA	1087	〃
345	—C_2	9	〃	364	—F_2	273	〃
346	—F_4	244	〃	365	—F_4	230	〃
347	—E_3	15	〃	366	SA	1117	〃
348	—D_2	46	〃	367	—E_3	115	〃
349	—H	14	〃	368	—E_4	19	〃
350	SA	66	〃	369	—E_3	63	〃
351	—F_3	284	〃				

第18表　歯牙・骨製釣針観察表

掲載No.	出土区	遺物No.	種　類	原　材　料	L	R	鐖の位置		現　状　・　特　長
							歯冠部	歯根部	
187	F_1		Ⅰa	イノシシ♂下顎犬歯		○		○	L＝8.0cm
188	F_4	320	〃	〃　〃	○			○	L＝8.4cm
189	F_2	261	〃	〃　〃	○			○	現存L＝7.2cm
190		8	〃	〃　〃	○			○	L＝7.4cm、鐖部長大
191	E_5	3	Ⅰb	〃　〃		○	○		現存L＝6.1cm、鐖ダブル
192	C_2	6	Ⅰa	〃　〃	○		○		L＝6.7cm
193	H	37	〃	〃　〃		○		○	現存L＝4.0cm、鐖部長大
194	F_2	267	Ⅰa？	〃　〃	○			○	基部ノミL＝4.6cm
195	E_2	60	Ⅰc	〃　〃	○		○		〃　L＝6.2cm 繁縛かかり2
196	H	22	Ⅰa？	〃　〃		○	○		基部ノミL＝3.3cm 繁縛かかり3
197		5	Ⅱ	〃　〃		○	○		L＝4.3cm
198	H	38	〃	〃　〃					L＝4.8cm
199	E_3	9	〃	〃　〃	○			○	L＝5.2cm
200	E_3	8	〃	〃　〃	○		○		現存L＝4.3cm、基部欠損
201	C_3	5	〃	〃　〃	○		○		現存L＝4.6cm 鐖欠損基部かかり残存
202	C_2	4		〃　〃				○	L＝6.6cm
203	F_2	6		〃　〃	○		○		L＝5.5cm
204		43		〃　〃		○	○		L＝6.1cm
205	D_2	1		〃　〃					L＝5.9cm
206	F_3	344		シカ					L＝5.9cm
207	F_2	313		シカ？					現存L＝4.7cm
208	F_3	345		〃					現存L＝2.5cm
209	H	21		〃					現存L＝4.2cm
210	E_4	77		イノシシ？					L＝3.7cm
211	F_3	220		シカ？					L＝4.2cm

佐賀貝塚の問題点（まとめにかえて）

佐賀貝塚の発掘調査において、多くの成果があったが、同時に今後に残された問題点も少なくない。以下に成果と問題点を記して結びとしよう。

1．対馬の集落今昔

佐賀貝塚の調査において縄文後期の住居跡3棟を検出した。対馬における住居跡の発見は過去になく、長年の夢であったが、今回果たされたことになる。僅かな海岸の平地を利用した住居であり、地盤としては脆弱な対州層群砂礫の海浜に住むための工夫が十分窺えるものであるといえよう。つまり、主柱を立てる土壙壁を板石で保全し、ある住居は竪穴を構築せず、平地式にするなどの工夫である。同時に対馬における居住可能な空間は、従前いわれたように海岸のわずかな平地に限られていたことを実証したといえよう。

今までに対馬で実施された調査は、現在の人文界から隔離された岬にある墓地が殆どであった。従って古代対馬島人の生活実態は分かりにくいものであったが、今後において現在の集落の空き地などに積極的に目をむけていく必要性を佐賀貝塚の調査は示している。

2．対馬縄文人の墓地

今回の発掘調査について縄文後期の埋葬人骨4体を検出することができたが、対馬縄文人の形質をはじめて知り得ることになった。日韓国境の島における縄文成人の形質は注目されるところである。埋葬に際して被葬者を礫と貝殻で覆う方法は本遺跡に2例見られたが「配石」の類であろうか。「配石」については、祭祀遺構あるいは埋葬遺構とする考えがあるが、本遺跡の被葬者を覆う礫群の場合は明らかに埋葬に伴うものである点を注目しておきたい。

3．佐賀貝塚の骨角器

佐賀貝塚の調査において500点近い骨角器が出土した。刺突具186点、釣針25点、狩猟具5点、装身具140点等、出土量の多さは注目に価する。一つには、対馬には石鏃等の剝片石器作りに必要な黒曜石の原産地がなく、骨角製利器への依存度を高からしめたものであろう。

骨角器自体の中で注目されるのは刺突具である。分類の中でII類・III類とした一群の刺突具は渡辺誠氏が「一王子型」（註1）とし、金子浩昌氏「開窩式」（註2）とされた離頭銛に類する資料である。渡辺誠氏が「(一王子式) 回転式離頭銛がリマン海流に乗って朝鮮半島の東海岸を南下し、縄文後期には対馬佐賀貝塚まで南下する」（註3）とされているが、日本海海域に広く使用されたものであろう。また、「西北九州型」釣針も注目されるが、長崎県脇岬（わきみさき）遺跡（註4）、同五島列島宮下貝塚（註5）、対馬志多留（したる）貝塚（註6）、や韓国上老大島貝塚など対馬海流域の新石器時代に広く使用されている漁撈具であり、海を介しての交流を窺わせる資料である。キバノロ犬歯製装飾品1点が出土しており、原材料もしくは製品自体が朝鮮半島から搬入されたことが確実である（註7）。

佐賀貝塚出土骨角器の中に鹿笛1点があり、縄文時代の狩猟を考える上で重要な資料を提供することになった。鹿笛の考古資料として7世紀とされる2例があることを本分中に記したが、考古資料と民俗例、使用法等については拙稿（註8）に譲ることにしたい。現時点では北海道から鹿児島県まで民俗例16ほどがあり、伝統的な狩猟具であるが、考古資料については事例に乏しく類例の増加を期待したい。また本例の出土地が対馬という位置であることを考えれば、朝鮮半島や大陸に類例のあることが十分に予察されるが、筆者の知見の中にはなく、類例について教示を期待したい。

4．対馬に搬入されたもの

佐賀貝塚から約3,700点の黒曜石が出土しているが、肉眼観察による限り殆どが佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石である。南隣の壱岐島には黒曜石原産地が4箇所あるが佐賀貝塚出土資料中には数例を見るにすぎない。佐賀貝塚に搬入したのは対馬縄文人であろうが、対馬島内での使用目的と一部朝鮮半島への搬出目的があったことが考えられる。長崎県西彼杵半島の西彼杵結晶片岩類の搬入を事前に予測したが、蛇文岩製石斧2点、結晶片岩片2点が出土した。これらの石材は壱岐島まではかなりの量が搬入されているが、対馬への搬入量は全島的にみてもきわめて数少なく、対馬縄文人の長崎県本土への往来が頻繁でなかったことをしめしている。佐賀貝塚出土の貝に関して山本愛三氏は、長さ8.5cmの巨大なホシキヌタ製装身具について南海からの搬入を示唆しており、貝輪の中で、サルアワビ・ユキノカサ製のものについては北日本海からの搬入品である、とされている。また、キバノロ上顎犬歯製垂飾は朝鮮半島からの搬入品であることは金子浩昌氏が指摘されたところである。

5．石斧の量産

佐賀貝塚では312本の各種石斧が出土している。石材は対馬産の硬質砂岩と頁岩である。前述の石斧の数は発掘面積（約350m²）に比すれば、1.1m²あたり1本の出土率であり、多量にすぎる感がある。縄文後期以後に石斧の量産があることが知られ、桑飼下遺跡（註9）等で報告されている。この遺跡の場合100m×30m範囲に750本の石斧の出土が報じられており、単位面積4m²に1本の石斧が出土したことになる。比較してみて佐賀貝塚の石斧出土数の多さが理解できる。石斧の素材に利用されるのは硬質の砂岩と頁岩であるが、この内頁岩は層状の摂理をもち、弥生時代においてしばしば磨製石剣の素材となり、美麗な縞目をみせる。また、佐賀貝塚Ⅶ・Ⅸ類石斧に多用されている硬質砂岩も層状の美麗な縞目が研磨によって現れる。

これらの石斧が対馬島内に搬出されている例は、美津島町芋崎海岸（註10）・豊玉町貝鮒（註11）・同町鑓川（註12）など事例も多い。一方対馬外でこの種石材製の石斧出土例は五島列島鰐川貝塚（註13）・北松浦郡鹿町町御堂池遺跡（註13）の資料に対馬産石材製と見られるものがある。これらの石斧のうち鰐川貝塚例は縄文後期、他の遺跡例は縄文時代と考えられるものの時期不明であるが、対馬産石材製石斧が九州本土で出土する可能性があることを示していよう。佐賀貝塚で量産された石斧が対馬の内外に供給された可能性の実証は今後の問題であるが、佐

賀貝塚人の島外活動に交易が含まれていた可能性がある。

〔註〕

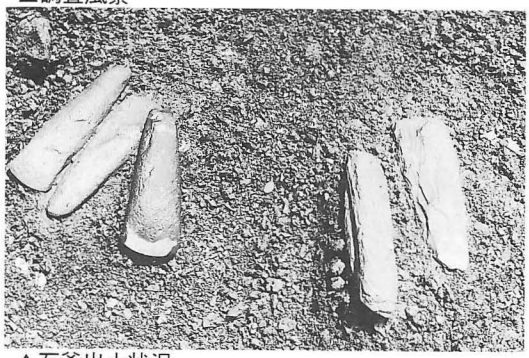
1．渡辺誠『西北九州の縄文時代漁撈文化』「列島の文化史」日本エディタースクール出版部1985
2．金子浩昌・忍沢成視『骨角器の研究』縄文篇慶友社　1986
3．渡辺誠『縄文・弥生時代の漁業』「秀刊考古学」第25号　1988
4．坂田邦洋『西九州・対馬・韓半島西南』考古学ジャーナル　№295　1988
5．長崎県教育委員会『宮下遺跡調査報告』1971
6．坂田邦洋『対馬の考古学』縄文文化研究会　1976
7．金子浩昌氏の教示による
8．正林護『鹿笛考』「乙益重隆先生古希記念論集」1989
9．桑飼下遺跡発掘調査委員会『桑飼下遺跡第二次発掘調査概報』1974
10．1989年２月、対馬峰町杉原氏が遺跡を発見され、持参された資料
11．西健一郎『豊玉村出土の石器』「対馬」長崎県教育委員会　1974
12．註11におなじ
13．正林護『鰐川貝塚』「長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ」長崎県教育委員会　1982
14．正林護他『大野台遺跡』重要遺跡範囲確認調査報告　鹿町町教育委員会　1983

図　　版

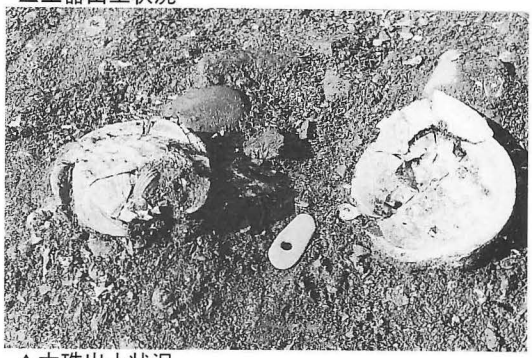
ＰＬ１　遺跡遠景（南から）　①佐賀貝塚　②佐賀漁港

▲調査風景

▲土器出土状況



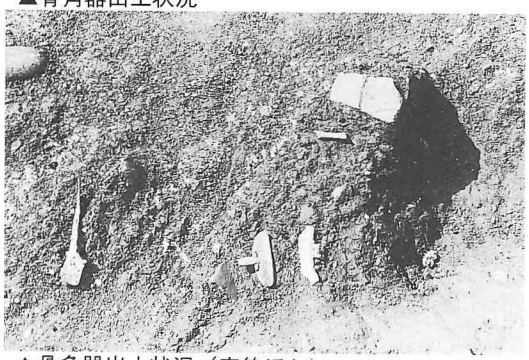
▲石斧出土状況



▲大珠出土状況

▲骨角器出土状況

▲骨角器出土状況



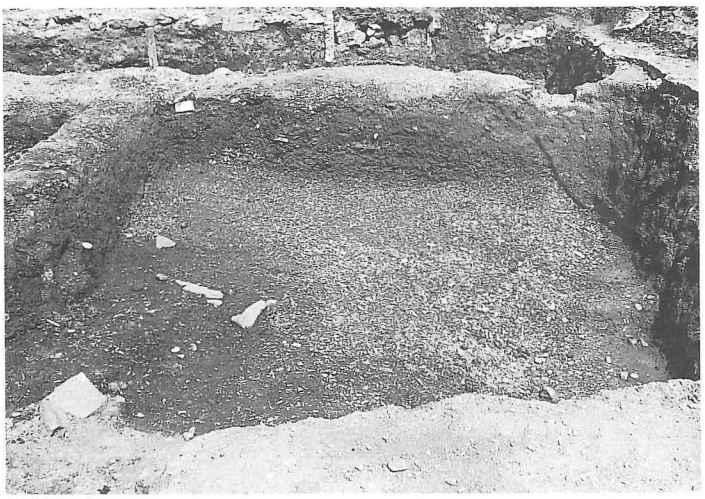
▲骨角器出土状況（鹿笛ほか）

▲骨角器出土状況

PL 2　遺跡と遺物出土状況

F5区北壁

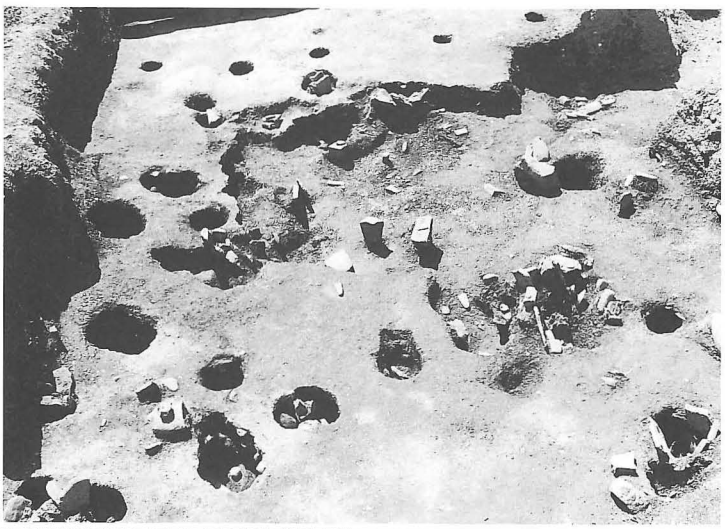
E4東壁



土層と旧海浜

PL 3　土層

柱穴群（南から）



二号住居跡

二号住居跡の柱穴

PL 4　遺構

▲1号人骨出土状況

▲3号人骨出土状況

▲2号人骨出土状況

▲4号人骨と礫群

▶4号人骨出土状況

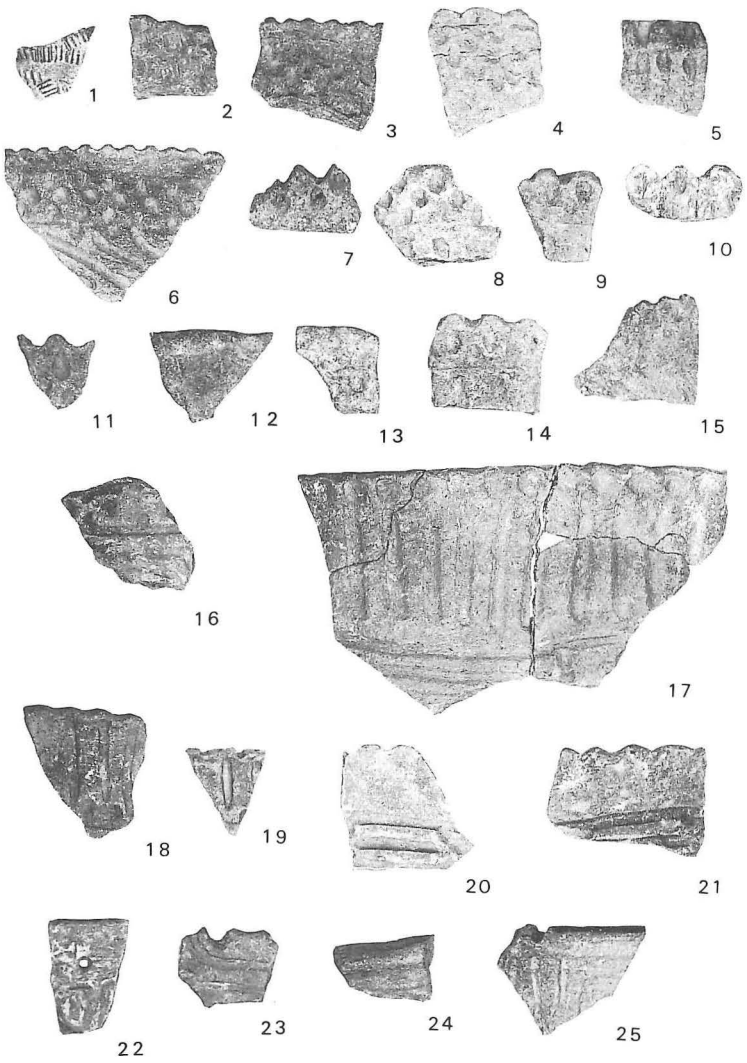
PL 5　遺構

歴史時代の遺物

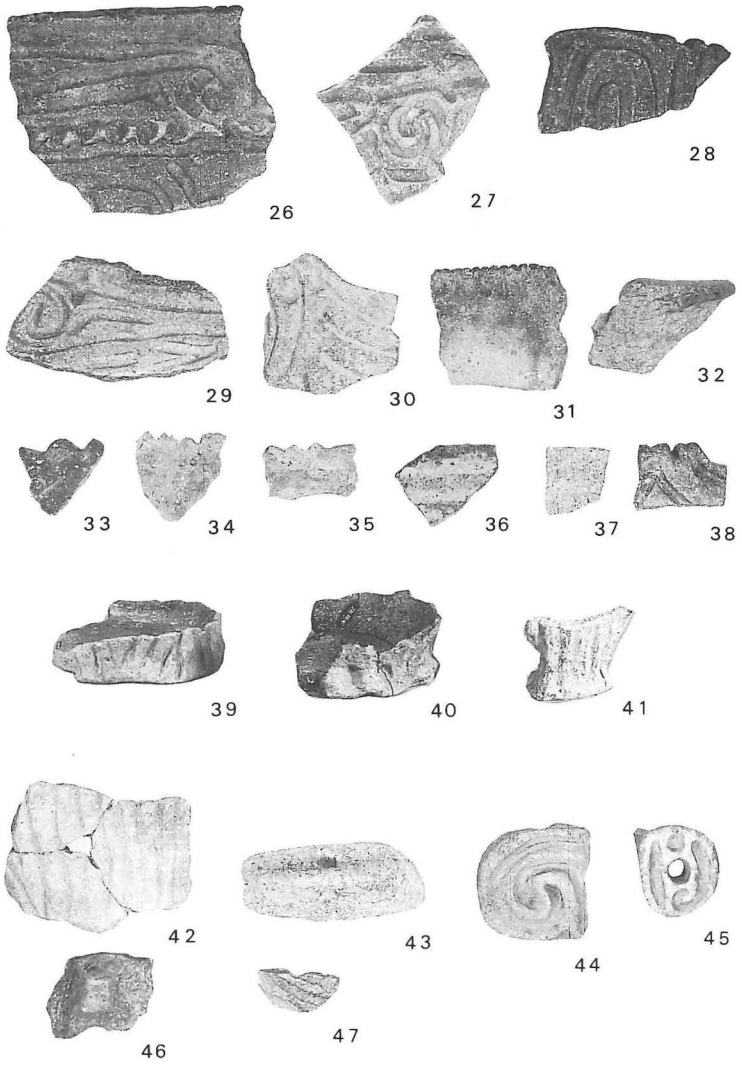
古墳時代の遺物

弥生時代の遺物

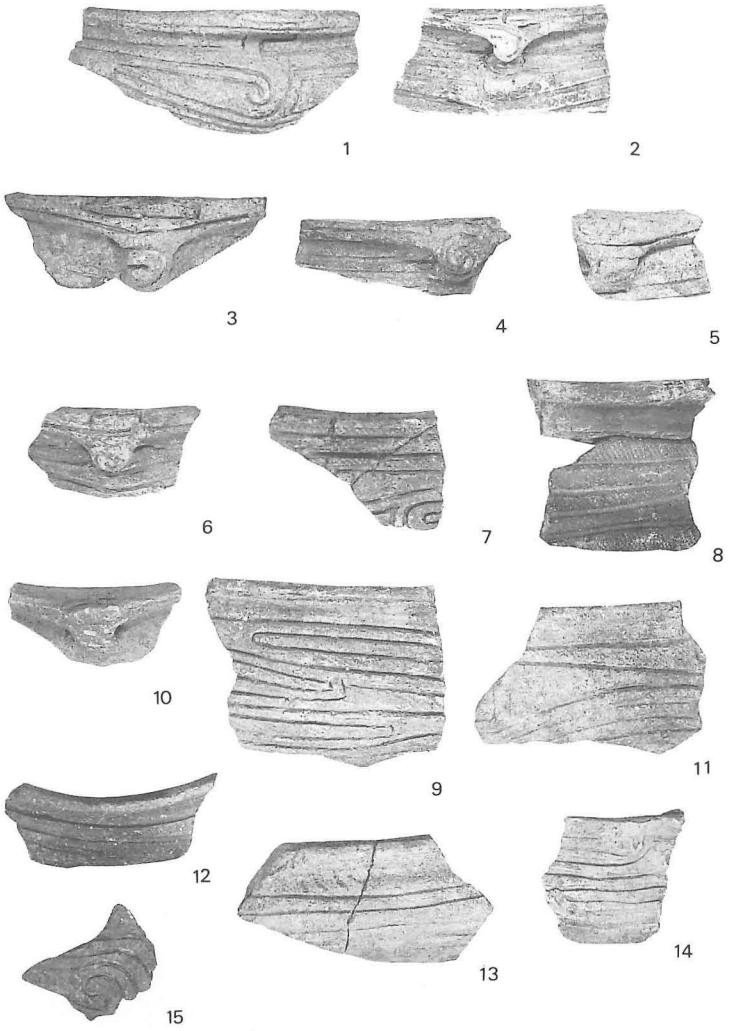
PL 6　遺物



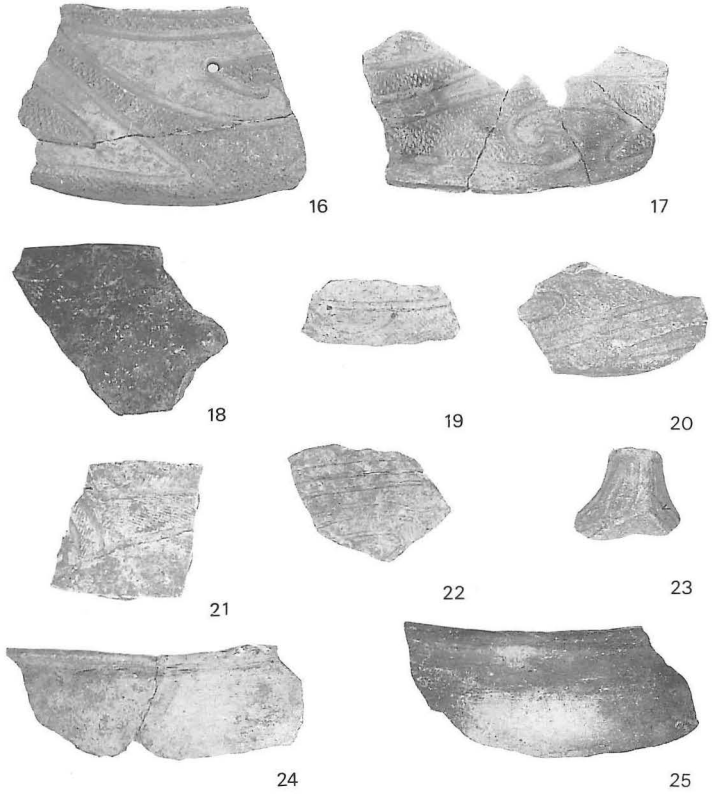
ＰＬ７　縄文中期の土器１（１/３）



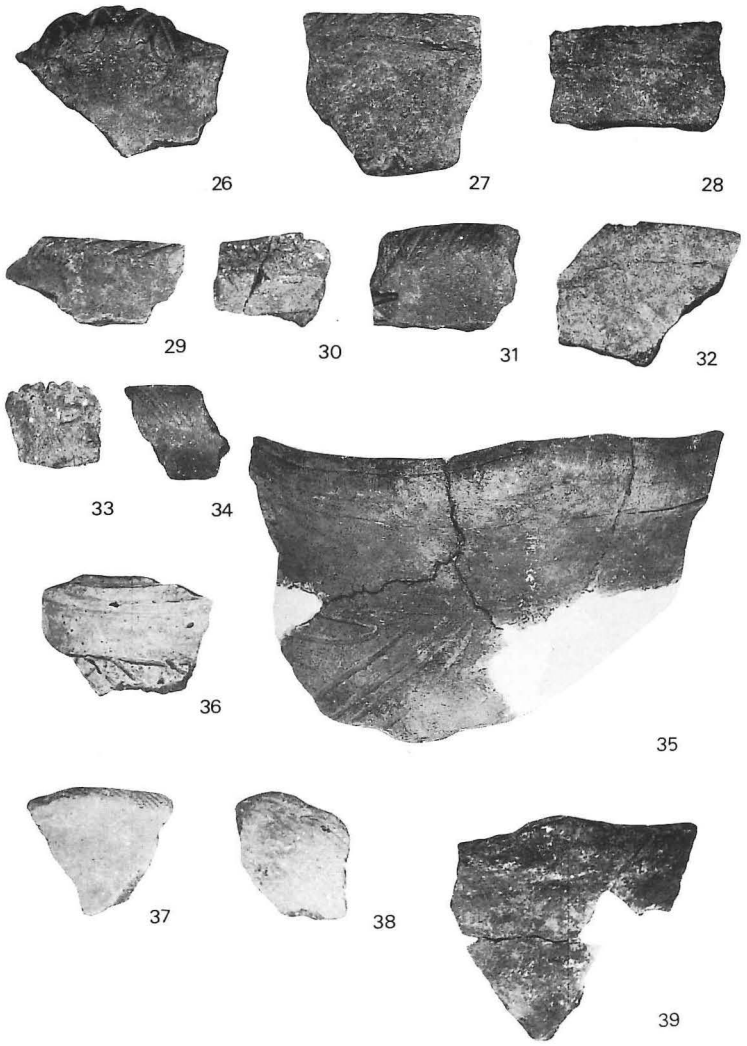
ＰＬ８　縄文中期の土器２（１/３）



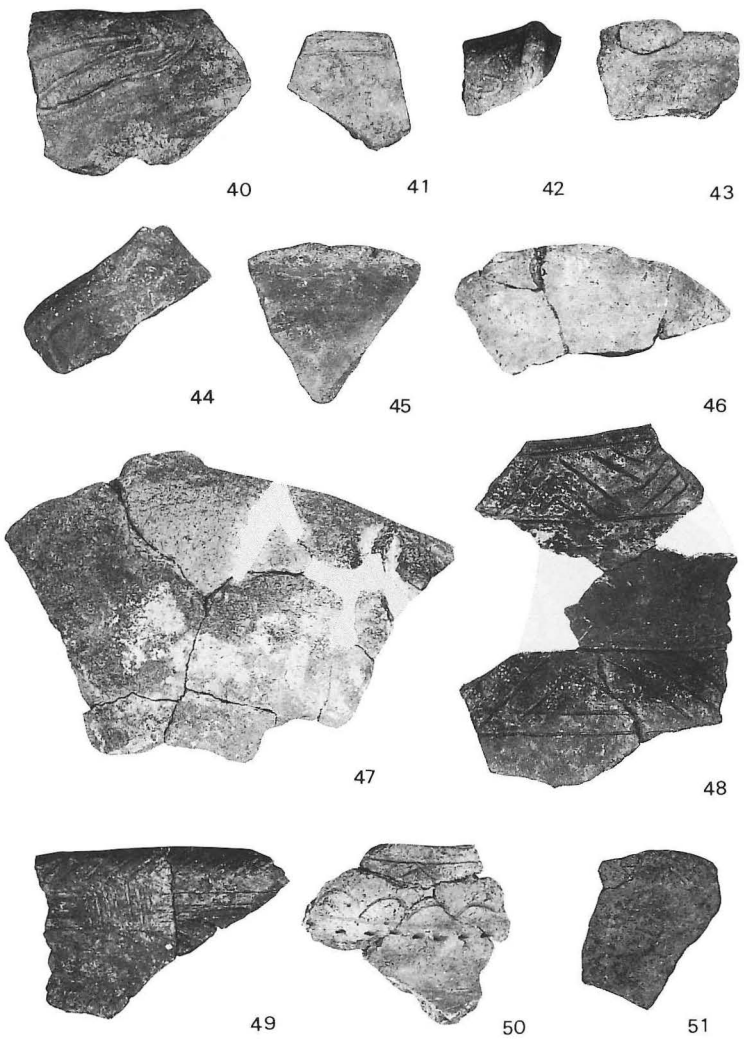
ＰＬ９　縄文後期の土器１（１／３）



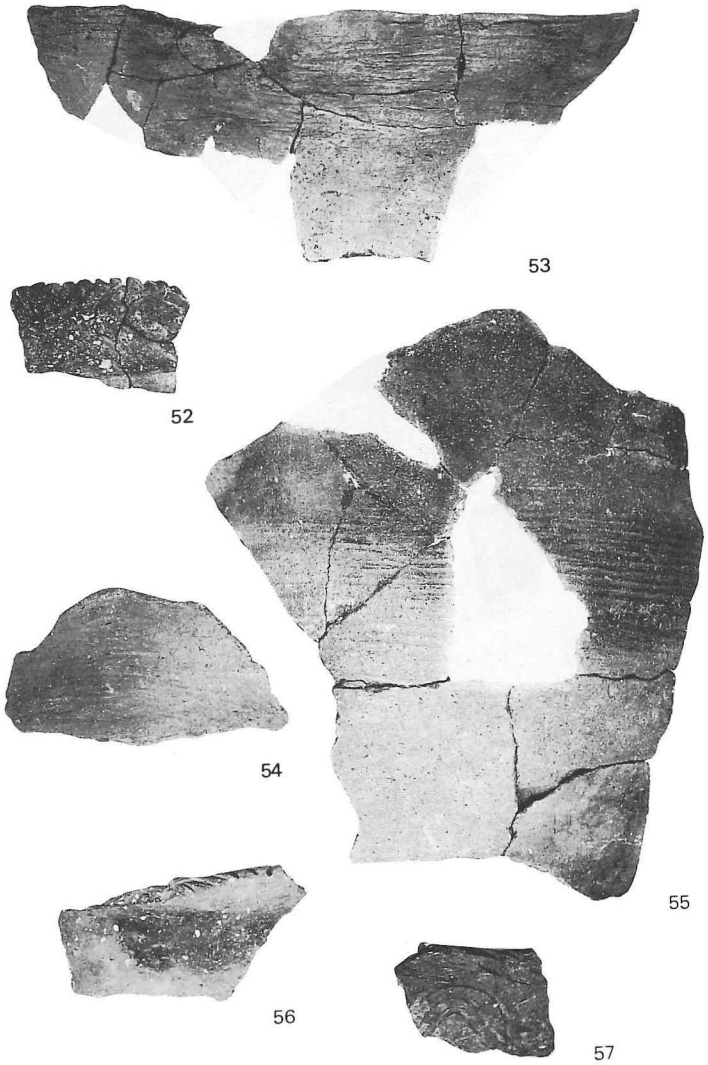
ＰＬ10　縄文後期の土器２（１／３）



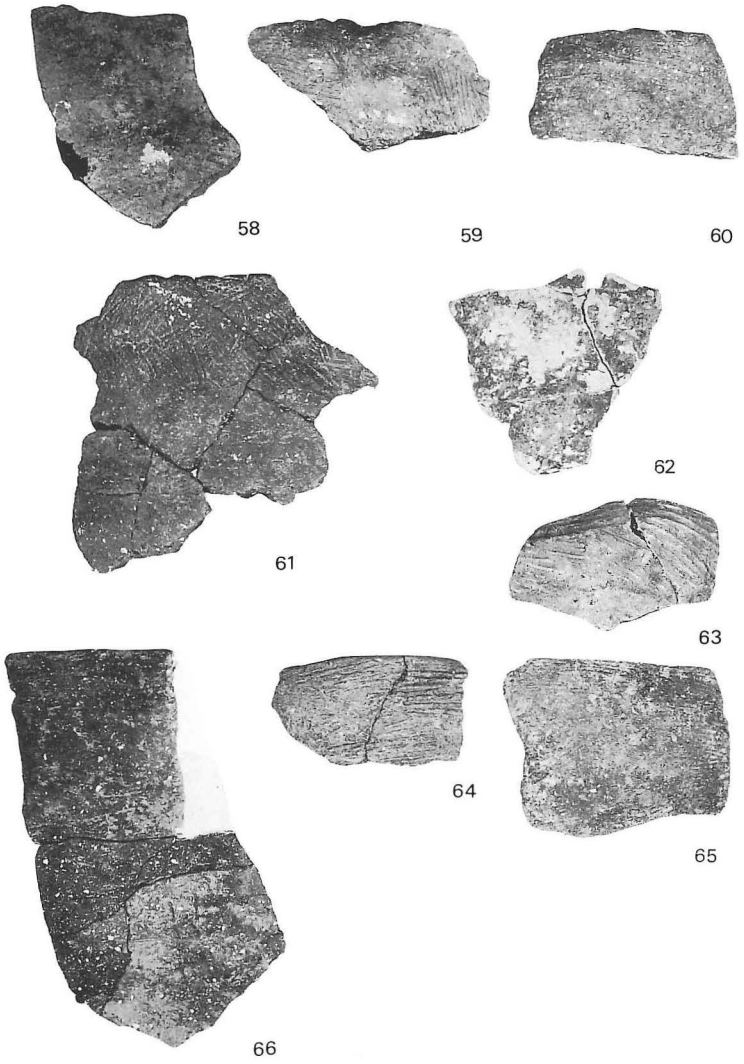
PL11　縄文後期の土器3（1/3）



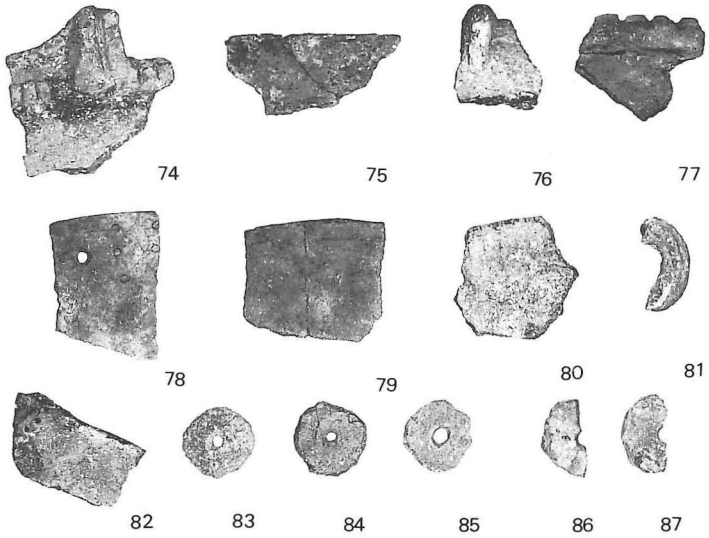
PL12　縄文後期の土器4（1/3）



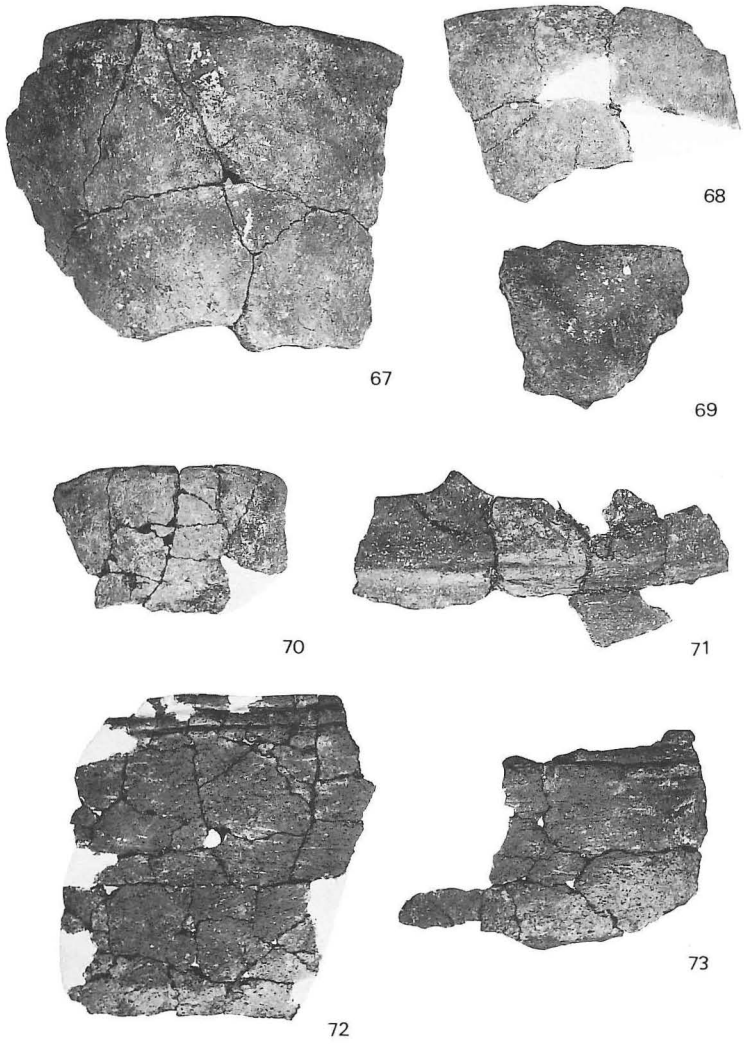
ＰＬ13　縄文後期の土器５（１/３）



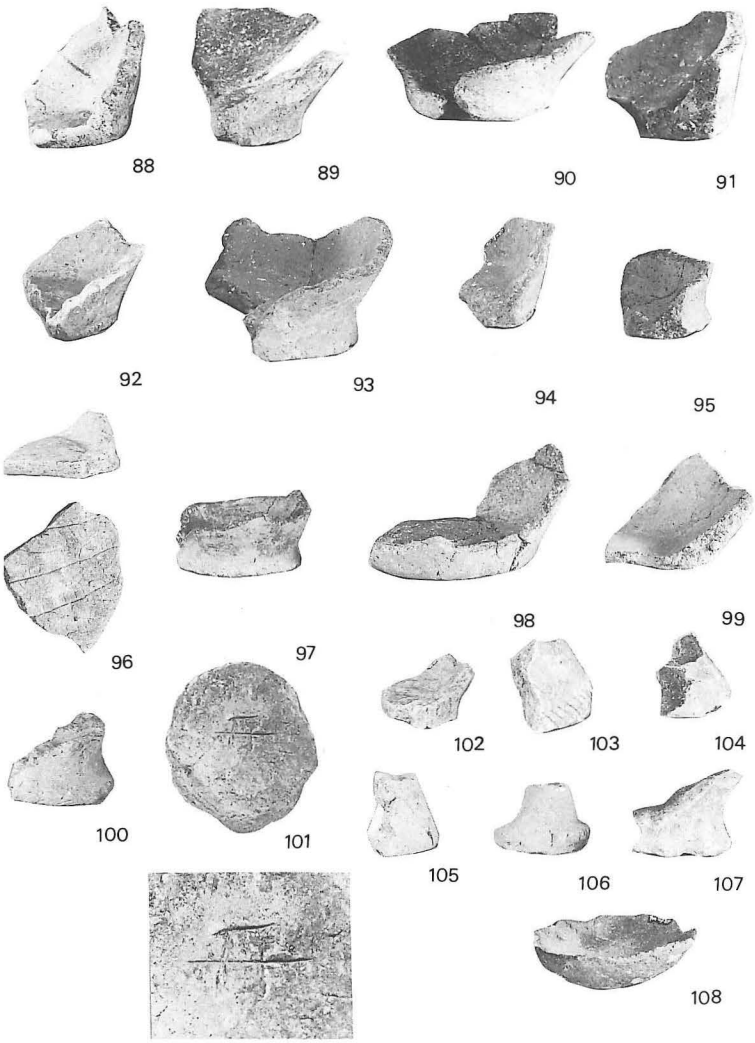
ＰＬ14　縄文後期の土器６（１/３）



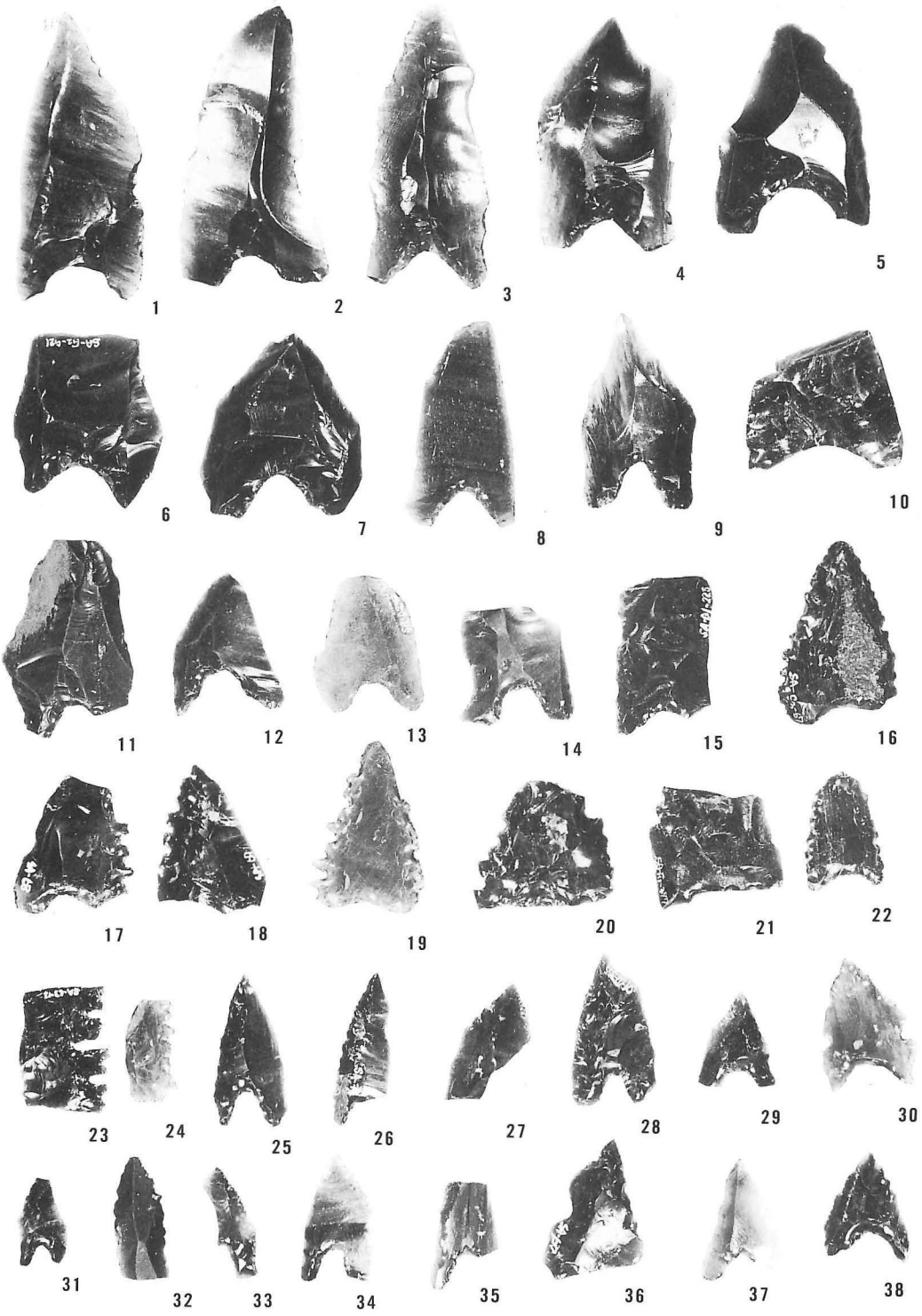
PL15　縄文後期の土器 7 （1 / 3）



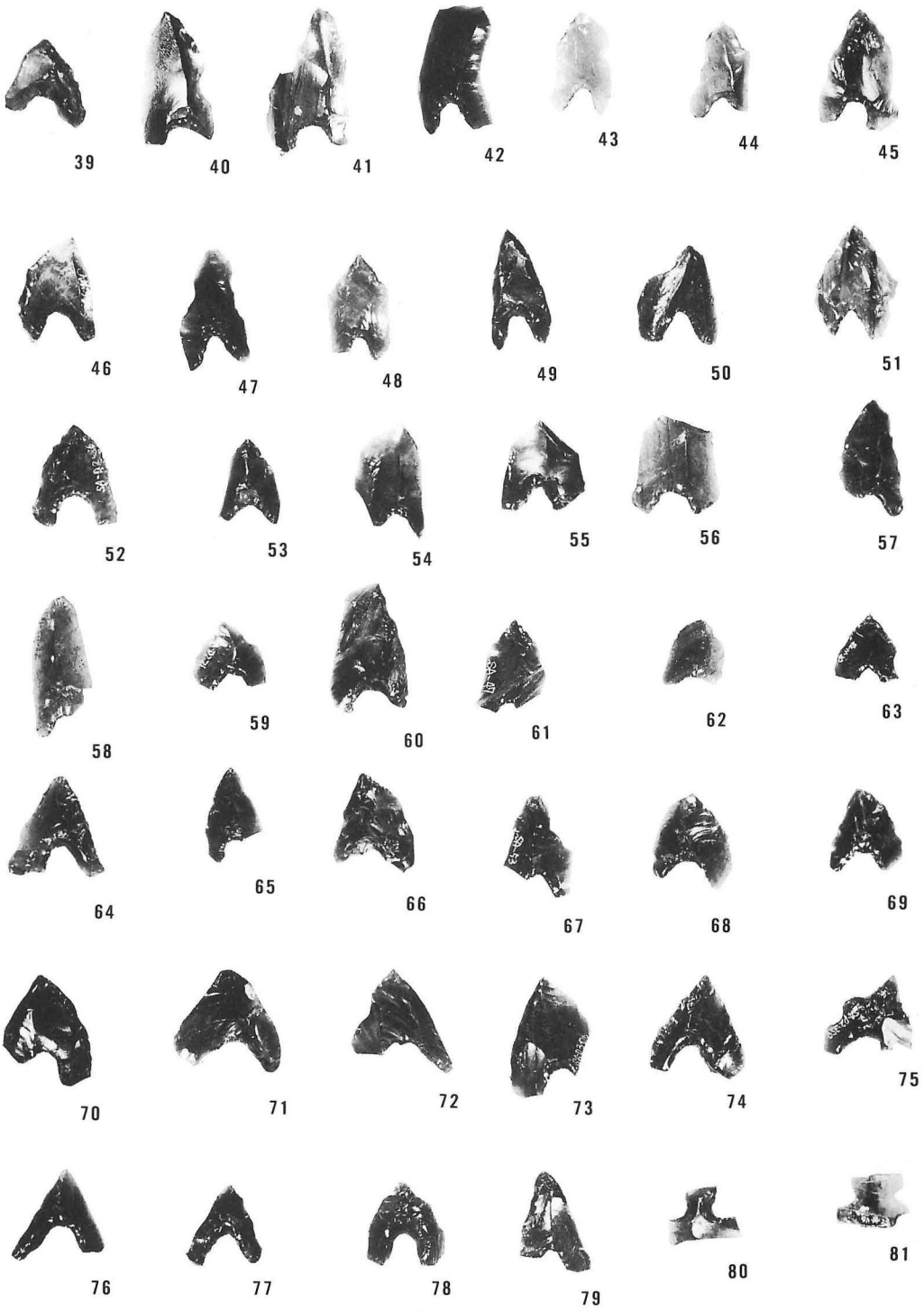
PL16　縄文後期の土器 8 （1 / 3）



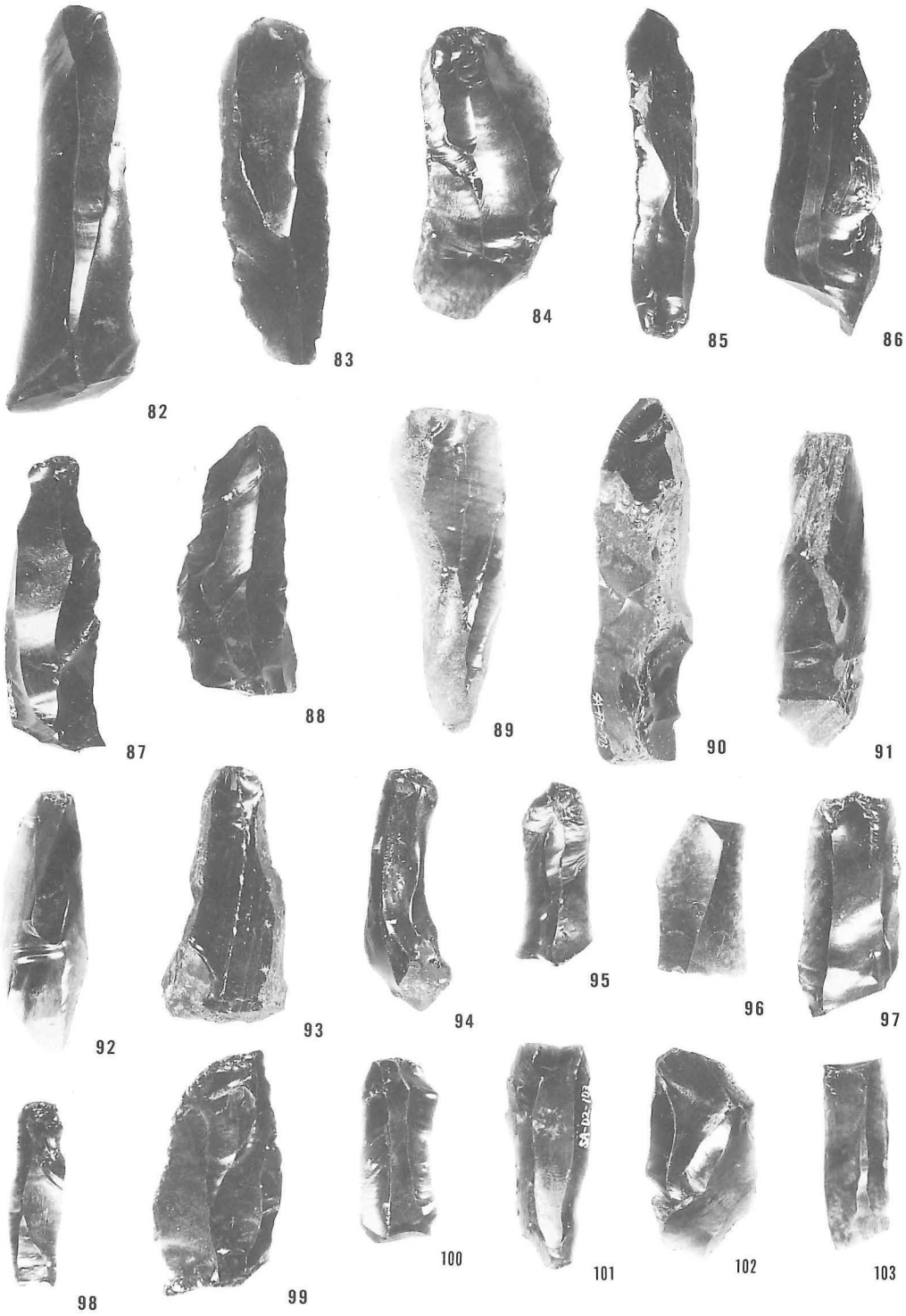
PL17　縄文後期の土器 9 （1 / 3）



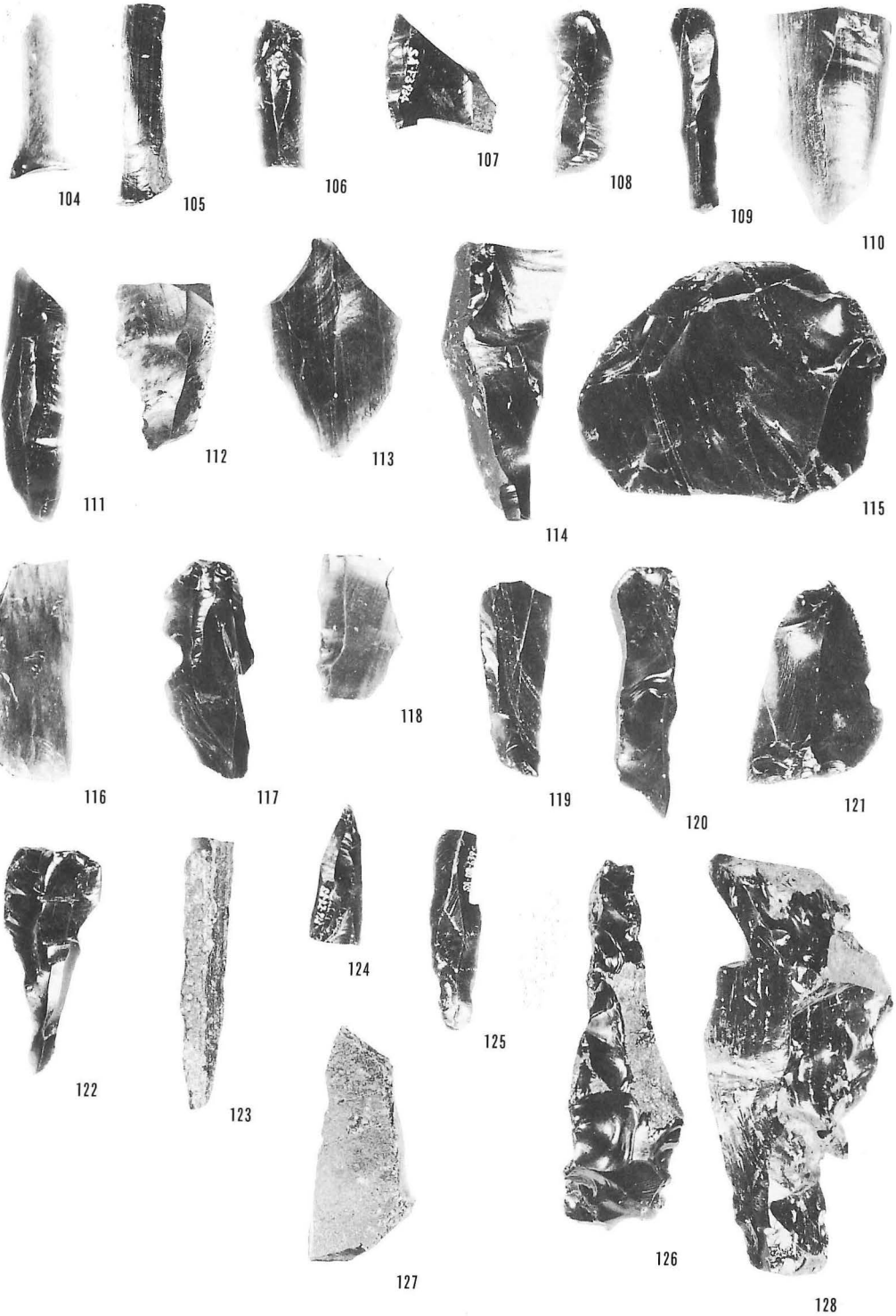
PL18　縄文後期の石器１（２/３）



ＰＬ19　縄文後期の石器２（２／３）



ＰＬ20　縄文後期の石器３（２／３）



PL21　縄文後期の石器４（２/３）

129

130

131

132

133

134

135

136

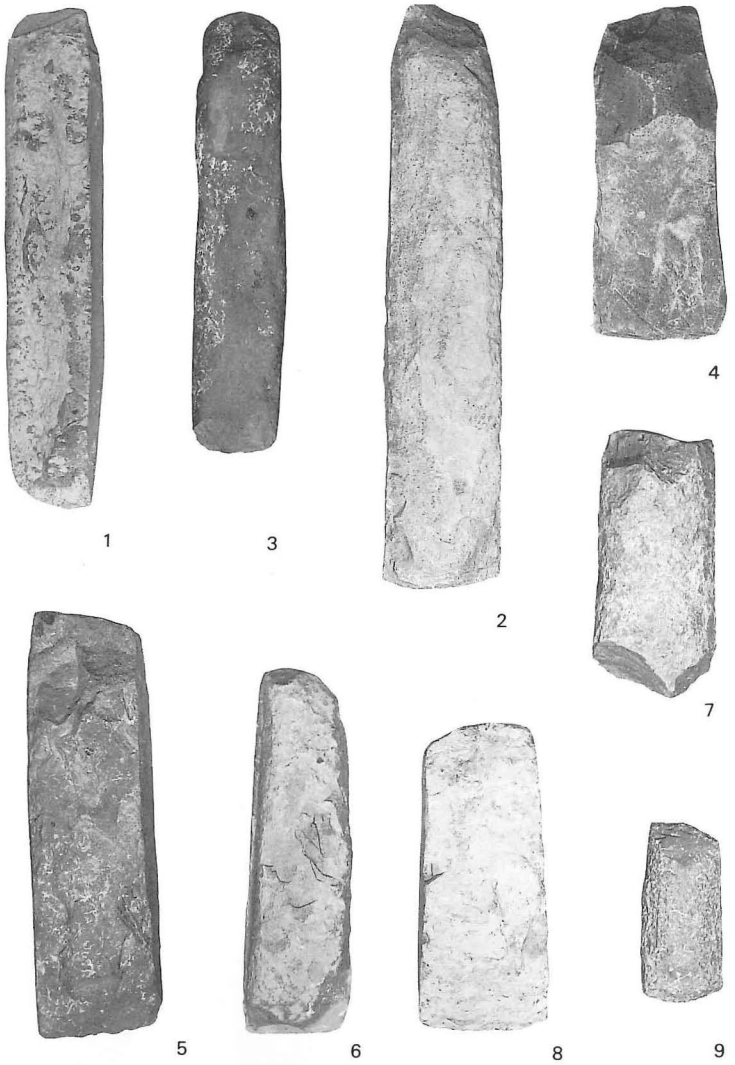
137

138

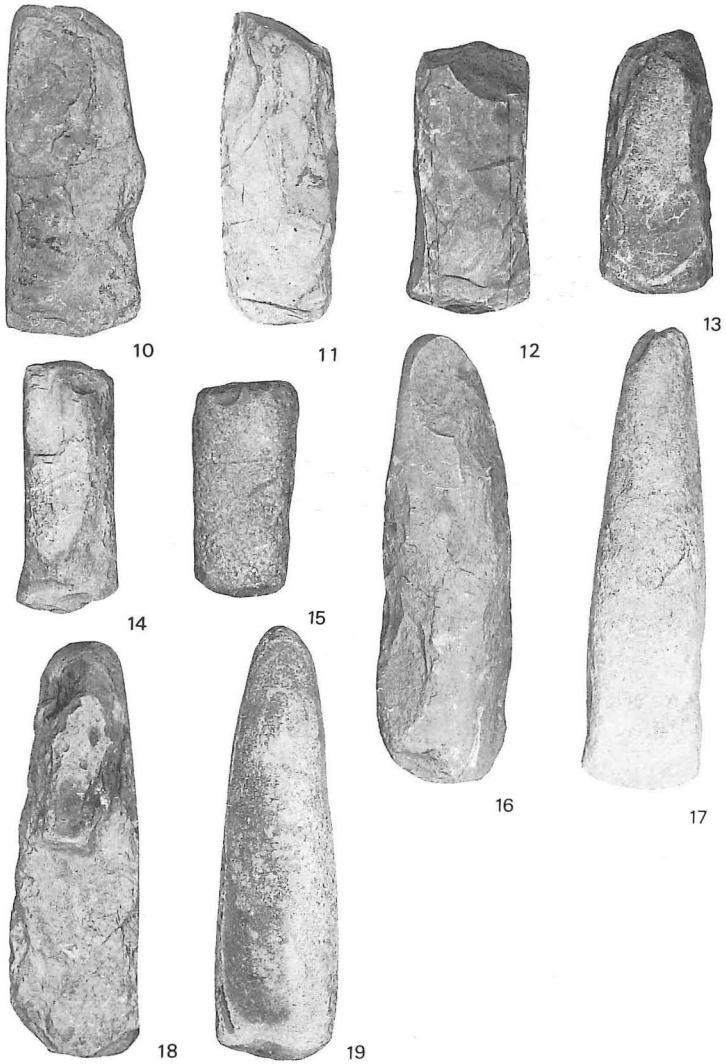
139

140

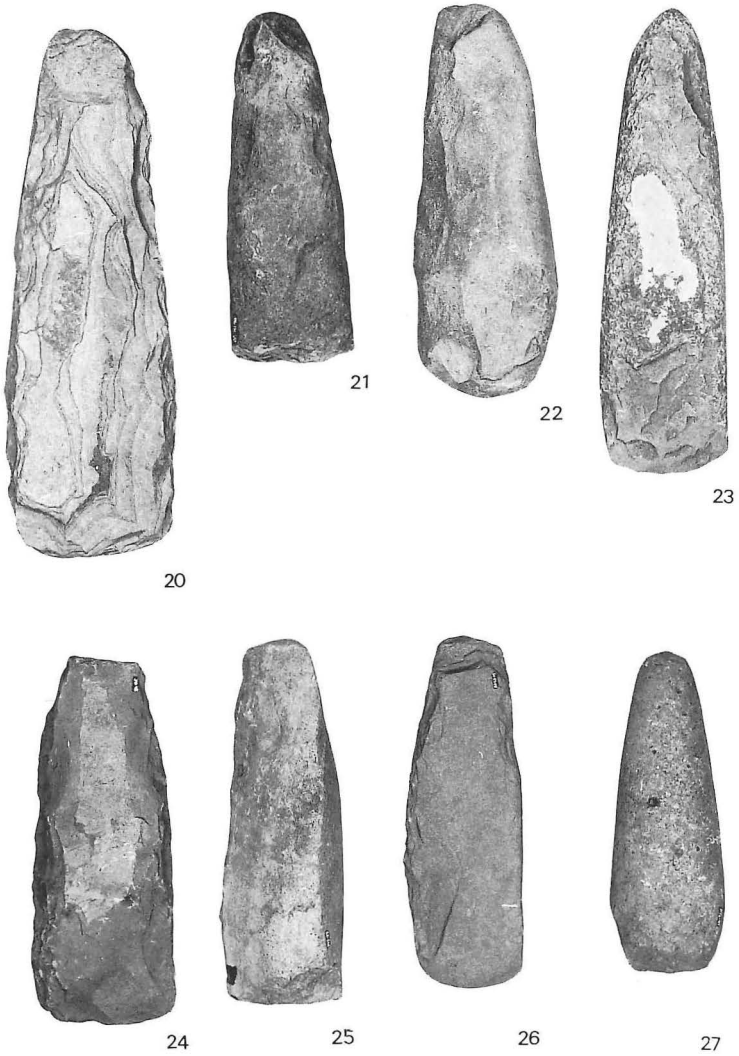
PL22　縄文後期の石器 5 （2 / 3）



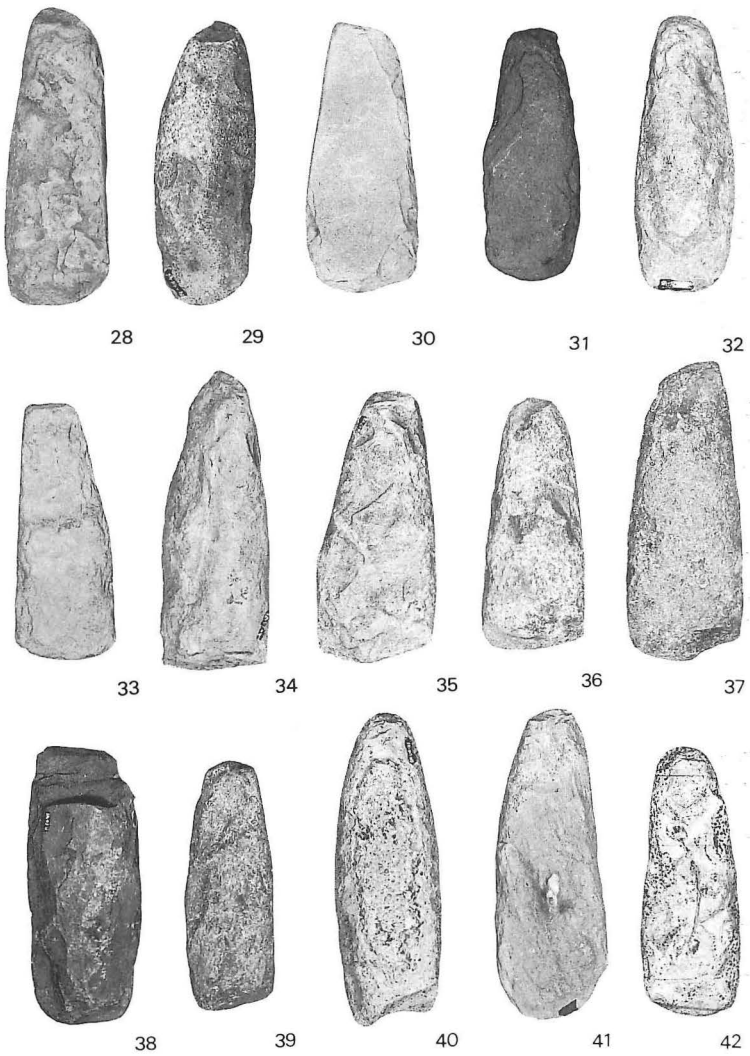
ＰＬ23　縄文後期の石斧１（１/３）



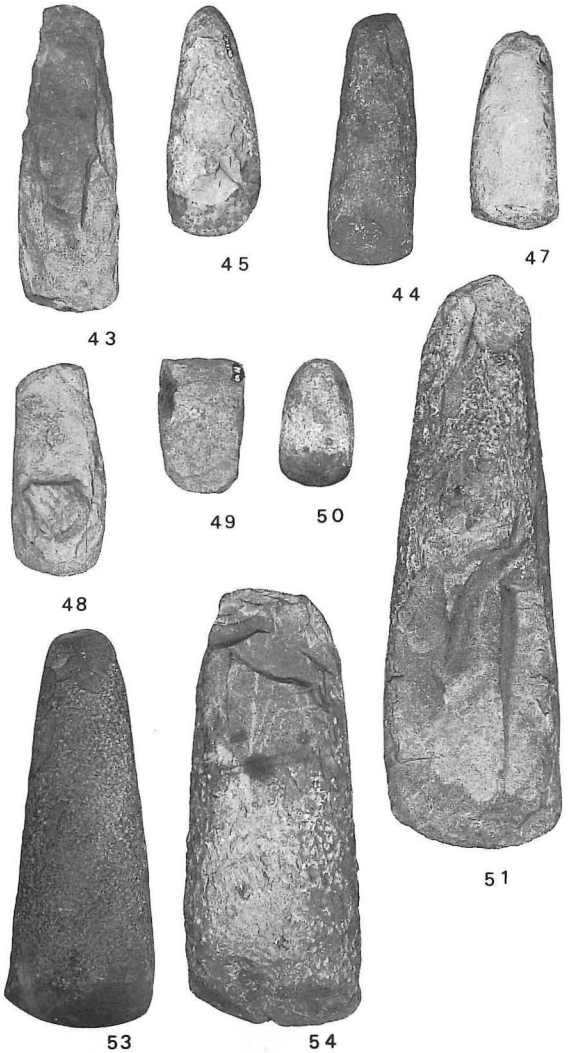
ＰＬ24　縄文後期の石斧２（１/３）



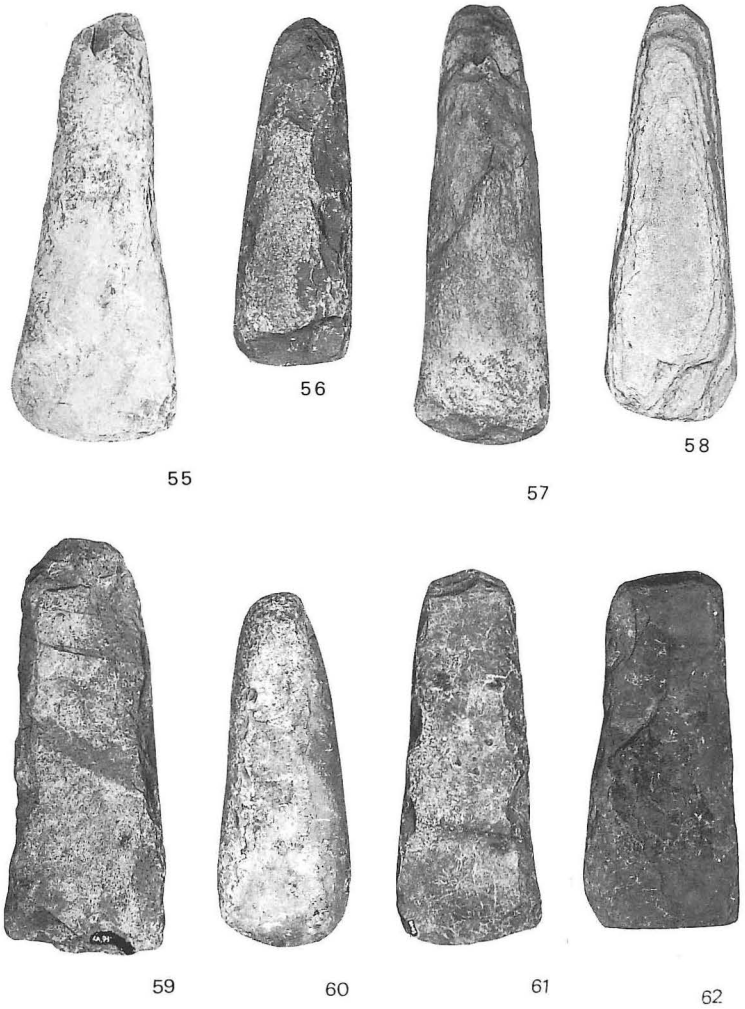
PL25　縄文後期の石斧 3 （1 / 3）



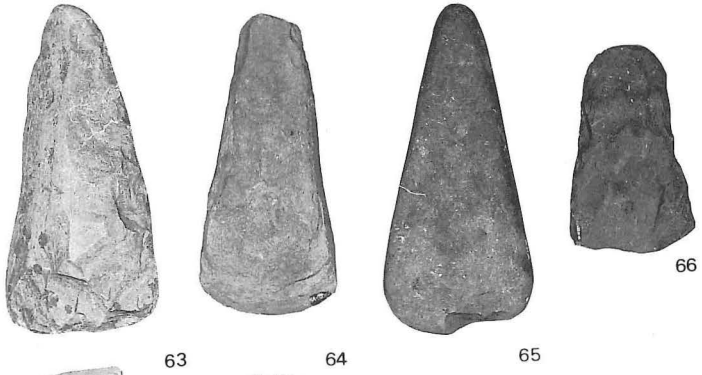
PL26　縄文後期の石斧 4 （1 / 3）

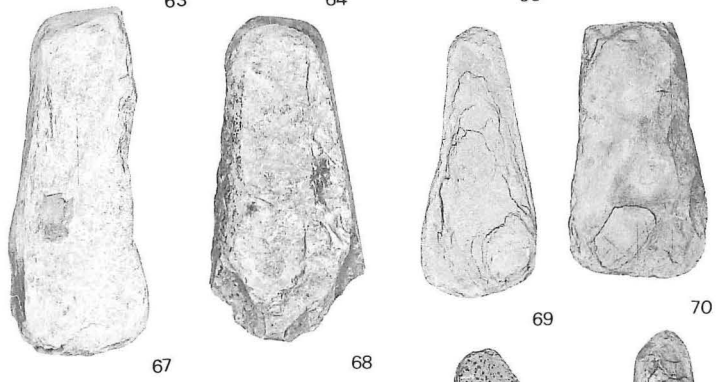


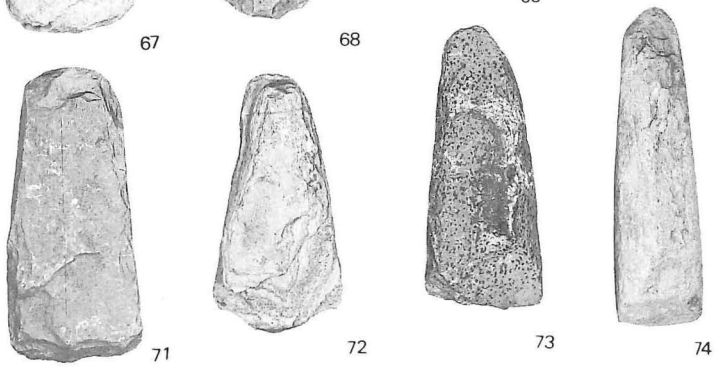
PL27　縄文後期の石斧5（1/3）



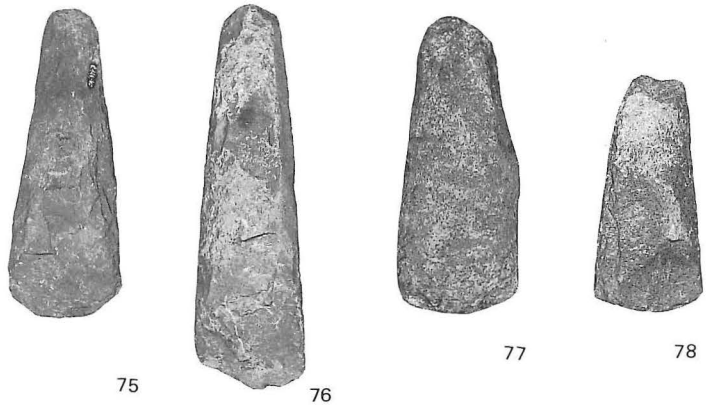
PL28　縄文後期の石斧6（1/3）

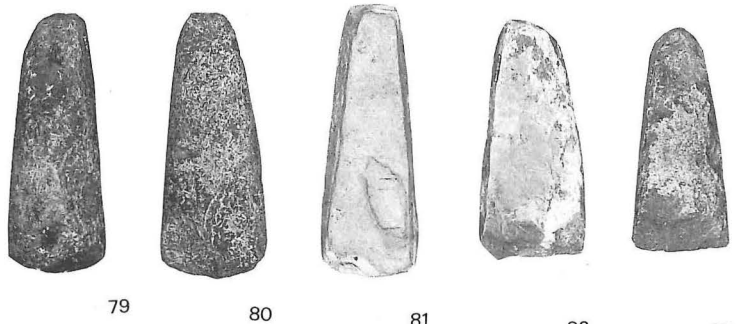


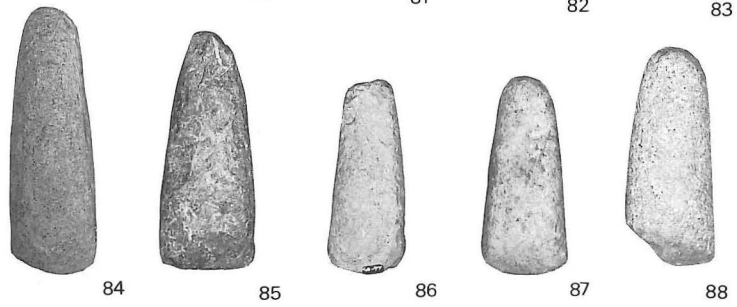




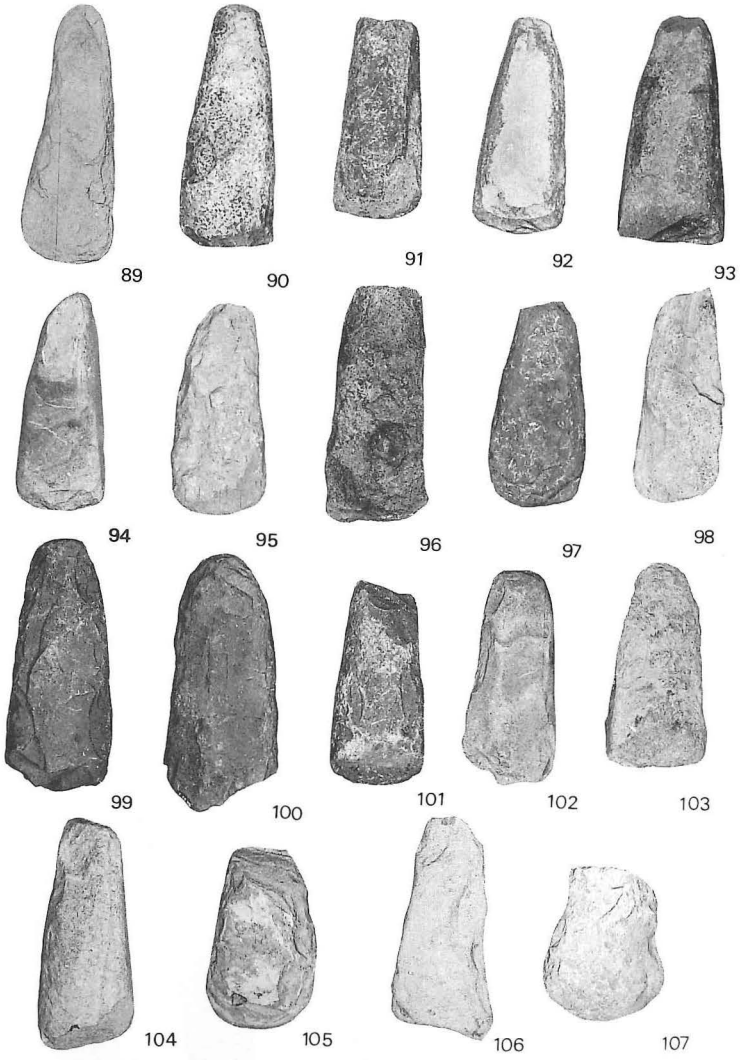
PL29　縄文後期の石斧 7 （1 / 3）



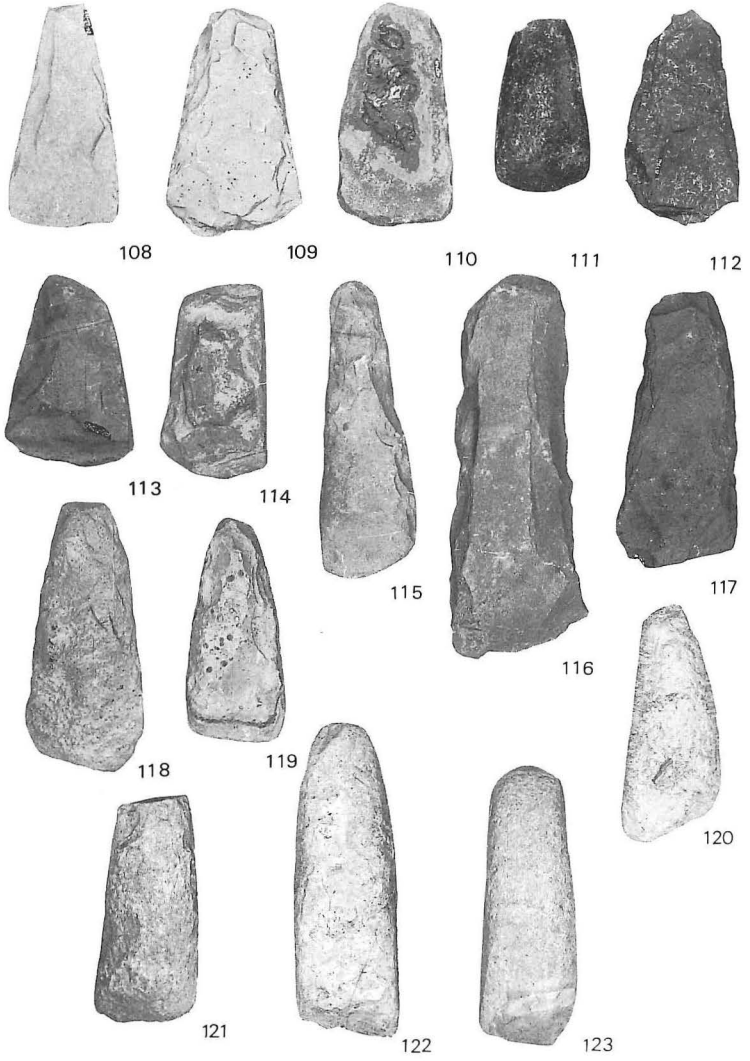




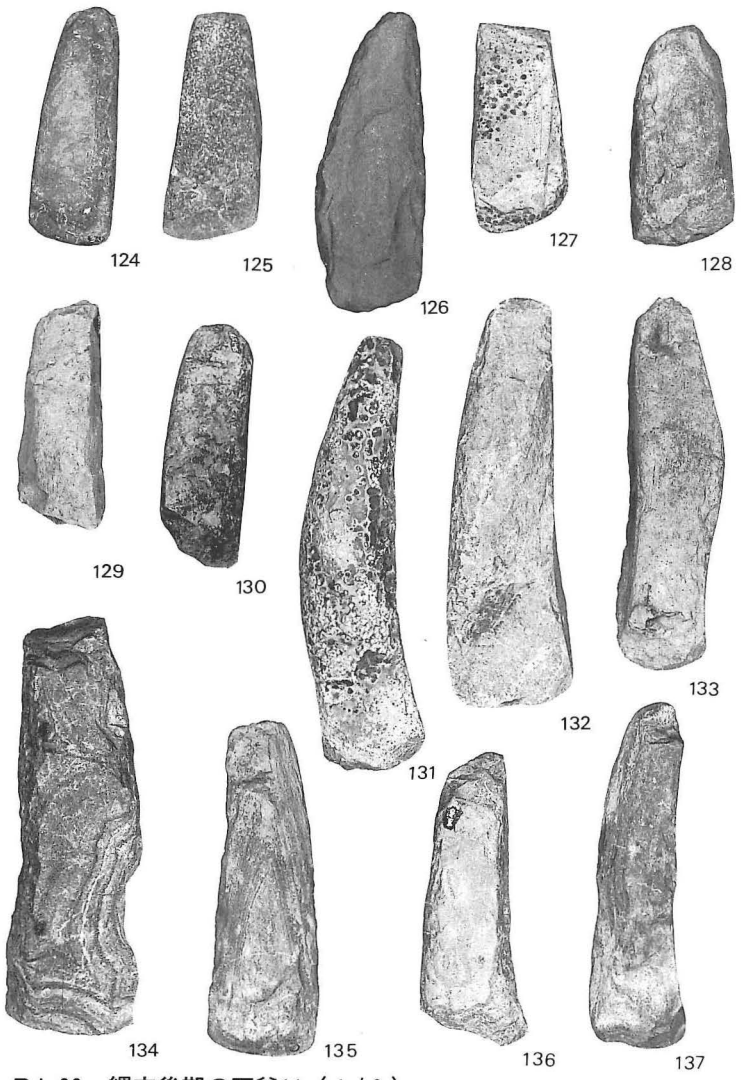
PL30　縄文後期の石斧 8 （1 / 3）



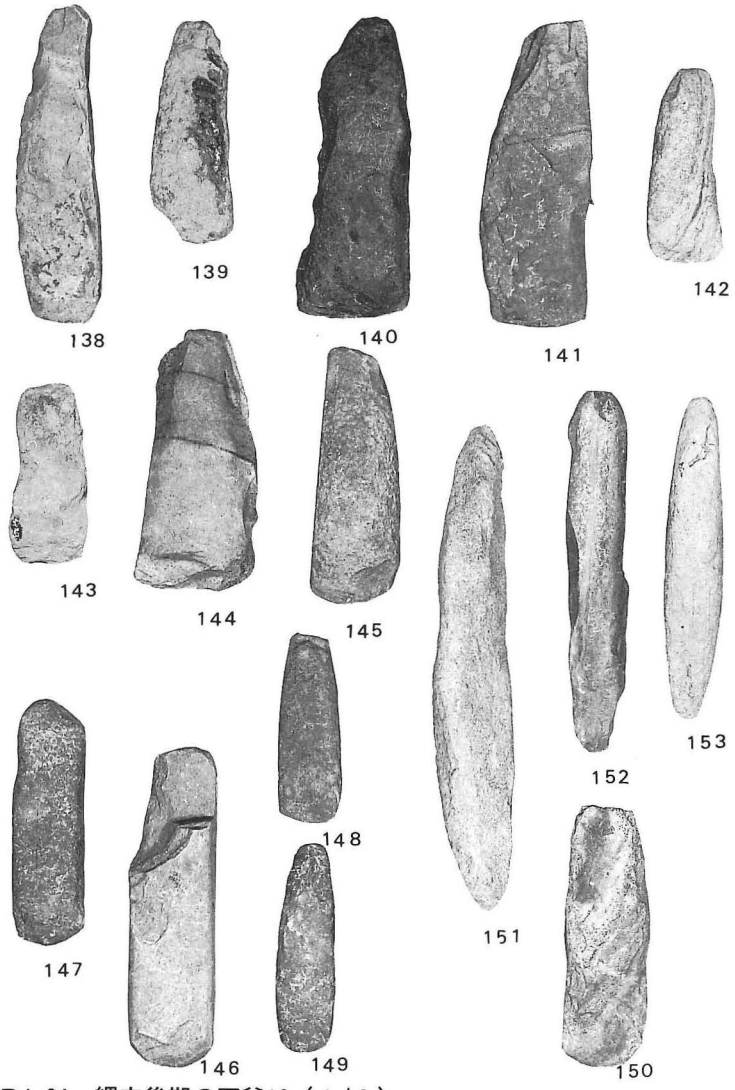
PL31　縄文後期の石斧 9 （1 / 3）



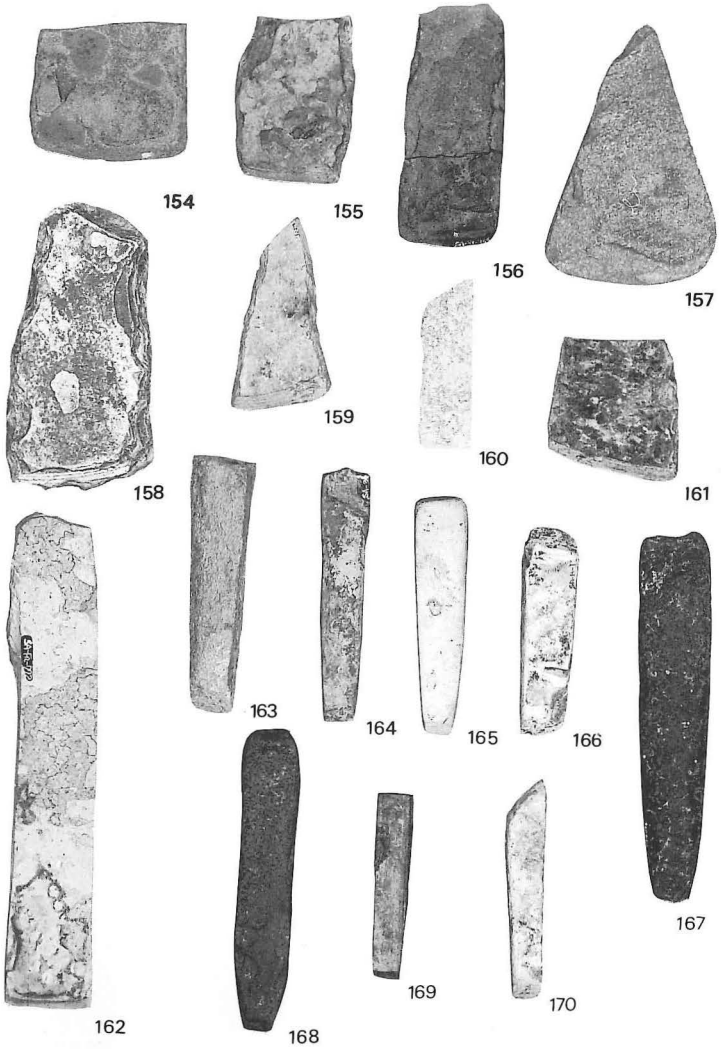
PL32　縄文後期の石斧10（1 / 3）



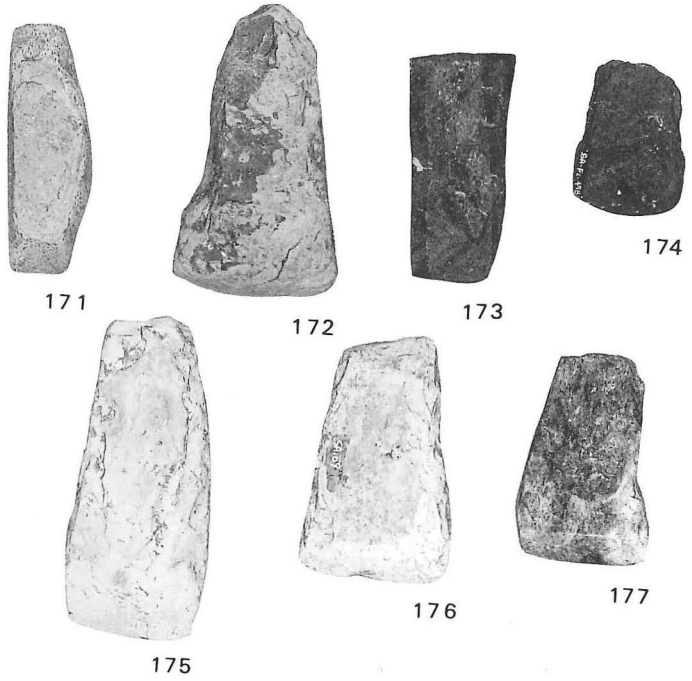
PL33　縄文後期の石斧11（1/3）



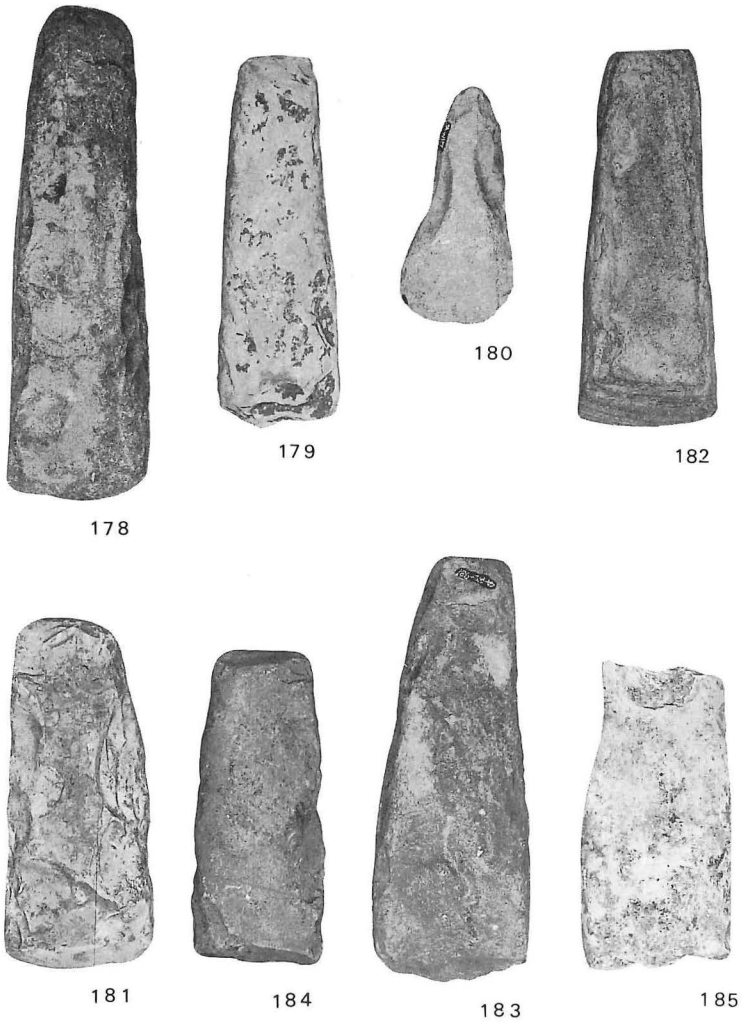
PL34　縄文後期の石斧12（1/3）



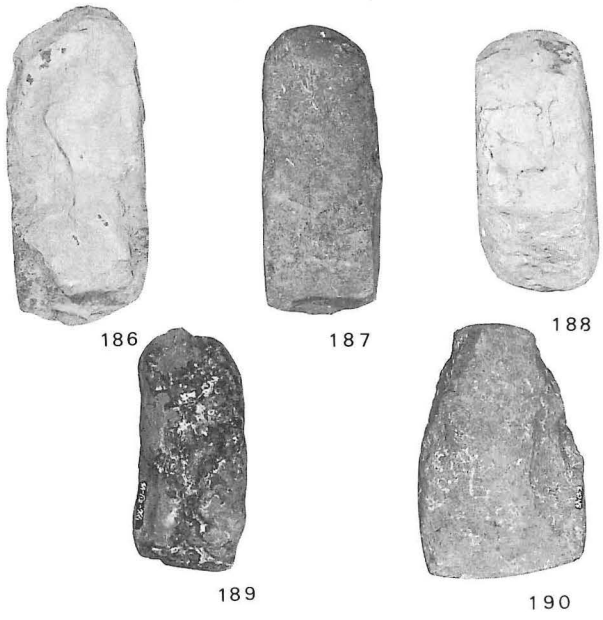
PL35　縄文後期の石斧13（1/2）



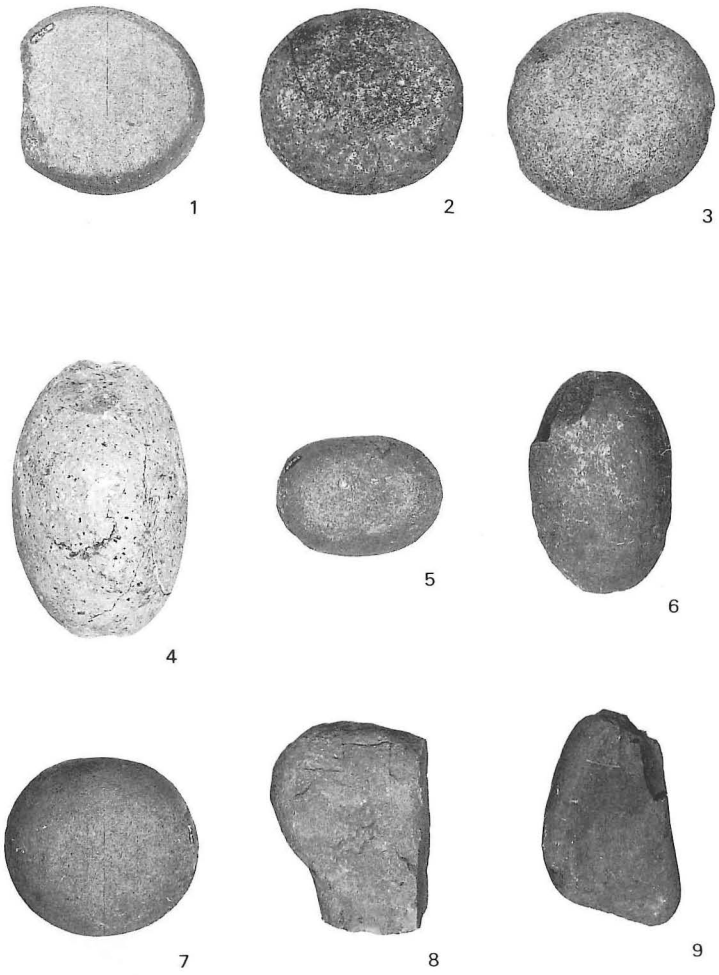
PL36　縄文後期の石斧14（1/2）



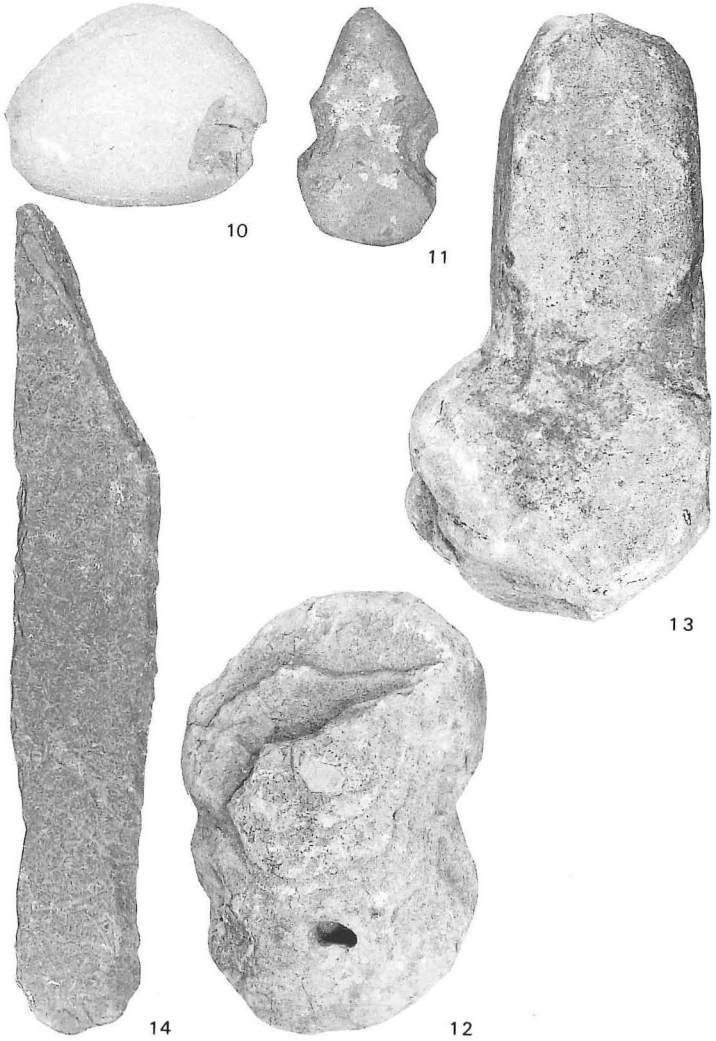
ＰＬ37　縄文後期の石斧15（１/３）



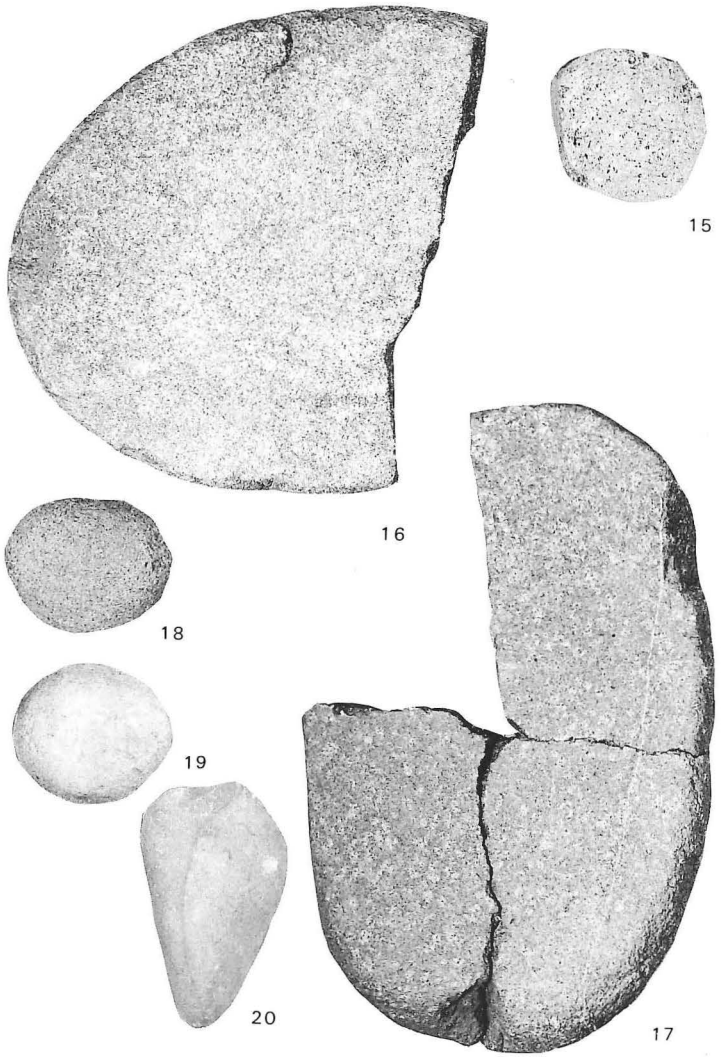
ＰＬ38　縄文後期の石斧16（１/３）



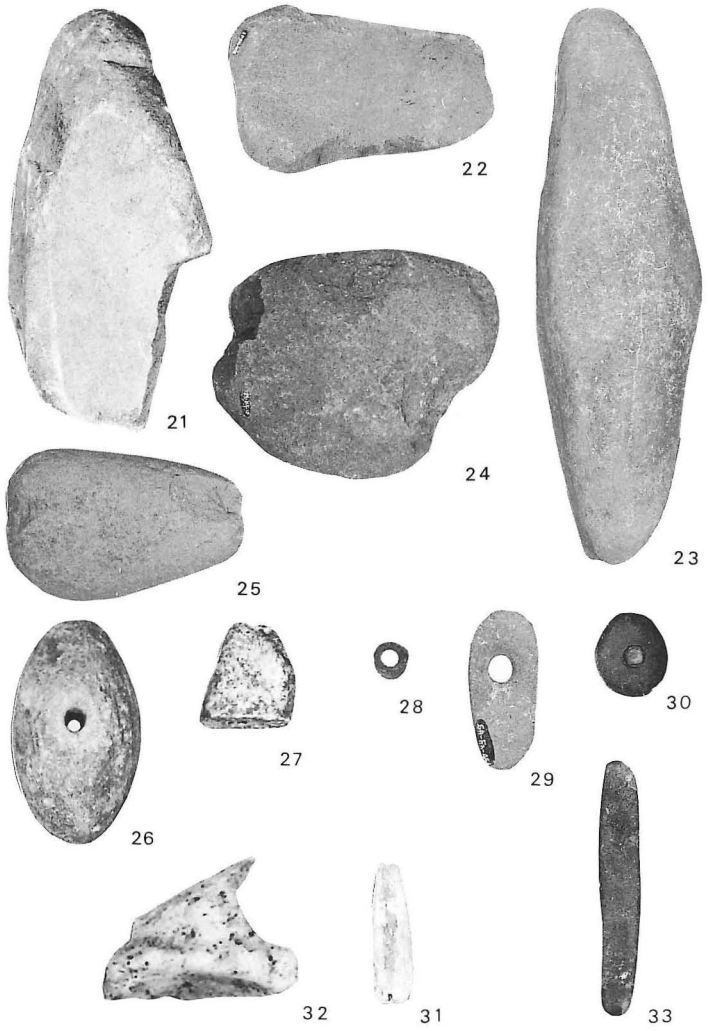
ＰＬ39　縄文後期のその他の石器１（１/３）



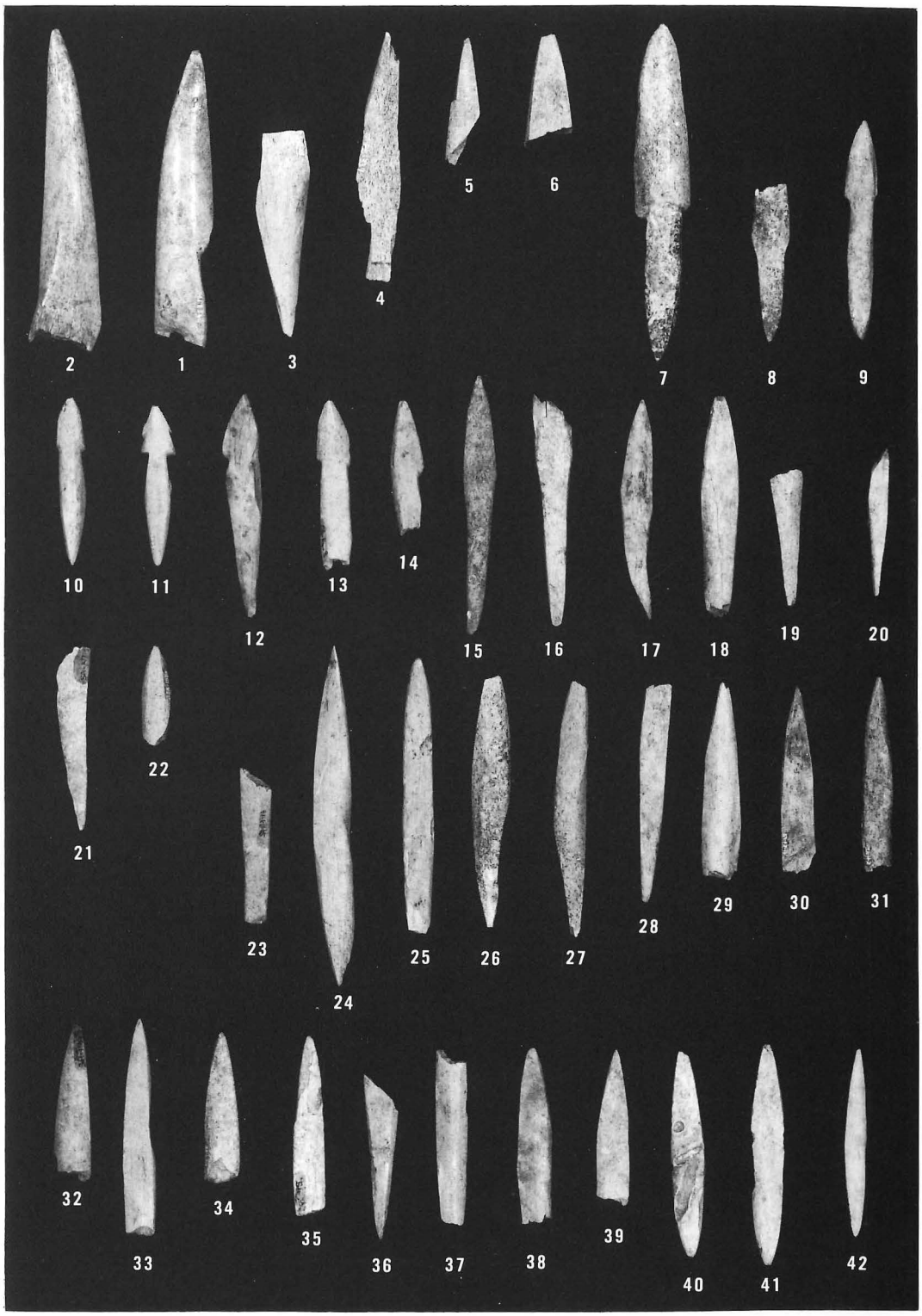
ＰＬ40　縄文後期のその他の石器２（１/３）



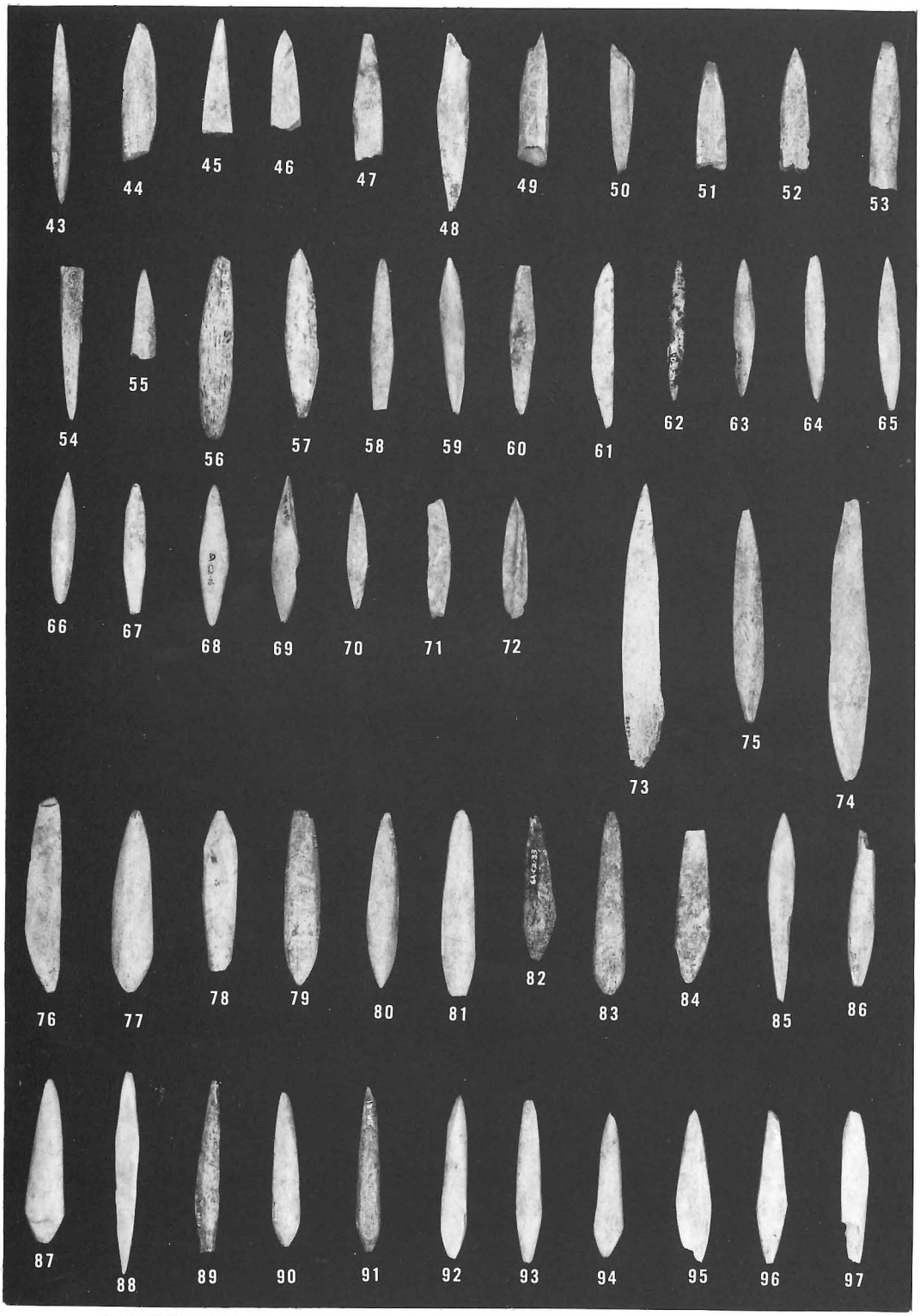
PL41　縄文後期のその他の石器 3 （1 / 3 ）



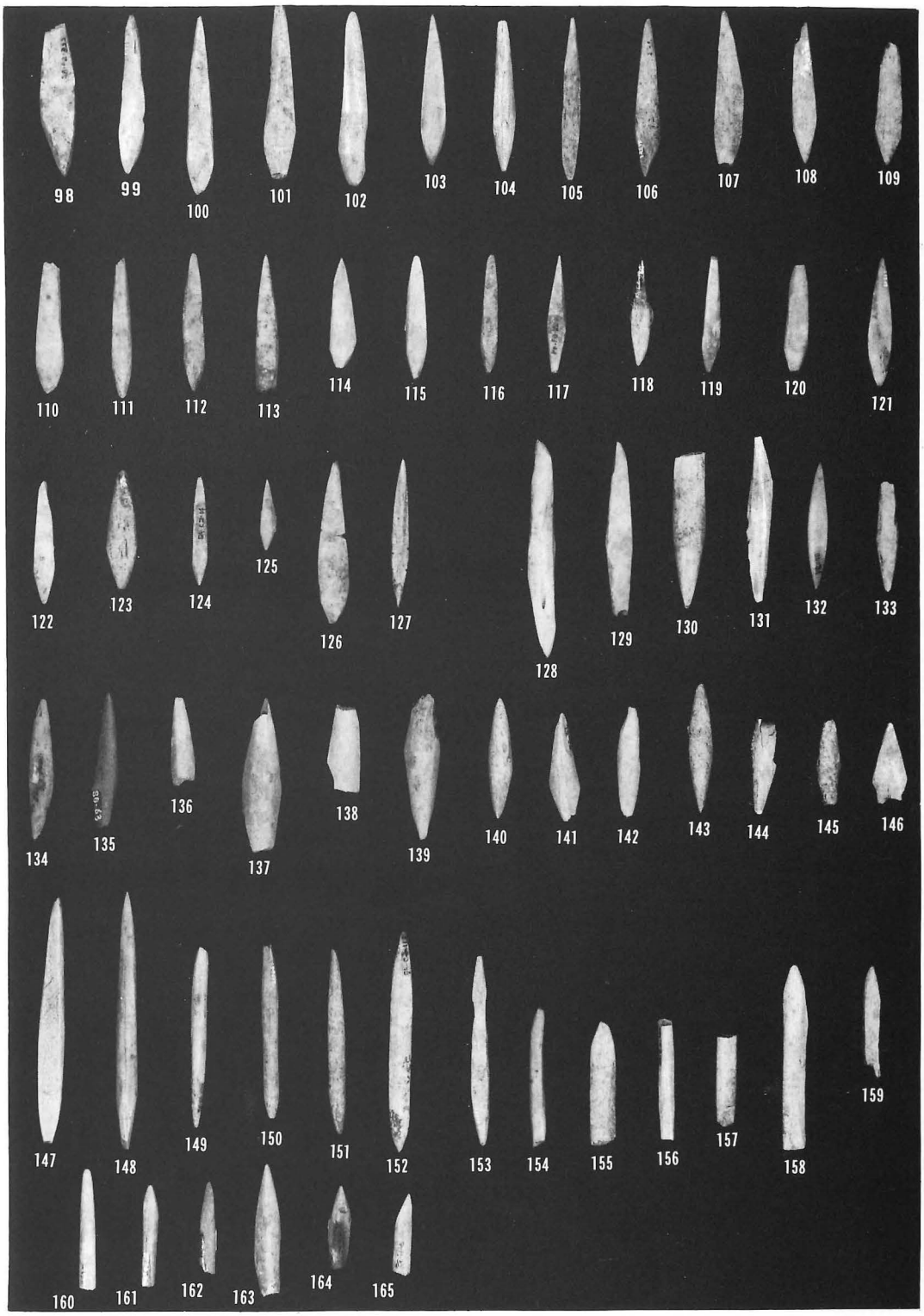
PL42　縄文後期のその他の石器 4（21～25＝1/3、26～33＝1/2）



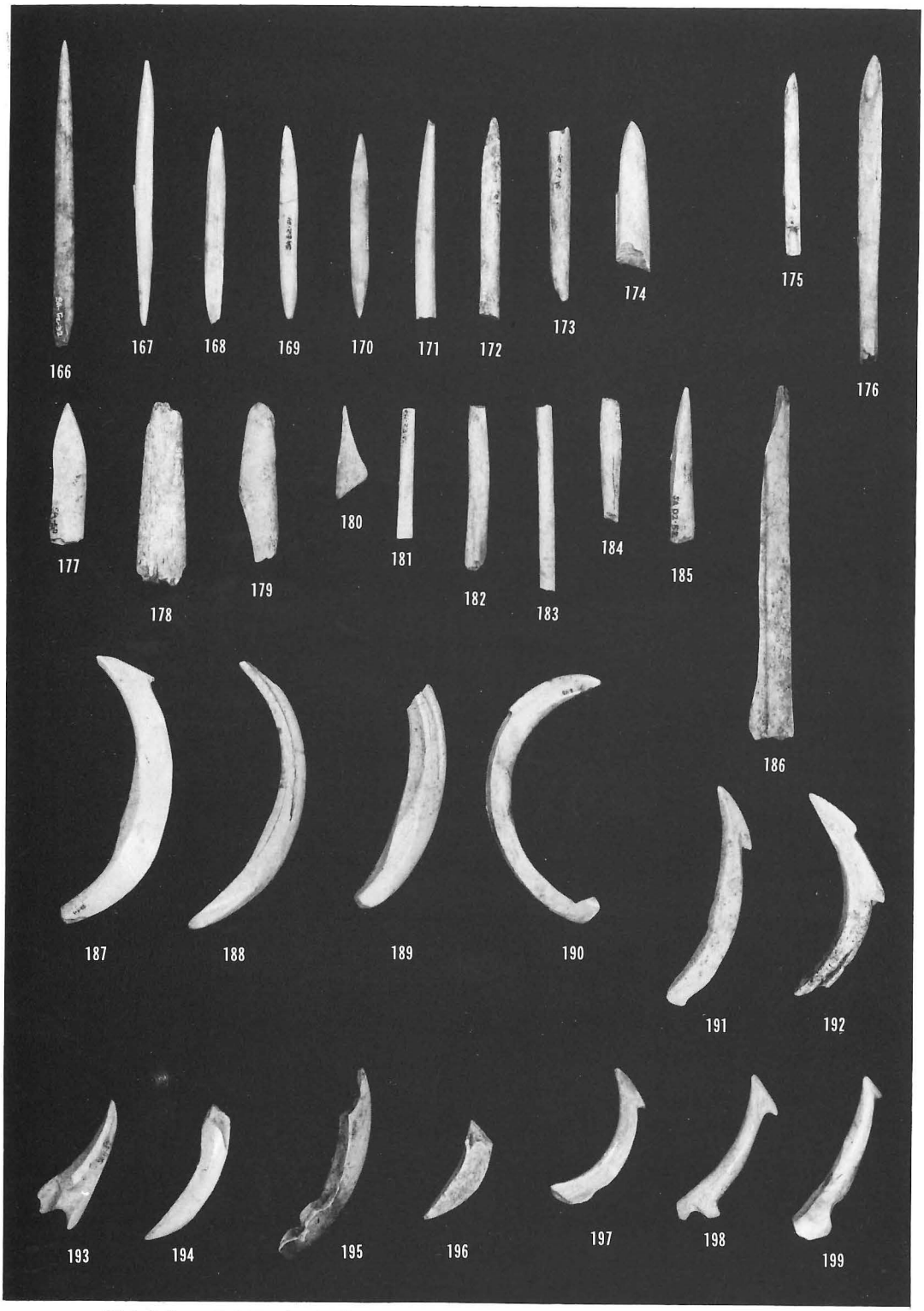
ＰＬ43　縄文後期の骨角器（１/２）



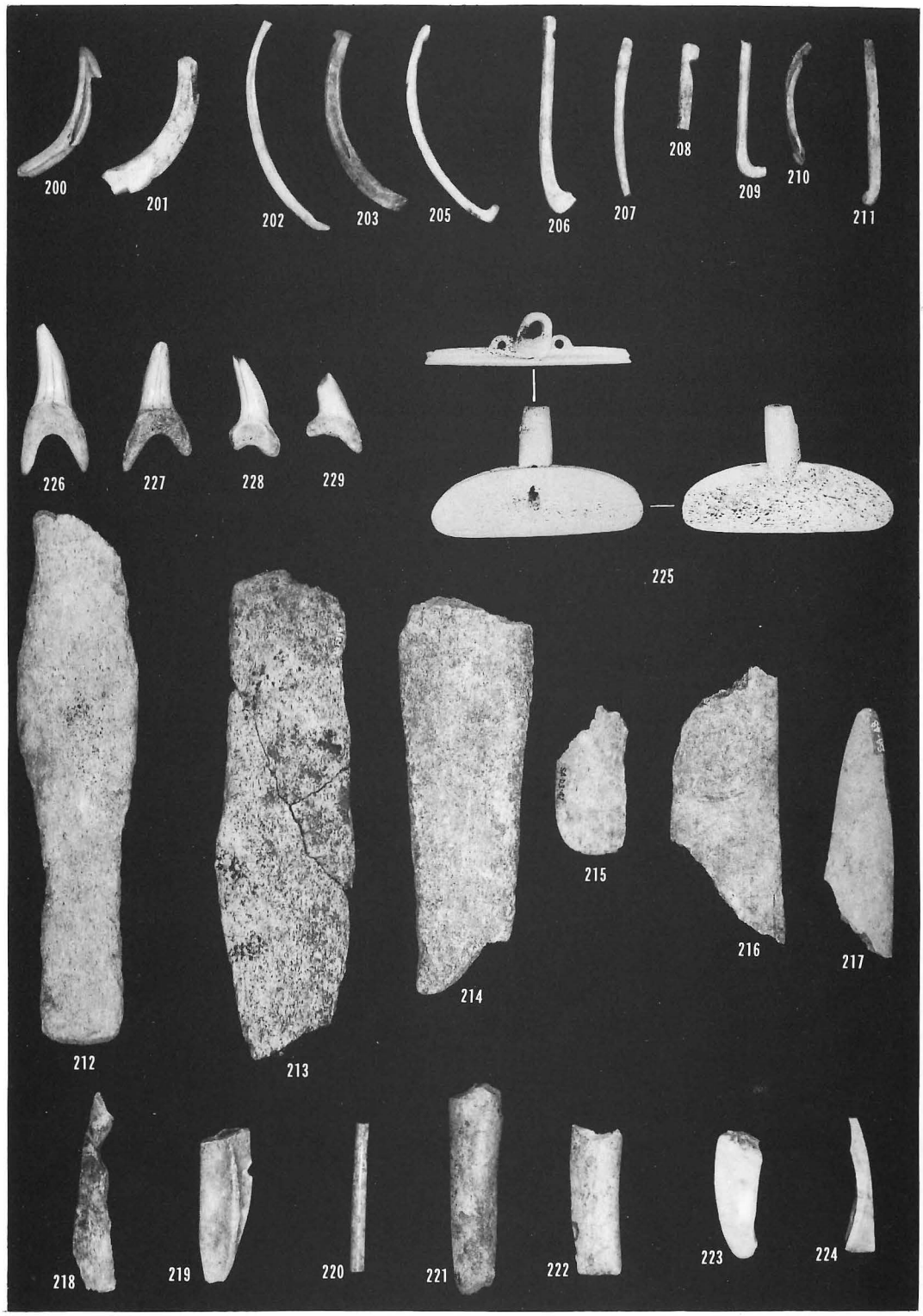
ＰＬ44　縄文後期の骨角器（１/２）



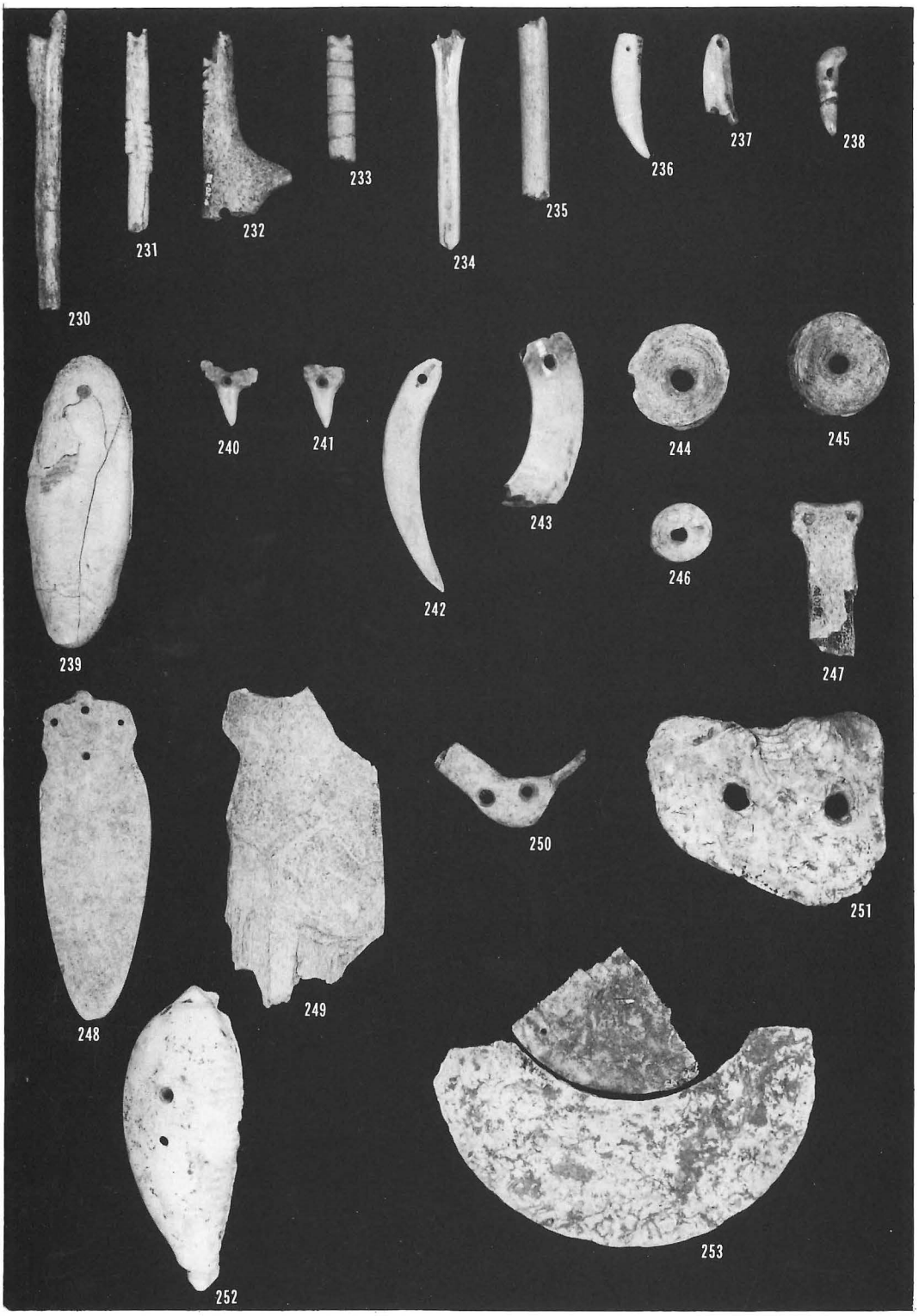
PL45　縄文後期の骨角器（1/2）



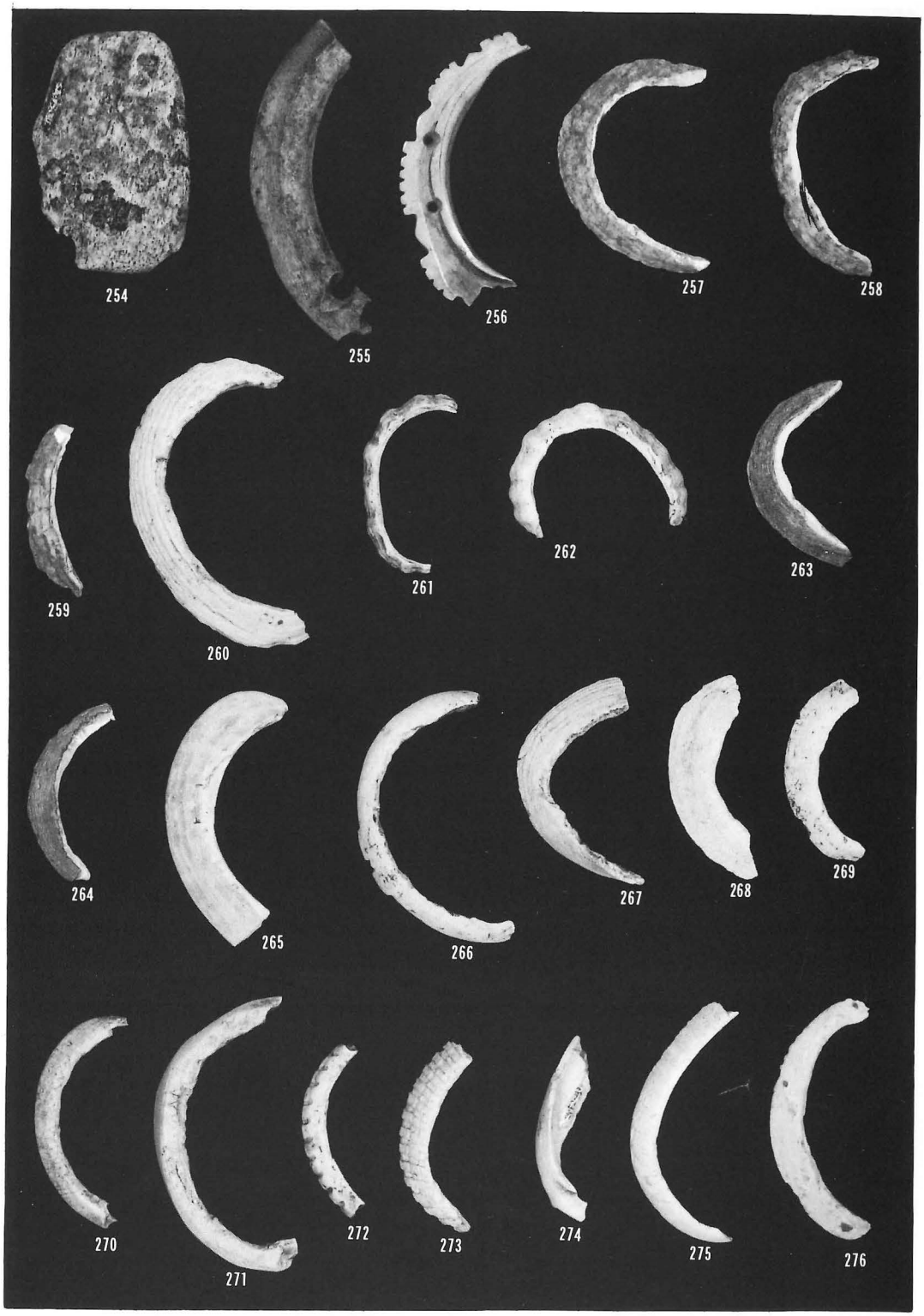
PL46　縄文後期の骨角器（1/2）



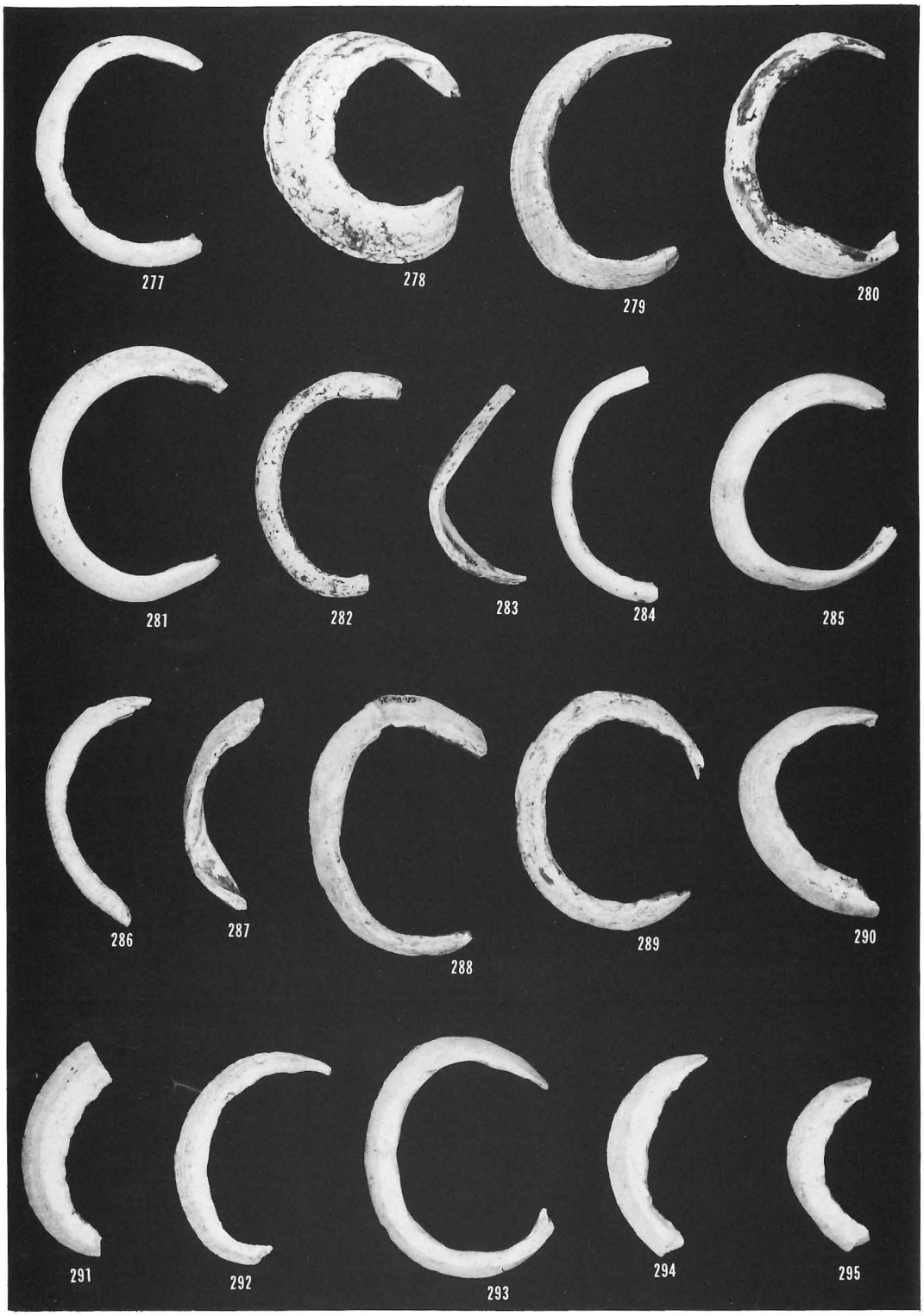
ＰＬ47　縄文後期の骨角器（１／２）



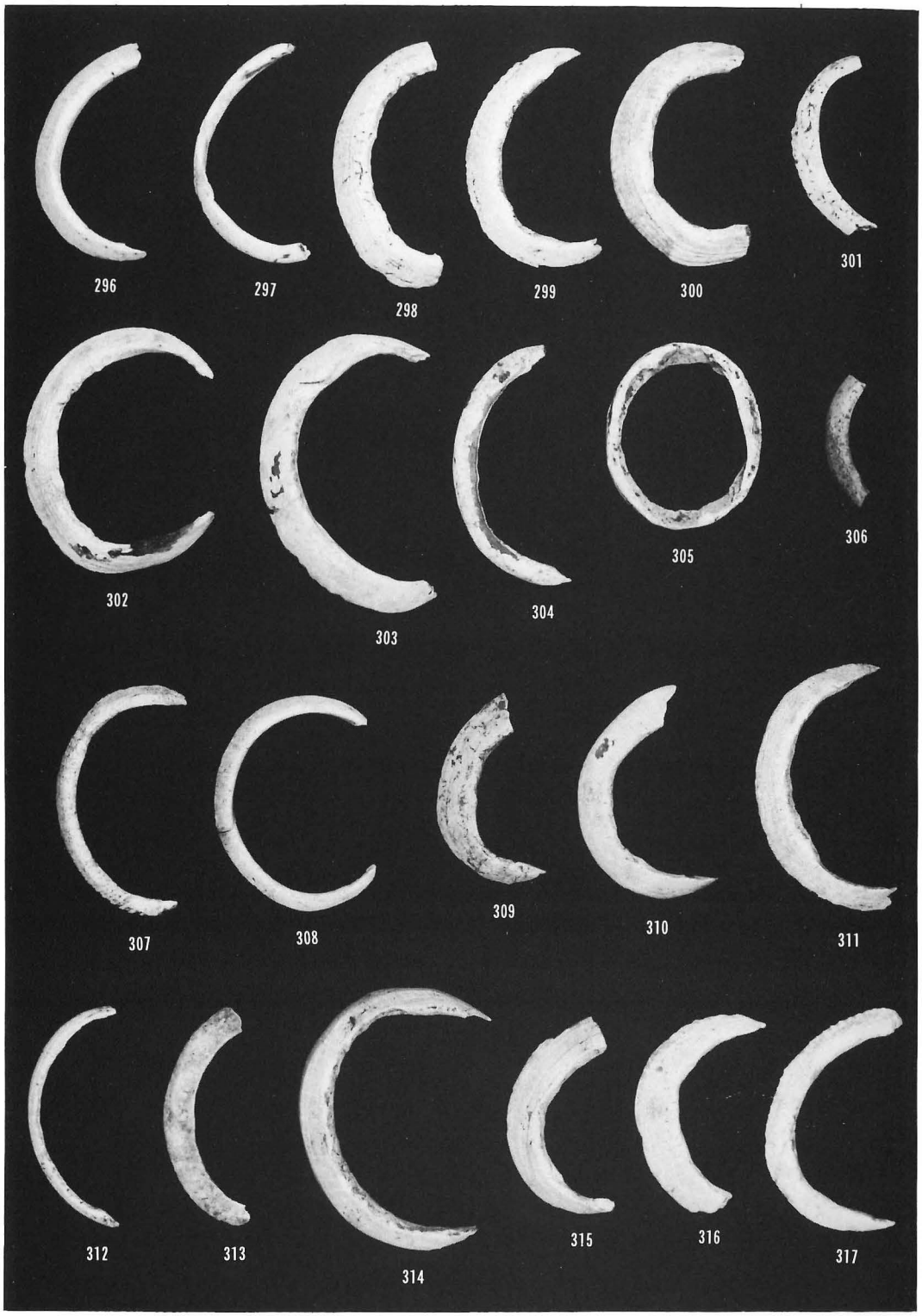
PL48　縄文後期の骨角器（1/2）



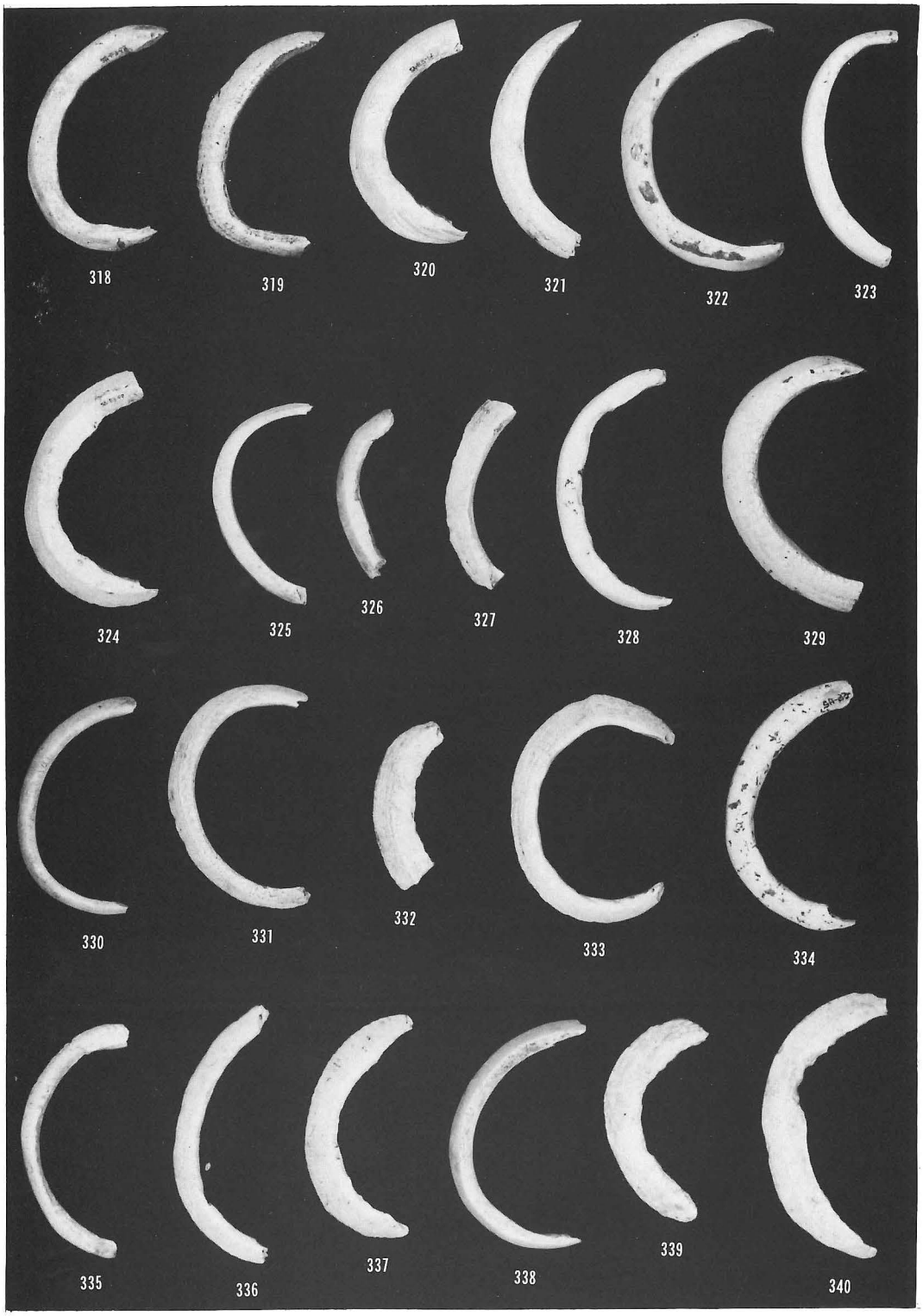
PL49　縄文後期の骨角器（1/2）



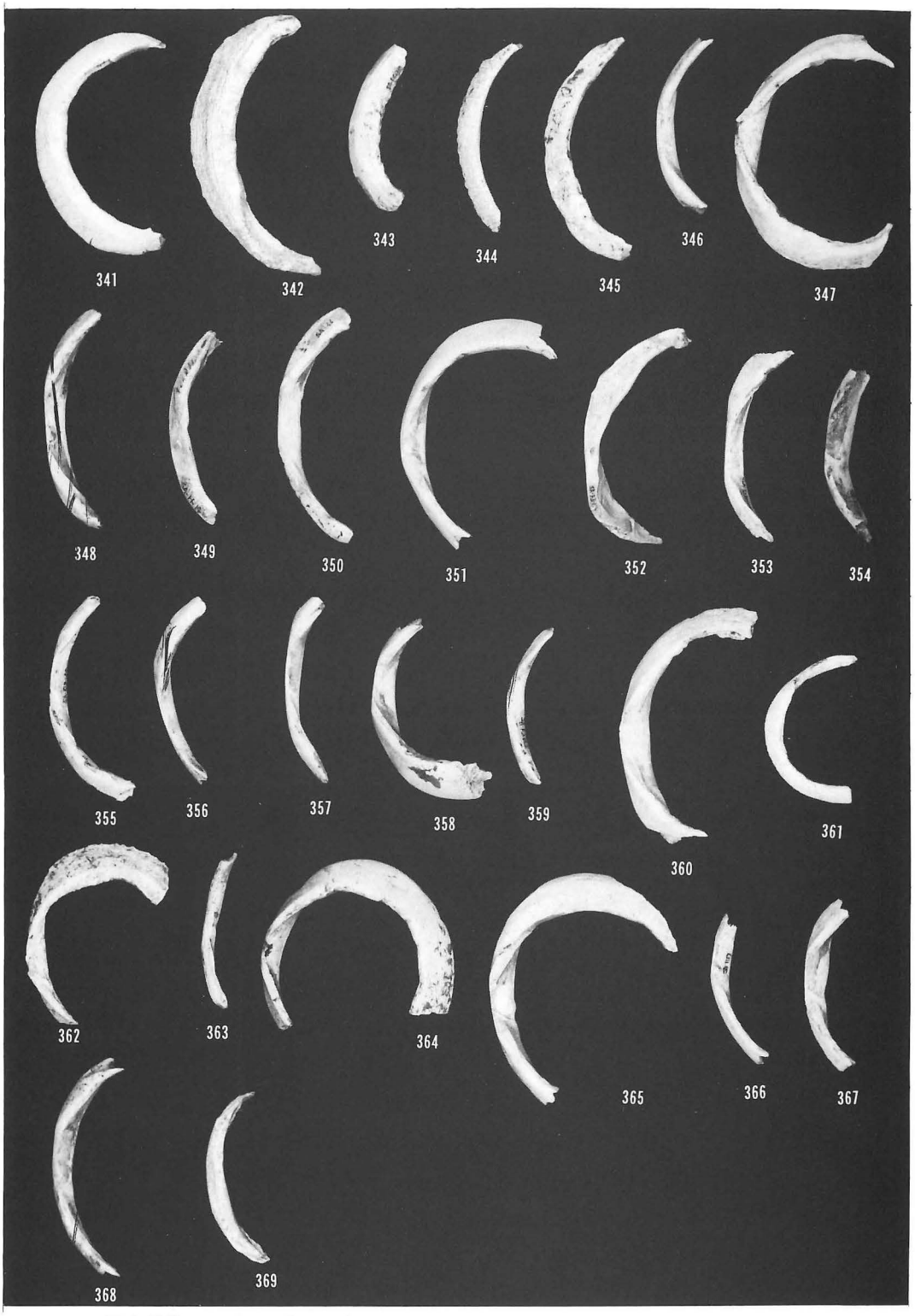
PL50　縄文後期の骨角器（1/2）



PL51　縄文後期の骨角器（1/2）



PL52　縄文後期の骨角器（1/2）



PL53　縄文後期の骨角器（1/2）

長崎県峰町(対馬)佐賀貝塚出土の縄文時代人骨

松下　孝幸*・佐伯　和信*・折原　義行*・小山田常一**

【キーワード】：長崎県峰町（対馬）、縄文時代後期、「低・広顔」、柱状大腿骨、扁平上腕骨

はじめに

長崎県上県郡峰町（対馬）大字佐賀に所在する佐賀貝塚の発掘調査が1985年に行われ、人骨が出土した。このうち埋葬状態と考えられるものは5体分で、その他に、散乱骨も出土した。

対馬は大陸と九州本土との間に位置し、壱岐とともに両地域の文化交流の飛び石的存在として、以前から注目されており、また、調査も度々行われてきた。

形質人類学的にも、縄文人の由来や北部九州地域に認められる特異な形質を持つ弥生人研究にとってもきわめて重要な地域の一つとして注目されてきた。しかし、今日まで、縄文時代の成人骨が全く出土せず、それ故、研究も進展しなかった。このような意味からも本縄文時代人骨はきわめて貴重である。

人骨の保存状態はけっして良好なものばかりではなかったが、1体はほぼ全身骨が残存しており、本縄文人の特徴の一端を知ることができた。出土人骨の形質人類学的観察や計測を行ったので、その結果を報告したい。

資　　料

今回の発掘調査で出土した人骨は5体分の埋葬人骨と散乱骨であるが、性別を判別できたものはすべて男性骨であった。散乱骨も体数に数えると、頭蓋の数からは成人骨は少なくとも6体分ということになり、幼小児骨（含む新生児）は上腕骨と大腿骨から少なくとも4体分である。従って、今回の発掘調査で出土した縄文時代人骨の体数は少なくとも10体分ということになる。出土人骨の性別、年齢は表1に示すとおりである。

これらの人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より、縄文時代後期に属する人骨群である。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、一部はHowells（1973）の方法で、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木（1963）と松下（1983）の方法で、歯は藤田（1949）の方法で佐伯が計測した。また、齲歯の観察は小山田が行った。なお、小児骨に関しては、分部が別稿で詳述しているので、本稿では成人骨についてのみ報告する。

今回、比較資料として用いたのは、白浜（松下・他、1980）、山鹿（九州大学、1988）、津雲

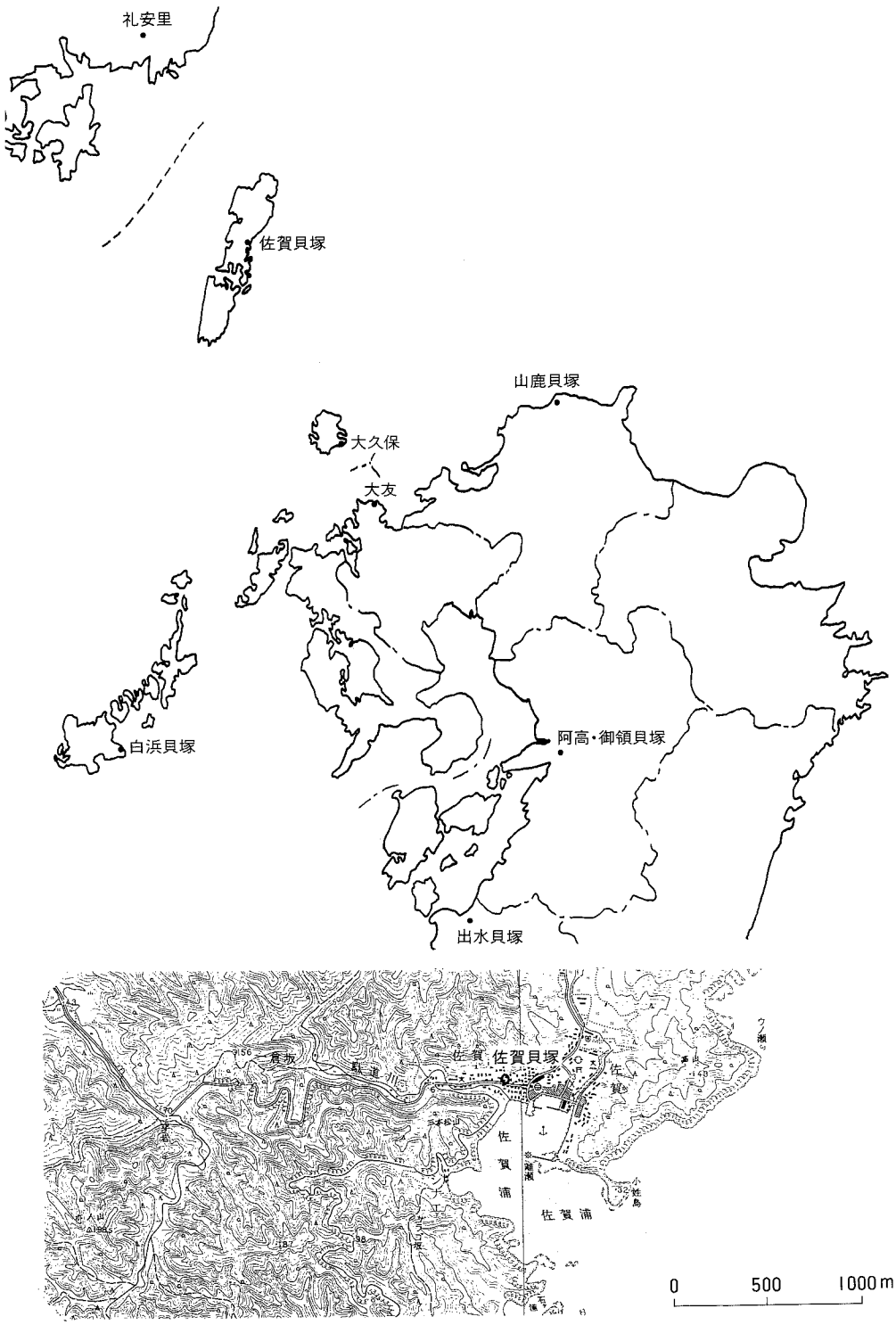


図１．遺跡の位置（Fig. 1. Location of Saka shell-mound, Tsushima Island, Nagasaki Prefecture）

（清野・他、1926、1928、岡本、1930）、阿高（岡本、1929、大森、1960）、御領（金関・他、1955）、出水（大森・他、1960）、大久保（松下・他、1988）、大友（松下、1981）、西北九州弥生人（内藤、1971）などである。

表1　出土人骨一覧　(Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考
1号人骨	男性	壮年	埋葬人骨
2号人骨	男性	不明	埋葬人骨
3号人骨	不明	幼児（1.5～2歳未満）	埋葬人骨
4号人骨	男性	壮年	埋葬人骨
5号人骨	男性	熟年	埋葬人骨
散乱骨1	不明	不明	下顎骨
散乱骨2	不明	不明	下顎骨
散乱骨3	男性	不明	左側上腕骨
散乱骨4	男性	不明	左側尺骨
散乱骨5	男性	不明	右側大腿骨
散乱骨6	不明	新生児　1カ月未満	右側上腕骨
散乱骨7	不明	新生児　1カ月未満	右側上腕骨
散乱骨8	不明	新生児　1カ月未満	右側上腕骨
散乱骨9	不明	新生児　1カ月未満	右側大腿骨
散乱骨10	不明	新生児　1カ月未満	右側大腿骨
散乱骨11	不明	新生児　1カ月未満	右側大腿骨
散乱骨12	不明	新生児　1カ月未満	右側脛骨

所　見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1号人骨（男性、壮年）

1．頭蓋

後頭骨半が残存していた。骨壁は厚く、堅牢である。外後頭隆起の発達は良好で、先端が突出している。乳様突起も大きい。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は両側とも認められない。縫合は、三主縫合のうちラムダ縫合と矢状縫合の一部が観察できたが、これらはいずれも内外両板が開離している。

脳頭蓋の計測はできず、頭型も不明であるが、観察したところでは、脳頭蓋の径はそれほど大きいものではなさそうである。

下顎骨の高径は低く、咬筋粗面の発達は良好で、下顎角は外反している。

2．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

$$\frac{M_3 \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup I_2 \diagup | \diagup \diagup \diagup P_1 P_2 M_1 M_2 M_3}{M_3 M_2 M_1 \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup | \diagup \diagup C\ P_1 P_2 M_1 M_2 M_3}$$

〔／：不明（破損）〕

咬耗度はBrocaの2度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3．四肢骨

⑴上肢骨

①上腕骨

長さはあまり長いものではないようであるが、三角筋粗面の発達は著しく良好で、両側とも三角筋粗面のところで「く」の字状に屈曲している。また、左側には滑車上孔が存在する。

計測値は、中央最大径が24㎜（右、左）、中央最小径は17㎜（右、左）で、骨体断面示数は70.83（右、左）となり、骨体の扁平性は強い。骨体最小周は58㎜（右）、57㎜（左）、中央周は67㎜（右）、66㎜（左）で、骨体はあまり大きくはない。

②橈骨

骨体はそれほど太くはないが、骨間縁の発達は良く、特に左側は鋭く突出しており、骨体は扁平である。

③尺骨

骨体はやや細く、骨間縁の発達も悪い。また、尺骨粗面部は陥凹している。

⑵下肢骨

①大腿骨

骨体はあまり大きいものではないが、粗線の発達は良好で、骨体両側面は後方へ著しく発達しており、柱状を呈している。また、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が27㎜（右）、28㎜（左）、横径は24㎜（右、左）で、骨体中央断面示数は112.50（右）、116.67（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて良好で、縄文人的な大腿骨である。骨体中央周は82㎜（右、左）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は76.67（右）、75.86（左）となり、骨体上部は扁平である。

②脛骨

骨体はやや細く、縁の発達も良くない。また、ヒラメ筋線の発達も良くないが、後面には一稜が認められ、骨体の断面形は両側ともヘリチカのⅣ型を呈している。

計測値は、中央最大径が28㎜（右、左）、中央横径は19㎜（右）、20㎜（左）で、中央断面示数は67.86（右）、71.43（左）となり、骨体は扁平である。骨体周は74㎜（右）、75㎜（左）、最小周は68㎜（右、左）で、骨体は細い。

③腓骨

骨体は細いが、溝は深い。

4．性別・年齢

性別は、外後頭隆起の発達が良好であることから、男性と推定した。年齢は、観察可能な縫

合のすべての部分で、内外両板が開離していることから、壮年と考えられる。

2号人骨（男性、年齢不明）

1．頭蓋

下顎骨のみが残存していた。その高径は低いが、幅径は大きく、咬筋粗面の発達は良好で、下顎角も外反している。

2．歯

下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

$M_3 M_2$ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | ／ ／ ／ ／ ／ ○ ○ ○

（／：不明（破損）　○：歯槽開存）

咬耗度はBrocaの3度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3．四肢骨

(1)上肢骨

①上腕骨

骨体の遠位部が残存していた。三角筋粗面の様態は不明である。

計測値は、骨体最小周が64㎜（右、左）で骨体はやや大きい。

②橈骨

骨体はやや大きく、骨間縁の発達も良好で、特に右側は著しく突出している。

③尺骨

尺骨もやや細いが、骨体は扁平である。

(2)下肢骨

①大腿骨

骨体は太く、粗線の発達も良好で、骨体両側面は後方へ著しく発達しており、柱状を呈している。また、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が31㎜(右)、横径は27㎜(右)で、骨体中央断面示数は114.81(右)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて良好である。骨体中央周は91㎜（右）で、骨体は大きい。また、上骨体断面示数は90.00（右）、87.10（左）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

②脛骨

骨体はやや大きいが、縁の発達は良くない。また、ヒラメ筋線の発達も良くない。骨体の断面形は両側ともヘリチカのII型を呈している。

計測値は、中央最大径が29㎜（右、左）、中央横径は22㎜（右）、23㎜（左）で、中央断面示数は75.86（右）、79.31（左）となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は82㎜（右、左）、最小周は75㎜（右）、74㎜（左）で、骨体は大きい。

③腓骨

骨体は太くて、頑丈である。

4．性別・年齢

性別は、下顎骨や下肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

4号人骨（男性、壮年）

1．頭蓋

(1)脳頭蓋

後頭骨の一部を欠損している以外は完全である。骨壁はやや厚く、堅牢で、いかにも縄文時代人骨らしい骨質である。外後頭隆起の発達は良好で、乳様突起も大きく、乳突上稜もよく発達している。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は両側とも認められない。縫合は、三主縫合とも内外両板が開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が185㎜、頭蓋最大幅は148㎜、バジオン・ブレグマ高は137㎜である。頭蓋長幅示数は80.00、頭蓋長高示数は74.05、頭蓋幅高示数は92.57となり、頭型はbrachy-, ortho-, metriokran（短、中、中頭）に属している。また、頭蓋水平周は524㎜、横弧長は310㎜、正中矢状弧長は376㎜である。

(2)顔面頭蓋

顔面頭蓋は、左側の頬骨弓と上顎骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓と眉間は強く隆起し、鼻骨も隆起しており、鼻根部には陥凹が認められる。また、鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起も著しく強い。鼻根部は狭いが、頬骨は外側へ強く張り出している。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が103㎜、中顔幅は102㎜、顔高は107㎜、上顔高は64㎜であるが、頬骨弓幅は計測できない。しかし、右側半を2倍することによって推定値を算出することができた。頬骨弓幅の推定値は〔73㎜×2＝146㎜〕である。顔示数は〔73.29〕（K）、104.90（V）、上顔示数は〔43.84〕（K）、62.75（V）となり、顔面には著しい「低・広顔」傾向が認められる。

眼窩幅は47㎜（左、右）、眼窩高は34㎜（右、左）で、眼窩示数は72.34（右、左）となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は25㎜、鼻高は50㎜で、鼻示数は50.00となり、mesorrhin（中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が16㎜、鼻根横弧長は計測できないが、鼻根彎曲示数はおそらく小さな値となるであろう。両眼窩幅は105㎜で、眼窩間示数は15.24となり、顔の幅に対して、眼窩間幅はかなり狭い。前頭突起水平傾斜角は85度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。

側面角は、全側面角が82度、鼻側面角が83度、歯槽側面角は78度で、歯槽性突顎の傾向は認められない。

下顎骨もほぼ完全である。左側の筋突起は外反しており、咬筋粗面の発達も良好で、下顎角

は外反している。下顎体の高径は低く、下顎切痕は浅い。

2．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

● ● ● ● ○ ／ ／ ○	I_1 ● ○ ● ● $M_1 M_2 M_3$
○ M_2 ● $P_2 P_1$ ○ ● ●	● I_2 ● $P_1 P_2$ ● ● ●

（／：不明（破損）　○：歯槽開存　●：歯槽閉鎖）

咬耗度はBrocaの3～4度である。なお、下顎の左側犬歯は存在しないが、歯槽はまだ閉鎖が完了しておらず、その過程にあることおよび歯周疾患が認められ、歯槽の状態が良くないことから、犬歯は歯周疾患によって脱落したものと考えられ、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3．四肢骨

⑴上肢骨

すべての上肢骨が残存していた。

①上腕骨

長さは短く、骨体は著しく太い。また、三角筋粗面の発達はきわめて良好である。

計測値は、最大長が286㎜（右）、293㎜（左）、骨体最小周は69㎜（右）、67㎜（左）、中央周は78㎜（右）、74㎜（左）で、長厚示数は24.13（右）、22.87（左）となり、骨体は著しく頑丈である。また、中央最大径は28㎜（右）、27㎜（左）、中央最小径は17㎜（右、左）で、骨体断面示数は60.71（右）、62.96（左）となり、骨体は著しく扁平である。

②橈骨

橈骨体も太く、頑丈である。また、骨間縁の発達も良好で、骨体近位1／3あたりで鋭く突出している。

③尺骨

近位部は大きいが、骨体遠位部はそれほど太いものではない。

⑵下肢骨

すべての下肢骨が残存していた。

①寛骨

両側とも恥骨を欠損している。大坐骨切痕の角度は小さい。

②大腿骨

右側は完全であるが、左側は内側顆を欠損している。長さはやや長く、粗線の発達はあまり良くないが、骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が423㎜（右）、骨体中央周は89㎜（右、左）で、長厚示数は21.14（右）となり、上腕骨ほど頑丈ではない。骨体中央矢状径は29㎜（右）、30㎜（左）、横径は28㎜（右）、27㎜（左）で、骨体中央断面示数は103.57（右）、111.11（左）となり、粗線や骨体両側面の後

方への発達は右側よりも左側の方が良好であるが、それでも縄文人としてはあまり発達が良くない方である。また、上骨体断面示数は70.59（右）、72.73（左）となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

長さは著しく長い。骨体も太いが、ヒラメ筋線の発達はそれほどではない。骨体後面には明瞭な鉛直線が認められ、骨体の断面形は両側ともヘリチカのII型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が370㎜（右、左）、骨体周は86㎜（右、左）、最小周は78㎜（右）、79㎜（左）で、長厚示数は21.37（右）、21.64（左）で、上腕骨ほど頑丈ではない。中央最大径は31㎜（右、左）、中央横径は22㎜（右）、23㎜（左）で、中央断面示数は70.97（右）、74.19（左）となり、縄文人としては骨体の扁平性は弱い。

④腓骨

骨体は大きく、扁平である。

4．推定身長値

各四肢骨の最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、表21のとおりである。上腕骨からの推定身長値は著しく低いが、橈骨、脛骨からは反対に高い値がでる。大腿骨からは160.82cm（Pearsonの式）、159.38cm（藤井の式）となり、160cm前後である。

5．性別・年齢

性別は、眉上弓と眉間が強く隆起し、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が小さいことから、男性と推定した。年齢は、三主縫合とも内外両板が開離していることから、壮年と考えられる。

5号人骨（男性、熟年）

1．頭蓋

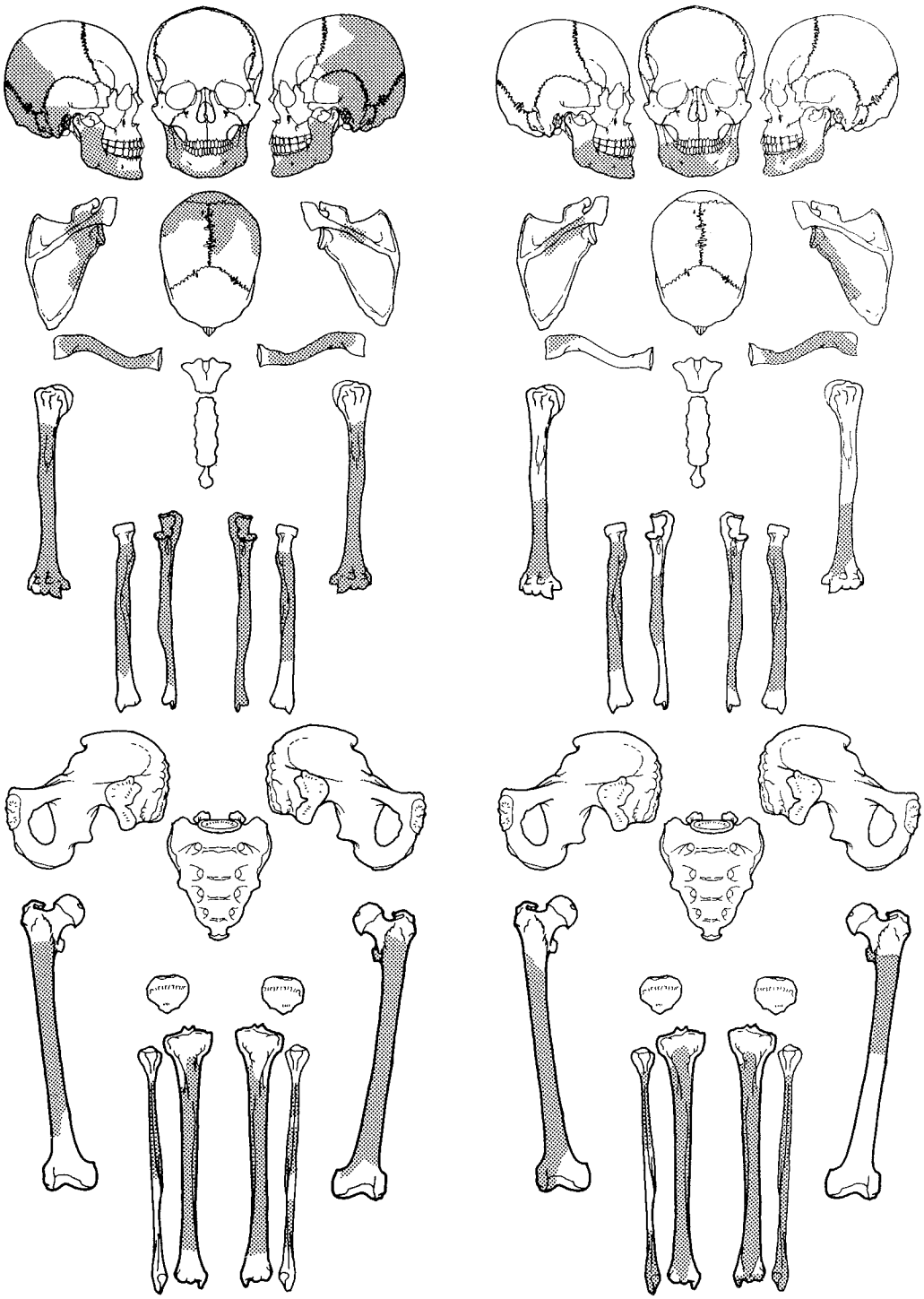
(1)脳頭蓋

脳頭蓋のみが残存していた。骨壁は厚く、著しく堅牢である。外後頭隆起の発達はそれほど良くないが、やや突出している。乳様突起も大きい。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫が両側ともに認められ、特に、左側は著しく大きい。三主縫合の内板はすべて癒合しており、外板はまだ開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が193㎜、頭蓋最大幅は156㎜で、バジオン・ブレグマ高は計測できない。頭蓋長幅示数は80.83となり、頭型はbrachykran（短頭）に属している。また、横弧長は344㎜で、頭蓋の径は大きい。

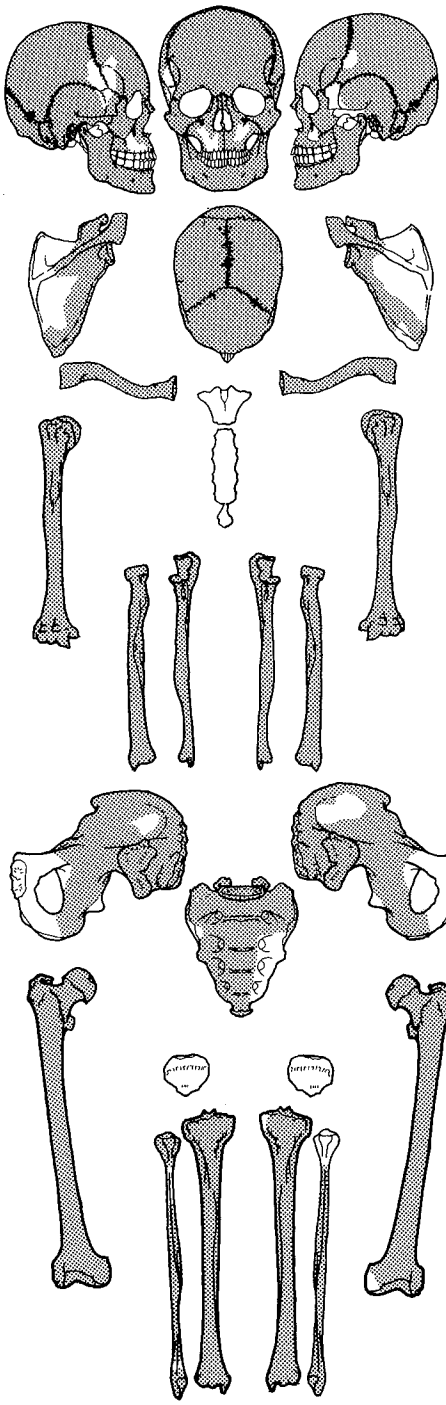
2．性別・年齢

性別は、頭蓋の径が著しく大きいことから、男性と推定した。年齢は、三主縫合の内板がすべて癒合していることから、熟年と考えられる。

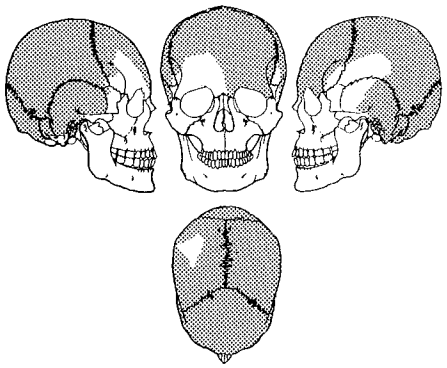


1号人骨(男性、壮年)　　2号人骨(男性、年齢不明)

図2．人骨の残存部(アミかけ部分)
(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



4号人骨(男性、壮年)



5号人骨(男性、熟年)

図3．人骨の残存部分（続き）

散乱骨 1 （性別、年齢不明）

下顎骨である。径はあまり大きくはないが、オトガイ隆起の発達は良く、顎舌骨筋線の下方が両側とも著しく凹んでいる。

また、歯も釘植している。その残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

$\overline{\text{○ } M_2\, M_2 \text{ ○ ○ ○ ○ ○}} \,|\, \overline{\text{○ ○ ／ ／ ／ ／ } M_2\, M_3}$

（／：不明（破損）
○：歯槽開存）

咬耗度は Broca の 3 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

性別、年齢は不明である。

散乱骨 2 （男性、年齢不明）

下顎体の一部が残存していた。その径は大きそうである。

歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ ● ○ ○ ○ ● ● ／ | ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

（／：不明（破損）
○：歯槽開存
●：歯槽閉鎖）

風習的抜歯の痕跡は認められない。

性別は、下顎体の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

散乱骨 3 （男性、年齢不明）

左側の上腕骨体である。径はあまり大きいものではないが、三角筋粗面の発達は著しく良好である。

計測値は、中央最大径が23㎜（左）、中央最小径は17㎜（左）で、骨体断面示数は73.91（左）となり、骨体は扁平である。骨体最小周は57㎜（左）、中央周は65㎜（左）で、骨体はあまり大きくはない。

性別は、骨体はあまり大きくはないが、三角筋粗面の発達が良好であることから、男性と推定した。年齢は不明である。

散乱骨 4 （男性、年齢不明）

左側尺骨体である。径は大きく、扁平である。

径が大きいことから、男性尺骨と推定したが、年齢は不明である。

散乱骨 5 （男性、年齢不明）

右側の大腿骨体である。骨体は大きく、粗線の発達も良好で、骨体両側面は後方へ発達しており、柱状を呈している。また、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が30㎜（右）、横径は28㎜（右）、骨体中央断面示数は107.14（右）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は90㎜（右）で、骨体は大きい。また、上骨体断面示数は75.76（右）となり、骨体上部は扁平である。

性別は、大腿骨が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

考　察

1．脳頭蓋

表2に示すとおり、頭蓋最大長は189.00㎜（2例）で、大久保弥生人よりは小さく、御領縄文人に近く、その他の縄文人と弥生人よりは大きい。頭蓋最大幅は152.00㎜（2例）で、大久保弥生人に最も近く、その他の比較資料よりは大きい。また、バジオン・ブレグマ高は137㎜（1例）で、大久保弥生人よりは小さく、山鹿縄文人および白浜縄文晩期人の値にほぼ一致し、それ以外の資料よりは大きい。

頭蓋長幅示数は80.42（2例）、頭蓋長高示数は74.05（1例）、頭蓋幅高示数は92.57（1例）で、頭型はbrachy-, ortho-, metriokran（短、中、中頭）に属している。頭蓋長幅示数は御領、津雲、出水縄文人と大友弥生人よりは大きく、白浜、山鹿、阿高縄文人と西北九州弥生人に最も近い。すなわち、九州の縄文人のうち御領縄文人だけが例外的に長頭型であるが、その他の縄文人は中頭型か短頭型である。

豊蓋水平周は524㎜（1例）で、白浜縄文人の値に近く、その他の比較資料よりも小さく、横弧長は327.00㎜（2例）で、大久保弥生人よりは小さく、出水縄文人の値に一致し、その他の資料よりは大きい。正中矢状弧長は376㎜（1例）で、白浜縄文人よりも大きく、山鹿、津雲縄文人および西北九州弥生人に近く、その他の資料よりは小さい。

頭蓋モズルスは156.67㎜（1例—4号人骨）で、この値はかなり大きく、表2では、大久保弥生人に次いで大きく、脳頭蓋の全体の径が大きいことがわかる。

すなわち、佐賀縄文人は脳頭蓋の径がやや大きく、短頭型である。

表2　脳頭蓋計測値（男性、㎜）（Table 2. Comparison of male calvarial measurements and indices）

		佐賀 縄文後期人 (松下・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		山鹿 縄文人 (九州大学)		津雲 縄文人 (清野・他)		阿高 縄文人 (大森)		御領 縄文人 (金関・他)		出水 縄文人 (大森・他)		大久保 弥生人 (松下・他)		大友 弥生人 (松下)		西北九州 弥生人 (内藤)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	2	189.00	1	179	4	183.3	16	186.4	9	183.56	3	190.83	1	182	1	193	24	183.71	21	182.81
8.	頭蓋最大幅	2	152.00	1	142	5	146.0	18	144.4	9	145.56	3	139.00	1	143	1	153	24	143.29	20	144.95
17.	バジオン・ブレグマ高	1	137	1	136	3	137.3	13	134.0	2	134.00	2	130.25	1	131	1	147	20	135.55	15	134.60
8/1	頭蓋長幅示数	2	80.42	1	79.33	4	80.1	16	77.7	9	79.40	3	72.90	1	78.57	1	79.27	21	77.93	20	79.17
17/1	頭蓋長高示数	1	74.05	1	75.98	3	75.2	13	71.6	2	74.72	2	69.20	1	71.98	1	76.17	16	74.52	15	74.15
17/8	頭蓋幅高示数	1	92.57	1	95.77	3	94.3	13	92.2	2	93.71	2	93.05	1	91.61	1	96.08	18	94.38	14	93.11
	頭蓋モズルス	1	156.67	1	152.33		—		—	2	152.17	2	152.85	1	152.00	1	164.33	15	154.31		—
23.	頭蓋水平周	1	524	1	522	4	529.0	15	532.3		—	3	535.00		—	1	562	18	531.44	19	530.42
24.	横弧長	2	327.00	1	320	5	323.8	16	310.3	4	325.50	3	315.00	1	327	1	347	22	317.27	15	324.67
25.	正中矢状弧長	1	376	1	367	4	377.5	13	375.0	2	380.00	2	380.50	1	380	1	406	13	382.62	17	376.47

2．顔面頭蓋

表3に示すとおり、頬骨弓幅は（146㎜）（1例）で、顔の幅径は広い、この値は大久保弥生人よりは小さく、山鹿縄文人にほぼ一致し、その他の資料よりは大きい。中顔幅は102㎜（1例）で、これはやや小さく、大友弥生人、白浜縄文人と大差なく、その他の資料よりは小さい。また、顔高は107㎜（1例）で、著しく低く、白浜縄文人にほぼ一致し、その他の比較資料よりも小さい。上顔高は64㎜（1例）で、白浜縄文人よりは大きいものの、その他の比較資料よりも小さく、顔の高径は著しく低く、幅径は広い。

従って、コルマンの顔示数と上顔示数はそれぞれ（73.29）、（43.84）となり、これらは表2のいずれの比較資料よりも小さい。また、ウィルヒョーの顔示数と上顔示数はそれぞれ104.90、62.75となり、この示数値もかなり小さいが、この2示数値は両者とも大久保弥生人の値に最も近い。

表3　顔面頭蓋計測値（男性、㎜、度）（Table 3. Comparison of male facial measurements and indices）

		佐賀縄文人（松下・他）		白浜縄文晩期人（松下・他）		山鹿縄文人（九州大学）		津雲縄文人（清野・他）		阿高縄文人（大森）		御領縄文人（金関・他）		出水縄文人（大森・他）		大久保弥生人（松下・他）		大友弥生人（松下）		西北九州弥生人（内藤）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔長	1	103	1	107	2	102.5	12	102.7		—	2	102.00	1	67	1	106	13	102.00		—
41.	側顔長	1	70	1	66(右)		—		—	1	70	3	76.33		—	1	76	24	71.08		—
45.	頬骨弓幅	1	(146)		—	3	146.3	6	143.2		—	2	141.00		—	1	154	9	140.67	12	138.42
46.	中顔幅	1	102	1	〔100〕	4	108.3	9	103.6		—	2	107.50		—	1	119	24	101.83	17	105.00
47.	顔高	1	107	1	106	4	116.0	11	115.8		—	2	119.00		—	1	126	18	118.67	14	117.07
48.	上顔高	1	64	1	59	4	69.0	13	67.0		—	2	67.50		—	1	72	16	66.63	17	68.06
47/45	顔示数（K）	1	(73.29)		—	3	79.5	4	79.6		—	1	83.80		—	1	81.82	7	83.85	12	84.60
48/45	上顔示数（K）	1	(43.84)		—	3	47.6	6	48.3		—	1	50.00		—	1	46.75	7	47.55	12	49.31
47/46	顔示数（V）	1	104.90	1	〔106.00〕	4	107.4		—		—	1	117.80		—	1	105.88	17	116.55	14	111.78
48/46	上顔示数（V）	1	62.75	1	〔59.00〕	4	63.9	8	67.7		—	1	63.50		—	1	60.50	15	64.46	17	64.84
	顔面モズルズ	1	(118.67)		—	1	124.0		—		—	1	122.30		—	1	128.67	7	119.67		—
51.	眼窩幅（左）	1	47	1	46(右)	4	43.3	14	43.5	2	41.50	3	43.00	1	42	1	48	23	43.96	15	43.07
52.	眼窩高（左）	1	34	1	30(右)	3	32.0	12	33.5	2	32.00	3	33.67	1	32	1	32	24	33.54	15	32.80
52/51	眼窩示数（左）	1	72.34	1	65.22(右)	3	73.9	12	76.5	2	77.54	3	78.33	1	76.19	1	66.68	22	76.49	15	76.18
54.	鼻幅	1	25	1	26	3	28.0	13	26.6		—	2	27.00		—	1	27	25	27.36	16	27.75
55.	鼻高	1	50	1	45	4	49.3	14	48.6		—	2	51.00		—	1	56	23	50.74	16	51.00
54/55	鼻示数	1	50.00	1	57.78	3	56.4	12	54.5		—	2	52.90		—	1	48.21	22	54.49	16	54.41
72.	全側面角	1	82	1	75	2	85.5	13	81.9		—	2	83.75		—	1	86		—	15	82.00
73.	鼻側面角	1	83	1	76	2	88.1	14	85.8		—	2	89.50		—	1	89		—		—
74.	歯槽側面角	1	78	1	72	2	77.5	13	70.9		—	2	75.50		—	1	75		—		—

すなわち、佐賀貝塚縄文後期人の顔面頭蓋には著しい「低・広顔」傾向が認められ、その傾向は強く、比較的大久保弥生人に近い。

眼窩幅は47㎜（左）で、幅径は著しく広く、大久保弥生人に近く、眼窩高は34㎜（左）で、比較群と大差ない。眼窩示数は72.34（左）となり、chamaekonch（低眼窩）に属しており、白浜縄文人、大久保弥生人よりは大きく、山鹿縄文人に近く、その他の資料よりは小さい。

鼻幅は25㎜で、幅径は狭く、鼻高は50㎜で、やや高く、白浜縄文人、津雲縄文人よりも高く、山鹿縄文人に近い。鼻示数は50.00となり、mesorrhin（中鼻）に属しており、大久保弥生人よ

りは大きいが、その他の資料よりは小さい。

すなわち、眼窩の幅径が著しく広く、鼻部の高径は高い傾向が認められる。

前頭突起水平傾斜角は85度を示し(表4)、前頭突起の向きは矢状方向で、白浜縄文人よりは小さく、その他の資料とは大差ない。

また、歯槽側面角は78度で、他の資料も70度を越えており、これらには歯槽性の突顎傾向は認められない。

表4　鼻根部計測値（男性、㎜、度）(Table 4. Comparison of male nasal root measurements and indices)

		佐賀 縄文後期人 (松下・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		大久保 弥生人 (松下・他)		西北九州 弥生人 (松下)		横隈狐塚 弥生人 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	1	16	1	22	1	22	14	18.79	14	17.21
	鼻根横弧長		—	1	25	1	25	13	24.39	14	19.93
	鼻根彎曲示数		—	1	88.00	1	88.00	13	76.72	14	86.69
57.	鼻骨最小幅		—	1	9	1	10	13	10.23	16	7.94
44.	両眼窩幅	1	105		—	1	113	19	102.37	11	98.18
50/44	眼窩間示数	1	15.24		—	1	19.47	16	18.12	10	17.34
	前頭突起上幅(右)	1	10	1	13	1	11	15	8.60	17	9.18
	(左)	1	10	1	14	1	11	17	8.88	15	9.47
	前頭突起水平傾斜角	1	85	1	99	1	88	12	84.83	9	86.33
	G－N投影距離	1	4	1	2	1	3	24	2.33	10	2.10
	鼻根角		—	1	124	1	135	9	129.78	9	145.56
	G－R距離		—	1	26	1	31	9	26.11	9	31.33
	垂線高		—	1	7	1	4	9	4.89	9	4.22
	鼻根陥凹示教		—	1	26.92	1	12.90	9	18.48	9	13.63

次いで、周辺地域の縄文人、弥生人との相互関係をみてみるために、ペンローズの形態距離を算出し(頭蓋14項目)、主座標分析を行ってみた。図3に示すように、佐賀縄文人は他の縄文人・弥生人集団とはかなり離れてしまう。しかも大久保弥生人、白浜縄文人も同じように離れてしまい、これら3集団が大きなひとつのクラスターを形成しているようである。対馬の佐賀縄文人、壱岐の大久保弥生人、五島の白浜縄文人が他の集団から分離してしまうことは、非常に興味ある結果であるが、これらの離島群がなにか意味を持った集団なのかどうか、未報告の脇岬縄文人などの特徴を明らかにしていく過程で、今後、検討していきたい。

3．四肢骨

①上腕骨

表5で、簡単な比較を行ってみた。最大長は286㎜（1例）で、白浜、阿高、山鹿縄文人よりは大きいが、その他の縄文・弥生人よりは小さい。骨体最小周は61.25㎜(3例)、中央周は68.33㎜（3例）で、両計測値ともすべての比較資料よりも小さく、骨体はあまり太くはない。骨体断面示数は69.23（3例）となり、白浜縄文人よりは大きいが、その他の資料よりは小さく、強い扁平性が認められる。また、長厚示数は24.13（1例）を示し、すべての資料よりも大きく、

この１例は骨体が著しく頑丈である。

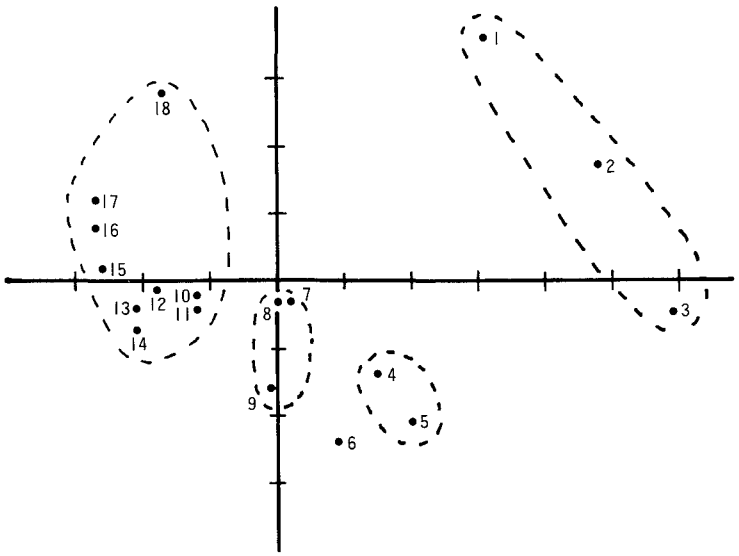


図４．主座標分析（Fig. 4. Principal co-ordinates analysis of the Penrose's shape distances）

１：佐賀、２：大久保、３：白浜、４：広田、５：椎の木、６：山鹿、７：大友、８：津雲、９：西北九州、10：中の浜、11：御領、12：吉母浜、13：土井ケ浜、14：金隈、15：三津永田、16：横隈狐塚、17：古浦、18：二塚山

表５　上腕計測値（男性、右、㎜）（Table 5. Measurements and indices of male right humeri）

	佐賀 縄文後期人（松下・他）		白浜 縄文晩期人（松下・他）		山鹿 縄文人（九州大学）		津雲 縄文人（清野・他）		阿高 縄文人（大森）		御領 縄文人（金関・他）		大久保 弥生人（松下・他）		大友 弥生人（松下）	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 上腕骨最大長	1	286	1	281	3	278.7(左)	15	292.0	4	281.00	1	328	1	306	9	294.33
2. 上腕骨全長	1	285	1	278	3	275.3(左)	12	286.2		—	1	324	1	302	8	291.75
5. 中央最大径	3	24.67(左)	1	27	5	25.2(左)	20	23.9	14	24.86	3	25.50	1	25	37	24.46
6. 中央最小径	3	17.00(左)	1	17	5	18.0(左)	20	17.5	14	18.43	3	19.00	1	19	37	17.97
7. 骨体最小周	4	61.25(左)	1	63	5	68.0(左)	20	65.2	15	67.87	3	73.33	1	69	37	64.57
7(a). 中央周	3	68.33(左)	1	73	5	71.4(左)		—		—	3	72.33	1	75	35	71.00
6/5 骨体断面示数	3	69.23(左)	1	62.96	5	71.6(左)	20	72.7	14	74.23	3	74.50	1	76.00	37	73.60
7/1 長厚示数	1	24.13	1	22.42	3	23.9(左)	15	22.8	4	23.65	1	22.90	1	22.55	9	22.32

②大腿骨

佐賀縄文人の最大長は423㎜（１例）で、表６の中では最も長い。また、骨体中央周は88.00㎜（４例）で、山鹿縄文人、大久保弥生人よりも小さいが、白浜、出水縄文人よりも大きく、比較的阿高、津雲、御領縄文人、大友弥生人に近い。骨体断面示数は109.51（４例）となり、御領、出水縄文人よりは大きいが、縄文人としてはこの示数値はやや小さく、白浜縄文人や比較的大久保、大友弥生人の平均値に近く、山鹿、津雲、阿高縄文人よりは小さい。また、上骨体断面示数は78.26（４例）となり、山鹿、阿高縄文人、大久保、大友弥生人よりも小さいが、御領、白浜縄文人よりも大きく、比較的津雲縄文人の平均値に近く、骨体上部は扁平である。

表6　大腿骨計測値（男性、右、㎜）（Table 6. Measurements and indices of male right femora）

		佐賀 縄文後期人 (松下・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		山鹿 縄文人 (九州大学)		津雲 縄文人 (清野・他)		阿高 縄文人 (大森)		御領 縄文人 (金関・他)		出水 縄文人 (大森・他)		大久保 弥生人 (松下・他)		大友 弥生人 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	1	423	1	406	2	409.0(左)	13	418.2	3	417.33	1	433.0	1	362	1	409	15	413.60
2.	自然位全長	1	421	1	404	1	398	13	414.2	3	411.67	1	424.5	1	359	1	406	15	409.53
6.	骨体中央矢状径	4	29.25	1	26	6	30.7	19	29.3	15	30.07	2	27.50	1	25	1	30	41	28.85
7.	骨体中央横径	4	26.75	1	24	6	26.5	19	25.5	15	25.60	2	27.25	1	24	1	27	41	26.07
8.	骨体中央周	4	88.00	1	80	6	90.3	19	86.8	15	88.73	2	86.00	1	79	1	90	41	87.22
9.	骨体上横径	4	31.75	1	29	7	31.6(左)	21	30.5	15	30.53	2	41.25	1	21	1	34	42	30.62
10.	骨体上矢状径	4	24.75	1	22	7	26.6(左)	21	79.5	15	25.53	2	30.00	1	27	1	29	42	24.83
8/2	長厚示数	1	21.14	1	19.80	1	21.9	13	21.1	3	22.37	1	20.5	1	22.01	1	22.17	15	21.13
6/7	骨体中央断面示数	4	109.51	1	108.33	6	115.7	19	114.6	15	117.58	2	100.9	1	104.17	1	111.11	41	111.72
10/9	上骨体断面示数	4	78.26	1	75.86	7	84.3(左)	21	79.5	15	83.17	2	72.7	1	128.57	1	85.29	42	81.34

③脛骨

最大長は長く、370㎜（1例）で、山鹿縄文人よりは小さいものの、表7ではそれ以外の資料よりは著しく長い。骨体周は80.67㎜（3例）、最小周は73.67㎜（3例）で、両計測値とも白浜、出水縄文人よりは大きいが、その他の資料よりは小さい。また、中央断面示数は71.56（3例）となり、出水縄文人、大久保弥生人よりは小さいが、津雲、山鹿縄文人および大友弥生人よりも大きく、白浜、阿高、御領縄文人の値に近く、扁平性は認められない。また、長厚示数は21.37（1例）で、大久保弥生人よりは小さく、他の資料とは大差ない。

すなわち、上肢は頑丈であるが、下肢骨はそれほどではない。

表7　脛骨計測値（㎜）（Table 7. Measurements and indices of male right tibiae）

		佐賀 縄文後期人 (松下・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		山鹿 縄文人 (九州大学)		津雲 縄文人 (清野・他)		阿高 縄文人 (大森)		御領 縄文人 (金関・他)		出水 縄文人 (大森・他)		大久保 弥生人 (松下・他)		大友 弥生人 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	1	365	1	321	1	369	7	345.9	3	350.00	1	360.0	1	309	1	321	12	339.58
1a.	脛骨最大長	1	370	1	331	1	375	8	349.5	2	352.50	1	365.0	1	316	1	329	14	347.86
8.	中央最大径	3	29.33	1	28	2	33.0	19	32.1	9	31.33	3	30.33	1	25	1	29	35	31.26
8a.	栄養孔位最大径	3	33.33	1	31	4	36.0	18	35.4	8	34.88		—		—	1	36	30	34.63
9.	中央横径	3	21.00	1	20	2	22.5	19	19.6	9	22.00	3	21.00	1	19	1	24	38	21.29
9a.	栄養孔位横径	3	23.67	1	21	4	23.8	18	21.9	8	23.88		—		—	1	27	32	23.22
10.	骨体周	3	80.67	1	75	2	88.5	19	83.8	10	86.20		—	1	70	1	83	34	82.85
10a.	栄養孔位周	3	89.33	1	82	4	94.5	18	92.2		—		—	1	77	1	98	30	92.00
10b.	最小周	3	73.67	1	69	5	78.2	15	77.4		—	3	77.00	1	62	1	77	34	75.35
9/8	中央断面示数	3	71.56	1	71.43	2	68.2	19	61.5	9	70.39	3	69.40	1	76.00	1	82.76	34	68.03
9a/8a	栄養孔位断面示数	3	70.95	1	67.74	4	66.1	18	62.2	8	68.88	1	22.2		—	1	75.00	30	67.16
10b/1	長厚示数	1	21.37	1	21.50	1	22.0	7	22.4		—		—	1	20.06	1	23.99	12	21.88

4．推定身長値

大腿骨からの推定身長値を他の資料と比較してみた。表8のとおり、本例は160.82㎜（1例）で、あまり高いものではない。この身長値は白浜、山鹿縄文人および大久保、西北九州弥生人の値よりはわずかに大きく、阿高、津雲縄文人および大友弥生人とほとんど大差ない。すなわち、身長値は九州や岡山県の縄文人や西北九州地域の弥生人とほとんど大差ないと考えてさしつかえないようである。

表8　推定身長値（男性、右大腿骨、Pearsonの式、cm）

(Table 8. Comparison of estimated male statures)

佐賀 縄文後期人 (松下・他)		白浜 縄文晩期人 (松下・他)		阿高 縄文人 (大森)		津雲 縄文人 (清野・他)		山鹿 縄文人 (九州大学)		大久保 弥生人 (松下・他)		大友 弥生人 (松下)		西北九州 弥生人 (内藤)	
n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	160.82	1	157.63	3	159.76	13	159.88	2	158.2	1	158.20	15	159.06	16	158.79

要　約

長崎県上県郡峰町（対馬）大字佐賀にある佐賀貝塚の発掘調査が1985年に行われ、埋葬人骨5体と散乱骨が出土した。九州本土と朝鮮半島との間の飛び石的存在として、注目されている対馬からの縄文時代人骨だけにその形質的特徴が注目される。

人骨の保存状態は良好なものばかりではなかったが、人骨の形質人類学的観察や計測を行い、その特徴の一端を明らかにすることができた。その結果は次のように要約することができる。

1．今回出土した人骨は5体分の埋葬人骨と散乱骨である。頭蓋の数からは成人骨は少なくとも6体分、幼小児骨（含む新生児）は上腕骨と大腿骨から少なくとも4体分で、従って、今回の発掘調査で出土した縄文時代人骨の体数は少なくとも10体分と考えられる。また、性別を判別できたものはすべて男性であった。

2．これらの人骨は、縄文時代後期に属する人骨群である。

3．頭蓋最大長は189.00㎜（2例）、頭蓋最大幅は152.00㎜（2例）、バジオン・ブレグマ高は137㎜（1例）で、頭蓋長幅示数は80.42（2例）、頭蓋長高示数は74.05（1例）、頭蓋幅高示数は92.57（1例）で、頭型はbrachy-, ortho-, metriokran（短、中、中頭）に属している。

4．頬骨弓幅は（146㎜）（1例）、中顔幅は102㎜（1例）、顔高は107㎜（1例）、上顔高は64㎜（1例）で、コルマンの顔示数と上顔示数はそれぞれ（73.29）、（43.84）、ウィルヒョーの顔示数と上顔示数はそれぞれ104.90、62.75となり、顔面頭蓋には著しい「低・広顔」傾向が認められる。

5．眼窩幅は47㎜（左）（1例）、眼窩高は34㎜（左）（1例）、眼窩示数は72.34（左）（1例）となり、chamaekonch（低眼窩）に属している。鼻幅は25㎜（1例）、鼻高は50㎜（1例）、鼻示数は50.00（1例）となり、mesorrhin（中鼻）に属している。

6．歯槽側面角は78度で、歯槽性の突顎傾向は認められない。

7．上腕骨の長さは短い。三角筋粗面の発達はきわめて良好で、三角筋粗面部で「く」の状に屈折しているものも存在するが、骨体の径は大きいものとやや小さいものとが存在した。また、骨体は著しく扁平である。

8．大腿骨は縄文人としてはやや長い。粗線や骨体の両側面の後方への発達は良好で、柱状性を呈しており、骨体も大きい。また、骨体上部は扁平である。

9．脛骨の長さは長いが、骨体はそれほど大きくなく、扁平性も認められない。

10. 大腿骨からの推定身長値は160.82cm（Pearsonの式）（1例）である。

11. 風習的抜歯は認められない。また、外耳道骨腫が1例（5号人骨、両側）に認められた。

12. 以上のように、佐賀縄文人は、短頭型で脳頭蓋の径がやや大きく、「低・広顔」傾向が著しく強い縄文人であった。四肢骨は上肢骨が下肢骨よりも頑丈で、上腕骨、大腿骨には扁平性が認められ、柱状性も認められたが、脛骨は扁平ではない。また、橈骨は上腕骨に比べて長く、脛骨も大腿骨に比較して長い。なお、5体の埋葬人骨のうち、1体（4号人骨）は大きく、頑丈で、屈強な縄文人であったが、1体（1号人骨）は四肢骨は小さい縄文人であった。

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた峰町教育委員会ならびに長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。≫

表9　脳頭蓋計測値（㎜）（Calvaria）

		佐賀貝塚 1号人骨 男性	佐賀貝塚 4号人骨 男性	佐賀貝塚 5号人骨 男性	佐賀貝塚 平均値 男性	
					n	M
1.	頭蓋最大長	—	185	193	2	189.00
8.	頭蓋最大幅	—	148	156	2	152.00
17.	バジオン・ブレグマ高	—	137	—	1	137
8/1	頭蓋長幅示数	—	80.00	80.83	2	80.42
17/1	頭蓋長高示数	—	74.05	—	1	74.05
17/8	頭蓋幅高示数	—	92.57	—	1	92.57
	頭蓋モズルズ	—	156.67	—	1	156.67
5.	頭蓋底長	—	103	—	1	103
9.	最小前頭幅	—	95	—	1	95
10.	最大前頭幅	—	115	127	2	121.00
11.	両耳幅	122	133	142	3	132.33
12.	最大後頭幅	—	116	—	1	116
13.	乳突幅	—	102	—	1	102
7.	大後頭孔長	—	34	—	1	34
16.	大後頭孔幅	—	30	—	1	30
16/7	大後頭示数	—	88.24	—	1	88.24
23.	頭蓋水平周	—	524	—	1	524
24.	横弧長	—	310	344	2	327.00
25.	正中矢状弧長	—	376	—	1	376
26.	正中矢状前頭弧長	—	134	—	1	134
27.	正中矢状頭頂弧長	—	—	133	1	133
28.	正中矢状後頭弧長	—	—	—		—
29.	左中矢状前頭弦長	—	116	—	1	116
30.	正中矢状頭頂弦長	—	—	117	1	117
31.	正中矢状後頭弦長	—	—	—		—
29/26	矢状前頭示数	—	86.57	—	1	86.57
30/27	矢状頭頂示数	—	—	87.97	1	87.97
31/28	矢状後頭示数	—	—	—		—
	Vertex Rad.	—	125	138	2	131.25
	Nasion Rad.	—	93	—	1	93
	Subsp. Rad.	—	98	—	1	98
	Prosth. Rad.	—	101	—	1	101

* Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI, Yoshiyuki ORIHARA
Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University
〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授)〕
* * Jouichi OYAMADA
Department of Oral Anatomy, School of Dentistry, Nagasaki Umiversity
〔長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座（主任：六反田篤教授)〕

表10　顔面頭蓋計測値（㎜、度）(Facial skeleton)

		佐賀貝塚4号人骨 男性
40.	顔長	103
41.	側顔長	70
42.	下顔長	119
43.	上顔幅	109
45.	頬骨弓幅	(146)
46.	中顔幅	102
47.	顔高	107
48.	上顔高	64
47/45	顔示数（K）	(73.29)
48/45	上顔示数（K）	(43.84)
47/46	顔示数（V）	104.90
48/46	上顔示数（V）	62.75
	顔面モズルス	(118.67)
50.	前眼窩間幅	16
44.	両眼窩幅	105
50/44	眼窩間示教	15.24
51.	眼窩幅（右）	47
	（左）	47
52.	眼窩高（右）	34
	（左）	34
52/51	眼窩示数（右）	72.34
	（左）	72.34
54.	鼻幅	25
55.	鼻高	50
54/55	鼻示数	50.00
55(1).	梨状口高	—
56.	鼻骨長	—
57.	鼻骨最小幅	—
57(1).	鼻骨最大幅	—
60.	上顎歯槽長	—
61.	上顎歯槽幅	—
62.	口蓋長	—
63.	口蓋幅	—
64.	口蓋高	—
61/60	上顎歯槽示数	—
63/62	口蓋示数	—
64/63	口蓋高示数	—
72.	全側面角	82
73.	鼻側面角	83
74.	歯槽側面角	78

表11　鼻根部計測値（㎜、度）(Nasal root)

		佐賀貝塚4号人骨 男性
50.	前眼窩間幅	16
	鼻根横弧長	—
	鼻根彎曲示数	—
57.	鼻骨最小幅	—
44.	両眼窩幅	105
50/44	眼窩間示数	15.24
	前頭突起上幅（右）	10
	（左）	10
	前頭突起水平傾斜角	85
	G－N投影距離	4
	鼻根角	—
	G－R距離	—
	垂線高	—
	鼻根陥凹示数	—

表12　下顎骨計測値（㎜、度）(Mandible)

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性	
				n	M
65.	下顎関節突起幅	—	134	1	134
65(1).	下顎筋突起幅	—	102	1	102
66.	下顎角幅	102	100	2	101.00
67.	前下顎幅	—	50	1	50
68.	下顎長	68	73	2	70.50
68(1).	下顎長	—	105	1	105
69.	オトガイ高	—	31	1	31
69(1).	下顎体高 (右)	—	35	1	35
	(左)	28	32	2	30.00
69(2).	下顎体高 (右)	—	31	1	31
	(左)	27	—	1	27
70.	枝高 (右)	—	72	1	72
	(左)	—	72	1	72
70(1).	前枝高 (右)	—	68	1	68
	(左)	—	68	1	68
70(2).	最小枝高 (右)	47	59	2	53.00
	(左)	48	57	2	52.50
70(3).	下顎切痕高 (右)	—	13	1	13
	(左)	—	15	1	15
71.	枝幅 (右)	32	37	2	34.50
	(左)	34	36	2	35.00
71a.	最小枝幅 (右)	32	37	2	34.50
	(左)	34	36	2	35.00
71(1).	下顎切痕幅 (右)	—	35	1	35
	(左)	—	36	1	36
79.	下顎枝角 (右)	—	111	1	111
	(左)	—	115	1	115
66/65	下顎幅示数	—	74.63	1	74.63
68/65	幅長示数	—	54.48	1	54.48
68(1)/65	幅長示数	—	78.36	1	78.36
69(2)/69	下顎高示数 (右)	—	100.00	1	100.00
	(左)	—	—		—
71/70	下顎枝示数 (右)	—	51.39	1	51.39
	(左)	—	50.00	1	50.00
71a/70(2)	下顎枝示数 (右)	68.09	62.71	2	65.40
	(左)	70.83	63.16	2	67.00
70(3)/71(1)	下顎切痕示数 (右)	—	37.14	1	37.14
	(左)	—	41.67	1	41.67

表13　肩甲骨計測値（㎜）(Scapula)

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性	
				n	M
11.	鳥口突起最大長 (右)	—	—		—
	(左)	—	—		—
12.	関節窩長 (右)	—	36	1	36
	(左)	34	35	2	34.50
13.	関節窩幅 (右)	—	—		—
	(左)	27	—	1	27
14.	関節窩深 (右)	—	5	1	5
	(左)	5	5	2	5.00
13/12	関節窩長幅示数 (右)	—	—		—
	(左)	79.41	—	1	79.41
14/12	関節窩彎曲示数 (右)	—	13.89	1	13.89
	(左)	14.71	13.51	2	14.11

表14　鎖骨計測値（㎜）(Clavicle)

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性	
					n	M
1.	鎖骨最大長 (右)	—	—	144	1	144
	(左)	—	—	154	1	154
2.	骨体彎曲高 (右)	—	—	6	1	6
	(左)	—	—	6	1	6
2a.	骨体彎曲高 (右)	—	—	31	1	31
	(左)	—	—	33	1	33
2(1).	肩峰端彎曲高 (右)	—	—	30	1	30
	(左)	—	—	32	1	32
3.	骨体彎曲弦長 (右)	—	—	95	1	95
	(左)	—	—	101	1	101
4.	中央垂直径 (右)	9	—	10	2	9.50
	(左)	9	10	9	3	9.33
5.	中央矢状径 (右)	14	—	13	2	13.50
	(左)	14	14	12	3	13.33
6.	中央周 (左)	38	—	38	2	38.00
	(左)	38	41	35	3	38.00
6/1	長厚示数 (右)	—	—	26.39	1	26.39
	(左)	—	—	22.73	1	22.73
2a/1	彎曲示数 (右)	—	—	21.53	1	21.53
	(左)	—	—	21.43	1	21.43
4/5	鎖骨断面示数 (右)	64.29	—	76.92	2	70.61
	(左)	64.29	71.43	75.00	3	70.24
2(1)/1	肩峰端彎曲示数 (右)	—	—	20.83	1	20.83
	(左)	—	—	20.78	1	20.78

表15　上腕骨計測値（㎜）（Humerus）

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚散乱3号 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性		
						n	M	σ
1.	上腕骨最大長(右)	—	—	—	286	1	286	
	(左)	—	—	—	293	1	293	
2.	上腕骨全長(右)	—	—	—	285	1	285	
	(左)	—	—	—	291	1	291	
3.	上端幅(右)	—	—	—	49	1	49	
	(左)	—	—	—	48	1	48	
3(1).	横上径(右)	—	—	—	55	1	55	
	(左)	—	—	—	53	1	53	
4.	下端幅(右)	—	—	—	60	1	60	
	(左)	—	—	—	60	1	60	
5.	中央最大径(右)	24	—	—	28	2	26.00	
	(左)	24	—	23	27	3	24.67	
6.	中央最小径(右)	17	—	—	17	2	17.00	
	(左)	17	—	17	17	3	17.00	
7.	骨体最小周(右)	58	64	—	69	3	63.67	
	(左)	57	64	57	67	4	61.25	5.06
7(a).	中央周(右)	67	—	—	78	2	72.50	
	(左)	66	—	65	74	3	68.33	
8.	頭周(右)	—	—	—	140	1	140	
	(左)	—	—	—	138	1	138	
9.	頭最大横径(右)	—	—	—	43	1	43	
	(左)	—	—	—	42	1	42	
10.	頭最大矢状径(右)	—	—	—	44	1	44	
	(左)	—	—	—	44	1	44	
11.	滑車幅(右)	—	—	—	21	1	21	
	(左)	19	—	—	—	1	19	
12.	小頭幅(右)	—	—	—	18	1	18	
	(左)	14	—	—	17	2	15.50	
12(a).	滑車幅および小頭幅(右)	—	—	—	45	1	45	
	(左)	38	—	—	—	1	38	
12(b).	小頭幅(右)	—	—	—	24	1	24	
	(左)	18	—	—	—	1	18	
13.	滑車深(右)	—	—	—	28	1	28	
	(左)	23	—	—	30	2	26.50	
14.	尺骨頭窩幅(右)	—	—	—	28	1	28	
	(左)	25	—	—	25	2	25.00	
15.	尺骨頭窩深(右)	—	—	—	14	1	14	
	(左)	13	—	—	14	2	13.50	
6/5	骨体断面示数(右)	70.83	—	—	60.71	2	65.77	
	(左)	70.83	—	73.91	62.96	3	69.28	
7/1	長厚示数(右)	—	—	—	24.13	1	24.13	
	(左)	—	—	—	22.87	1	22.87	

表16　橈骨計測値（㎜）（Radius）

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性	
					n	M
1.	最大長(右)	—	—	245	1	245
	(左)	—	—	247	1	247
1b	平行長(右)	—	—	242	1	242
	(左)	—	—	243	1	243
2.	機能長(右)	—	—	228	1	228
	(左)	—	—	230	1	230
3.	最小周(右)	—	—	45	1	45
	(左)	—	45	43	2	44.00
4.	骨体横径(右)	16	19	20	3	18.33
	(左)	17	17	18	3	17.33
4a.	骨体中央横径(右)	16	17	18	3	17.00
	(左)	17	17	18	3	17.33
4(1).	小頭横径(右)	—	—	22	1	22
	(左)	—	—	21	1	21
4(2).	頚横径(右)	—	—	13	1	13
	(左)	—	—	13	1	13
5.	骨体矢状径(右)	11	12	13	3	12.00
	(左)	11	13	12	3	12.00
5a.	骨体中央矢状径(右)	11	12	13	3	12.00
	(左)	11	13	12	3	12.00
5(1).	小頭矢状径(右)	—	—	23	1	23
	(左)	—	—	23	1	23
5(2).	頚矢状径(右)	—	—	14	1	14
	(左)	—	—	14	1	14
5(3).	小頭周(右)	—	—	71	1	71
	(左)	—	—	69	1	69
5(4).	頚周(右)	—	—	43	1	43
	(左)	—	—	43	1	43
5(5).	骨体中央周(右)	42	46	49	3	45.67
	(左)	44	47	47	3	46.00
5(6).	骨下端幅(右)	—	—	32	1	32
	(左)	—	—	32	1	32
3/2	長厚示数(右)	—	—	19.74	1	19.74
	(左)	—	—	18.70	1	18.70
5/4	骨体断面示数(右)	68.75	63.16	65.00	3	65.64
	(左)	64.71	76.47	66.67	3	69.28
5a/4a	中央断面示数(右)	68.75	70.59	72.22	3	70.52
	(左)	64.71	76.47	66.67	3	69.28

表17　尺骨計測値（㎜）（Ulna）

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚散乱4号 男性	佐賀貝塚平均値 男性		
						n	M	σ
1.	最大長(右)	—	—	262	—	1	262	
	(左)	—	—	263	—	1	263	
2.	機能長(右)	—	—	231	—	1	231	
	(左)	206	—	231	—	2	218.50	
2(1).	肘頭尺骨頭長(右)	—	—	259	—	1	259	
	(左)	229	—	260	—	2	244.50	
3.	最小周(右)	—	—	40	—	1	40	
	(左)	32	—	38	—	2	35.00	
6.	肘頭幅(右)	—	—	27	—	1	27	
	(左)	22	—	27	—	2	24.50	
6(1).	上幅(右)	—	—	36	—	1	36	
	(左)	—	—	34	—	1	34	
7.	肘頭深(右)	—	—	26	—	1	26	
	(左)	22	—	24	—	2	23.00	
8.	肘頭高(右)	—	—	17	—	1	17	
	(左)	14	—	17	—	2	15.50	
11.	尺骨矢状径(右)	11	—	15	—	2	13.00	
	(左)	11	14	16	15	4	14.00	2.16
12.	尺骨横径(右)	14	—	17	—	2	15.50	
	(左)	14	15	17	15	4	15.25	1.26
S	中央最小径(右)	11	13	13	—	3	12.33	
	(左)	11	13	13	13	4	12.50	1.00
L	中央最大径(右)	14	16	18	—	3	16.00	
	(左)	13	15	19	18	4	16.25	2.75
C	中央周(右)	42	48	51	—	3	47.00	
	(左)	40	47	50	50	4	46.75	4.72
3/2	長厚示数(右)	—	—	17.32	—	1	17.32	
	(左)	15.53	—	16.45	—	2	15.99	
11/12	骨体断面示数(右)	78.57	—	88.24	—	2	83.41	
	(左)	78.57	93.33	94.12	100.00	4	91.51	9.12
S/L	中央断面示数(右)	78.57	81.25	72.22	—	3	77.35	
	(左)	84.62	86.67	68.42	72.22	4	77.98	9.02

表18　大腿骨計測値（㎜）（Femur）

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚散乱5号 男性	佐賀貝塚平均値 男性		
						n	M	σ
1.	最大長(右)	—	—	423	—	1	423	
	(左)	—	—	—	—		—	
2.	自然位全長(右)	—	—	421	—	1	421	
	(左)	—	—	—	—		—	
3.	最大転子長(右)	—	—	413	—	1	413	
	(左)	—	—	—	—		—	
4.	自然位転子長(右)	—	—	403	—	1	403	
	(左)	—	—	—	—		—	
6.	骨体中央矢状径(右)	27	31	29	30	4	29.25	1.71
	(左)	28	—	30	—	2	29.00	
7.	骨体中央横径(右)	24	27	28	28	4	26.75	1.89
	(左)	24	—	27	—	2	25.50	
8.	骨体中央周(右)	82	91	89	90	4	88.00	4.08
	(左)	82	—	89	—	2	85.50	
9.	骨体上横径(右)	30	30	34	33	4	31.75	2.06
	(左)	29	31	33	—	3	31.00	
10.	骨体上矢状径(右)	23	27	24	25	4	24.75	1.71
	(左)	22	27	24	—	3	24.33	
15.	頚垂直径(右)	—	—	32	—	1	32	
	(左)	—	—	32	—	1	32	
16.	頚矢状径(右)	—	—	25	—	1	25	
	(左)	—	—	24	—	1	24	
17.	頚周(右)	—	—	95	—	1	95	
	(左)	—	—	96	—	1	96	
18.	頭垂直径(右)	—	—	46	—	1	46	
	(左)	—	—	45	—	1	45	
19.	頭横径(右)	—	—	46	—	1	46	
	(左)	—	—	46	—	1	46	
20.	頭周(右)	—	—	148	—	1	148	
	(左)	—	—	148	—	1	148	
21.	上顆幅(右)	—	—	—	—		—	
	(左)	—	—	—	—		—	
8/2	長厚示数(右)	—	—	21.14	—	1	21.14	
	(左)	—	—	—	—		—	
6/7	骨体中央断面示数(右)	112.50	114.81	103.57	107.14	4	109.51	5.10
	(左)	116.67	—	111.11	—	2	113.89	
10/9	上骨体断面示数(右)	76.67	90.00	70.59	75.76	4	78.26	8.28
	(左)	75.86	87.10	72.73	—	3	78.56	
16/15	頚断面示数(右)	—	—	78.13	—	1	78.13	
	(左)	—	—	75.00	—	1	75.00	
19/18	頭断面示数(右)	—	—	100.00	—	1	100.00	
	(左)	—	—	102.22	—	1	102.22	

表19　脛骨計測値（㎜）（Tibia）

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性	
					n	M
1.	脛骨全長(右)	—	—	365	1	365
	(左)	—	—	365	1	365
1a.	脛骨最大長(右)	—	—	370	1	370
	(左)	—	—	370	1	370
1b.	脛骨長(右)	—	—	357	1	357
	(左)	—	—	357	1	357
2.	顆距間距離(右)	—	—	345	1	345
	(左)	—	—	345	1	345
3.	最大上端幅(右)	—	—	—		—
	(左)	—	—	—		—
3a.	上内関節面幅(右)	—	—	30	1	30
	(左)	—	—	—		—
3b.	上外関節面幅(右)	—	—	—		—
	(左)	—	—	—		—
4a.	上内関節面深(右)	—	—	—		—
	(左)	—	—	—		—
4b.	上外関節面深(右)	—	—	37	1	37
	(左)	—	—	39	1	39
6.	最大下端幅(右)	—	—	53	1	53
	(左)	—	—	53	1	53
7.	下端矢状径(右)	—	—	38	1	38
	(左)	—	—	37	1	37
8.	中央最大径(右)	28	29	31	3	29.33
	(左)	28	29	31	3	29.33
8a.	栄養孔位最大径(右)	30	35	35	3	33.33
	(左)	30	35	34	3	33.00
9.	中央横径(右)	19	22	22	3	21.00
	(左)	20	23	23	3	22.00
9a.	栄養孔位横径(右)	21	26	24	3	23.67
	(左)	20	25	23	3	22.67
10.	骨体周(右)	74	82	86	3	80.67
	(左)	75	82	86	3	81.00
10a.	栄養孔位周(右)	82	94	92	3	89.33
	(左)	78	94	92	3	88.00
10b.	最小周(右)	68	75	78	3	73.67
	(左)	68	74	79	3	73.67
9/8	中央断面示数(右)	67.86	75.86	70.97	3	71.56
	(左)	71.43	79.31	74.19	3	74.98
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)	70.00	74.29	68.57	3	70.95
	(左)	66.67	71.43	67.65	3	68.58
10b/1	長厚示数(右)	—	—	21.37	1	21.37
	(左)	—	—	21.64	1	21.64

表20　腓骨計測値（㎜）（Fibula）

		佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性	佐賀貝塚平均値 男性 n	M
1.	最大長(右)	—	—	—		—
	(左)	—	—	—		—
2.	中央最大径(右)	14	—	17	2	15.50
	(左)	14	16	16	3	15.33
3.	中央最小径(右)	10	—	12	2	11.00
	(左)	11	11	12	3	11.33
4.	中央周(右)	43	—	49	2	46.00
	(左)	45	46	48	3	46.33
4a.	最小周(右)	—	40	—	1	40
	(左)	—	43	—	1	43
4b.	頚横径(右)	—	12	—	1	12
	(左)	—	15	—	1	15
4c.	頚矢状径(右)	—	14	—	1	14
	(左)	—	13	—	1	13
4(1).	上端幅(右)	—	—	26	1	26
	(左)	—	—	—		—
4(1a).	上端矢状幅(右)	—	—	—		—
	(左)	—	—	—		—
4(2).	下端幅(右)	—	—	—		—
	(左)	—	20	22	2	21.00
4(2a).	下端矢状幅(右)	—	—	27	1	27
	(左)	—	28	26	2	27.00
3/2	中央断面示数(右)	71.43	—	70.59	2	71.01
	(左)	78.57	68.75	75.00	3	74.11
4a/1	長厚示数(右)	—	—	—		—
	(左)	—	—	—		—

表21　推定身長値（cm）
(Estimated stature)

		佐賀貝塚4号人骨 男性
Pearsonの式	上腕骨(右)	153.41
	(左)	155.43
	橈骨(右)	166.06
	(左)	166.71
	大腿骨(右)	160.82
	(左)	—
	脛骨(右)	165.38
	(左)	165.38
藤井の式	上腕骨(右)	153.04
	(左)	155.83
	橈骨(右)	163.43
	(左)	164.91
	大腿骨(右)	159.38
	(左)	—
	脛骨(右)	164.15
	(左)	163.68

表22　四肢骨比（最大長の比）
(Ratio of extremities)

	佐賀貝塚4号人骨 男性
鎖骨／上腕骨(右)	50.35
(左)	52.56
橈骨／上腕骨(右)	85.56
(左)	84.30
橈骨／尺骨(右)	93.51
(左)	93.92
橈骨／大腿骨(右)	57.92
(左)	—
橈骨／脛骨(右)	66.22
(左)	66.76
上腕骨／大腿骨(右)	67.61
(左)	—
上腕骨／脛骨(右)	77.30
(左)	79.19
脛骨／大腿骨(右)	87.47
(左)	—
腓骨／脛骨(右)	—
(左)	—
上肢骨／下肢骨(右)	66.96
(左)	—

※上肢骨＝橈骨＋上腕骨、
下肢骨＝脛骨＋大腿骨

表23　四肢骨比（中央周の比）(Ratio of extremities)

	佐賀貝塚1号人骨 男性	佐賀貝塚2号人骨 男性	佐賀貝塚4号人骨 男性
橈骨／尺骨(右)	100.00	—	96.08
(左)	110.00	100.00	94.00
橈骨／上腕骨(右)	62.59	—	62.82
(左)	66.67	—	63.51
鎖骨／上腕骨(右)	56.72	—	48.72
(左)	57.58	—	47.30
上腕骨／大腿骨(右)	81.71	—	87.64
(左)	80.49	—	83.15
上腕骨／脛骨(右)	90.54	—	90.70
(左)	88.00	—	86.05
脛骨／大腿骨(右)	90.24	90.11	96.63
(左)	91.46	—	96.63
腓骨／脛骨(右)	58.11	—	56.98
(左)	60.00	56.10	55.81

参考文献

1．Howells. W. W,1974 : Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol. 67.

2．金関丈夫、他、1955、：熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究、2：93—163.

3．金関丈夫、他、1960：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について。人類学研究、7（附録）：1—36.

4．清野謙次、他、1926a：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第二部　頭蓋骨の研究（前編）。人類学雑誌、41：95—140.

5．清野謙次、他、1926b：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第二部　頭蓋骨の研究（後編）。人類学雑誌、41：151—208.

6．清野謙次、他、1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第四部　下肢骨の研究。其一　人類学雑誌、43、第4付録：303—390.

7．清野謙次、他、1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第三部　上肢骨の研究。人類学雑誌、43、第3付録：179—301.

8．九州大学医学部解剖学第二講座、1988：日本民族・文化の生成、2、九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成、六興出版、東京

9．Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. l. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart : 429-597.

10．松下孝幸、1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書46)：242—255.

11．松下孝幸、他、1980：串島遺跡出土の人骨。串島遺跡（長崎県文化財調査報告書51)：133—135.

12．松下孝幸、他、1980：五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨。白浜貝塚（福江市文化財調査報告書2)：120—133.

13．松下孝幸、1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1)：223—253.

14．松下孝幸、他、1983a：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。土井ケ浜遺跡第7次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化調査報告2)：19—30.

15．松下孝幸、他、1983b：佐賀県唐津市菜畑遺跡出土の人骨。菜畑遺跡(唐津市文化財調査報告5)：388—398.

16．松下孝幸、1985：福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨。横隈狐塚遺跡II下巻、（小郡市文化財調査報告書第27集)：1—46.

17．松下孝幸、他、1986：熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨。七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚（熊本県文化財調査報告第79集)：39—70.

18. 松下孝幸、他、1988：長崎県壱岐・石田町大久保遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報ＸＩ（長崎県文化財調査報告書第91集）：77—99.
19. 内藤芳篤、1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌、79：236—248.
20. 内藤芳篤、1973：沖の原遺跡の人骨。長崎大学解剖学第二教室
21. 中橋孝博、他、1980：椎の木遺跡出土人骨について。馬毛島埋葬址—西之表市椎の木遺跡—（研究室活動報告６）：24—34.
22. 中橋孝博、他、1985：金隈遺跡出土の弥生時代人骨。史跡金隈遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集）：43—145.
23. 大森浅吉、1960：故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究、7（附録）：211—230.
24. 大森浅吉、他、1960：薩摩国出水貝塚出土（昭和29年）の人骨について。鹿児島医学会雑誌、33：269—283.
25. 岡本辰之輔、1929：肥後国下益城郡阿高貝塚人人骨の人類学的研究（頭蓋骨に就いて）第一報。人類学雑誌、44（第１附録）：１—26.
26. 岡本辰之輔、1929：肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人人骨の人類学的研究（其の二、四肢骨について）。人類学雑誌、44（第三附録）：77—105.
27. 岡本辰之輔、他、1930：日本石器時代人人骨（津雲貝塚人々骨）の身体各部比例に就いて。人類学雑誌、45：51—78.
28. 鈴木　尚、1963：日本人の骨。岩波書店。
29. 牛島陽一、1954：佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究、１：273—303.
30. 財津博之、1956：山口県土井ケ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究３：320—349.

Hunam Skeletal Remains of the Jomon Period Excavated form Saka Shell-Mound, Mine -cho, Nagasaki Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI, Yoshiyuki ORIHARA
〔Depertment of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University〕
Jouichi OYAMADA
〔Depertment of Oral Anatomy, School of Dentistry, Nagasaki University〕

Five buried skeletons, four adult males and one infant, of the late phase of the Jomon Period were excavated from Saka Shell-mound, Mine-cho, Kamiagata-gun (Tsushima island), Nagasaki Prefecture, in 1985. They were observed and measured anthropologically.

Skeltons of Saka people is thick and massive.

The male length-breadth index is 80.42, brachycranic, and its face is strikingly wide and low (Table 9, 10).

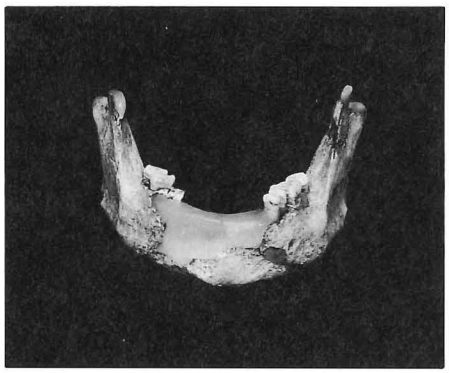
The measurements and indices of the Saka skulls are compared with the Jomon and Yayoi series of the southwest Japan (Table 2, 3).

Saka Jomon people did not practice the artificial tooth extraction. Estimated stature is 160.82cm. No. 5 skeleton has aural exostoses bilaterally.

頭蓋後面（Norma occipitalis of the skull）

下顎骨上面（Norma verticalis of the mandible）

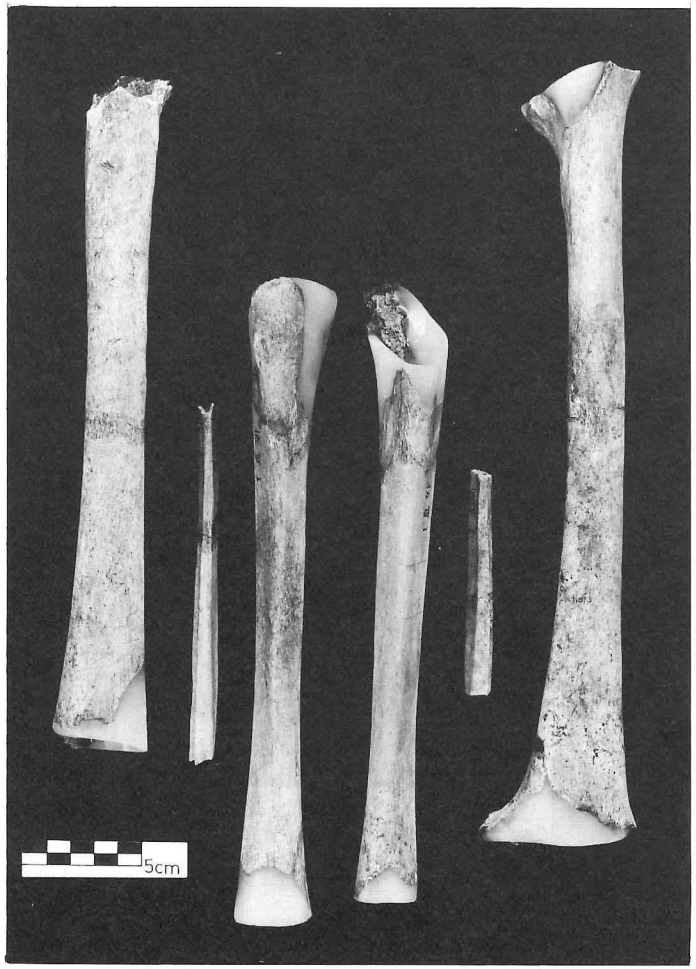
下顎骨側面（Norma lateralis of the mandible）



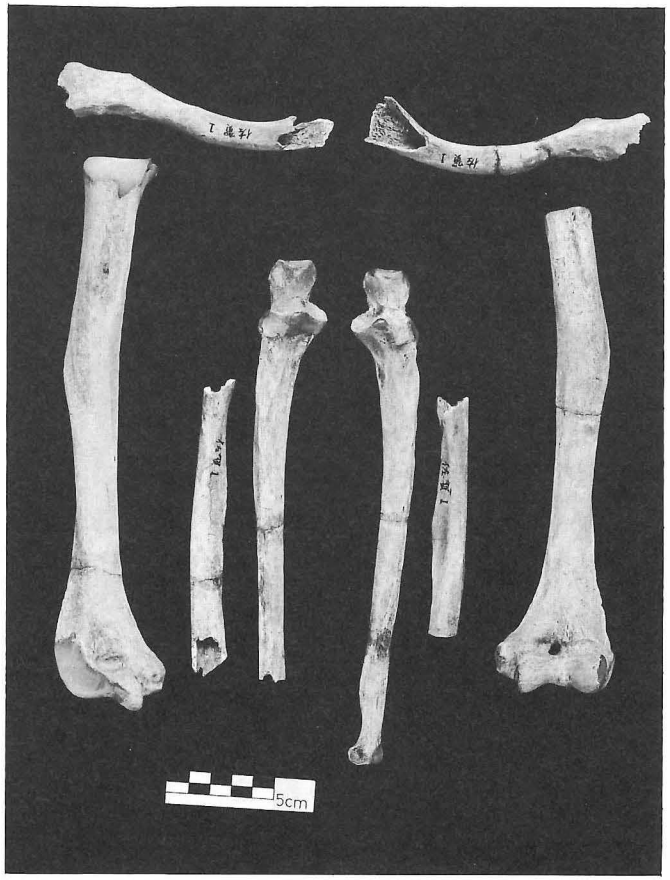
下顎骨前面（Norma frontalis of the mandible）

佐賀貝塚Ⅰ号人骨（男性、年令不明）
（Saka No. I skeleton, male）

図版1



下肢骨（Bones of the lower limb）



上肢骨（Bones of the upper limb）

図版2

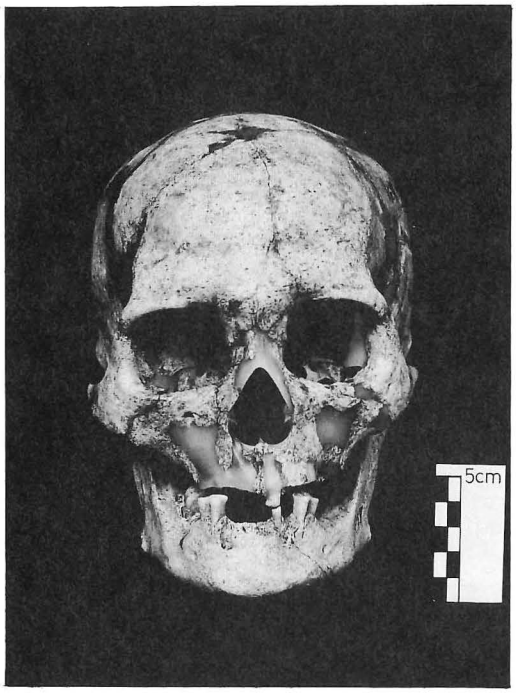
佐賀貝塚Ⅰ号人骨(男性、年令不明)
(Saka No. I skeleton, male)

下肢骨（Bones of the lower limb）

上肢骨（Bones of the upper limb）

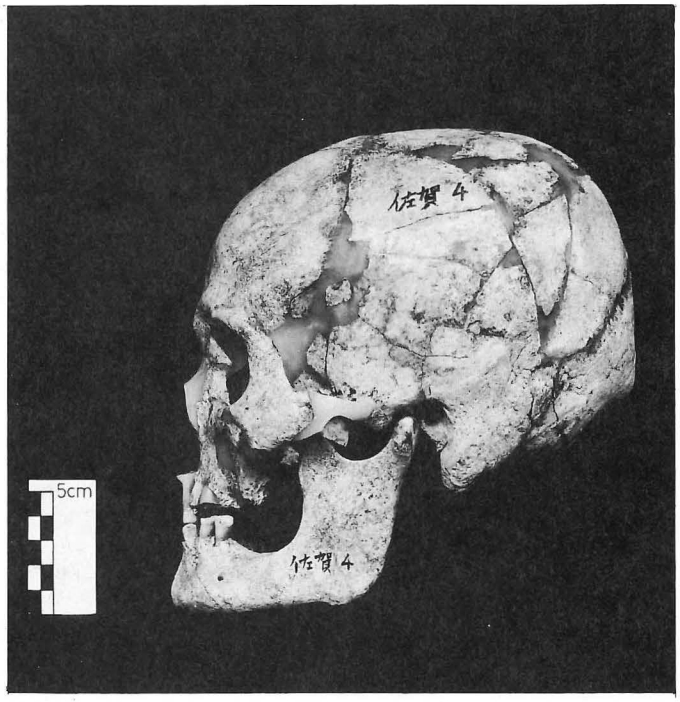
図版3

佐賀貝塚2号人骨(男性、壮年)
(Saka No. 2 skeleton, young adult male)



頭蓋前面（Norma frontalis of the skull）

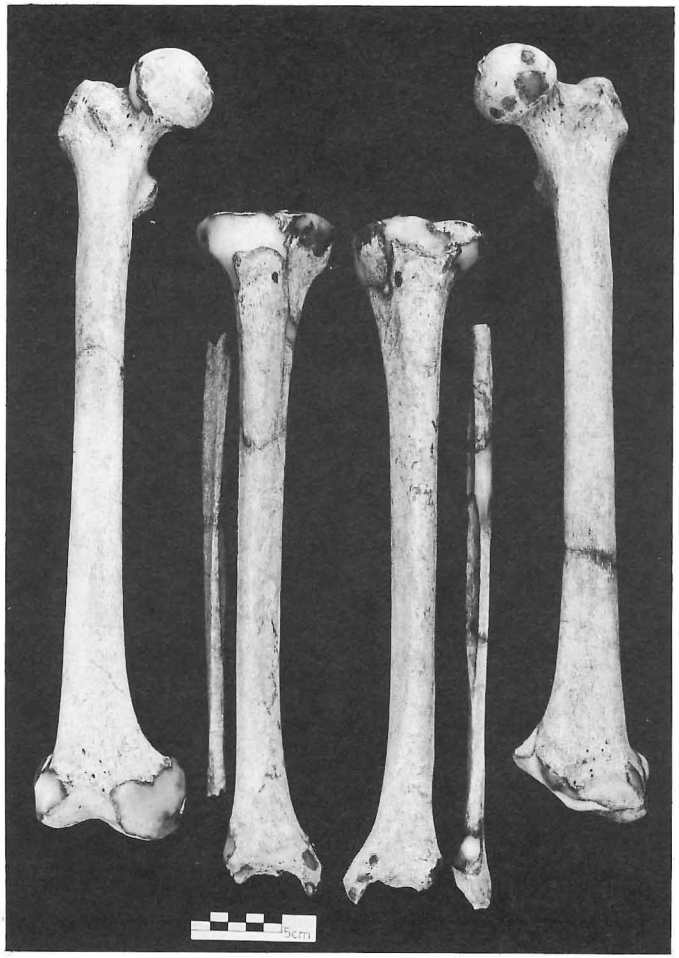
頭蓋上面（Norma verticalis of the skull）



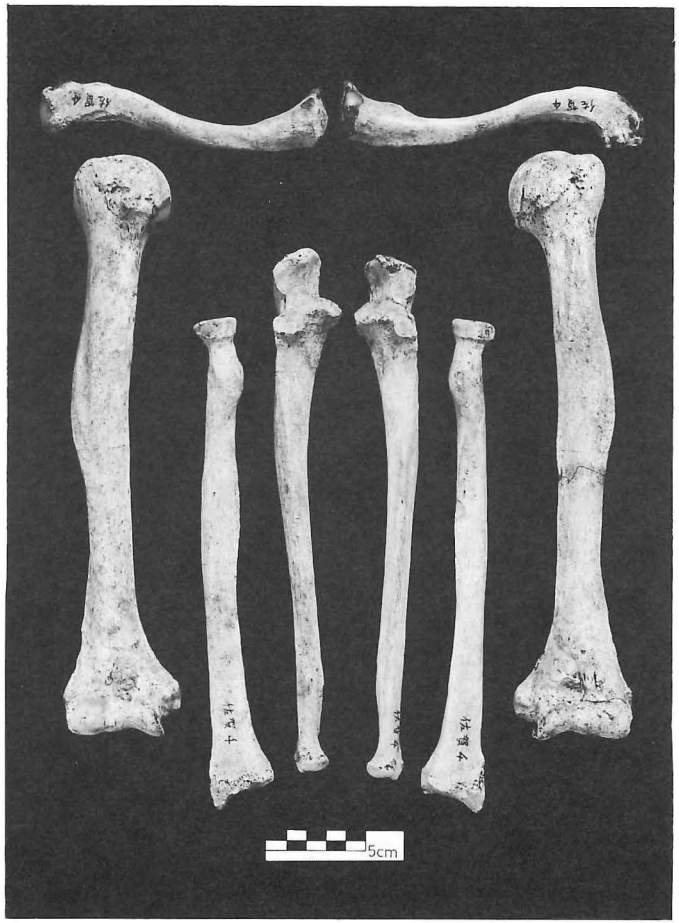
頭蓋側面（Norma laterlis of the skull）

佐賀貝塚 4 号人骨（男性、壮年）
（Saka No. 4 skeleton, young adult male）

図版 4



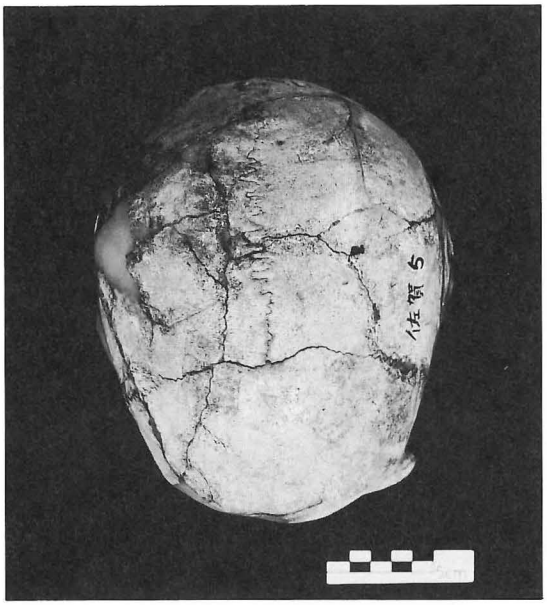
下肢骨（Bones of the lower limb）



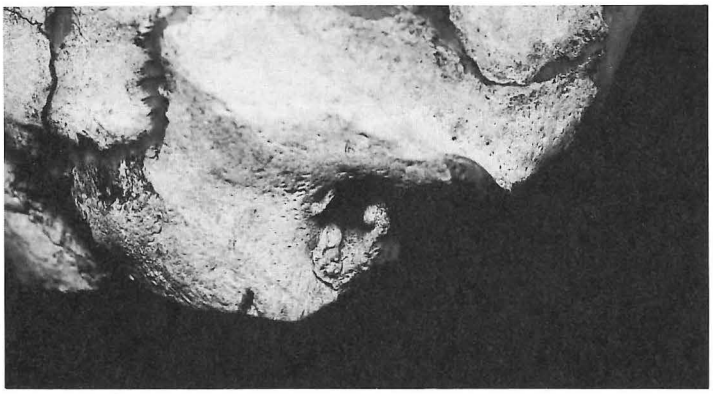
上肢骨（Bones of the upper limb）

図版5

佐賀貝塚4号人骨(男性、壮年)
(Saka No. 4 skeleton, young adult male)



頭蓋上面（Norma verticalis of the skull）



外耳道骨腫、右側（Aural exostosis , right side）

外耳道骨腫、左側（Aural exostosis, left side）

佐賀貝塚5号人骨（男性、熟年）
（Saka No. 5 skeleton, mature male）

図版6

長崎県峰町（対馬）佐賀貝塚出土の縄文時代幼児骨

分　部　哲　秋*

はじめに

長崎県上県郡峰町（対馬）大字佐賀に所在する佐賀貝塚は、1985年（昭和60年）に発掘調査され、5体の埋葬人骨と12個の散乱骨が出土し、そのうち1体の埋葬人骨と7個の散乱骨が幼児骨であった。

筆者は、縄文時代から現代に至る幼小児骨の形質、化骨、歯の萌出などに関して研究するとともに、各遺跡で出土する幼小児骨について報告を行っている。佐賀貝塚出土の幼児骨は、資料数の少ない縄文時代のもので、今後の幼小児骨の研究にとって貴重な資料の一つとなると考えられることから、人類学的観察および計測の結果について報告しておきたい。

資料・方法

佐賀貝塚からは、表1に示しているように埋葬人骨が5体と散乱骨が12個出土したが、散乱骨を含んだ体数は、成人骨が頭蓋の数から少なくとも6体、幼児骨が四肢骨の数から少なくとも4体分あり、合計10体分である。幼児骨の残存状態は図1に示しているとおりである。なお、これらの人骨は、別稿で述べられているように考古学的所見から縄文時代後期に属している。

年齢は、3号人骨については藤田（1965）による現代人の歯の萌出時期を用いて、現代と縄文時代のそれが大差ないと仮定したうえで推定し、散乱骨6から12については現代人胎児骨の成績（穐吉、1976）と比較して推定した。年齢区分は、佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨（分部、1981）の報告と同様の区分とした。なお、幼小児骨の性差については種々の研究がなされているが、同定を行うことは難しいのが現状で、本例についても性別は不明である。

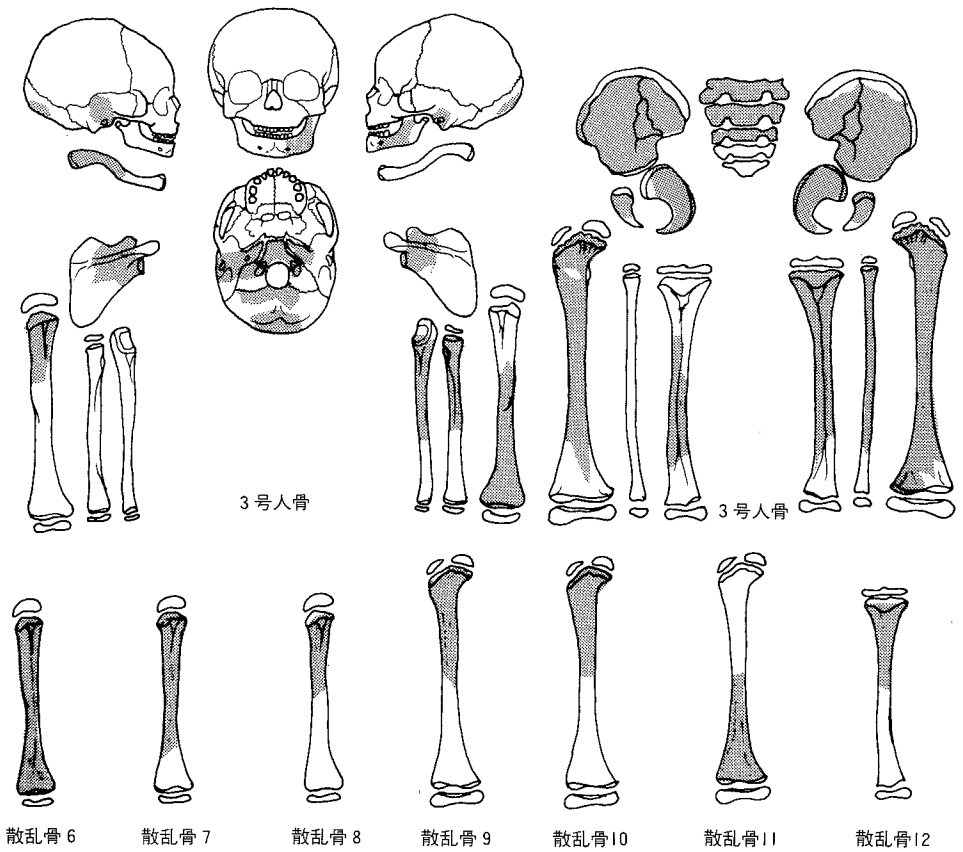
計測は、Martin-Saller（1957）の方法によったが、脛骨の横径についてはオリビエの方法で行った。また、歯の計測値と齲歯の観察結果は、成人骨の稿に記載している。

今回比較資料として用いた近代人（分部、未発表）の成績は、主として明治時代の資料で実年齢は分かっているが、古人骨と基準を同じにするために歯の萌出状態により推定した年齢に従って集計したものである。また、古人骨の性別が不明であるので、近代人も男女を合わせた平均値を算出した。

* Tetsuaki WAKEBE　Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University［長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）］

表Ⅰ　出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢区分	年齢	備考
1号人骨	男性	壮年		
2号人骨	男性	不明(成人)		
3号人骨	不明	幼児	1.5～2歳未満	
4号人骨	男性	壮年		
5号人骨	男性	熟年		
散乱骨1	不明	不明(成人)		下顎骨
散乱骨2	不明	不明(成人)		下顎骨
散乱骨3	男性	不明(成人)		左側上腕骨
散乱骨4	男性	不明(成人)		左側尺骨
散乱骨5	男性	不明(成人)		右側大腿骨
散乱骨6	不明	新生児	1カ月未満	右側上腕骨
散乱骨7	不明	新生児	1カ月未満	右側上腕骨
散乱骨8	不明	新生児	1カ月未満	右側上腕骨
散乱骨9	不明	新生児	1カ月未満	右側大腿骨
散乱骨10	不明	新生児	1カ月未満	右側大腿骨
散乱骨11	不明	新生児	1カ月未満	右側大腿骨
散乱骨12	不明	新生児	1カ月未満	右側脛骨



図Ⅰ．人骨の残存部(アミかけ部分)

所　　見

各骨の計測値は、文末に一括して掲げている。

3号人骨

1．頭蓋

脳頭蓋はほとんどの骨が小片となっており、復元は不可能で、計測もできない。

顔面頭蓋は、左側の下顎体と歯が2本のみ残っている。残存している歯を歯式で示すと、次のとおりである。

／／／／／	／／／／ ／
／／／／／	／／○m_1(m_2)

（　）　歯槽内埋伏
○　歯槽開存
／　不明

歯の萌出状態は、下顎の第一乳臼歯が萌出し、また乳犬歯も歯槽の状態から萌出していたと考えられる。第二乳臼歯は歯槽内に埋伏している。下顎第一乳臼歯の咬耗の程度はBrocaの1度である。

2．四肢骨

(1)上肢骨

①上腕骨

右側は骨体近位部、左側は中央部から遠位部が残っている。三角筋粗面は、この年齢にしては発達がよい。計測値は中央最大径が13.2㎜（左）、中央最小径は10.3㎜（左）で、骨体断面示数は78.03（左）となる。また、骨体最小周は34.0㎜（左）、中央周は38.5㎜（左）で、両周径は差が大きい。

各計測値を、表2において同年齢の長崎県浜郷遺跡出土の弥生時代幼児骨および近代幼児骨の成績と比較してみると、骨体最小周と中央周は、近代人1歳の平均値はもとより、浜郷1歳の平均値よりもかなり大きく、骨体は太い。また、骨体断面示数は近代人よりもかなり小さく、浜郷の平均値に近くて、骨体は近代人よりも扁平である。

②橈骨

左側のみが残存し、骨体の遠位部を欠損している。骨体は長さの割に細く、骨体断面示数は77.11（左）となり、骨間縁の発達も悪い。

③尺骨

遠位部を欠く左側の骨体が残っている。近位端の大きさに比べて、骨体は細い。また、骨体断面示数は100.00（左）となり、骨体は扁平ではない。

(2)下肢骨

①大腿骨

右側は骨体の遠位端を欠損しているが、左側はほぼ完全である。骨体の最大長は150㎜（左）、骨体中央周は37.5㎜（右）、36.5㎜（左）で、長厚示数は24.33（左）となる。骨体中央矢状径は11.9㎜（右）、12.0㎜（左）、骨体中央横径は11.2㎜（右）、10.9㎜（左）で、骨体中央断面示数は106.25（右）、110.09（左）となる。示数値はやや大きいが、これは粗線の外側唇に相当する部が後外側に張り出しているためである。また、上骨体断面示数は80.85（右）、79.71（左）である。

表3において浜郷および近代人と比較すると、最大長および骨体中央周は浜郷よりはやや大きく、近代人よりはかなり大きい。しかし、長厚示数は両者よりもやや小さくて、骨体中央部は長さに比べてさほど太いものではない。骨体中央断面示数は、浜郷および近代人よりもかなり大きく、粗線の発達が良好である。また、上骨体断面示数は、近代人よりはかなり小さく、浜郷とほぼ同じ値を示し、骨体上部はこの年齢にしては扁平である。

②脛骨

右側は骨体の中央部が、左側は遠位端を欠く骨体が残っている。計測値は骨体周が37.5㎜（右、左）、栄養孔位周は42.5㎜（左）、最小周は37.5㎜（左）で、骨体は長さの割に太く頑丈である。中央最大径は12.5㎜（右）、12.8㎜（左）、中央横径は11.3㎜（右、左）で、中央断面示数は90.40（右）、88.28（左）となる。また、栄養孔位断面示数は97.08（左）である。

表4において、浜郷および近代人と比較してみると、骨体周、栄養孔位周、最小周の各周径は、浜郷および近代人よりも大きく、骨体は太い。また、中央断面示数は両者よりもやや小さいものの、栄養孔位断面示数は両者よりも大きい値を示し、骨体に扁平性は認められない。

③腓骨

遠位端を欠く左側の骨体が残存している。中央断面示数は73.13（左）となり、骨体は扁平である。

表2　上腕骨骨体計測値　（㎜）

		佐賀3号（縄文）（1歳）（左）	浜郷（弥生）（1歳）（左）		近代人（1歳）（右）	
			n	M	n	M
5.	中央最大径	13.2	3	10.63	9	9.79
6.	中央最小径	10.3	3	8.47	9	8.30
7.	骨体最小周	34.0	3	29.83	9	29.11
7(a).	中央周	38.5	3	31.00	9	29.39
6/5	骨体断面示数	78.03	3	79.86	9	84.88

表3　大腿骨骨体計測値　（㎜）

		佐賀3号（縄文）（1歳）（左）	浜郷（弥生）（1歳）（左）		近代人（1歳）（右）	
			n	M	n	M
1.	最大長	150	1	142	10	123.85
6.	骨体中央矢状径	12.0	3	9.73	10	9.54
7.	骨体中央横径	10.9	3	11.17	10	9.98
8.	骨体中央周	36.5	3	33.50	10	30.85
9.	骨体上横径	13.8	2	13.55	3	12.43
10.	骨体上矢状径	11.0	2	10.70	3	11.47
8/1	長厚示数	24.33	1	25.35	10	24.96
6/7	骨体中央断面示数	110.09	3	86.87	10	95.48
10/9	上骨体断面示数	79.71	2	79.34	3	91.39

表4　脛骨骨体計測値　(mm)

		佐賀3号（縄文）（1歳）（左）	浜郷（弥生）（1歳）（左）		近代人（1歳）（右）	
			n	M	n	M
8.	中央最大径	12.8	2	10.25	9	9.68
8a.	栄養孔位最大径	13.7	2	11.45	8	11.18
9.	中央横径	11.3	2	9.10	9	8.86
9a.	栄養孔位横径	13.3	2	10.15	8	10.10
10.	骨体周	37.5	2	30.50	9	29.22
10a.	栄養孔位周	42.5	2	34.00	8	33.06
10b.	最小周	37.5	2	30.25	9	29.11
9/8	中央断面示数	88.28	2	90.25	9	91.88
9a/8a	栄養孔位断面示数	97.08	2	89.44	8	90.49

3．年齢

歯の萌出状態から年齢を推定してみると、この人骨の歯は、すでに下顎の乳犬歯と第一乳臼歯が萌出している。下顎乳犬歯は藤田（1965）によれば男性平均1歳7カ月、女性平均1歳6カ月、第一乳臼歯は男性平均1歳6カ月、女性平均1歳5カ月で萌出する。また、歯槽内埋状の下顎第二乳臼歯は男性平均2歳1カ月、女性平均1歳10カ月で萌出する。したがってこの人骨の年齢は、1歳後半の幼児と推定される。

4．化骨

化骨の進行状態が観察可能であった部位は、頭蓋においては前および後頭内軟骨結合、蝶後頭軟骨結合で、四肢骨では肩甲骨、上腕骨遠近両端、橈骨近位端、寛骨の寛骨臼および恥骨坐骨間、大腿骨遠近両端、脛骨と腓骨の近位端である。以上はすべて未癒合である。

散乱骨6～12

散乱骨6、7、8は、右側の上腕骨で3個体分存在する。そのうち散乱骨6の最大長は55㎜（右）で、この値は現代人胎齢9カ月の平均値（穐吉、1976）に近い。また、散乱骨7の骨体は、散乱骨6よりもやや細い。

散乱骨9、10、11は、右側の大腿骨で、それらはほぼ同じ大きさである。これらのうち散乱骨9の骨体中央横径は、6.1㎜（右）で、現代人胎齢10カ月の平均値よりもわずかに大きい。

散乱骨12は、右側の脛骨であり、この脛骨は前述した散乱骨6～11とほぼ同年齢のものである。

以上のように、これらの散乱骨は現代人胎児骨と比べると、現代人の胎齢9ないし10カ月のものに相当し、早産および死産の可能性もあるが、現代人と縄文人では胎児の発育が異なることも考えられることから、ここでは一応新生児（生後1カ月未満）としておきたい。また、こ

れらの散乱骨の体数は少なくとも３体分ある。

ま と め

長崎県上県郡峰町（対馬）大字佐賀に所在する佐賀貝塚は、1985年（昭和60年）に発掘調査され、５体の埋葬人骨と12個の散乱骨が出土し、そのうち１体の埋葬人骨と７個の散乱骨が幼児骨であった。これらの幼児骨についての人類学的観察および計測の結果を要約すると、次のとおりである。

1．歯の萌出状態から推定した３号人骨の年齢は、１歳後半の幼児で、四肢骨の大きさにより推定した散乱骨６から12は新生児である。新生児骨の体数は少なくとも３体分はある。

2．３号人骨の化骨の進行状態は、大泉門と小泉門は観察不可能で不明であるが、その他はすべて未癒合である。

3．３号人骨の上腕骨は、骨体最小周が34.0㎜（左）、中央周は38.5㎜（左）で、骨体は太い。また、骨体断面示数は78.03（左）で示数値は小さく、骨体は浜郷弥生幼児骨と同様に、近代人よりも扁平である。

4．３号人骨の大腿骨は、骨体の最大長が150㎜（左）、骨体中央周は37.5㎜（右）、36.5㎜（左）で、長厚示数は24.33（左）となる。骨体中央断面示数は106.25（右）、110.09（左）で、示数値は大きくて粗線の発達が良好である。また、上骨体断面示数は80.85（右）、79.71（左）で、示数値はかなり小さく、骨体上部は浜郷弥生幼児骨と同様に、近代人よりも扁平である。

5．３号人骨の脛骨は、骨体周が37.5㎜（右、左）、栄養孔位周は42.5㎜（左）、最小周は37.5㎜(左)で、骨体は長さの割に太く頑丈である。また、中央断面示数は90.40(右)、88.28(左)栄養孔位断面示数は97.08（左）で、示数値は大きい値を示し、骨体に扁平性は認められない。

〈擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育委員会文化課ならびに峰町教育委員会の諸先生方に感謝致します。〉

表５　鎖骨骨体計測値　（㎜）

		３号（１歳）	
		（右）	（左）
4.	中央垂直径	5.4	—
5.	中央矢状径	5.0	—
6.	中央周	17.0	—
4/5	鎖骨断面示数	108.00	—

表６　上腕骨骨体計測値　（㎜）

		３号（１歳）		散乱骨６（1カ月未満）	散乱骨７（1カ月未満）
		（右）	（左）	（右）	（右）
1.	上腕骨最大長	—	—	55.0	—
5.	中央最大径	—	13.2	5.3	5.0
6.	中央最小径	—	10.3	4.5	3.7
7.	骨体最小周	—	34.0	16.0	14.5
7(a).	中央周	—	38.5	16.0	14.5
6/5	骨体断面示数	—	78.03	84.91	74.00
7/1	長厚示数	—	—	29.09	—

表 7　橈骨骨体計測値　(mm)

		3号（1歳） (右)	3号（1歳） (左)
4.	骨体横径	—	8.3
4a.	骨体中央横径	—	7.4
5.	骨体矢状径	—	6,4
5a.	骨体中央矢状径	—	6.1
5(5).	骨体中央周	—	21.5
5/4	骨体断面示数	—	77.11
5a/4a	中央断面示数	—	82.43

表 8　尺骨骨体計測値　(mm)

		3号（1歳） (右)	3号（1歳） (左)
11.	尺骨矢状径	—	7.0
12.	尺骨横径	—	7.0
S.	中央最小径	—	5.6
L.	中央最大径	—	7.0
C.	中央周	—	21.0
11/12	骨体断面示数	—	100.00
S/L	中央断面示数	—	80.00

表 9　大腿骨骨体計測値　(mm)

		3号（1歳） (右)	3号（1歳） (左)	散乱骨9（1カ月未満） (右)
1.	最大長	—	150	—
6.	骨体中央矢状径	11.9	12.0	5.4
7.	骨体中央横径	11.2	10.9	6.1
8.	骨体中央周	37.5	36.5	18.5
9.	骨体上横径	14.1	13.8	—
10.	骨体上矢状径	11.4	11.0	—
8/1	長厚示数	—	24.33	—
6/7	骨体中央断面示数	106.25	110.09	88.52
10/9	上骨体断面示数	80.85	79.71	—

表10　脛骨骨体計測値　(mm)

		3号（1歳） (右)	3号（1歳） (左)	散乱骨12（1カ月未満） (右)
3.	最大上端幅	—	33	—
8.	中央最大径	12.5	12.8	—
8a.	栄養孔位最大径	—	13.7	6.0
9.	中央横径	11.3	11.3	—
9a.	栄養孔位横径	—	13.3	6.0
10.	骨体周	37.5	37.5	—
10a.	栄養孔位周	—	42.5	19.0
10b.	最小周	—	37.5	—
9/8	中央断面示数	90.40	88.28	—
9a/8a	栄養孔位断面示数	—	97.08	100.00

表11　腓骨骨体計測値　(mm)

		3号（1歳） (右)	3号（1歳） (左)
2.	中央最大径	—	6.7
3.	中央最小径	—	4.9
4.	中央周	—	19.0
4a.	最小周	—	17.0
3/2	中央断面示数	—	73.13

参考文献

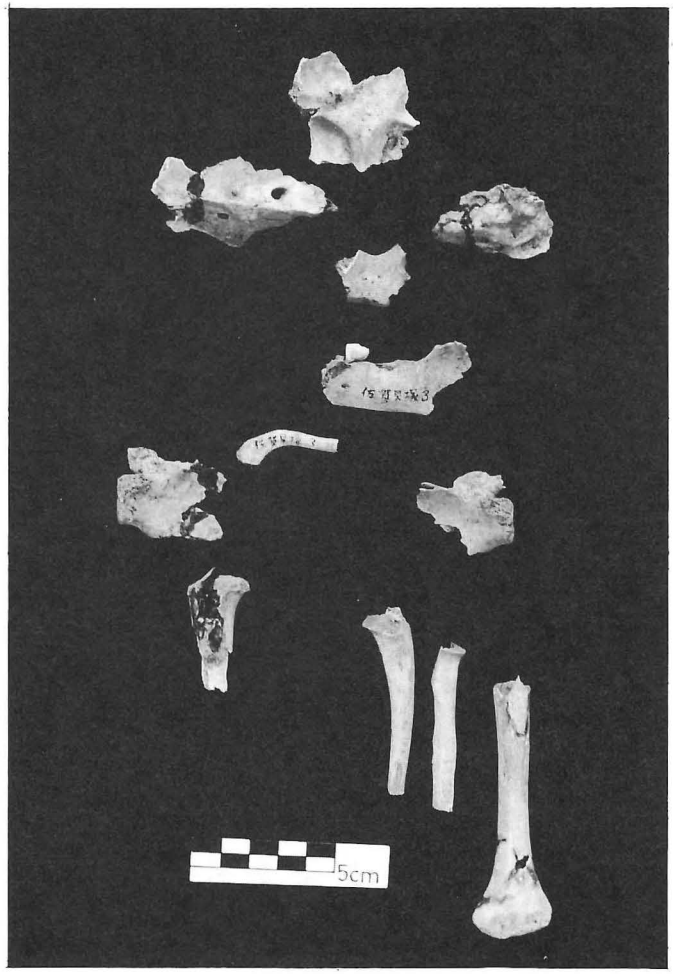
1．金田義夫、1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報、30：165-172.

2．藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店。東京：57-98.

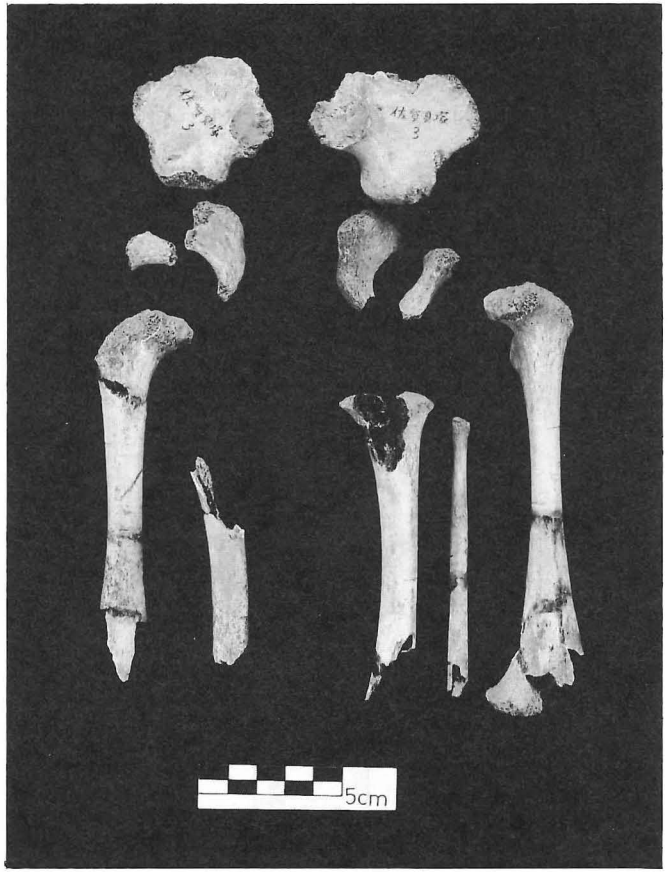
3．Martin-Saller, 1957：Lerhrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlarg, Stuttgart：429-504.

4．分部哲秋、1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：254-264.

5．分部哲秋、1984：長崎県浜郷遺跡出土の弥生時代幼小児骨（会）．解剖学雑誌、59：410.



頭蓋・上肢骨（Skull and bones of the upper limb）



下肢骨（Bones of the lower limb）

図版1

佐賀貝塚3号人骨(幼児)
(Saka No. 3 skeleton, infant)

長崎県・佐賀貝塚の貝類より見た考察

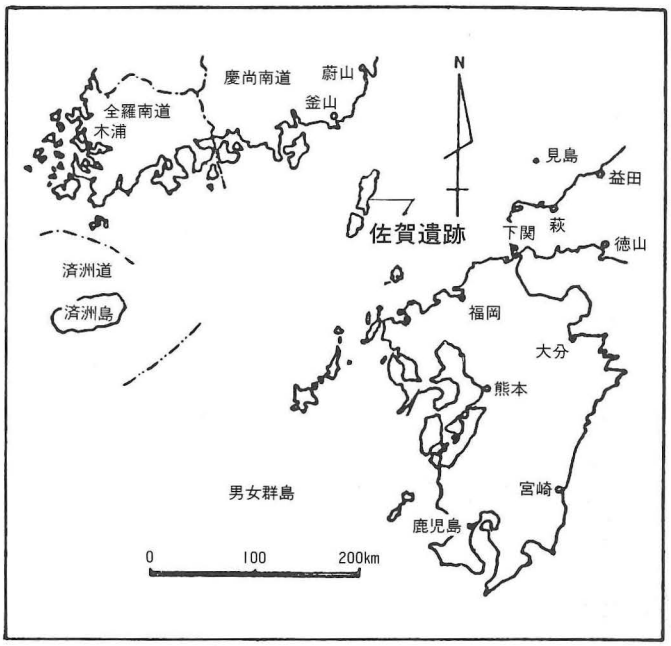
山　本　愛　三
（県立長崎北高等学校・日本貝類学会評議員）

I　序

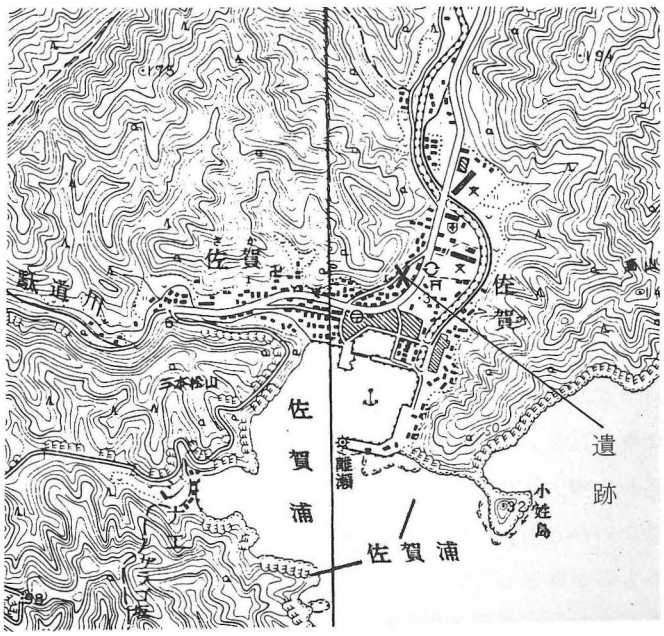
昭和60年４月８日から、５月10日までの間、本遺跡の発掘が行われ、そのおりの資料分析の依頼を受けた。直接調査を行い、この機会を与えて下さった長崎県教育庁文化課主任指導主事正林護氏をはじめ関係諸氏に深甚の謝意を表るものである。

II　本遺跡の発掘概況

本遺跡は第１図に示すように、長崎県上県郡峰町大字佐賀486所在し、第２図に示すように、南には駄道川をはさんで三本松山、北には175mの峰が急傾斜で迫り、この山麓にひらけた標高2.5～３mの台地に本遺跡はある。本遺跡の立地する台地は、土壌分析より、縄文前期の堆積台地であると考えられる。包含される土器は、鐘ケ崎式等を中心とするもので縄文時代後期と判断された。遺物は、石斧300点以上、ヤス200点以上、人骨６体、住居跡４棟が記録された。



第１図　対馬・佐賀貝塚位置図



第２図　佐賀貝塚周辺図

III　貝類を中心とする資料の分析

各トレンチ内で発掘された貝類のトレンチ別抽出資料および土壌ごとのブロック抽出標本であった。

資料は、種ごと個体数を計出し、5,283個体を数えた。本遺跡の貝類組織は、第1表に示した。土壌資料は、標準篩で篩い、土壌組成を分析し、微小自然遺物の抽出を行い、本遺跡をのせる台地が海成層であること、標高および立地条件より、縄文前期の堆積層であると判断した。

IV　貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元

第1表を生態群集別に表示したのが第2表である。貝類の主体をなすものは78.59%を占める。潮間帯岩礁群集で、第1表で示すように、スガイ・オオコシダカガンガラ・サザエ・レイシガイ・クマノコガイ等を常食としていたと考えられる。第2表I群で示したこれらの貝は現在でも遺跡周辺で採集は可能である。しかしウミイボニナ・フトヘナタリ・マガキ・オキシジミ・ミルクイ等、潮間帯砂泥底汽水群集が1,043個体19.74%発見されているのに、現在の周辺海域では採集できない。このことは、本遺跡形式当時、遺跡周辺域にラグーンの発達があったと考えられる。これは、本遺跡直下の駄道川川口部、佐賀小学校や佐賀神社をのせる一帯が可能性が強い。(第2図参照)

なお正林等は、出土状況や底質の状況より、現標高2m線に当時の満潮線があったと推定している。このようであれば、当時2mまで海であったと考えられ、より正確な調査が望まれる。

V　その他貝類より推定されること

a　潜水漁法の発達　第1表～第2表で示したように、本遺跡出土貝類は、第2表IV～VI群で示されるように、ミガキボラ・ミガキナガニシ・ベンケイガイ・ヒオウギ等、水深5～20mの種、テングニシ・イタヤガイ等水深10～80mのものが発見され巨大である。I群のサザエ・アワビの中にも驚くほど大きいものが発見される。もし漁網で採取していたものであれば、大小さまざまのものや他種も発見されるはずであるが、大型のものだね採取しているのは、潜水漁法が発達していたと考えられる。

b　韓国との交易　133個の貝輪が発見されているが、その種別構成は第3表に示した。本遺跡近海で採集可能なものは、ベンケイガイ・サルボウ・タマキガイ・マツバガイ・チョウセンハマグリ・ホシキヌタ・ウチムラサキの7種であるが、サルアワビ・ユキノカサの2種は、本邦東北以北および韓国寒流域で分布するもので、対馬では現在発見されていない。また東北以北から搬入されたという証拠も今のところない。むしろ韓国の日本海側との交流があったのではないかと考えたい。獣骨の中にもノロの犬歯が発見されたり、土器の中に朝鮮系と考えられるものが混在していることからも韓国との交易の可能性が強いと考えられる。土器・石器等から見なおしが必要と思われる。

c　陸産貝について　ツシマケマイマイはカタツムリの一種であるが、現在、対馬；仁田・三根・海神神社・豆酘・永泉寺・佐須奈・比田勝・内院浦・厳原・中原と長崎市；南山手・崇福寺・筑後町福済寺・浦上天主堂・音無町・岩屋山・本河内等に採集記録がある。対馬一帯と長崎市周辺区という、とびはなれた分布は、人為的搬入か、広域分布していたものが途中で絶滅したかを考えないと説明つかないものである。しかし今回、本遺跡の発掘土中から発見されたことは、対馬に古くから生息していたこと、対馬へ人為的に搬入されたものでないことの証拠といえる。

山本愛三（1962）：五島岐宿町寄神貝塚に関する考察、五島遺跡調査報告書、42～51。
山本愛三（1963）：五島江湖貝塚の貝類、曽畑式土器に関する研究、縄文文化研究会、70～72。
山本愛三（1974）：熊本県小田貝塚の貝類、曽畑式土器に関する研究、縄文文化研究会。
山本愛三（1975）：対馬・住吉平貝塚の貝類・長崎県文化財調査報告書第20集、4～5。
山本愛三（1976）：志多留貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元、対馬の生物、長崎県生物学会49～57。
山本愛三（1977）：壱岐・原ノ辻遺跡を中心とする壱岐の先史生物、壱岐の生物、長崎県生物学会、81～87。
山本愛三（1978）：長崎県串島貝塚より見た遺跡形成時の自然環境の復元、長崎県文化財報告書第51集、137～146。
山本愛三（1981）：五島沿岸貝類の壱岐・対馬との対比、五島の生物、長崎県生物学会、509～542。
山本愛三（1984）：長崎県・有喜貝塚の貝類より見た考察、諫早市文化財調査報告書第5集、69～77、pl.19

第Ⅰ表　対馬・佐賀遺跡出土貝類組成表（一部蔓脚類を含む）

No.	種　　名	個体数	%	群集型
1.	*Turbo coronata coresensis* (RECLUZS, 1853) スガイ	1,917	36.28	
2.	*Batillus cornutas* (LGHTFOOT, 1786) サザエ	745	14.18	
3.	*Reishia bronni* (DUNKER, 1860) レイシガイ	299	5.66	
4.	*Omphalius pfeifferi* (GMELIN, 1791) オオコシダカガンガラ	238	4.50	
5.	*Chlorostoma argyrostoma turoinatum* (A. ADAMS, 1853) ヘソアキクボガイ	160	3.03	
6.	*Reishia clanigera* (KUSTER, 1860) イボニシ	156	2.95	
7.	*Chlorostomanigricclor* (DUNKER, 1860) クマノコガイ	123	2.33	
8.	*Sairgnyarca verescens* (REEVE, 1884) カリガネエガイ	121	2.29	
9.	*Masododonta labio confusa* (TAPPARONE-CANEFRI, 1874) イシダタミ	105	1.99	
10.	*Balanus tintinnabulum vclcano* (PILSBRY, 1890) オオアカフジツボ	79	1.49	
11.	*Omphalius ruslicus* (IMELIN, 1791) コシダカガンガラガイ	61	1.15	
12.	*Chlorostoma argyrostoma lischkei* (TAPPARONE-CANEFRI, 1874) クボガイ	34	0.64	第
13.	*Nerdotis sieboldi* (REEVE, 1846) メカイアワビ	20	0.38	
14.	*N, discus* (REEVE, 1846) クロアワビ	16	0.30	
15.	*Muricodrupa fusca* (KUSTER, 1862) レイシガイダマシモドキ	15	0.28	Ⅰ
16.	*Tetraclita squamosa* (BRUGUIERE, 1895) クロフジツボ	12	0.23	
17.	*Nerdotis gigantea* (GMERIN, 1791) マダカアワビ	9	0.17	
18.	*Serpulorbis imbricatus* (DUKKER, 1860) オオヘビガイ	9	0.17	型
19.	*Cellana nigrclineata* (REEVE, 1854) マツバガイ	6	0.11	
20.	*Nerdotis* sp. アワビ類の片切	5	0.07	
21.	*Sulculus aquatilis* (REEVE, 1846) トコブシ	4	0.07	
22.	*Spondylus balbatus* (REEVE, 1856) ウミギクガイ	3	0.05	
23.	*Septifer vergatus* (WICGMANN, 1837) ムラサキインコガイ	3	0.05	
24.	*Cellana grata stearnsii* (PILSBRY, 1891) アミガサガイ	3	0.05	
25.	*Reishia luteostoma* (HOLTEN, 1803) クリフレイシガイ	2	0.04	
26.	*Omphalius niberrima* (GMELIN, 1791) ヒメクボガイ	2	0.04	
27.	*Astralium haematragum* (MENKE, 1829) ウラウズガイ	1	0.02	
28.	*Amalthea conica* (SCHUMACHER, 1817) キクスズメガイ	1	0.02	
29.	*Drupa clathrata* (LAMARCK, 179) ヒロクチイガレイシガイ	1	0.02	
30.	*Spondylus cruertus* (KISCHKE, 1868) チリボタンガイ	1	0.02	
31.	*Batillaria zonalis* (BRUGUIERE, 1792) イボウミニナ	509	9.63	
32.	*Cerithidea rhizophorarum* (A. ADAS. 1855) フトヘナタリ	509	9.63	第
33.	*Crassastrea gigas* (THUNBERC, 1793) マガキ	18	0.34	Ⅱ
34.	*Cylina sinesis* (GMELIN, 1791) オキシジミ	4	0.07	型
35.	*Tresus keenae* (AURODA et HABE, 1952) ミルクイガイ	1	0.02	
36.	*Glossaulax didyma* (RÖDING, 1798) ツメタガイ	2	0.04	第Ⅲ型
37.	*G. d. hosoyai* (KURODA et KIRA, 1959) ホソヤツメタガイ	1	0.02	
38.	*Mytilus corsucus* (GOULD, 1861) メガイ	66	1.25	第
39.	*Saxidomus purpuratus* (SOWEBY, G,B, II, 1852) ウチムラサキ	1	0.02	Ⅳ
40.	*Circe sciripta* (LINNE, 1758) シラオガイ	1	0.02	型
41.	*Mimachlamys nobilis* (REEVE, 1852) ヒオオギ	2	0.04	
42.	*Gomphina veneriformis* (LAMARCK, 1818) オキアサリ	2	0.04	第
43.	*Ponda vitellus* (LINNE, 1758) ホシキヌタ	1	0.02	Ⅴ
44.	*Monoplex echo* (KURODA et HABE, 1950) カコボラ	1	0.02	型
45.	*Kelletia lischkei* (KURODA, 1938) ミガキボラ	1	0.02	第
46.	*Fusinus similis* (BIRD, 1873) ミガキナガニシ	1	0.02	Ⅵ
47.	*Glycymeris albolineata* (LISCHKE, 1872) ベンケヨガイ	1	0.02	型
48.	*Pigilina ternatana* (GMELIN, 1791) テングニシ	8	0.15	第Ⅵ型
49.	*Pecoen albicans* (SCHRÖTER, 1802) イタヤガイ	4	0.07	
50.	*Aegista trochula* (A. ADAMS, 1868) ツシマケマイマイ	4	0.07	第Ⅳ型
	総　　計	5,283	100%	

第２表　生態群集別貝類構成表

生態群集	個体数　(%)
I　潮間帯岩礁群集	4,152 (78.59)
II　潮間帯内湾砂泥底汽水群集	1,041 (19.70)
III　潮間帯～30 m 細砂～砂泥群集	3 (0.05)
IV　亜潮間帯上部(　～30 m) 群集	68 (1.25)
V　〃　〃　(5 ～10 m) 群集	2 (0.04)
VI　〃　〃　(5 ～30 m) 群集	7 (0.13)
VII　〃　〃　(10 ～80 m) 群集	12 (0.22)
VIII　陸産貝	4 (0.07)
計	5,283　(100)

第３表　対馬・佐賀遺跡の貝輪種別構成表

種名	個数	分布域
ベンケイガイ	110	北海道南部、本州、四国、九州、朝鮮、フィリッピン
サルボウ	7	北海道南部、本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国
タマキガイ	4	本州（房総以南)、四国、九州
マツバガイ	3	本州（房総以南)、四国、九州、台湾、西太平洋
サルアワビ	3	北海道、東北、日本海北部、朝鮮
ユキノカサ	2	サハリン、シベリア、千島、朝鮮、北海道、東北
チョウセンハマグリ	1	本州（房総以南)、四国、九州、台湾、朝鮮、中国
ウミウサギ	1	本州（紀伊以南)、四国、九州、台湾
ホシキヌタ	1	本州（房総以南)、四国、九州、台湾、インド太平洋
ウチムラサキガイ	1	北海道（南部)、本州、四国、九州、朝鮮
計	133	

佐賀貝塚出土の脊椎動物遺存体

金子　浩昌（早稲田大学考古学研究室）

本貝塚の脊椎動物遺存体については、今回の報告でその全容を記述するまでに整理を終了することができなかった。従って、ここではその概要をのべるに止めざるを得ない。本貝塚からは魚、鳥、獣骨の多量のものが出土している。それらのカード化、表化の作業は大変な労力を伴うものであるが、現在もそれをつづけており、いずれ詳細をのべる機会があると思われる。

なお、筆者の手元に層位図その他の関係資料がまだ届いていないので、その点については本貝塚が縄文後期初頭期の形成を主体とするという概報に基付き一括して扱っておいた。いずれ詳細をのべる段においては、層位、地点による表等を作製するつもりである。

Ⅰ　脊椎動物遺体の概要

以下にのべる出土動物骨の概要は、魚、爬虫、獣類のそれぞれについて記したものであるが、その記述の方法はある程度動物分類の順に記したものの、必ずしもすべてがそれに従ったものではない。それは考古学的な意味を先行させているためで、この遺跡での主体種、あるいは重要種を先ずとり上げている。これは遺跡における動物相の特徴をのべるための方法であった。なお種名一覧表は検討する標本もあるので今回は省略した。

1．魚　類

軟骨魚綱　Chondricthyes

サメ目 Lamniformes の椎体が多数出土している。その大部分はネズミザメ科 Lamnidae に特徴的な形態をもつものであって、大型のものは椎体径40.0㎜、同長30.0㎜に達した。しかし、量的に多かったのは椎体径20.0㎜～30.0㎜位であり、それより小さいものもある。ただ、10.0㎜前後になるようなのは殆どなかったようである。これらの椎体は共伴している歯からみてアオザメ *Isurus glaucus* のものと考えている。

サメ類の椎体中央に径5.0㎜の穿孔の行われているものが15個あるが、垂飾その他に使用されたものである。また歯に穿孔した垂飾品が出土している。アオザメの歯である。このような穿孔品には、モウカザメ *Lamna ditropis* の歯をつかったものもある。サメの歯はこれらすべてで13点余りであった。

ツノザメ科 Squalidae の背びれにつく棘が５点出土している。現存長50.0～60.0㎜である。

エイ目　Rajiformes

尾棘があるが数点を検出しているのみである。

硬骨魚綱　Osteichthyes

スズキ目　Perciformes

タイ科　Sparidae・マダイ　*Pagrus major* の骨が多量に含まれる。おそらく中型（サメ・カジキ類を大型魚として）の魚の中で最も多かった種類であろう。巨大な前頭骨、前上顎骨、歯骨その他の骨をみる。前頭骨はその最大幅57.75㎜を測る標本があり、前上顎骨では全長60.0㎜前後になる。

クロダイ *Acanthopagrus schlegeli* とヘダイ *Sparus sarba* もあるが、マダイと比べるとはるかに少ない。クロダイも大型のものがあり、前上顎骨全長42.0㎜前後になる。ヘダイも同程度の大きさである。

イシダイ科 Oplegnathidae のイシダイ Oplegnathus fasciatus もしくはイシガキダイ O・*punctatus* の上・下の顎骨の出土が多い。全部で22点位になる。大型の標本で、エナメル質部分の長さだけで40.0㎜を越え、小さくても20㎜になる。岩礁での漁撈を特徴付ける魚である。

アジ科　Carangidae のブリ *Seriola quinqueradiata* も大型（歯骨全長80.0㎜位になる）になる個体の骨を残している。

大型の魚種ではカジキ類の椎体が出土している。椎体長は40～50㎜位である。椎体標本としてはこの程度であるが、大型の前上顎骨が破損標本であるが出土している。いわゆる〝くちばし〟であるが、その部分だけで900㎜位になると思われるものもある。

ベラ科　Labridae この科の魚は特徴的である。殆どはコブダイ　*Semicossyphus reticulatus* 1種が知られるだけであるが、その数は下咽頭骨だけで14個を算える。その最大横径86.0㎜に達するものがあり、大部分が70～80.0㎜前後の大きさになる。

スズキ科　Serranidae のハタ類の前上顎、歯骨の数は少ないが大型の標本をみる。大型の前上顎骨長は、その全長が100㎜に達したと思われる。スズキ *Lateolabrax japonicus* は歯骨が1点あっただけであるが大型のものである（歯骨高15.68㎜）。

フグ目　Tetraodontiforme マフグ科 Tetraodontidae の前上顎、歯骨の多いのも特徴的で30点位が出土している。大きさは歯のエナメル質部分で30～40.0㎜前後の大きさが多い。すべてトラフグ、ショウサイフグタイプの形態である。外海系の貝塚でフグ類の多いのはこの貝塚の特徴である。

別にのべられているように、本貝塚からは骨・角、犬歯製の釣針や銛頭などの出土が多い。上述した魚種は、それらの漁獲の対象となった魚である。いずれも大型で、引きの強い岩礁魚である。丈夫なつくりであること、脱れないようにすることが要件である。それを充分に果していたことを、上述した魚類の遺体が物語っていると思う。

2．爬虫綱　Reptilia

カメ目　Chelonia　ウミガメ科　Cheloniidae

全体の出土量は多くないようである。上腕骨が2点、その他背甲骨板などの破片がある。上腕骨の2点はアオウミガメ *Chelonia mydas* と思われ、大・小の大きさの異なる個体のもので

ある。縄文時代の貝塚では、特に関東以西ではアオウミガメの出土が目立つようである。

3．鳥　類　Aves

鳥骨の出土は多かった。これも本貝塚の特徴として注目される点である。鳥骨の大部分は2乃至3に折れており、完存するのは烏口骨や小型の中手骨、大腿骨、指趾骨などに限られた。

量的には、おそらくウの類（ペリカン目　Pelecaniformes，ウ科 Phalcrocoracidae）が最も多いであろう。ウミウ *Phalacrocorax filamentos* とヒメウ *P. pelagicus* がある。多分ヒメウの方が多いであろう。頭蓋などの出土はなく、四肢骨に殆ど限られた。

ミズナギドリ目　Procellariformes。先ずアホウドリ科　Diomedeidae の種類にはアホウドリ *Diomedea albatrus* がある。完存する中足骨があり、その全長97.45㎜を計測する。他に上腕骨の近位端があり、これも大型である（貝層出土）。アホウドリ類の骨の数は少ない。外海系の貝塚ではアホウドリの多いことを幾つもの例でみる。本貝塚のはむしろ例外的である。

次にミズナギドリ科　Procellariidae　であるが、この種の骨は多い。オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* が大部分であるらしい。完存する尺骨の全長112.3㎜、細く真直ぐな骨で、偏平性はみられない。

やや大型の海鳥として、アビ目 Gaviiformes，アビ科 Gaviidae の鳥の骨が、ウやオオミズナギドリに次いで多い。ただ完存する骨がないので、大きさに不明な点があるが、中足骨が80.0㎜位になるので、オオハム *Colymbus arcticus viridigularis* かアビ *C.stlellatus* であろう。いずれも冬期に九州、対馬に渡来する。

ガンカモ目　Anseriformes の骨は少ない。中型のいわゆるカモ類の骨若干と、マガン *Anser albitrons* のみられるのは注目される。量的には少ない。

カイツブリ目　Podicipediformes，カイツブリ科 Podicipidae の中型種アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* があり、チドリ目 Charadriiformes のカモメ科 Laridae の骨もみる。カモメ類のは大型種、セグロカモメ位になるのではないかと思われる。

数のさらに少ない標本であるが、ワシタカ目　Falconiformes　があり、トビ　*Milvus migrans* とオオワシ *Haliaeetus pelagicus* もしくはオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の上腕骨片と中手骨片各1個が出土している。珍しいし、重要である。

スズメ目　Passeriformes のカラス科 Corvidae の尺骨片がある。少ないようである。

佐賀貝塚の鳥類相の概要は以上の通りであるが、これらの鳥はオオミズナギドリ、カラスが島で著殖していた他は、冬鳥として渡来する種類が大部分であり、この時期の食料の補足を目的とし、またワシ類などは羽毛の利用も重要な目的として、時に捕獲されたのであろう。

4．哺乳綱　Mammalia

ウサギ目　Lagomorpha　断片的な歯と四肢骨3点が出土している。

齧歯目　Rodentia　ドブネズミ　*Pattus norvegicus* の骨がかなりの数出土している。当時のものと新しいものの混在があるかも知れないので、詳述するのはさける。

クジラ目　Cetacea

椎体の前後の骨端、肋骨、その他破片で、クジラ類の骨の出土の多いことが知られる。椎体の骨端はその形状が扁円形を呈するものが多いので尾椎体のものと思われる。その径が330㎜になるのが最大で、250㎜、200㎜位の大きさのものも含めて35点がある。クジラ類のこの骨は、円板を為しているので、台その他の生活用具として使われたもの、あるいはその目的のために持ち込まれてきたものなのであろう。

上述した椎体骨端は大型のもので、最大のものはナガスクジラのものと思われ、またやや小さい骨端例でもマッコウクジラ、イワシクジラ級の大きさのものと思われる。このような骨端骨が数多く出土するのも本貝塚の特徴である。肋骨を長方形平扁の板状にした荒い加工品も幾つも出土しており、いずれ何らかの骨製品がつくられるのであろう。あるいはその残片とみられる。

イルカ科　Delphinidae　の骨は全体で50点程の椎骨と、環椎は5個。歯はバンドウィルカ *Tursiops gilli* のもののみで12個がある。マイルカ *Delphinus delphis* の下顎骨が1点ある。おそらくマイルカが主体で、それにバンドウイルカがまじるのであろう。バンドウイルカの歯の採集されているのは、大きいからであるが、垂飾品のための素材として特にのこされていたものかも知れない。この種の橈骨も検出されている。

ゴンドウクジラ科　Globicephalidae の歯が3点ある。全高58.0㎜位になり、径も20.0㎜に達する。これも特に加工はされていないが、その素材となる可能性はある。オキゴンドウあるいはユメゴンドウといわれる種類である。

サカマタ　*Orcinas orca* はこの科の最大種であり、この種の歯に穿孔したものも本貝塚から出土している。

食肉目　Canivora

イヌ　*Canis famirialis*　頭蓋片、下顎骨、四肢骨片など破損し、断片的な骨も含めるとイノシシ、シカに次いで多い。遺存骨からみる限りではまとまった状態の出土はなかったらしい。しかし、下顎骨では左右の揃う標本が2組程ある。幼獣から亜成獣、成獣までの個体が含まれる。大きさを計測できる完存の標本が無いが、小型犬の範ちゅうにはいる。成獣の顎骨、四肢骨は頑丈な感じを与える。

頭蓋標本で完存する資料はないが、前頭骨の一部と頭頂以後をのこす標本がある。これで額段の形状をみると、傾斜の少ない前頭部であったことがわかる。

イタチ科　Mustelidae　ツシマテン　*Martes melampus tsuensis* の四肢骨が数点出土している。

アシカ科　Otariidae の出土は、この海域で特に出土の多い海棲獣として注目している。

ニッポンアシカ　*Zalophus californianus japonicus* は下顎骨１、上腕骨Ｌ３、Ｒ２、橈骨Ｒ１、尺骨Ｒ２、Ｌ１、大腿骨Ｒ３、Ｌ２、この他に肩甲骨、寛骨などがある。下顎骨は雌の成獣、四肢骨には幼獣から亜成獣、成獣、そして雌、雄の個体を含む、幼・若獣の方が多い。幼獣の大腿骨や上腕骨は、その近・遠位の骨端がイヌにかじられて無くなっていた。成獣の大腿骨は最大長141.63㎜、中央最小径43.15㎜であった。

偶蹄目　Artiodactyla

イノシシ科　Suidae、イノシシ　*Sus scrofa* の骨は多量に出土している。対馬でのこれ程多量の出土量はかつてないといわれている。標本の多くは骨髄食のためにこわされており、全体をうかがえる骨は一部に限られる。下顎臼歯 M_3 の数は、Ｌ：28、最後端咬頭のエナメル質穿孔のみられる M_3 は２、dm_4 及びそれをもつ顎骨：９、計39、Ｒ：24、M_3 の未萌出例４、dm_4 及びそれをもつ顎骨10、計38。

下顎犬歯の数は♂Ｌ：15、Ｒ：17、♀Ｌ：６、Ｒ：11、雌雄計Ｌ21、Ｒ：28。

下顎犬歯は釣針などに加工されるので、その分が上記の犬歯の数から減っているはずである。また消耗したものもあろう。最小個体40個体前後であろうか。

シカ科　Cervidae　ニホンジカ　*Cervus nippon*

角、上腕骨などの四肢骨10点が出土しているのみである。イノシシとの出土量の差の大きなことに注目したい。また、シカの骨には大・小の大きさの異なるタイプの個体のものが混在するようである。小さいタイプのシカは本州、九州産シカのそれに比べて小さいのに、大きいタイプのものはそれよりはるかに大きい。この大きい方のシカの骨は対馬、日本本土以外のところから運び込まれたものとみなくてはなるまい。これについては別の機会に詳述しなければならないと思っている。

II　終　　束

以上佐賀貝塚出土の脊椎動物骨について概要をのべてきた。それぞれのところでその特徴となる点をのべて来たが、さらに要約するとすれば以下のようになろう。

魚　類

マダイを主体とするもので、これに大型のコブダイ、イシダイが加わり、対馬暖流の影響する海での漁撈の特徴を見てとることができる。さらにこれに加えて、カジキ類のあること、イシダイなどと同じ程度にフグ類のあることは、この海域ならではの特徴なのであろう。

かつて筆者は本州の太平洋岸にある東京湾湾口部の貝塚（千葉県館山市鉈切洞穴遺跡）を調査したが、そこで知られたのは佐賀貝塚と同じマダイを主体とする漁撈で、カンダイ、イシダイ、ハタ類が同様にみられた。これは黒潮暖流の影響下の漁撈で、佐賀貝塚と共通する在り方である。ただ、鉈切洞穴遺跡では佐賀貝塚のようなメカジキ、フグ類は少なく、その代わりにウツボ、イワシ類が多かった。両遺跡で釣針や銛頭の発達することも共通している。黒潮、対馬暖流文化圏ともいえるものがあったに違いない。しかし、漁具、漁法には種々の違いがみら

れ、それぞれの文化の伝統の大きく異なることを示すようである。

鳥類、ウミガメについても外海的な性格がよくうかがえ、これもまた先の鉈切洞穴例と共通する。

哺乳類

クジラ、イルカ類、アシカの骨の目立ったことも本遺跡のある島嶼的な特徴を示し、この水域がこれらの海棲獣の回遊路に当たっていたからである。これも先述の東京湾口部での例と共通するが、クジラ類、アシカ類の出土は佐賀貝塚においてより多く、イルカ類では東京湾口部においての方がより多かったように思える。

陸棲獣に対しては、かつてこの島に多棲したイノシシが主対象となり、多くの骨をのこしている。イノシシは、その肉や毛皮が利用されるだけでなく、犬歯が釣針の素材となっているのをみるように、イノシシ猟の重要性がここにもあったのであろう。この骨角器文化の中心の一つが、この地で形成されたと考えることもできよう。

シカ猟については遺存骨そのものについての問題があり、今後の研究に待たねばならない。

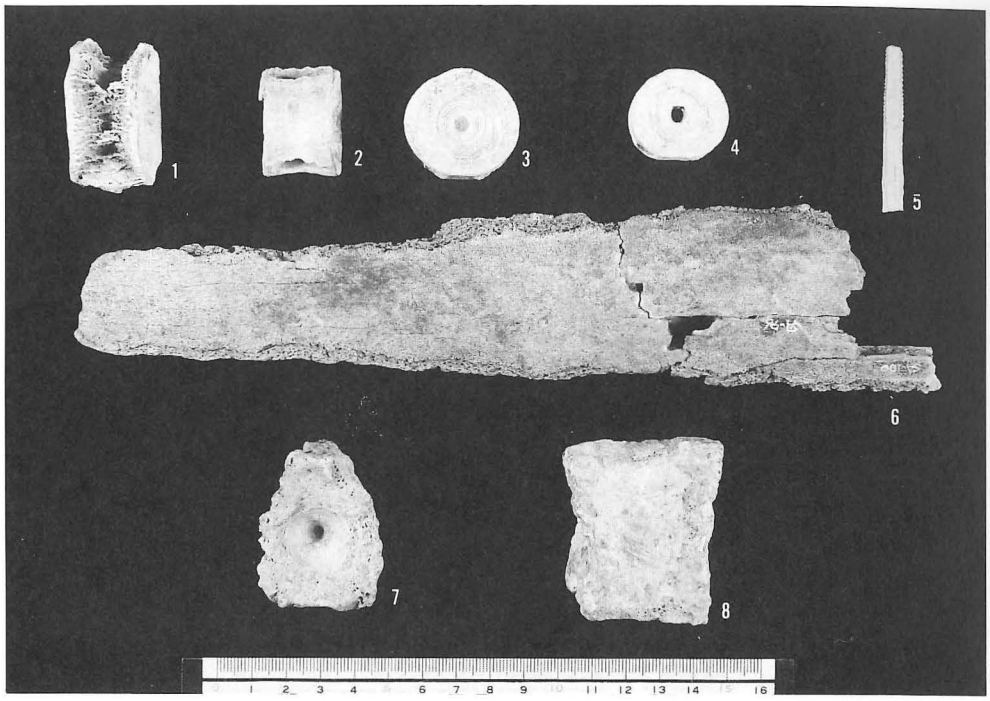


図 1　魚類(1)

1．モウカザメ椎体　2・3．ネズミザメ科椎体（2は側面）　4．同（穿孔のあるもの）
5．エイ類尾棘　6．メカジキ前上顎骨　7・8．同尾椎骨（7は前面観，8は側面観）

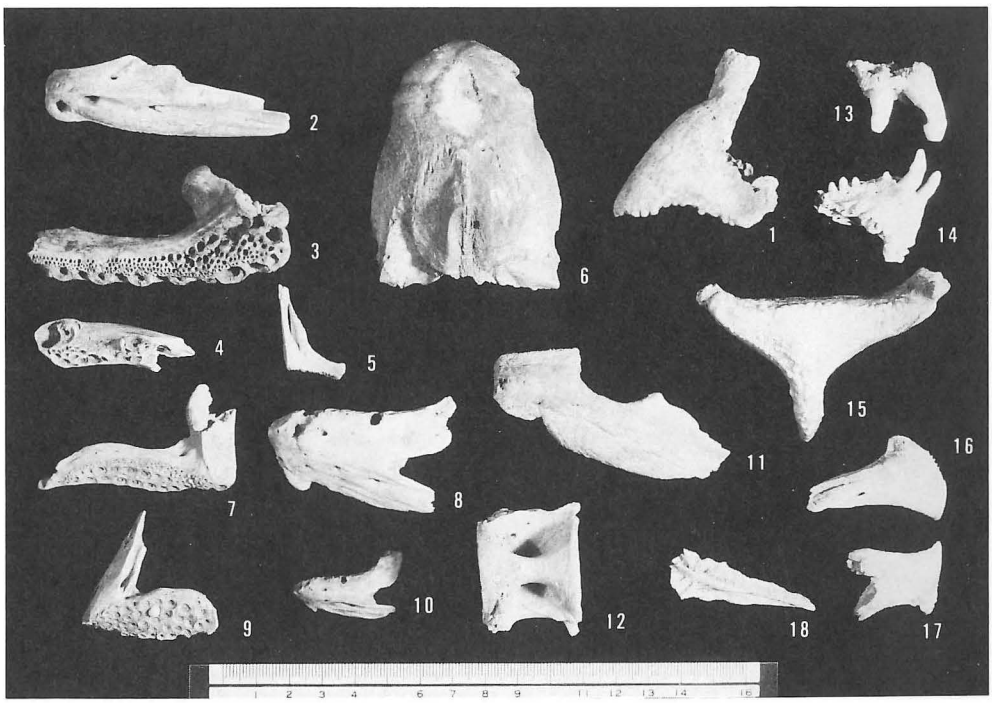


図 2　魚類(2)

1．イシダイ　L前上顎骨　2．スズキ　L歯骨片　3．ハタ類　L前上顎片　4．同　R歯骨片
5．コショウダイ　R前上顎骨　6．マダイ前頭骨　7．同　L前上顎骨　8．同　L歯骨
9．クロダイ　R前上顎骨　10．同　L歯骨　11．ブリ　L歯骨片　12．マグロ類　尾椎骨
13．カンダイ　R前上顎骨片　14．同　R歯骨片　15．同　下咽頭骨　16．フグ類　R前上顎骨
17．同　R歯骨　18．同　R前鰓蓋骨

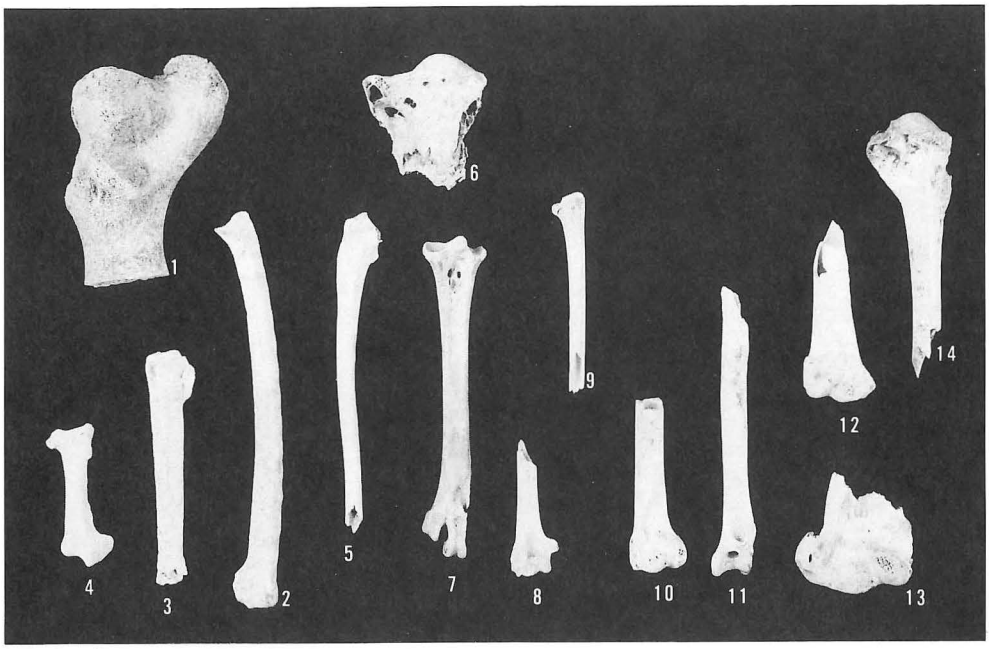


図 3　爬虫類と鳥類（縮率は小獣類と同じ）

1．アオウミガメ　L上腕骨片　2．アビ類　L尺骨　3．同　L大腿骨　4．同　R中足骨
5．アカエリカイツブリ　L上腕骨　6．アホウドリ　R上腕骨片　7．同　L中足骨　8．オオミズナギドリ　L上腕骨片
9．同　R尺骨片　10．ヒメウ　L上腕骨片　11．同　L脛骨片　12．トビ　R上腕骨片
13．ワシ類　L上腕骨片　14．カモメ類　R上腕骨片

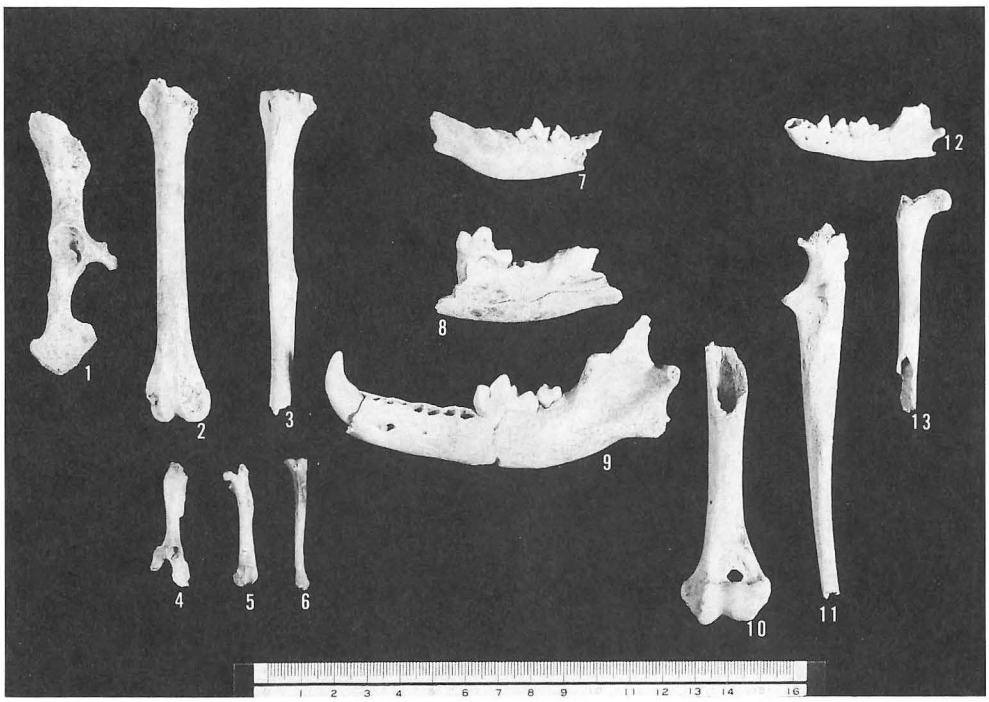


図 4　獣骨

1．ノウサギ　R寛骨　2．同　R大腿骨　3．同　L脛骨　4．ドブネズミ　L寛骨
5．同　L大腿骨　6．同　尺脛骨　7．イヌ　R下顎骨（乳歯）　8．同　L下顎骨
9．同　L下顎骨　10．同　L上腕骨片　11．同　L尺骨　12．テン　L下顎骨片
13．同　R大腿骨片

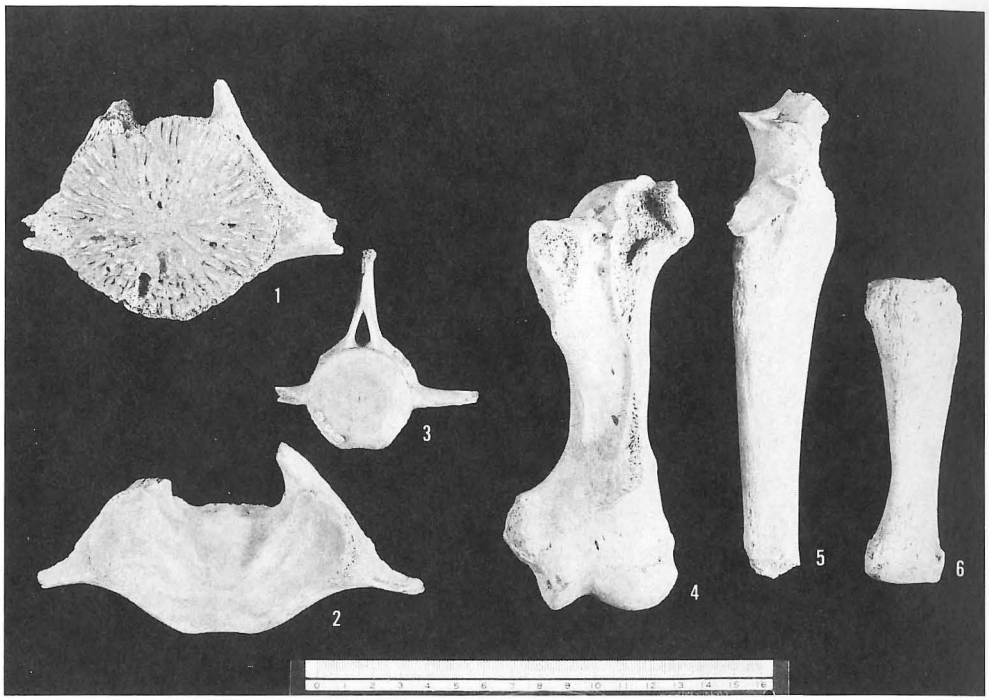


図 5

1．ゴンドウクジラ類　腰椎　2．マルイカ　環椎　3．マルイカ科腰椎
4．ニッポンアシカ　L上腕骨(雌)　5．同　L尺骨　6．同　R第Ⅰ中足骨

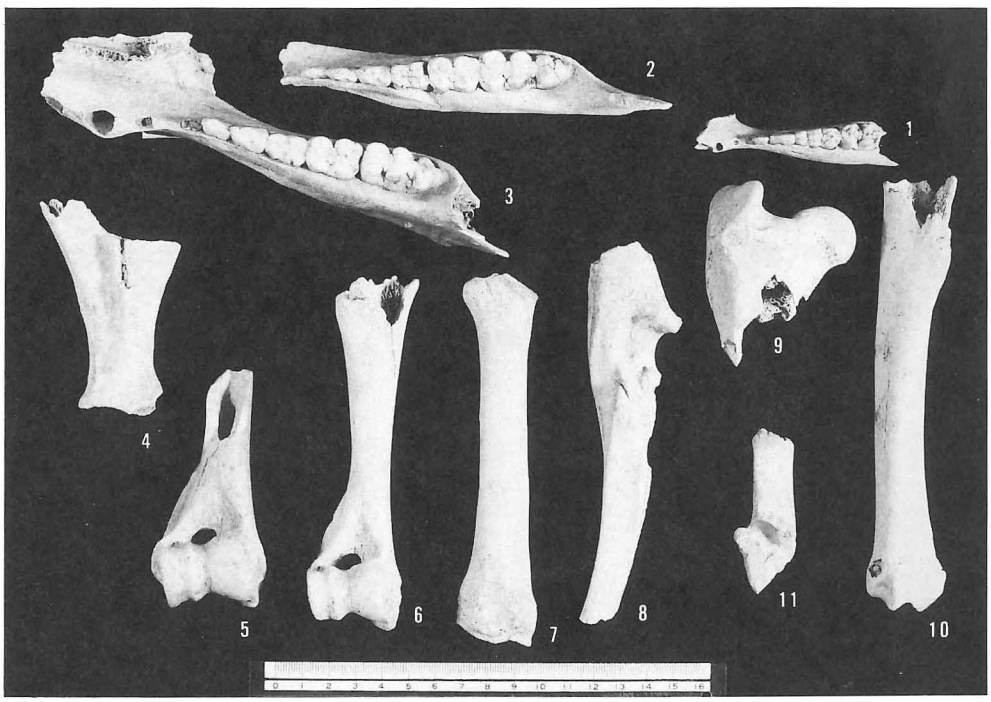


図 6　イノシシ

1．L下顎骨片（$dm_{2\sim4}$・M_1）　2．同　（$P_{2\sim4}$・$M_{1\sim3}$）　3．同　（$P_{3,4}$・$M_{1\sim3}$）　4．R肩甲骨
5・6．R上腕骨片　7．R橈骨　8．R尺骨
9．R大腿骨片　10．L脛骨　11．R踵骨

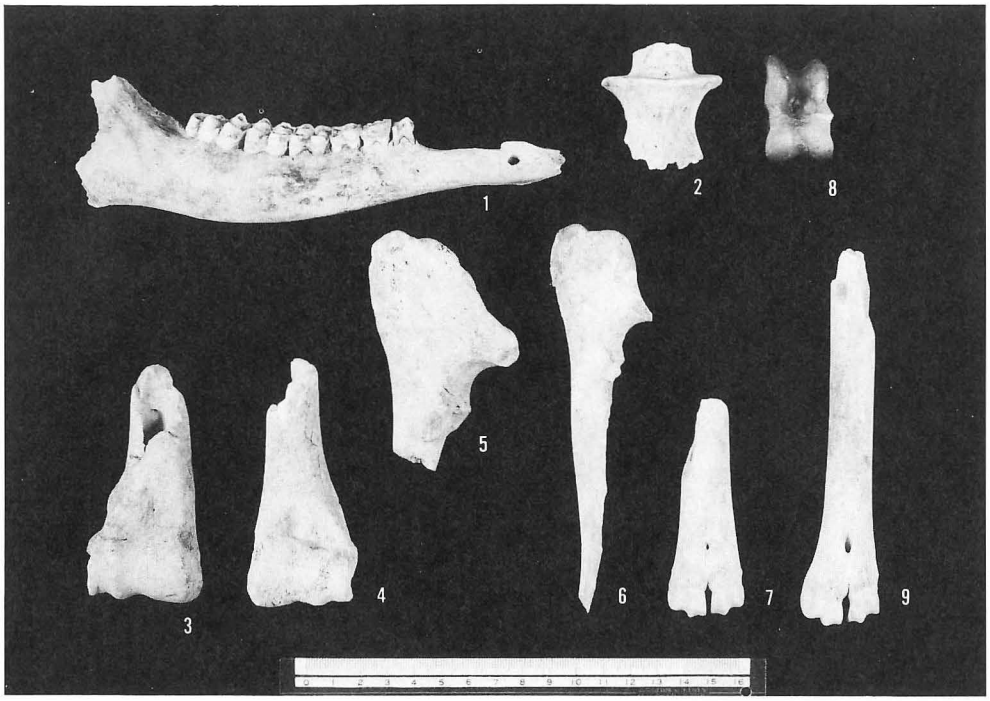


図7　シカ類

1．右下顎骨　2．軸椎片　3．R上腕骨片　4．L上腕骨片
5．R尺骨片　6．R尺骨片　7．R巾手骨片　8．R距骨
9．R中足骨片

あ と が き

佐賀貝塚の発掘調査が実施されたのは，昭和60年の４月初め，終了したのが５月の初めである。コナラの淡い緑が映え，潮風も心地よい最高の季節であった。季節も最高であったが，最高の緊張を要求される調査でもあった。砂丘であり，貝塚であるから予測はされたものの，これ程の遺構・遺物との出会いがあるとは予測していなかったのが事実である。対馬で最初の住居跡・保存状態のよい縄文人骨の検出，豊富な骨角器と膨大な数量の石斧等等，驚きと感動そして緊張の連続であった。

そのような感動と緊張の連続を和らげてくれたのは，対馬の人々のおおらかな人柄であったろう。お世話いただいた民宿「たまき」の方々，ご加勢くださった阿比留嘉博先生はじめ地元の方々のご厚情は遺跡内容とともに終世忘れ得ないであろう。これらの方々の内阿比留先生と「たまき」のご主人はその後，泉下の人となられた。

謹んでご冥福を祈るとともに，本書刊行を報告させて頂く。

発掘調査の後，整理と編集作業の過程で，骨角器のあるものは，本邦に生息しない動物の犬歯で作られ，あるものは雌の擬声を発して雄を呼ぶ狩猟具であることが判明するなど，驚きと感動の深まりがあった。

かかる第一級遺跡の調査を担当させて頂き，報告書に携わらせて頂いた峰町教育委員会・県文化課の諸氏に感謝の意を表して編集を終わることにする。

（正林）

佐賀貝塚

峰町文化財調査報告書 第9集

平成元年3月31日

発行　峰町教育委員会
〒817—13
長崎県上県郡峰町大字三根451番地

印刷　昭和堂印刷